地域づくり １月号別冊

平成26年度

# 地域活性化事例集

## 伝統的な地域資源を生かした地域活性化










一般財団法人
地域活性化センター

本誌は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです

# はじめに

近年、地方を取り巻く環境は景気低迷、少子高齢化など極めて厳しい状況にあり、地方の疲弊が久しく指摘されていました。しかしながら、現在、国において地方創生を最重点課題として取り組むこととされ、これまでの地方に対する政策の見直しが行われ、今後どのようにして各地域を活性化していくのか注目を集めています。

そこで、当地域活性化センターでは、各地域にある伝統的な地域資源について、その活用手法や見せ方等を工夫したり、新しい用途開発したりして地域活性化に取り組んでいる事例について、取りまとめることにしました。

掲載事例につきましては、各都道府県に地域における特徴ある取り組み事例の推薦をお願いし、127事例を収録いたしました。

本報告書においては、この中から特に他の自治体においても参考になると思われる41事例を「特集編」、「本編」として掲載しております。

「特集編」の8事例においては、当センターにおいて現地取材を行い、関係者の方々の生の声を取り上げ執筆させていただきました。「本編」の33事例については、関係する地方公共団体の担当者の方々にご執筆いただきました。

さらに、その他の特徴的な86事例については、関係する地方公共団体の担当者または実施主体の方々にご執筆いただき「資料編」として掲載しております。

各事例につきましては、取り組みのきっかけ、取り組みの内容と成果、今後の課題と展望などについてまとめております。

本報告書が、地方公共団体の方々をはじめ、関係者の皆様のご参考になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、本報告書の作成にあたり、ご協力いただきました皆様方に厚く御礼を申し上げます。

平成27年1月

一般財団法人　地域活性化センター
理事長　椎川　忍

平成26年度

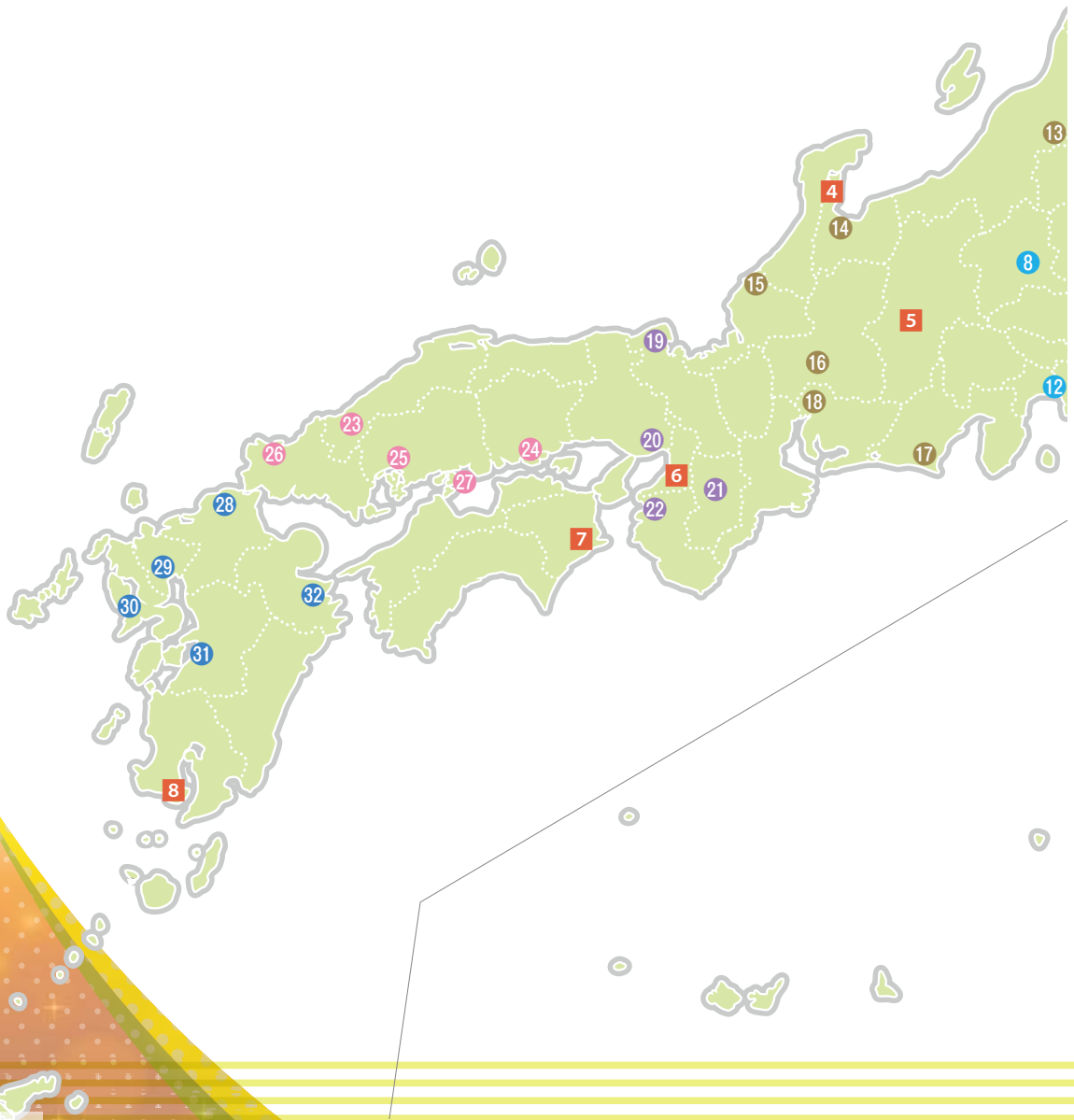
# 地域活性化事例集

## 伝統的な地域資源を生かした地域活性化

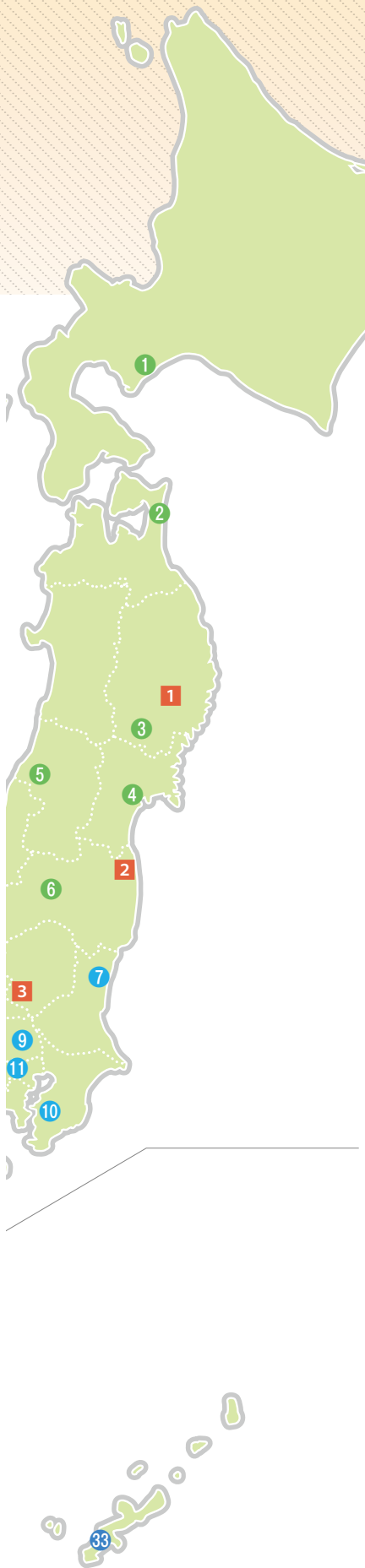

はじめに……1
目次……2
ご利用にあたって……4


### 特集編8事例


1 岩手県　遠野市　遠野遺産認定制度……6
2 福島県　南相馬市　朝日座を楽しむ会……10
3 栃木県　佐野市　天明鋳物の文化財保護と継承活動……14
4 石川県　七尾市　花嫁のれんを活かした賑わい創出……18
5 長野県　木曽町　木曽町地域資源研究所……22
6 大阪府　河内長野市　ぐるっとまちじゅう博物館……26
7 徳島県　那賀町　おららの炭小屋……30
8 鹿児島県　指宿市　指宿まるごと博物館構想推進事業……34

# CONTENTS



## 本編33事例


1 北海道　登別市　熊舞 …… 40
2 青森県　東北町　日の本中央まつり …… 42
3 岩手県　奥州市　奥州市の文化財継承と創造事業 …… 44
4 宮城県　仙台市　すずむしの里づくり事業 …… 46
5 山形県　鶴岡市　出羽三山の精進料理プロジェクト …… 48
6 福島県　会津若松市　あいづまちなかアートプロジェクト …… 50
7 茨城県　常陸太田市　常陸太田市指定文化財集中曝涼 …… 52
8 群馬県　東吾妻町　東吾妻むかし道MTB ライド …… 54
9 埼玉県　鴻巣市　鴻巣びっくりひな祭り …… 56
10 千葉県　富津市　日本三大くも合戦 …… 58
11 東京都　練馬区　練馬大根育成事業 …… 60
12 神奈川県　藤沢市　「藤沢宿・遊行の盆」事業 …… 62
13 新潟県　五泉市　端午の節句のぼり旗 …… 64
14 富山県　射水市　鰻絵を活かしたまちづくり …… 66
15 福井県　あわら市　あわらの健康「食べ・歩き」おばあちゃんの味の日 …… 68
16 岐阜県　美濃市　美濃手すき和紙後継者育成制度 …… 70
17 静岡県　菊川市　棚田文化の伝承 …… 72
18 愛知県　一宮市　萩原チンドンまつり …… 74
19 京都府　京丹後市　月の輪田プロジェクト …… 76
20 兵庫県　西宮市　西宮酒ぐらルネサンスと食フェア …… 78
21 奈良県　宇陀市　宇陀松山華小路 …… 80
22 和歌山県　岩出市　根来塗講座事業 …… 82
23 島根県　益田市　益田糸操り人形 …… 84
24 岡山県　倉敷市　倉敷屏風祭 …… 86
25 広島県　広島市安佐北区　大林地区の歴史、文化及び　伝統芸能の保存継承 …… 88
26 山口県　萩市　浜崎伝建おたから博物館 …… 90
27 愛媛県　上島町　「東寺献上　弓削塩」作り …… 92
28 福岡県　芦屋町　芦屋釜復興事業 …… 94
29 佐賀県　小城市　～小城どこでんミュージアム～ 屋根のない博物館事業 …… 96
30 長崎県　長崎市　長崎ペーロン選手権大会 …… 98
31 熊本県　八代市　文化遺産を活かした地域活性化事業（八代妙見祭） …… 100
32 大分県　臼杵市　西神野風流杖踊り …… 102
33 沖縄県　宜野湾市　創作市民劇公演事業 …… 104


## 資料編86事例


資料編 …… 107

# ご利用にあたって

## 構　　成

●本書は、「特集編8事例」「本編33事例」「資料編86事例」により構成されている。

## データについて

●自治体の人口及び面積は、平成26年4月1日時点における数値である。

●平成26年4月2日以降の市町村合併による人口及び面積の変更は反映されていない。

## そ　の　他

●特集編の本文中に掲載の関係者の役職名や名称等は取材時（平成26年8～10月）のものである。

●本編は執筆時（平成26年8月～10月）の内容に、一部時点修正等（平成26年11月）を加えたものである。

●資料編は事例収集時（平成26年7月）の内容に、一部時点修正等（平成26年9月～11月）を加えたものである。

# 特集編

## 8事例

特集編

# 遠野遺産認定制度
## ～住民と作るふるさとの誇り～

### 岩手県遠野市の概要

遠野市は、岩手県東南部の北上山地の中央に位置し、総面積 825.62㎢ に及ぶ。土地の多くは山林となっているが、冷涼な気候と豊かな自然環境を生かした農林業を基幹産業とし、米を中心に野菜などの農産物、また家畜が複合経営されており、日本有数の乗用馬生産地として知られている。

遠野市の歴史は古く、約9万年前とされる旧石器時代の金取遺跡や縄文時代の国指定史跡綾織新田遺跡などがある。また、延暦19年頃(800年)には閉伊と呼ばれ、蝦夷（えみし）の集落が営まれていたことが『続日本紀』に記されている。近年では柳田國男の『遠野物語』で全国的に民話のまちとして有名となり、現在でも民話の語り部がいるなど歴史や伝承が息づいている。

### 伝統的な地域資源の起源と歴史について

旧石器時代から人が住んでいた遠野市では、厳しい自然環境の中から、食文化や豊作を祈る祭りなど様々な文化が生まれ受け継がれてきている。そんな遠野の人々の心のよりどころは神仏への信仰であり、生きるために生活の一部となって地域に根付き、はるか昔から神仏を大切にする風土があった。生活と緊密な文化である風習や信仰を親から子、子から孫へ引き継いでいくことと同様に地域に伝わる伝統的な地域資源も大切にする土地柄でもあったという。

このような背景から、行政の積極的支援がない状況の中で伝承されてきたまつりや郷土芸能、信仰に関連した歴史的建造物等の、地域あるいは個人で守ってきた伝統的な地域資源が遠野市内には数多く残っている。



大日山の桜



荒神神社

### 取り組みのきっかけ

遠野市は伝統的な地域資源を大切にする風土を持っており、古くから伝わる数多くの有形文化財、無形文化財が市内には存在しているが、それらの保存継承は年々難しくなっていた。日本の他の地域と同様に少子高齢化等による後継者の減少や以前と比べて地域住民の繋がりが希薄化され地域全体で伝統的な文化財を支える力が弱くなったことが原因と考えられるという。

遠野の景観を構成する代表的な要素である社（やしろ）や祠（ほこら）の場合でいうと、地域の子供たちの遊び場でもあり、祭礼を通して地域の人たちが集まり地域の拠り所となっていた場所や周辺が荒れていく姿に心を傷める人たちが増え、人々が集う機会も減って絆が薄れていくことが危惧される地域もあったという。

現在の行政が支援できるのは文化財保護法に基づくものであり、指定の要件を満たさないものは直接支援ができないため、個人で維持管理できなくなったから

といって、行政ではどうすることもできないことが多々あるという。しかし、遠野市には祖先より受け継いできた伝統的な文化財は数多くあり、このまま放置するとそれらが保存できなくなってしまうとの危機感から何らかの支援や方策が求められていた。また一方では、少子高齢化などにより衰退しつつある地域コミュニティの再構築と地域の活性化という課題に対する解決策を模索していた。そこで、遠野市では現行の文化財保護法の範疇では保護できない文化的地域資源を含め、地域住民自らが大切だと思っている宝を守り、次世代へ引き継いでいくため新しい制度である遠野遺産認定制度を作った。この制度は文化財保護だけでなく、世界には人類の宝「世界遺産」があるなら、遠野には遠野の宝「遠野遺産」があると、少子高齢化により疲弊した各地域において自らの地域にはこのような素晴らしい地域の宝があることを再発見し、文化的地域資源を切り口として市民協働で地域を活性化したいとの思いから生み出されたという。

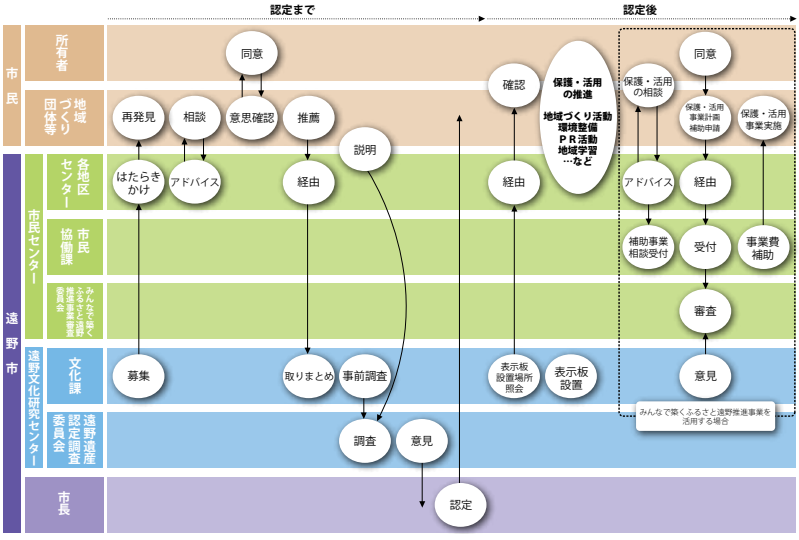
そこで今回は、伝統的な地域資源を活かした地域活性化への取り組みとして遠野遺産認定制度について遠野市遠野文化研究センターの佐藤浩彦課長補佐に話を伺った。

## 取り組み内容

遠野遺産認定制度は、遠野市が一方的に選ぶのでなく遠野市民が次世代に残すべきと考える文化遺産、市民目線で考える遠野らしいものを遠野市に推薦し、市が遠野遺産として認定する制度である。平成19年に「遠野遺産認定条例」を制定し、制度を開始した。

対象としては、「有形文化遺産（建築物や旧跡等）」「無形文化遺産（郷土芸能、伝承等）」「自然遺産（植物、地形等）」「複合的遺産（これらの複合されたもの）」の4つのカテゴリーがあり、建築物から郷土芸能や動植物まで幅広い対象がある。これらについて年に一度、9地区ある地区センターを通じて各地区の地域づくり団体が遠野遺産への推薦書を市に提出する。その後、市民で構成される「遠野遺産認定調査委員会」が申請書に基づき現地調査を行う。その結果をもとに遠野市長に答申を行い、市長はその答申を踏まえて遠野遺産を認定するというのが一連の流れである。

この制度は、市民で構成する「遠野遺産認定調査委員会」が大きな役割を果たしており、その構成員としては、市外の有識者1人、市内の地域づくり団体の代表者等10人からなる委員会である。委員会は性別、年齢、地域を考慮した委員で構成され、様々な視点で遠野遺産が認定されることを目指している。調査委員が遠野遺産を認定する基準は多く設けておらず、地域の人たちが大切にする「遠野らしさ」を選考基準としている。一見すると曖昧な基準ではあるが、明確な基準を設けると一般的文化財行政と同じようになってしまい、基準を満たさずに遺産認定から外される文化的地域資源も数多く出てくる。そもそもの制度の目的として、現行の文化財行政では保護しきれないが、地域にとって大切な文化的地域資源を保護するとともに市民協働で地域の活性化を目指して始まった制度であるため、あえて細かい基準は設けずに、多様な遠野らしい文化的地域資源を遠野遺産に認定したいということで



遠野遺産認定制度フローチャート



遠野遺産認定調査委員会




遠野遺産認定証交付式

ある。

特徴としては、遠野遺産認定を受けることが終わりではなく認定を受けることにより、地域づくり団体の活動が始まることである。認定には、推薦した地域づくり団体が遠野遺産の環境整備や保存修理し、積極的に活用することが認定条件に含まれている。これらの活動は、地域づくり団体を中心にその地域だけで行われる。その過程で改めて地域の良さを再認識し、次世代へ遠野遺産を伝えるべく地域住民自らが活動を行っていく。この保存・活用に関しては、地域づくりの補助金である「みんなで築くふるさと遠野推進事業補助金」の対象となり（上限100万円）、地域住民らの活動を行政が支援する仕組みとなっている。

また、行政が主導的に文化的地域資源の保護・活用を行うのではなく、地域を見守ることを基本としていることがこの制度のもう一つの特徴といえる。このようにすることで、行政に頼らない自発的な地域の活動を促そうとしている。行政は、前述の保護活動における補助金に加え、認定された遠野遺産に対して表示板を設置することやガイドブックを作成することなど住民意識の啓発と情報発信により支援している。

平成26年8月23日時点で、遠野遺産は141件となった。「有形文化遺産68件」、「無形文化遺産26件」、「自然遺産15件」、「複合的遺産32件」、多くの遠野遺産が、今後、地域の大切な宝として認識され市民の手で保存・活用が行われることになる。

## 取り組みの成果

平成19年の制度開始より7年が経過するが、遠野遺産認定を契機に地域に伝わる伝説をモチーフにした祭りが始まるなど新たな動きが各地域で起こりつつある。その一例として、遠野遺産認定第10号「飯豊の熊野神社と羽黒神社」がある。この2つの神社は、それぞれのご神体の仲が悪く、熊野神社の権現様は耳を喰いちぎられ、羽黒神社の権現様は舌を喰いちぎられたという伝説が地域にあった。遠野遺産認定後、地域で遺産を活用しようと新しく考えだされたのが、この2






飯豊まつり（上下）

つの神社にまつわる伝説を生かして、仲の悪いご神体同士を仲直りさせる祭り「飯豊まつり」である。様々な伝説が息づく遠野ならではの市民主体の新しい祭りが始まり、地域内外から参加者が集まり地域を活性化している。

市民自らが地域資源を見つめ直し、新たな視点で活用策を考え出すことで、多様な地域活性化の手法が遠野市内の各地で起きるよう期待されている。さらには自らが住む、もしくは育った地域について良さを再認識することができ、郷土愛の醸成や文化的地域資源の保護継承が期待できる。また遠野市としては、支援にかかりきりにならず、市民の力を引き出すことで、息の長い支援をすることができるという。

## 今後の課題と展望

平成19年より開始された遠野遺産認定制度だが、市民から市の担当者に対して「今年は遠野遺産に申請できないが、来年は申請できるように準備する」と市民自ら声をかけてくることもあるなど、いまや地域に理解され親しまれている制度となっている。市の担当者としては、今後の課題として遠野遺産認定制度の検証が挙げられるという。

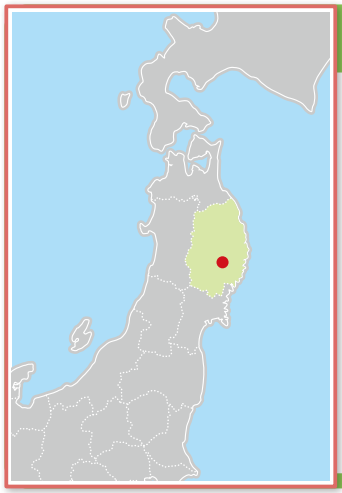
平成26年度には141件の遠野遺産があるが、今までに認定を受けた文化的地域資源のその後の状況について確認し、各地域づくり団体から制度の改善点について意見があれば制度を見直していく。

また、遠野遺産が多種多様なものになってきたため、交流人口の拡大、経済の自立に向け、新しい活用法もあるのではないかと考えているという。例えば、複数の遠野遺産を巡るツアーといった観光産業との連携や遠野遺産認定をされた資源を使っての商品開発などである。ただし、遠野遺産の新活用についても、遠野市は住民達に対して新しい活動への強要はせず、情報提供に留め、あくまでも地域住民の意思を尊重する方針だという。このように一貫して、遠野遺産をどのようにするかは行政ではなく地域住民で決定するようにし、行政だけに頼らない地域づくりを目指している。

全国各地で文化的地域資源が廃れていく中、以前と比べて様々な地域の課題に対応するだけの行政の余力はなくなっている。その中で、遠野市が作り出した遠野遺産認定制度は、地域住民の力を引き出し、行政だけではできない文化的地域資源の保護・活用に地域住民の力が活かされ、地域コミュニティの活性化にも繋がっている。以前は行政の支援もなく、一部の人達からしか関心を持たれていなかった文化的地域資源の数々が、遠野市では行政とともに地域で保存する体制が整った。これからも市民協働で「遠野らしい文化的地域資源や自然」が次世代へ継承されていくことを期待したい。



遠野市　遠野文化研究センター　佐藤浩彦
課長補佐兼文化遺産係長



**自治体名　岩手県遠野市**

- 人　　口：29,310人
- 面　　積：825.62km²
- 事　業　名：遠野遺産認定制度
- 事業開始年度：平成19年度
- 事 業 主 体：遠野市、地域づくり団体

連絡先

遠野市遠野文化研究センター　文化課
TEL 0198-62-2340　FAX 0198-62-5758
URL http://www.city.tono.iwate.jp

特集編

# 朝日座を楽しむ会
# ～南相馬市文化遺産を活かした復興まちづくり～

## 福島県南相馬市の概要

南相馬市は、福島県北部の太平洋沿岸に位置する、人口約65,000人の町。平成18年1月1日に、旧原町市、旧小高町、旧鹿島町の1市2町が合併し「南相馬市」となった。

毎年7月には、甲冑を身に着けた騎馬武者約400騎が神社の旗を奪い合ったり、裸馬をとらえて神社に奉納し相馬地方の平和と繁栄を祈願する「相馬野馬追（そうまのまおい）」が行われており、国の重要無形民俗文化財に指定されている。国の史跡も多く、原町区には東北地方有数の規模を誇る前方後方墳の桜井古墳、小高区には東北地方最大にして最古の薬師堂石仏・観音堂石仏、鹿島区には群集墳の真野古墳群などが所在している。



相馬野馬追の様子

## 伝統的な地域資源の起源と歴史について

南相馬市内の原町区に、国の登録有形文化財として指定されている映画館「朝日座」がある。「朝日座」の起源は、大正12年7月2日、原町の地元有志が組合を設立し、芝居小屋・映画常設館として「旭座」を開館したことに始まる。当時はまさに関東大震災が発生した年（同年9月）であり、テレビはおろか、ラジオ放送もまだ始まっていない時代であった。開館当時の旭座では、無声映画が数多く上映され、娯楽の少なかった町民はこぞって足を運び、大衆が集まる場所として大いに賑わったという。館内の舞台には花道があり、坂東勝三郎、中村翫十郎の大一座による「旭座舞台開き」も行われ、桟敷席もあった観客席は大観衆で埋め尽くされていた。

戦時中も旭座は映画上映を続け、終戦の昭和20年8月には全国的に映画興行が一時中止されていたものの、戦後も映画は庶民の娯楽として高い人気を誇っていた。映画が全盛を迎える中、昭和27年に旭座は「朝日座」と改名。建物の経営者も変わり、升席だった会場も、現在のような椅子席に変わっていった。昭和35年頃には、映画館の観客数は市民一人あたり年間5.2回の入場を数えていたことからも、当時の映画人気が窺える。

そして時代は進み、日本は高度経済成長期に入り、テレビ放送の普及やレンタルビデオ店の増加などによって映画館への客足は徐々に減少。迎えた平成3年、朝日座開館70周年を記念して5月に「ニュー・シネマ・パラダイス」が上映されるも、観客数の減少に歯止めはかからず、同年9月に上映された「シザーハンズ」、「ホーム・アローン」を最後に、朝日座は町の人々に惜しまれながら閉館することとなった。




朝日座外観

## 取り組みのきっかけ

朝日座の閉館後、平成20年3月に地元有志によって発足した「朝日座を楽しむ会」の小畑瓊子（おばたけいこ）会長に、会の活動について話を伺った。小畑会長は現在、同会の会長の他、南相馬市市民活動サポートセンターの事務局長としても活動されている。

「朝日座を楽しむ会」が発足するきっかけとなったのは、平成20年10月に福島で開催された「全国生涯学習フェスティバル」に先駆けて、市の生涯学習課が開催した南相馬市マナビィカレッジ事業「生涯学習まちづくり講座」であった。社会人として多くの経験を積んできた団塊の世代をはじめとする市民の人々が、肩書きによらず一人の地域住民として「まちづくり」を話し合うきっかけとすることを目的として設けられたのが同講座であり、その中に小畑会長の姿もあった。そこで昔ながらの愛着のある「朝日座」を残したいという意志を持った数人の集まりから、半ば周囲の流れに乗る形で小畑会長も会に参加し（当時は会長ではなく事務局として）、活動をスタートさせた。平成3年の上映を最後に閉館した朝日座は、他市の興業主によって年数回程度アニメ映画が上映されていたが、映画館の建設当初の組合の代表者にすでに売却されており、閉館以前から客入りの少なくなっていた館は老朽化が進み、屋根は雨漏りなどの修繕も行われていなかったという。

戦前に建てられ、大勢の人々の最大の娯楽として親しまれてきた映画館。そんな歴史ある朝日座を後世に遺し、その利活用を目的とした事業を“楽しみながら”活動していきたいと名付けられた「朝日座を楽しむ会」は、発足当時から会員も徐々に増えていき、その活動範囲を広げていった。



朝日座内観客席

## 取り組み内容

### （1）朝日座の保存と利活用

「朝日座を楽しむ会」としての活動は、まず朝日座そのものに人々に関心を向けてもらうことから始めたという。「朝日座の現役時代を知る町の人々からは、当時の記憶が蘇るような懐かしさを感じてもらい、多くの方からのご支援とご協力をいただいた」と小畑会長は振り返る。

取り敢えず始めたのは映画会の実施であった。最初は小さな集まりであったが、徐々に会の活動が人々に知られるようになり、パリ祭や寄席等も上演し、2～3ヶ月に一度は活動を実施しながら、保存活動に取り組んでいった。会の発足当初から、県や市からまちづくりのための助成を受け、活動を行うことにより、多くの人々が朝日座に関心を持つようになっていった。

入口や館内側面に貼られた映画ポスターなどの資料や映像機材などは、現在でもそのままの状態で残っており、建物と一体となった保存が進められている。「ここにいると、懐かしさからか、とても気分が落ち着きます」と、小畑会長が嬉しそうに話す。






館内ポスター（上下）

### （2）震災の影響を受けて

平成23年3月11日、東日本大震災が発生。福島県内でも大勢の住民が避難を余儀なくされ、一時原町区の住民は5,000人程にまでなった。朝日座も館内設備の転倒や外壁の破損などの被害を受けたが、幸いにも建物全体に大きな損傷はなかった。県外から訪れたボランティアによって地域の復旧活動も進み、震災から3ヶ月後の6月12日には、朝日座において、震災後初となる復興上映会が開催され、「いつでも夢を」が上映されることとなった。娯楽施設や図書館などの文化施設がすべて閉鎖されている中、集まった約90名の参加者たちは、皆が情報交換をし合い、多くの住民たちが再会を喜んだという。

その後も会は慰労のための公演や上映などの活動を続け、震災の翌年には平常通りのスケジュールを再開した。平成24年10月には、福島大学の大学生らが訪れて建物正面や内装の塗り替え作業を行うなど、朝日座の復旧も進んでいった。また、平成25年12月には、これまでの朝日座の歴史や、そこに関わった人々の記録を集めて制作されたドキュメンタリー映画「ASAHIZA」が上映され、県内外から多くの参加者が集まった。この映画制作には、小畑会長をはじめ、「朝日座を楽しむ会」の皆が大いに励まされたという。

## 取り組みの成果

### （1）国登録有形文化財（建造物）の指定に向けて

震災後の平成24年度より、福島県からの助成や、市内外からの寄付を受け、最大の懸案であった朝日座の老朽・破損した屋根の修繕工事が着工した。朝日座をまちの文化財として遺し、その良さを広めたいという思いから、「国登録有形文化財（建造物）」の指定に向けた動きが本格的に始まった。助成金のみでは賄いきれない修繕費用を補うため、全国から寄付金を募り、また国への申請のため朝日座館内の調査も実施した。建物自体にはあまり手を加えず、従来の朝日座の姿をそのまま残すため、小畑会長も活動を続け、各地を奔走したという。

震災後の混乱から脱却するために尽力した会の活動はやがて実を結び、平成25年3月には屋根の工事も竣工、平成25年11月15日の文化財審議会の審査を受けて、朝日座は相双地区第1号の登録文化財として指定されることとなった。このニュースは官報にも掲載され、平成26年5月30日に市教育長より小畑会長に登録証が伝達されている。



舞台裏



役者通路跡

### （2）現在の活動状況

現在、「朝日座を楽しむ会」の会員は50名程おり、一時期は被災して避難していた人々も徐々に会に戻りつつある。会の中でも30代の若いメンバーで構成されている青年部の事業は、関東圏からも観客が訪れるほど好評で、手づくりのチラシなども制作している。

平成26年に入り、朝日座館内では、当時の作品のまま35ミリフィルムで「赤穂浪士」などの昭和30年代の作品を一挙に上映する朝日座映画祭や、古典落語・邦楽漫才を生で楽しめる朝日座寄席を開催している。その他にも、平成26年10月には第37回日本アカデミー賞最優秀外国作品賞を受賞した「レ・ミゼラブル」を上映するなど、様々な活動を展開している。

また、多くの助成団体の助成により、館内設備も充



映写室

実させたほか、月１回の「カフェde映画会」と銘打った茶会なども開かれており、町の人々の憩いの場として賑わいを見せている。

## 今後の課題と展望

映画文化の継承や、原町区の市街地活性化、地域のコミュニティの交流増加など、今後の南相馬市の文化的拠点の一つとして、朝日座の有形文化財登録が果たす役割は大きい。小畑会長が考える今後の課題と展望について伺った。

「やはりまずは会の中心に入ってくれる人を増やしていきたい」と小畑会長は語る。比較的若い世代も会にはいるものの、絶対数としては不足していると言わざるを得ず、ボランティアの方ばかりでも、今後会の運営を担っていくには難しい部分があるため、色々な方々の協力を得ながら、事業としての方向性を考えていきたいという。無論、若い年代の人々にも、子育てや自分の生活があるため、専従として会で活動してくれる人を探すのはなかなか思うようにはいかず、目下の課題であると話す。

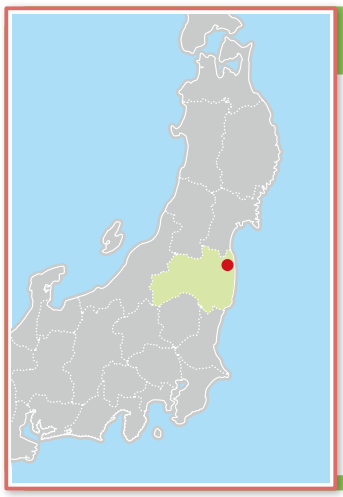
最後に館内を案内してくれた小畑会長は、「今後は月1回開催している茶会も、もっと回数を増やしていきながら、多くの方に朝日座を知っていただき、皆にとっての朝日座を楽しみながら作っていきたい」と笑顔で答えた。戦前の設立から、90年余りの年月を町と共に歩んできた映画館「朝日座」。一度は閉ざされたものの、有志の力によって、館は賑わいを取り戻し、今再び脚光を浴びている。




朝日座を楽しむ会　小畑会長

※資料提供先：南相馬市

Copyright(C)The Executive Committee of SOMA NOMAOI All Rights　Reserved



**自治体名　福島県南相馬市**

- 人　　口：63,679人
- 面　　積：398.50km²
- 事　業　名：南相馬市文化遺産を活かした復興まちづくり
- 事業開始年度：平成26年度
- 事 業 主 体：朝日座を楽しむ会

連絡先

南相馬市教育委員会　文化財課

TEL 0244-24-5284　FAX 0244-24-1288

URL http://www.city.minamisoma.lg.jp/sections/index.cfm?footer=10

特集編

# 天明鋳物の文化財保護と継承活動 ～日本最古の鋳物を未来へ残す～

## 栃木県佐野市の概要

佐野市は栃木県の南西部、群馬県との県境に位置している。東京から70㎞圏内にあり、首都圏との交通アクセスも充実していることから、北関東の交通の要衝となっている。また、佐野厄よけ大師、大型商業施設、ゆるキャラ「さのまる」や佐野らーめんなど、多種多様な魅力を有している。さらに、同市の歴史には藤原秀郷や田中正造等、日本史上の重要人物が関わっているとともに、天明鋳物や牧歌舞伎など、有形・無形の伝統的な地域資源が豊かなまちでもある。

## 伝統的な地域資源の起源と歴史について

佐野市の伝統的な地域資源の中で最も古い歴史を持つのが「天明鋳物（てんみょういもの）」で、国内でも最古の鋳物製造である。江戸時代以前は「天命」と記した。天明鋳物の歴史には平安時代中期に起こった「天慶の乱（平将門の乱）」が深く関わっている。この乱は、平貞盛と下野国押領使であったと言われている藤原秀郷が平将門を討伐して収束し、秀郷は将門討伐の功を認められ下野守、武蔵守及び鎮守府将軍に任ぜられた。このとき、秀郷は武具等を製作させるため、河内の国から5人の鋳物師を佐野の地に移り住まわせたといい、これが天明鋳物の始まりとされている。

平安時代後期に入ると湯釜が鋳造されるようになり、天明は茶の湯釜のブランドとして知られるようになっていく。安土桃山時代には、茶の湯釜で「西の芦屋（現在の福岡県芦屋町）・東の天明」と並び称され、千利休が天明で茶会を催したと伝わっている。また、江戸時代になると、京都の公家である真継家配下の御用鋳物師として天明鋳物師が権勢を誇り、領主からも保護を受けて活躍した。

大阪夏の陣の原因となった方広寺の梵鐘の製作に天明鋳物師が携わったほか、日光東照宮にある徳川家の霊廟である青銅鋳物の宝塔は、三代家光から九代家重まで天明鋳物師の製作である。

佐野市の中心市街地には鋳物を表す「金」のつく地名が多い。それはこの地に多くの鋳物師が住み、製作・創作活動を行っていたことを今に伝えている。



天明鋳物の作品（佐野市HPより）

## 取り組みのきっかけ

「天命鋳物伝承保存会」と佐野市では天明鋳物や鋳造関連技術・用具等の保存と継承を目的とした取り組みを行っている。その経緯や内容について、同会代表の若林洋一氏、副代表で五代目天命鋳物師の若林秀真（ほつま）氏、事務局長の藤掛正男氏、そして、佐野市文化振興課の上岡幸宏氏に話を伺った。

最盛期には先述のような武具、茶の湯釜や梵鐘だけでなく、仏像、花瓶等の美術工芸品から、風呂釜、鍋等の日用品や農具までが作られていた天明鋳物だが、そのピークは江戸時代中期である。幕末期には真継家の権勢の衰えによって、また、明治以降は他の鋳物産地の発展やアルミニウム製品の台頭によって、天明鋳物は衰退した。さらに、第二次世界大戦によって多くの作品が兵器の材料として供出されるなど、かなりの



佐野市内の天明鋳物の電話ボックス

数の作品が失われてしまった。多い時には佐野市内に80～100ほどの鋳造所が軒を連ねていたというが、現在では10軒ほどが残っているばかりである。それらの鋳造所では、木型を用いて砂型を作り、溶かした金属を流し込むという伝統的な鋳造方法を継承しつつ、美術工芸品や機械部品等の製作を行っている。

若林秀真氏の「若林鋳造所」は、弘化３年（1846年）、江戸時代の末期に操業を開始し、五代にわたって鋳物を作り続けている。同鋳造所には、四代目の若林彦一郎氏が残してくれた、創業以来伝わっている鋳造用具が相当数残されている。若林彦一郎氏は、天明鋳物の伝統と技術が消失することに危機感を抱き、残すことができるものは可能な限り後世に残しておこうと、普通は使い捨ててしまう鋳物の木型なども可能な限り保管し、用途等を詳細に記録していたという。

若林洋一氏・秀真氏も、このままでは天明鋳物の伝統技術や歴史を伝える貴重な資料が失われるという危機感を持っていた。そこで、２人で「天命鋳物伝承保存会」を立ち上げ、鋳物そのものだけでなく、天明鋳物の技術や歴史、関連資料を後世に伝えていくとともに、四代目の彦一郎氏が残してくれた鋳造用具を完全な形で残していこうという目的のもと活動を開始した。

平成19年4月、最初はたった２人で始めた同会の活動だが、次第に賛同・協力してくれる人も増え、中高年世代を中心に57人の会員を擁するまでになった。積極的な会員の募集等は行っておらず、ほとんどが天明鋳物に興味があったり、独自に鋳物の研究を行っている人ばかりとのことである。

## 取り組み内容

### （1）文化財としての保護活動

天命鋳物伝承保存会の主要な活動目的は、若林鋳造所に残されている鋳造用具や関連資料等を保護し、後世に伝えていくことである。

先述のとおり、同鋳造所には非常に多くの鋳造用具や関連資料が残されているのだが、このうち1,453点の鋳造用具は、同会のこれまでの地道な努力によって、平成23年度に栃木県の有形民俗文化財に指定されている。工芸品が文化財になって残ることは往々にしてあるが、その工芸品を作るための道具は失われてしまうことが多い。そのような中で、鋳造用具が県の文化財に指定されたことは、大きな意義があるといえる。

若林秀真氏は、「昔は100軒近く鋳造所があったので、どこにでもこのような用具があったはず。でも全部ごみになってしまった。これだけ揃っているところはない」と、これら鋳造用具の貴重さを強調する。

若林洋一氏は、これらの鋳造用具を国指定の重要文



若林鋳造所には貴重な鋳造用具が保存されている



現在の若林鋳造所内部の状況

化財にするという目標のもと、日々活動を続けているが、国の指定を受けるためには用具の図面など様々な資料作りを行わなければならないとのことである。市でもこの取り組みを支援すべく、文部科学省の補助金を活用して、国の文化財指定に向けた鋳造用具の保存・整備活動を支援する環境を整備していくとしている。

### （2）教育と後継者育成

同会では、後継者の育成につなげようと、若林鋳造所において後継者育成講座を行っている。一昨年から昨年にかけて20回にわたって行った講座では、本格的に鋳物を学ぼうという若者が、20代を中心に7名参加した。今年度は様々な世代から11名の参加があるという。同会では興味を持ってくれる人を天明鋳物の後継者だと考えている。ただ技術を伝えるだけでなく、興味を持つ人が情報を発信してくれれば、天明鋳物の継承に大きく貢献することにつながると考えているからである。

また、小中高生に対して鋳物の歴史を伝えるとともに、簡単な鋳物作りの体験学習も行っている。佐野市の天明小学校では、地域の歴史や文化を学ぶという趣旨から、毎年６年生がこの体験学習に必ず参加することになっているという。

鋳物を作るまでに、若林洋一氏が天明鋳物の歴史や作品について詳しく講義を行い、自分たちが住んでいる地域が「鋳物のまち」であるということを意識してもらう。そのうえでシンプルな鋳物作りを行うのだが、自分たちでつくった鋳型を割って、鋳物が出てきた瞬間の子どもたちの喜びと驚きは例えようがないほど大きいものだという。若林秀真氏はその様子を「スイッチが入る」と表現する。「こういう仕事を勉強するのはどこの学校に行ったらいいのかと聞いてくる子どももいる。将来、弟子にしてほしいという子どもが1人でも現れれば嬉しい」と若林秀真氏は語っていた。

### （3）天明鋳物の価値を伝え、広げていく

同会では年に２回、天明鋳物に関する研究会を主催しており、大学教授などの有識者を招いて講義を受けている。また、同会の会員が自らの研究成果を発表する場としても活用しているという。

また、市でも天明鋳物に関する講演会を開催したり、同会と連携した鋳造用具の公開説明会を開催するなど、天明鋳物の文化的な価値の普及に努めている。

市では「佐野ルネッサンス鋳金展」という展覧会を平成10年から2年おきに開催している。

これは鋳物に特化しているという点で全国でも類を見ない展覧会であり、若手鋳物作家の登竜門とも呼ばれている。さらに、平成26年度からは、「天明鋳物のふるさと散策」として、市中心部の鋳物関連施設を巡るツアーを企画している。市外からの観光客に対しても、これまで認知度が低かった天明鋳物を、地域の資源として発信していく取り組みを進めている。



公開説明会の様子（佐野市HPより）

## 取り組みの成果

平成25年度には天命鋳物伝承保存会が取り組んでいる天明鋳物の保存・継承活動が認められ、公益社団法人日本ユネスコ協会連盟の「プロジェクト未来遺産」に登録された。



プロジェクト未来遺産2013登録証

自然保護活動団体などの登録が多い中、天明鋳物のような伝統工芸が登録されたケースは初めてであるという。藤掛氏は「後継者育成活動が特に高い評価を受けたようだ」としている。

プロジェクト未来遺産への登録はマスコミで広く報道され、鋳物の素晴らしさや同会の活動に対する認知度が高まり、大きな注目を集めるようになっている。県の指定文化財ということも相俟って、今では月に40～50名の見学者に加え、多数の取材が若林鋳造所に訪れるという。

以前は市民の間でも一部の人が深い関心を示す存在

だった天明鋳物だが、市議会で天明鋳物の保存や活用について質問がされるなど、市民の意識にも変化が見え始めている。また、平成26年度に栃木県で開催される「ねんりんピック」のメダルには天明鋳物が採用されるなど、天明鋳物が地域の大切な資源として再認識され、様々な場面で活用・紹介されるようになっている。




ねんりんピックのメダル（佐野市HPより）

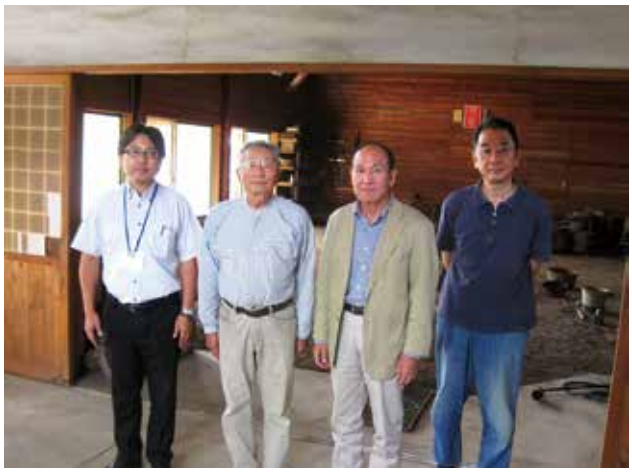
## 今後の課題と展望

佐野市文化振興課の上岡氏は、市の課題として、天明鋳物に対する取り組みについて、市役所の組織内連携はもちろんのこと、鋳物業に携わる人たちとの協働を課題に挙げている。また、認知度が高まっているとは言いながら、未だに天明鋳物のことを知らない市民がいることも事実であり、課題の一つである。

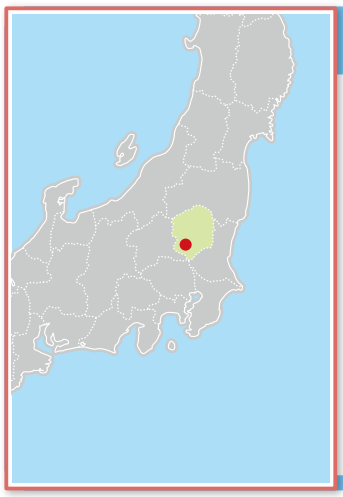
一方、「天命鋳物伝承保存会」では、後継者の育成を課題に挙げている。ルネッサンス鋳金展や後継者育成講座を行っているものの、佐野市で鋳物の製作・創作活動を行いたいという人が現れていない現実に、同会は危機感を抱いている。

今後、市では天明鋳物をまちづくりのための一つの資源と位置付け、市内外に広く情報を発信することで、文化芸術以外の分野の活性化にもつなげたいとしている。「天明鋳物のふるさと散策」に代表されるような「天明鋳物を核とした様々な取り組みを展開していきたい」と上岡氏は語る。

また同会では、これまでの活動によって市民や行政の理解が進んできたことを受け、様々な方面からの協力を得ながら天明鋳物の継承と保存に取り組んでいきたいと考えている。若林洋一氏は、「将来のまちづくりや教育など、地域の抱える様々な課題と天明鋳物を結びつけた取り組みを進めていきたい」と語り、保存・継承活動に取り組むと同時に、天明鋳物を佐野市の地域資源と捉え、地域の課題解決のために活用していきたいとしている。



（左から）上岡氏、若林洋一氏、藤掛氏、若林秀真氏



**自治体名　栃木県佐野市**

- 人　　口：122,582人
- 面　　積：356.07km²
- 事　業　名：天明鋳物の文化財保護と継承活動
- 事業開始年度：平成19年度
- 事 業 主 体：天命鋳物伝承保存会・佐野市

連絡先

天命鋳物伝承保存会事務局　TEL・FAX 0283-65-0902
佐野市文化振興課　TEL 0283-61-1164　FAX 0283-62-8929
URL http://www.city.sano.lg.jp/kakuka/bunkashinkou.html

特集編

# 花嫁のれんを活かした賑わい創出 ～伝統の価値を再確認し、まちの宝に～

## 石川県七尾市の概要

七尾市は、石川県の北部、能登半島の中央に位置する。市内には七尾西湾、七尾南湾が広がり、北に能登島が浮かび、東は富山湾に面している。海に囲まれた半島ならではの海の幸のほか、山の幸に恵まれ、七尾仏壇、田鶴浜建具などが伝統工芸として挙げられる。

また、曳山と呼ばれる山車の曳き回される青柏祭や能登各地で行われるキリコ祭りの1つ、石崎奉燈祭など勇壮な祭りも開催され、毎年賑わう。

今回本事例で取り上げる花嫁のれん展は青柏祭の開催期間中にも行われる。

## 伝統的な地域資源の起源と歴史について

花嫁のれんは、明確な発祥時期は不明であるが、幕末から明治にかけて、旧加賀藩領の加賀、能登、越中地方の庶民生活の中に見られる伝統的な婚礼儀式の道具であり、嫁入りの儀式の際の「のれんくぐり」に用いられる。

多くは加賀友禅の技法が用いられ、花嫁の実家の家紋と様々な意味を持つ色、柄の組み合わせで造られる、2枚と同じ図柄のないものである。



花嫁のれん

婚礼の日、花嫁は嫁ぎ先に実家の家紋を入れた花嫁のれんを持参し、嫁ぎ先の仏間の入り口に掛け、そののれんをくぐって仏壇に向かう。そこで嫁ぎ先の先祖へ嫁になったことを報告するのである。

伝統の継承状況としては、戦後以降も地域独自の重要な婚礼儀式として継続されていたが、高度経済成長期以降、家の間取り等の変化や婚礼様式の変化（自宅婚から式場婚へ）により徐々に花嫁のれんを利用する家庭が減少し、近年では非常に稀なものとなった。

花嫁のれんは、本来、婚礼の儀が終わった後は二度と利用されることがないものである。従って、若い世代は花嫁のれんという風習を知らないまま、また、実家に母親、祖母の世代ののれんが眠っていることも知らないという状況になっている。

## 取り組みのきっかけ

失われかけていた伝統の「花嫁のれん」に再び注目し、地域おこしの目玉として活用しているのが、七尾市一本杉通りである。

同通りの商店会である一本杉通り振興会では、毎年昭和の日から母の日にかけての約２週間、約450メートルの通りの商店や住家に「花嫁のれん」を展示し、多くの見物客で賑わう。この花嫁のれん展は、平成26年度で11回目を迎えた。この取り組みの中心となって

いるのが、一本杉通り振興会・一本杉町会である。一本杉通り振興会会長、鳥居正子氏に話を伺った。

### （1）一本杉通りの賑わいの復活を目指して

花嫁のれんを開催している一本杉通りは、古くから良港に恵まれた七尾地域の交易で大変に栄えた通りであるが、商店街の衰退により、賑わいを失っていた。

取り組みをスタートさせたのは、一本杉通りに店を構える商店の女将5人組だ。5人は一本杉通りの商店に嫁いだ女将同士として日頃より仲が良く、子育て等がひと段落した頃から、通りに賑わいを取り戻したいという共通の思いを持ち、ことあるごとに話し合いや視察を兼ねた旅行を重ねてきた。

### （2）のれんへの気付きと取り掛かり

花嫁のれんに注目することとなるきっかけは、意外にも外部からの指摘であった。何か自分達のまちで地域おこしの目玉に活用できるものがないかと考えているときに、東京から来た知人が花嫁のれんを地域独自の特徴ある素晴らしいものとして話されたことがきっかけとなった。

それまで思いつかなかった花嫁のれんを指摘され、それが、どこの家の箪笥にもしまわれているはずだと気付いた5人は、地域に働きかけ、すぐに活動を開始した。まず、当時の一本杉町会長北林氏に、花嫁のれん展の開催を提案、また、町内の各戸に眠るのれんの展示に協力するよう各家庭を訪問し働きかけた。




鳥居醤油店　通りには５軒の登録有形文化財など歴史を感じられる建物が見られる

このような地域の中での地道な取り組みにより、平成16年のゴールデンウィークの青柏祭の時期には37軒、53枚の展示のれんを集め、第1回の花嫁のれん展開催にいたった。

## 取り組み内容

### （1）通りの家々をギャラリーに

毎年4月29日の昭和の日から5月の第2日曜日の母の日にかけての約2週間、商店や住家等日常の空間をギャラリーとして開放し、花嫁のれんを展示している。展示場所やのれんの提供を呼びかけ、また個別に訪問をして着実に展示箇所、枚数を増やした。

その結果、平成16年の第1回の際に37軒、53枚であったのれん展示は、平成26年度の第11回で50軒、170枚の展示にまで拡大し、同じ花嫁のれん文化を持つ旧加賀藩領の地域からも、その地域で伝わるのれんを一本杉通りの花嫁のれん展で展示してほしいとの依頼が来るほどになった。

また、一度展示場所を提供してくれた家は、特別な事情がある場合を除けば、毎年継続して協力してくれるという。

プライベートな空間を開放することは、容易ではないが、地域住民が主導して、同じ通りに住む者同士の信頼感、団結力によって維持されていることが住民の継続的な参加につながっているといえる。

### （2）物語性を重視したのれんの活用

のれん展の展示では、花嫁のれんが２枚と同じ柄のないこと、それぞれに親子の嫁入りの物語があることにちなみ、美しい展示を眺めてもらうだけではなく、１枚１枚ののれんに込められた意味を観光客にも伝えることを大事にしている。そのため、商店主らで30軒ほど「語り部処」を設置して、のれん展開催中のみならず、いつでも気軽に花嫁のれんにまつわる物語、その他通りの魅力などを聞くことができる。この取り組みが奏功し、個別の語り部にファンが付き、毎年語り部に会いにのれん展に来場するリピーターもいる。このような物語性の重視は、特に女性客の共感を集めるとともに、450メートル余の通りでありながら２日間かけて見物をする客もいるなど、通りへの滞留時間の

拡充にも寄与している。

### （3）展示の工夫

花嫁のれん展では、語り部の配置だけでなく、通り内各所に住民手作りの毛氈張りの休憩用椅子を設置し、見物客に配慮するとともに通りに彩りを加えるなど、住民が中心となって協力し合い、「あるものを活用」して、より良いものを作る取り組みがなされている。

また、花嫁のれん展の期間でないとのれんを見ることができないのを惜しむ声も増えてきたことから、平成23年には通り内の空き店舗を改装してのれんの常設展示を行う花嫁のれん館を試験的に設置した。その後、ガイドを配置するなどの取り組みを実施している（市の補助金有）。



空き店舗を改装した花嫁のれん館外観



花嫁のれん館内部

### （4）ごみ0宣言の取り組み

一本杉通り振興会では、花嫁のれん展の始まった平成16年から、見物客のため、そして生活する住民自身のために、「ごみ0宣言」を訴え、定期的な一斉清掃のほか、通りの美化、各家庭のごみの減量を目指す取り組みを続けている。まさしく通りの住民の団結を示す「向こう三軒両隣」の意識を取り戻す活動である。その意識は各家庭でごみを出す際には重さを量ることが習慣となるほど浸透している。

### （5）地域を活性化させるための取り組み

一本杉通りにある古い民家、商店の家屋の登録有形文化財への登録申請を花嫁のれん展のスタートに合わせて行い、現在までに5件の登録にこぎつけている。

平成22年には花嫁のれんのブランド濫用によるイメージの低下を防ぐことを目的とし、「花嫁のれん」の商標登録を一本杉通り振興会で行っている。

### （6）婚礼の儀式の再現

花嫁のれん展開催の幕開けとして、花嫁のれんの本来の用法である、嫁入りの際の「のれんくぐり」を、毎年1組、実際の新婚夫婦に体験してもらっている。花婿の実家に向かう「花嫁道中」から宅前（花婿の実家）で行う「水合わせの儀式」、そして宅内（花婿の実家）の仏間に掛けたのれんをくぐった後に仏壇のお参りをするという伝統的な婚礼の儀式の再現である。参加する夫婦は地域で実際にその年に結婚する夫婦のほか、地域の新婚者がいない場合、地域外の夫婦が公募で選ばれることもある。この儀式は花嫁のれん展と共に毎年多くのメディアで紹介され、地域の魅力のPRになるほか、今は行われることの少なくなった伝統的な儀式のあり方を若者にも伝えている。



花嫁道中

## 取り組みの成果

第11回を数える花嫁のれん展の継続的な取り組みにより、開催期間の入込客数は8万人を数え、毎年多くの来場者を呼び込み続けており、地元経済に与える影響も大きい。

また、忘れられかけていた風習「花嫁のれん」を地元の目玉として、また文化的財産として確立させている。実際に、のれんの意義が見直され、若い世代も婚礼に花嫁のれんを使うようになってきているという声もある。

また、毎年のれん展の期間のみ展示を行うというペースを崩さず、住民に無理のない、できる範囲での活動とすることで、一部の人が頑張るのではなく、一本杉通り振興会全体でより多くの人が協力して一つの取り組みを行う、地域内の前向きな連帯感が醸成されている。

重要な成果のひとつとして、世代交代により廃棄されてしまう運命にあったのれんについて、寄贈を受けて管理するなど、従来、嫁入りの際の一度きりの利用であったのれんに再度活躍の場と保存の道を与えることで、文化の継承に一役買っている。

## 今後の課題と展望

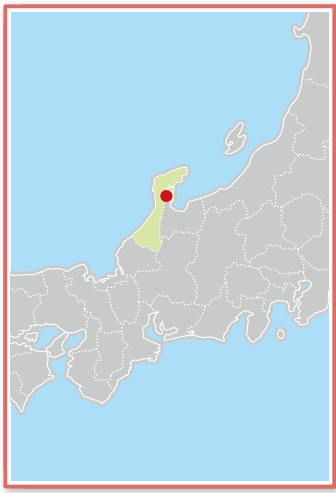
開催回数が2ケタを超えた平成26年度からは、この取り組みの若者への継承を大きな課題とし、一本杉通り振興会の若者等をのれん展運営の中核に取り込み、また、その若者を対象として語り部養成の講習を行っている。

今後のまちづくりについて、花嫁のれん展が脚光を浴び、多くの人が訪れるようになっている今でも、土産物屋やコンビニ等の進出に頼って利便性を重視した観光地化ではなく、まず地元の住民が愛することのできる、昔ながらのまちとしての誇りと品格を大事にしたまちづくりを推進し、のれん展の継続を図りたいとしている。

今後の花嫁のれん展の発展としては、現在450メートル前後であるのれん展の範囲を拡大させるため、通りの延長にある隣の町会に対して協力を求めていきたい考えである。向こう三軒両隣の精神で、少しずつ手の届く範囲、責任の持てる範囲でゆっくりと拡大を目指すことが重要としている。



話を伺った七尾市観光交流課堤主幹（左）、
中道主事（右）、一本杉通り振興会鳥居会長（中央）



**自治体名　石川県七尾市**

- 人　　口：56,659人
- 面　　積：318.09km²
- 事　業　名：花嫁のれんを活かした賑わい創出
- 事業開始年度：平成16年度
- 事 業 主 体：一本杉通り振興会・一本杉町会

連絡先

七尾市　産業部観光交流課
TEL 0767-53-8424　FAX 0767-52-2812
URL http://ipponsugi.org/noren/（花嫁のれん展ウェブサイト）

特集編

# 木曽町地域資源研究所 ～科学の力で木曽の新たな魅力発見～

## 長野県木曽町の概要

木曽町は、長野県の南西部に位置し、面積は476.06㎢、人口約12,000人の町。平成17年11月１日に木曽福島町、日義村、開田村、三岳村の4町村が合併し「木曽町」となった。県内の町村では最も広い面積を有し、木曽駒ヶ岳など四方を山地に囲まれており、総面積の95%以上が山林である。気候は内陸性であり、夏冬、昼夜の寒暖の差が大きい。

「日本で最も美しい村連合」に加入しており、自然豊かな景観を持ちながら、伝統的な郷土食や、郷土文化が根付いている町である。



木曽町遠景



旧中山道の町並み

## 伝統的な地域資源の起源と歴史について

木曽町に伝わる伝統的な郷土食に、「すんき」がある。「すんき」は、赤カブの葉などを、“塩”を使わずに植物に棲息している乳酸菌で発酵させて作る漬け物であり、健康食品としても注目されている保存食である。300年以上前に芭蕉一門の俳句に読まれるなどその歴史は古く、塩が大変貴重であった時代の先人の知恵が作り出した「すんき漬け」の酸味のある味は、地元の人々に長きに渡って親しまれてきた。漬け物としてだけでなく、「すんき汁」や「すんきそば」などにも使われている。

また、木曽の初夏を彩る伝統の名菓に、「朴葉巻（ほおばまき）」がある。「朴葉巻」は、米の粉で作った餅にこしあんを詰め、木曽で取れる独特な香りを持つ「朴の葉」で巻き、それを蒸し上げて作られる。古くから端午の節句などに“祝い”の菓子として家庭でも出されてきた「朴葉巻」もまた、木曽の伝統的な郷土食である。

そんな木曽の伝統ある様々な地域資源を科学的に研究し、後世に継承することや、新たな特産品づくりを通じて地場産業に寄与することを目的に設立されたのが木曽町地域資源研究所である。本来こうした研究は大学など専門機関に委託する場合が多いが、町民からの問い合わせや課題に迅速に対応するため、また特殊性もあることなどから、町が平成23年度に自前で設立した。町村単位でこういった研究機関を設立している事例は、全国的にも珍しいものである。

## 取り組みのきっかけ

木曽町の伝統的地域資源を活かす取り組みの経緯や

内容について、木曽町地域資源研究所の保井久子所長に話を伺った。

保井所長は、信州大学農学部の教授という経歴を持ち、それ以前に乳酸菌製品を取り扱う会社に勤めていたこともあり、同大学で長年乳酸菌の研究を続けてきた研究者である。

以前から町と交流のあった保井所長は、大学退職後すぐに同研究所の所長となった。現在は同研究所内での研究の他、町内外での講演や、学会での研究発表、国内外での論文発表などで各地を奔走している。

地域資源研究所のある建物は、国の保有であった旧帝室林野局庁舎（以下「庁舎」という。）を平成22年度に町が買い取り、それを改修して造られたものである。内部は研究室の他に、会議室や応接間、木工作品展示室などもある。一時期取り壊しの話も出ていた庁舎だったが、町民らの署名活動により、改修という形で新たに生まれ変わった。所員は所長の他、常勤の専任スタッフが1人と木曽町役場の職員が1人、勤務にあたっている。



研究所外観



研究所建物内「木工作品展示室」



研究所建物内「応接室」

町が買い取った当時の庁舎は、研究施設と言える状態ではなく、平成23年4月、設立時に着任した保井所長は、廃園になった保育園を間借りする形で研究をスタートさせた。木曽町の地域資源の有用性を科学的に解析し、新たに「機能性食品」を開発することで町の活性化を目指す、というのが設立目的だったが、研究施設としての設備が整うまでは、町内の各地を転々としながら研究を続けていたという。

やがて改修工事も進み、平成26年4月、研究所が庁舎に移転。現在は、町の助成により研究設備も充実しているほか、町議会議員などから構成される運営委員会を年2回程度、研究進捗会議を2ヶ月に1回開くなど、町の協力も得ながら運営にあたっている。

## 取り組み内容

### （1）木曽の郷土食「すんき」に潜む乳酸菌を研究

郷土食を伝承し、発展させる主な取り組みとして、まず第一に木曽町地域資源研究所で行っている様々な研究が挙げられる。

「すんき」から各種乳酸菌を分離・収集し、その中から新たな機能性をもつ乳酸菌を発見したことがその一つである。同じ長野県内での調査の中で、北部に位置する長野市、松本市と木曽地域を比較して、アレルギー患者数の割合が大きく異なっていることに注目した保井所長は、地域間の生活習慣の違いについて調べた。そして研究の結果、木曽地域のみで食べられる郷土食の「すんき」に含まれる乳酸菌が、抗アレルギー作用を持ち、高い免疫調節機能があることを発見したのである。「Sn26株」と呼ばれるこの乳酸菌の研究は

さらに進み、木曽町産芝霧種青大豆の豆乳に添加することで高い菌数を有する発酵豆乳を作ることにも成功した。糖の添加有無によって、「食べる」発酵豆乳と「飲む」発酵豆乳を作り、マウス実験から類推すると、毎日約100ml摂取することにより、花粉症やアトピー性皮膚炎などのアレルギーの予防・軽減効果が期待できるという。その他にも、Sn26株は、豆乳中の配糖体イソフラボンを、吸収の良いアグリコンにする効果があり、吸収しやすくすることから、抗がん作用や骨粗しょう症予防作用も期待できるという。昔から木曽で食べられてきた「すんき」が、なぜ健康に良いのか、どういう効果があるのか、その確かな科学的根拠を得るべく進められた保井所長の長年の研究が、一つの形となり、新しい機能性食品へと発展しつつある。

### （2）信州大学との共同研究

第二に信州大学農学部との共同研究を進めている「天然酵母」、「朴葉」、「枯草菌（こそうきん）」の研究があげられる。



研究室



研究設備

町内にある植物や土壌から採取した酵母の免疫調節を調べ、それを食品に活用しようという「天然酵母」の研究は、平成23年の研究所設立当初から進められていた。酵母の採取を始めたところ、208点の試料の中から、およそ5000株の菌床を分離し、そのうち免疫調節を持つ天然酵母7株の選抜に成功。町内の酒蔵で、この「天然酵母」を用いて「にごり酒」の製造を試験し、官能試験で高評価を得ている。

木曽の代表的な名菓「朴葉巻」に使われる「朴葉」もまた、共同研究の対象となっている。地域で親しまれる朴葉は、抗菌性があると言われており、これを詳しく調査研究したところ、ロタウイルス下痢症（生後数ヶ月～2歳児までの免疫力の低い小児のほとんどが経験する嘔吐・下痢を伴うウイルス感染症）の症状を軽減する作用が認められた。この研究による成果として、朴葉を用いた健康食品や薬品等の開発を県内の製薬会社と進めている。

他にも、町内にある生ゴミのリサイクル施設からの悪臭が問題となったことがきっかけとなり、町内の土壌から採取される「枯草菌」を消臭剤として活用する研究も、同大学と共同で進められている。まさに菌の地産地消によって、循環型社会を目指し、自然の微生物の力により環境に配慮した対処法を見出そうというものである。

これらの様々な研究成果は、日本食品科学工学会をはじめとした国内外に向けた数々の学会および論文で発表されており、現在も引き続き研究が進められている。研究によって得た成果は、特許出願もしており、木曽町の新たな地域資源が生まれることが期待されている。

## 取り組みの成果

### （1）研究成果をもとに商品開発へ

研究所では、現在取り組んでいる研究成果をもとに、すんき乳酸菌を利用した発酵豆乳や、木曽酵母を用いた酒の製造およびサプリメントなどの新たな利用法の開拓、朴葉を用いた健康食品や薬品等の開発、枯草菌の消臭作用を活用した消臭剤の製品化など、地域資源を新たに商品開発する様々な取り組みが模索されている。中でも木曽酵母を使った「にごり酒」は、長野県工業技術総合センターや地元酒造会社との共同

開発が進んでおり、商品化に大きく動いている。他にも県内外の民間企業から多数声がかかっており、「今後研究成果を活用した木曽の新たな特産品が次々生まれていくことを期待している」と保井所長は語る。

### (2) 研究所の取り組みを伝えるために

保井所長は、自身が大学で教鞭を執っていたこともあり、現在でも地元木曽青峰高校生にすんき乳酸菌や酵母の科学についての集中講義・集中実習を行っているほか、長野県内や東京での講演活動、執筆活動にも力を入れている。

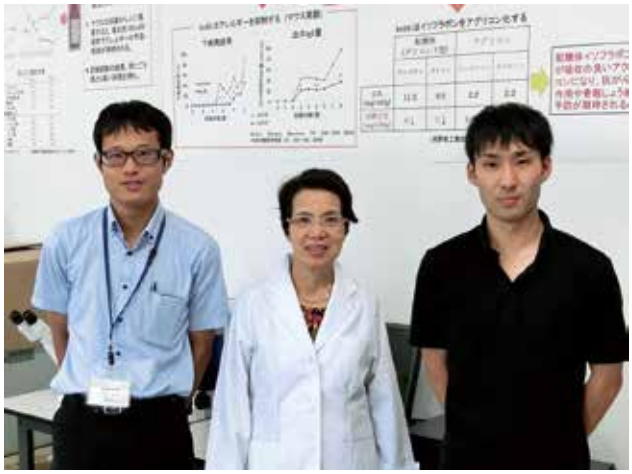
また、内閣府主催の第9回食育推進全国大会（国民に食育推進についての理解を深めてもらうため、「食育月間」を6月と定め、全国各地で関係者相互間の連携を推し進める中核的行事を実施）にも、発酵豆乳とにごり酒をあわせて出展して披露したほか、信州大学が主催する学内の研究成果を公開する「信州大学見本市」にも、にごり酒を出展するなど、精力的に広報を行っている。

## 今後の課題と展望

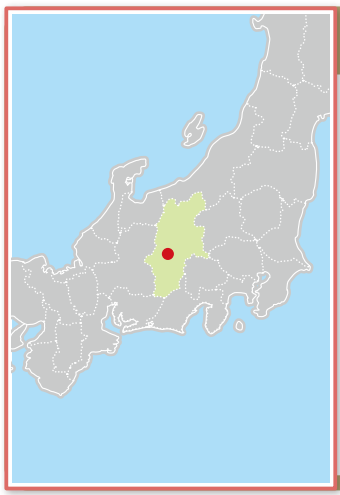
研究所の活動内容は非常に専門的なものでもあるため、地域住民には分かりにくい部分もあることから、町は毎月発行の広報誌に「菌況報告」欄を設けている。さらに、今後は住民向けの公民館講座なども取り入れていく予定であり、研究成果を着実に、地域住民のために活用していきたいと、町の担当者は言う。無論、新たな商品開発に向け、民間企業などへの情報提供にも尽力していきたいとのことである。

また特許についても、数年の審査期間を要してやっと取得できるものであるが、知的財産にシビアな今の時代に、町の貴重な資源を守るための重要な役割を担っている。すんきについては製法特許を取得済であるが、こうした成果が今後も数多く出てくることが、木曽ならではの魅力発信に大きく寄与することとなるため、これからの動向に期待が高まる。

最後に、保井所長は今後の抱負として、「木曽の豊富な資源を科学的に分析してできた機能性食品を、木曽町の発展に繋げていくために、全国、また世界に向けて広く発信していくよう、更なる努力を続けていきたい」と語った。今後の研究所の活動や成果に、注目が集まっている。



木曽町役場　戸田主任（左）　保井所長（中央）　原研究員（右）



**自治体名　長野県木曽町**

- 人　　口：12,189人
- 面　　積：476.06km²
- 事　業　名：木曽町地域資源研究所
- 事業開始年度：平成23年度
- 事 業 主 体：木曽町

連絡先

木曽町企画財政課企画係

TEL 0264-22-4287　FAX 0264-24-3602

URL http://www.town-kiso.com/

特集編

# ぐるっとまちじゅう博物館 ～文化財を活用した地域資源の再発見～

## 大阪府河内長野市の概要

河内長野市は大阪府の南部に位置し、南は和歌山県、東は奈良県と接しており、市の面積109.61㎢は府内３位の広さを誇っている。古くから高野参詣の活性化とともに交通経済の要衝として栄えた歴史を持ち、高度経済成長期に至ると多くの新興住宅地が造成され、大阪市のベッドタウンとして急速に発展した。一方、現在でも豊かな自然や歴史的・文化的資源が市内には多数残されており、これらは同市がさらに発展する大きな魅力となる可能性を持っているといえる。

## 伝統的な地域資源の起源と歴史について

河内長野市一帯は市内を流れる石川等の河川沿いに河岸段丘が形成されているが、市域の大部分は山林となっている。大阪府内としては比較的多くの縄文時代の遺構が発見されており、古くから人々の生活が営まれていたことがわかっている。飛鳥時代に遣隋使とともに中国にわたり、国博士となった高向玄理が河内長野市出身といわれている。

旧国制下では摂津、大和、紀伊、和泉が接する場所に位置していた。平安時代から室町時代にかけては、観心寺や金剛寺など数々の有力寺院が建立され、人口も急増し、多くの荘園も設置された。

江戸時代になると、高野参詣の庶民への浸透に伴って高野街道を行き交う人が増加すると、沿道の地域はさらに発達し、観光の名所としても非常ににぎわった。また、戦災にあっていないことから、江戸時代の民家建築も多く残っている。

先述のような歴史を持つ同市には、多くの文化財が存在している。国宝・重要文化財保有数では全国14位、府内では大阪市に次いで2位を誇っており、6件の国宝と79件の国指定重要文化財という数は、都道府県レベルで保有されている国宝・重要文化財の数に匹敵する（いずれの数値も平成26年9月末現在）。主な有形文化財としては、上記の観心寺、金剛寺の金堂などの仏教建築及び仏像等、「延喜式第十二残巻」をはじめとした古文書が挙げられる。また、「山本家住宅」、「烏帽子形城跡」など、古代から江戸時代にかけての建築物や史跡等の文化財も市内に点在している。

## 取り組みのきっかけ

河内長野市内に存在している、主に有形の文化財を活用した文化財特別公開事業「ぐるっとまちじゅう博物館」の取り組みの経緯や内容について、河内長野市政策企画課の緒方博氏、河内長野市教育委員会ふるさと交流課の太田宏明氏、島津知子氏に話を伺った。

同市における文化財の特徴のひとつは、古くから人々の生活や信仰の中で使われ、根付いてきたものがそのまま文化財になっているということである。また、同市にはくろまろ館（ふるさと歴史学習館）・滝畑ふるさと文化財の森センターなどの展示施設があるが、文化財の多くは展示施設ではなく、当時文化財が置かれた環境に、当時の形のまま存在していることが特徴として挙げられる。このように、古くから人々の生活や信仰の中で使われ継承されてきたものが、文化財となっているため、適切な説明がなければ、まちなみや里山の風景の中にとけこみ、認識が難しい文化財も多い。また、市では、文化財が多い事を漠然とＰＲするだけではなく、地域に対する関心と愛着を育むため、あるいは市内外へ発信すべき市の魅力として文化財を活用する必要性を感じていた。

そこで、市では、地域への関心の高揚を図り、市内外へ市の魅力を発信し、文化財をそれが置かれている自然的環境や社会的環境とともに公開する文化財特別公開事業を企画し、地域全体を博物館と見立て「ぐ

るっとまちじゅう博物館」と名付けた。そして、文化財所有者、ボランティア、地域住民とともに文化財の価値や市の魅力を来訪者へ伝える努力を行ってきた。また、事業は、年を追うごとに拡充し、平成16年からは子ども文化財解説を導入し、平成21年からは近隣の大学とも連携を行ってきた。

## 取り組み内容

### (1)「ぐるっとまちじゅう博物館」による文化財の公開と活用

「ぐるっとまちじゅう博物館」は平成15年度に開始し、平成26年度で12回目を迎える。現在のところは、毎年地域を決めて、その地域内の文化財を公開している。



文化財特別公開事業（延命寺）

最初に「ぐるっとまちじゅう博物館」の開催を地域に持ちかけたところ、積極的な賛同を得ることはできないこともあったとのことである。

その理由は、地域外から人が来ることへの抵抗や不安など感情に関わることではなかったという。むしろ、自分たちの地域の文化財をきちんと説明できなかったら恥ずかしいとか、期間中は特別に文化財を管理しなければならないため、地域の負担が増加してしまうということであった。また、文化財の所有者は一部の住民にとどまるため、このような文化財所有者が地域の中で浮いてしまうのではないかというような懸念もあったという。

これらの問題を解決するために、市では文化財解説用のシートを作成して配布したり、文化財ボランティアと協働して人的な支援を行うなど、文化財所有者や地域住民の負担を減らすための取り組みを行っている。このような取り組みが功を奏し、これまでは当初に企画した計画をほぼ実現してきた。

市では、事業を円滑に進めるためのポイントは、立場のちがう様々な人々をうまくコーディネートすることだと考えている。しかし、「最初から絶対いやだと言われたことはない。文化財を切り口にして、神社の氏子や寺院の檀家の集まりなど、価値観を共有しやすく、地域に関心が高い住民からアプローチしたのが良かったと思う。それでも、地域の文化財を公開することに対して慎重な立場がとられる場合もあるが、おもてなしの心を刺激して、その地域の文化に対する価値づけをしっかりと行い、公開を勧めることが重要と感じている」と太田氏は語る。



人気の文化財には多くの見学者が集まる（延命寺）



「模擬合戦」イベント（烏帽子形城跡）

また、集客の工夫として、市内外を問わず様々な人に興味を持ってもらうために、文化財公開と併せて地域の特色を活かしたイベントを組入れる努力も行っているとのことである。

### (2) 将来を見据えた取り組み～子ども文化財解説

「ぐるっとまちじゅう博物館」の最も特徴的かつ中心的なイベントとして位置づけられているのが、平成16年度から始まった「子ども文化財解説」である。公開地区の児童が地域の文化財のことについて事前に学習し、「ぐるっとまちじゅう博物館」の期間に合わせて学習成果を発表するという取り組みである。

この取り組みをとおして、子どもが地域のことを知り、授業やさまざまな情報で得た知識を現地で確認して、さらに来訪者に地域文化を伝えることを体験できる。また、子どもの発表を家族が聞きにくることによる集客効果と、子どもの地域に対する愛着や理解を育む効果も期待できる。



子ども文化財解説（観心寺）




「ぐるっとまちじゅう博物館2014」チラシ

このように、単に観光や文化財保護の目的だけでなく、将来的に地域に根付いて、地域のために活躍してくれる人材を育てていくことが「ぐるっとまちじゅう博物館」の大きな目的となっている。

「子どもが大きくなって市民として活躍する際には、このような体験をしている場合とそうでない場合では地域に対する考え方が全く異なるだろう。そういう面でも市の将来に対して大きなリターンがあると思う」と太田氏は語っていた。

## 取り組みの成果

「ぐるっとまちじゅう博物館」は河内長野市のメインイベントのひとつとして定着しており、特に有名な文化財を公開する際には6,000人を超える集客を達成している。毎年楽しみにして来てくれるリピーターも増えているという。

住民にとっては自らの地域の価値の発見と再認識につながっている。地域によっては子どもから高齢者まで、幅広い地域住民から「ぐるっとまちじゅう博物館」への協力もあったという。初めは「そっとしておいてくれ」と言われたこともあったが、やってみると「自分達の地域にこんなに価値があったのか」「価値を認めてもらえてよかった」と喜んでくれたのだそうだ。

また、文化財の特別公開をきっかけに、寺院でのボランティア活動が誕生するなど、様々な住民が地域活動に参加する機会につながっているほか、近年では「子ども文化財解説」の感想や思い出が、小学生の作文コンクールで入賞することもあるという。

「ぐるっとまちじゅう博物館」をきっかけにして、地域に関心を持つ住民が増えていると市では考えている。また、未指定文化財の公開を通じて、住民の文化財に対する認識が定着し、工事等を行う際にもそのような文化財に対する取扱いを注意してもらえるようになったという思いがけない効果もあったとのことである。

## 今後の課題と展望

当初は、ある地域を指定して順番に文化財を公開していけば、次の年には去年公開した地域でも地域住民が自主的に公開し、最終的には「ぐるっとまちじゅう博物館」の開催期間には市内で一斉に文化財が公開できるということを目標にしていた。しかし、実際にそこに到達するためにはまだまだ課題が多いということである。それは第一に人員体制の問題、次に費用、ノウハウなど様々な問題があるためだという。特に普段公開していない文化財を公開するためのコストやマンパワーの確保が課題になっている。

また、市民への周知もまだ十分とはいえず「ぐるっとまちじゅう博物館」の知名度を上げる努力も必要である。興味がない人にどうやって振り向いてもらうかも課題のひとつである。

さらに、子ども文化財解説は、現在は公開対象となる文化財を校区に持つ小学校の児童しか体験できないが、市ではできるだけたくさんの児童が関われるようにしなければならないと考えている。

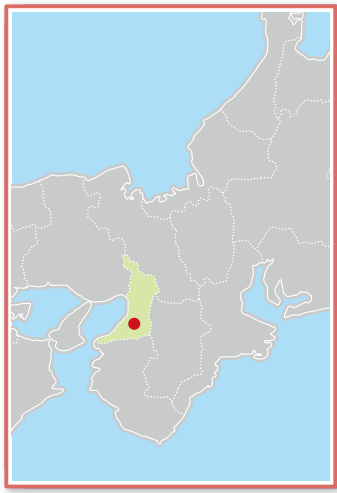
緒方氏は「貴重な文化財を守り続けていくためには、住民に対し費用面も含めた理解を得なくてはならない。これからは、文化財の保護はもちろんのこと、さらなる活用を進めながら、本市の強みとして教育やまちづくりの分野に絡めることで、定住・交流人口の増加などにつなげていくことが重要である」と今後の事業の方向性を捉えている。

また、島津氏は「地域の独自性とは風土や歴史などに現れる。全国的に宅地開発で似たような地域が増える中、地域の歴史的背景や独自エピソードで特色を持たせて深みを出すためのコンテンツとして文化財を使っていきたい」と語っていた。

太田氏は、今後の目標のひとつに事業の実施にあたり、ボランティアなど住民活動の役割を大きくしていくということを挙げた。これまで主に文化財を守ってきた旧村の住民に開発団地に住む新しい住民が参加し、「ぐるっとまちじゅう博物館」をより広い枠組みで実施するきっかけになればいいと考えている。また、今後のテーマのひとつに文化財の価値の顕在化ということを挙げた。「『見られないものが見られる』から、『見られるものを効果的に見せていく』事業に展開していきたい」とこれからの事業の方向性を見据えていた。



（左から）太田氏、島津氏、緒方氏



### 自治体名　大阪府河内長野市

- 人　　口：111,683人
- 面　　積：109.61km²
- 事　業　名：文化財特別公開事業「ぐるっとまちじゅう博物館」
- 事業開始年度：平成15年度
- 事 業 主 体：河内長野市

連絡先

河内長野市 ふるさと交流課

TEL 0721-53-1111（内線748）　FAX 0721-53-1198

URL http://www.city.kawachinagano.lg.jp/static/kakuka/kyousha/history-hp/index.htm

特集編

# おららの炭小屋
## ～炭焼きを活かした交流と地域活性～

### 徳島県那賀町の概要

那賀町は徳島県の南部に位置し、東は阿南市、西は高知県、南は海部郡、北は勝浦郡、神山町、美馬市、三好市に隣接している。

地域の北西部には四国山地、南部には海部山脈があり、標高1,000m以上の山々に囲まれ、地域の9割以上が森林という中山間地域である。

今回取り上げるおららの炭小屋（「おらら」は「自分たち」の意）は、那賀町内のとりわけ山深い地域、旧木頭村北川地区の取り組みである。

## 伝統的な地域資源の起源と歴史について

石油、電気の普及により時代は変わってしまったが、木炭は古来より生活に欠かせないものであった。那賀町の旧木頭村北川地区でも、他の山村地域同様、古来より炭焼きが行われ、代々その技術は引き継がれてきた。昔は、各家庭には臥せ窯と呼ばれる地面に穴を掘って窯を成型し蓋をする簡易な炭焼き窯があり、家庭で消費する炭をつくるのが、普通であった。

山奥の当地域内で生産された木炭は、戦前までは多くが村内消費用であった。しかし、戦後の交通事情改善と木炭燃料の需要増のため、元々豊かであった天然林を活かして木炭を多く生産し、町外にも販売していた。木炭の販売は貴重な収入源となったが、その後の高度経済成長期以降の燃料事情と生活形態の変遷により、木炭の需要や炭焼きは徐々に廃れ、その技術を持つ者は非常に少なくなった。



昔ながらの臥せ窯

## 取り組みのきっかけ

取り組みが始まった平成11年頃（1990年代後半）は、介護保険法の成立など高齢者の福祉と生活の対策が拡充されるなかで、高齢者の生きがいづくりをしようとする動きがあった。村でも高齢者の生きがいになる取り組みを始めようとして、20ほどの候補の中から炭焼きが選ばれた。

炭焼きが活動として選ばれた理由は、高齢者でも無理なく参加できる上、伝統を守ることができる取り組みだからである。

このようにして、高齢者の生きがい事業の一環として、村内の高齢者を中心とした13人のメンバーで炭焼き活動の準備を始めた。活動の最初は、拠点作りとして、草地になっていた公園跡地を取得し、集会や休憩に使う小屋作りを行った。そして、平成11年に炭焼き窯、作業小屋を建設、平成12年に「おららの炭小屋（奥木頭＝おくきとう＝炭焼き保存伝承会）」が設立された。

開始当時は小屋や炭焼き窯の整備のため、町の補助金を貰いながらも、自分たちでそろえられるものをできる限り使って活動してきた。現在の活動資金の状況については、後述する。

今回は、「おららの炭小屋」より大城慶太郎会長と野口穂氏、一般社団法人イコールラボ玄番隆行氏、那賀町地域おこし協力隊（農林資源振興担当）細貝旬氏、那賀町企画情報課長　湯浅卓治氏にお集まりいただき、炭小屋にて話を伺った。

## 取り組み内容

### 1．月１回の定例炭焼き（技術研修会）

月１回、第2土曜日に、定例会として炭焼きワークショップを行っている。炭焼きは火入れから取出しまでで最低２週間程度かかる。炭材の切り出し（確保）から窯の火入れ、完成した木炭の取出しまで行うため、定例会開催日以外にも日々作業は行われている。作業は炭小屋メンバーや集落の住民を中心に行うが、外部からの参加希望があれば広く受け入れている。過去には、パプアニューギニア、インドネシア、ドイツ、アメリカ等からの見学者があり、通訳を介してワークショップに参加して貰った。海外からの参加者はグリーンツーリズムの視察の他、炭焼きの技術視察にも訪れている。



現在使用されている炭焼き窯

### 2．炭焼き窯構築作業

現在活用している1基の炭窯は、これまでも2，3度の大きな補修をしている。すぐに使用できなくなるわけではないが、現在、新たな炭焼き窯を構築している。これは、大城会長を中心とした、昔の知恵を持つ指導者が健在なうちに、若い世代にも炭焼き窯の作り方を継承させておく必要があるとの意図によるものである。

新しい炭焼き窯の構築には、伝統的な技術や知識のみならず、現在の炭焼きから得られた改良案も積極的に取り入れられる。また、小屋や炭焼き窯等の設備や鉈の柄等の道具なども自分たちで作れるものは一から作る努力をしている。若い世代や街で生活してきた人達は、必要なものは買うという発想が普通であるが、作れるものはまず自分で作るということを実践しながら継承している。

### 3．小中学生の自然体験受け入れ

木頭地域の小学校、町内の相生地域の中学校の自然体験学習を受け入れている。平成16年に炭小屋近くの小川に堰を作り水深1m程度の安全な水場とし、一本乗り（昔の木材運搬手段）、いかだ遊び等川に触れる遊びを体験させるほか、炭小屋では木工体験などをさせてきた。同地域の子供達は、自然に囲まれて生活をしているものの、最近では事故防止のため川遊びを制限する指導が行われていることから、おららの炭小屋での水に触れ合う経験は貴重なものとなっている。

また、近隣の小中学校の他、毎年夏には神戸の自然観察団体が神戸の子供たち20～30人を引率して、炭焼き体験と自然体験をするキャンプを行っている。

### 4．大学生のインターン受け入れ

平成23年以降、大学生のインターンを受け入れている。単位認定が可能なプログラムとするためには法人格を持った組織として大学との契約が必要であるが、この問題は、同地域にIターンし長く炭小屋の活動に関わってきた玄番氏が設立した「一般社団法人イコールラボ」が中間支援組織として入ることで解決している。

細貝氏は大学在学中にこのインターンに参加した1人で、地域おこし協力隊として昨年より那賀町に移住し、「おららの炭小屋」をはじめ、木頭地域の地域活動に参画している。

### 5．活動資金の確保

活動資金の収入源には、炭焼きによる生産物や木工工芸品の販売収入、体験学習等の受託収入、那賀町からの移住交流支援センターに関する助成や地球環境基金、トヨタ財団等からの事業費助成等がある。

自主財源としては、主に炭焼きで出来た生産品の販売収入が挙げられる。木炭については、特別な加工を行わず販売し、1窯分で200kg程度の木炭が出来、概ね2～3万円の現金収入となる。商品として加工販売しない理由としては、地区から運搬する際に破損したり

するリスクがあることによる。ただし、木炭そのものとしての販売が難しい木炭の小片は、自分達の畑にすき込む等して畑の土壌改良に活用し無駄にしていない。

また、炭焼きの副産物として、除草や消臭等に用いられる木酢液がある。木酢液も大量生産はできず、1窯の炭焼きで100～200ℓほど生成されるものの、1度採取してから1年ほど不純物を自然沈殿させる必要がある。これらの炭焼きによる生産物と木工工芸品は、村内での自家消費にまわしたり、希望者に直接販売したりするほかは、旧第3セクターで、現在は株式の85%が地域住民に譲渡されている株式会社きとうむらの物産販売店「よいしょきとうむら」で販売している。

前記のように、自主財源である販売収入は多くはない。しかし、元々「おららの炭小屋」は高齢者の生きがいづくりを目的に発足しているため、必ずしも無理な増産等による収入増加は目指していない。昨年までは九州の生活協同組合から大量の注文があり、一度に2～3窯分の木炭を高い価格で発注してくれていた。しかし、そのペースでは地元に供給できる炭もなくなってしまう状況で、そこまでしての外部販売は出来ないと判断、現在は同組合からの受注はしていない。ただ、道具や車の維持費等の負担が重く、収益の確保が課題となっている。



炭俵



土産用木炭と木酢液

## 取り組みの成果

活動を開始した平成12年頃、炭焼きの技術を身に着けている人は3人程度しかいなかった。それから15年の間の「おららの炭小屋」の活動がなければ、この地域から炭焼きの伝統は失われていたかもしれない。

近年、木炭の価値が見直され多孔質、アルカリ性等の性質を活かした新たな用法（脱臭、ろ過、土壌改良等）も注目されるなか、手頃な価格で手作りの木炭を手に入れることが出来るため、購入者から喜ばれている。

炭焼きのワークショップの他、自然体験活動については経験豊富な年配者がまさに主役であり、若者にとっても日頃触れられない自然や技術に触れることが出来る貴重な場となっている。炭小屋での作業やワークショップの後は、シカやイノシシ、魚等をその場でさばいて調理をして地域の食材で懇親会を行う。まさに老若男女の憩いの場となっている。

また、山村留学や自然体験の受け入れ等、県内外、国内外の客との各種交流事業においても拠点として重要な役割を果たすに至っている。

Facebookやホームページでの情報発信を通じて、興味を持った域外の人々がコンタクトをとり、訪れてくれる。また、NHKに取り上げられた際には海外での放送もあったことから、それをきっかけとして国外からの炭焼き技術視察や山村留学に繋がった。

## 今後の課題と展望

高齢者の生きがいづくりから始まった「おららの炭小屋」の取り組みは、那賀町における幅広い人々の交流拠点として重要となっており、今後の活動継続と、後継者育成が必要となっている。

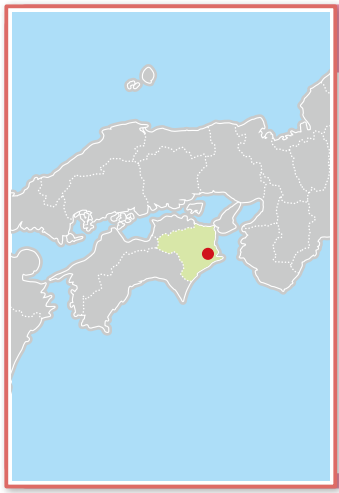
村の生活では収入源が限られており、若い世代が町外に仕事に出てしまうという現状がある。また、炭焼きのみでは主たる収入にはならず、それのみを仕事として残していくには難しい。従って、炭焼きの活動に限らず、地域ブランドの確立や交流人口の拡大を図った上で村に定住者を増やし地域活動の担い手を増やしていきたいと考えている。

地域おこし協力隊の細貝氏が若さを活かして村に溶け込み、頑張っているが、彼はもっと若い人に村の中に入ってほしい、若い人が増えれば増えるほど、できることは多くなると考えている。

木炭の原料となる雑木は貴重な天然資源であり、むやみに切り出して枯渇させてはならないので現在は天然雑木を減らさないペースでの炭焼き活動を行っているが、メンバーが昔から大事にしてきた村内の人的つながりと「おららの炭小屋」の活動への評価によって、土木会社や森林組合等からも善意で雑木を分けてもらっている。今後は、世代交代をしても引き続き地域のそういった支え合いの人的関係を継承していくことが課題であろう。




話を伺った皆さん
上段左より、地域おこし協力隊 細貝氏、
那賀町企画情報課課長 湯浅氏
下段左より、一般社団法人イコールラボ 玄番氏、
おららの炭小屋会長 大城氏、野口氏



**自治体名　徳島県那賀町**

- 人　　口：9,517人
- 面　　積：694.86km²
- 事　業　名：おららの炭小屋（炭焼き、木工、竹細工、飾り炭等山の手仕事全般）
- 事業開始年度：平成12年度
- 事 業 主 体：おららの炭小屋

連絡先

那賀町　企画情報課
TEL 0884-62-1184　FAX 0884-62-1177
URL http://olala.jp/, https://www.facebook.com/olalakito

特集編

# 指宿まるごと博物館構想推進事業 ～映像記録による郷土芸能・伝統行事の継承と発展～

## 鹿児島県指宿市の概要

指宿市は、薩摩半島の最南端、鹿児島湾口に位置し、中央部には九州一の大きさを誇る池田湖、南西部には標高924mの薩摩富士と呼ばれる秀峰開聞岳などがあり、緑豊かな都市である。

市の全域を霧島火山脈が縦断しており、世界に類を見ない「天然砂むし温泉」をはじめ、豊富に湧出する温泉に恵まれている。また霧島錦江湾国立公園に指定されている自然景観や前述の世界的にも珍しい砂むし温泉をはじめとした観光施設を生かした特色ある観光地づくりが進められている。

## 伝統的な地域資源の起源と歴史について

指宿市の歴史は古く、旧石器時代から人々が生活を営んでおり、把握されているだけでも120か所の遺跡がある。中には15,000年前の集落である水迫遺跡といった国内でも貴重な遺跡もあり、昔から人が住みやすい土地であったことがわかる。近代には、指宿市は交易拠点として発展し、徳川家康によって海外貿易を許可された船が、指宿市の山川港から出航したり、江戸時代においても、琉球を窓口とした海外交易の拠点の藩港として、薩摩藩の中で重要な地位を占めていたりしていた。

指宿市が交易の拠点だったという証は現在も残っている。江戸時代に指宿市に伝えられたとされる「石敢當（せっかんとう）」と呼ばれる中国由来の石製の魔除けが山川港周辺には多数見られることや、琉球使節団の一行が、無事の渡航を感謝して枚聞神社へ参拝



石敢當

中、街道沿い等で踊った舞を真似たとされる「琉球傘踊り」が市内の各地で郷土芸能として根付いている。このほか薩摩藩時代の海外交易の名残である有形・無形の文化財が確認できる。


利永琉球傘踊り

## 取り組みのきっかけ

指宿市には、古代から近代に至るまで、史跡や考古資料等の埋蔵文化財をはじめ、石碑などの有形文化財、郷土芸能や伝統行事などの無形文化財等、様々な歴史的・伝統的な文化財が残っている。しかし、それらがうまく伝承されず、また、住民達がそれらを知らない、さらにその魅力に気付いていないことがあった。

そこで、指宿市では豊富にある有形物・無形物の様々な文化財を指宿市民へ広く周知し、地域の良さを見つめ直し、再発見し、文化財を活かしながら次世代へつなぐ「指宿まるごと博物館推進構想事業」を平成

23年度より始めた。

この取り組みは市全体を博物館とみなし、市内にある自然・歴史・文化・産業等の全てを貴重な展示物として位置づけ、それらを観光・教育・地域活性化に活かそうとするものである。「指宿まるごと博物館推進構想事業」では様々な取り組みが行われているが、現在、地域に伝わる郷土芸能・伝統行事の映像を記録し、DVDにまとめる新しい事業に取り組んでいる。元々、指宿市を含む鹿児島県は郷土芸能が非常に豊富で、1,000を超える種類の郷土芸能がある。そのような土地柄から指宿市では社会参加活動として、青少年から高齢者まで幅広い人達の郷土芸能や地域行事への参加を推進しており、市としても郷土芸能・伝統行事を重要視している。しかしながら、コミュニティ内で世代間を超えて守り伝えられてきた郷土芸能は、各保存会構成員の高齢化や地域の少子化等の理由から継承できる若い人が徐々に少なくなってきている。毎年、市内で行われる指宿市産業祭、生涯学習推進大会において、輪番で2、3団体が郷土芸能を上演していたが、「来年は踊りを披露できないかもしれない」など




上野猿の子踊り




中小路唐人踊

将来を心配する声が聞かれるようになってきた。

指宿市には、市内各地の郷土芸能保存会の代表が集う指宿市郷土芸能保存会が設立されている。そこで、指宿市郷土芸能保存会と連携をしながら、行政として今何かできることはないかと考え、郷土芸能および伝統行事について練習風景から本番風景はもちろんのこと、その由来等を解説した映像を保存し、次世代へつなぐ事業を始めることになった。指宿市郷土芸能・伝統行事映像記録事業について、指宿市の鎌田主査及び奥村主査に話を伺った。




指宿まるごと博物館マップ

## 取り組み内容

指宿市郷土芸能・伝統行事映像記録事業は、市内で継承されている29の郷土芸能、10の伝統行事をデジタル映像で記録する取り組みである。1団体あたり3時間程度の撮影をして、定点カメラで撮影した映像、また、ハンディカメラで撮影した映像と定点カメラで撮影した映像を編集した短編映像（1団体あるいは1伝統行事につき10～15分程度）の2つを制作する。撮影内容としては、その郷土芸能・伝統行事の由来や起源をはじめ、それに関わる人達、楽器や必要な道具、曲、練習風景、本番までの段取りや準備、神社奉納等の様子などあらゆる項目が対象となっている。

撮影されたものについては、今後、指宿市文化遺産普及促進事業として、指宿まるごと博物館ホームページで広く配信するとともに、1団体あたり15分程度のDVDを作成し、市内各学校・校区公民館等に配布

し、郷土教育や地域活性化に役立てられる。

映像撮影するうえで工夫した点としては、現在、伝えられている郷土芸能・伝統行事を正確に映像として残すことはもちろんのこと、普段、馴染みのない人が見てもわかるように努めたという。そのために、既に踊りを引退した人達にも取材を行い、その郷土芸能・伝統行事の由来や起源を説明してもらうとともに、その踊りなどの細かい見せ場やポイントを解説してもらうなど、正しく分かりやすく次世代の人達へ引き継ぐことができるようにした。現在、郷土芸能・伝統行事に携わっている人達も、その由来や起源を初めて耳にしたという人もおり、初心者だけでなく現役の人達にとっても理解を深めることに役立ったという。

この取り組みは、現時点で守り伝えられてきたものが50年後、100年後にもどのようなものだったかがわかるように記録保存することを目指している。それは、このように記録保存することで、たとえ郷土芸能・伝統行事が、この先に途絶えてしまっても、ある時を契機にその時にいたメンバーで活動を再始動できる手がかりになる。

保存会としては、郷土芸能・伝統行事を記録保存することで、継承について確かな道筋がつき、撮影を契機に次世代へ向けて活動を盛り上げていこうという機運が高まったという。





田中手拍子踊り練習



利永琉球傘踊り練習風景

## 取り組みの成果

指宿市郷土芸能・伝統行事映像記録事業は、活動の様子を撮影し次世代に残すことを目的にしているが、現在活動している踊り手達やそれらを支援する指宿市に与えた影響は大きい。

この事業では、郷土芸能・伝統行事についての由来や起源を記録するため、普段は練習に来ない引退した人達から取材を行った結果、現在行われている踊りと以前の踊りでは所作に違いがあるということがわかった。踊りを継承する過程で、難しい所作は踊りづらいということであえて省いて継承したため、現在の踊りと以前の踊りに違いが生まれたという。「本来の正しい姿の踊りを次世代に継承しよう」と、現在の保存会の人達が自発的に引退した人達から踊りを学ぶ勉強会を開くなど新たな動きが起きている。

また、以前は自分達の活動に特に自信を持っていなかったが、この事業を契機として、その歴史をひも解くうちに、自分達の踊りが歴史ある素晴らしいものだということに気づき「もっと早く撮影をしてくれればよかったのに」という声も市民から聞かれるようになり、自らの活動を前向きに見直すきっかけにもなったりしている。

活動を支援する指宿市としても、今までは、各保存会より提出される年間計画により活動状況を把握するだけで、実際の現場の状況を知る機会が少なかった。この事業を通して、本番以外に普段の練習風景など、どのような環境で郷土芸能・伝統行事を行っているかということがわかり、また自らの世代で活動を盛り上げていこうという保存会の人達の熱い想いに触れ、今

までよりも深く市民の活動を理解できたことが成果の一つであるという。

## 今後の課題と展望

指宿市が撮影で各保存会長や区長、公民館長達に取材したところ、「青少年から高齢者まで世代間交流を図ることができる郷土芸能・伝統行事を、地域コミュニティを維持していくための1つの大切な手段として、今後も守り伝えていきたい」と、口々に市担当者に語ったとのことである。

それを受け、指宿市の今後の課題は、各地域の郷土芸能・伝統行事をどのようにすればさらに活性化・継続化できるかであり、その仕組みや場所づくり等、行政だからこそできることに取り組みたいとしている。

例えば、地域内だけで郷土芸能等の活動を行うことが出来なくなってしまった場合においては、小学校と協力して学校行事として児童に参加してもらい活動するなど、以前よりも広域の範囲で行うようにするなどである。

従来は踊り手の居住地域や年齢に決まりがあったが、市・学校・保存会などが一緒になって郷土芸能・伝統行事をより気軽に親しむ環境を整え、これからも市を挙げて郷土芸能・伝統行事を守っていく必要があると考えているとのことである。

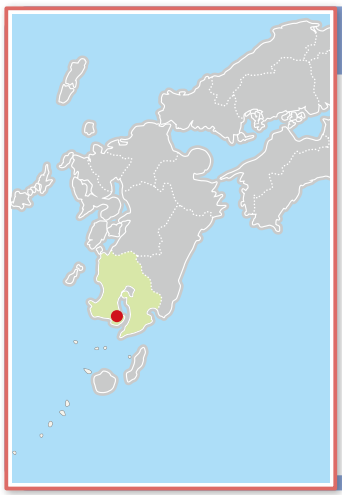
指宿市の今後の展望は、まずは指宿市文化遺産普及促進事業として、指宿まるごと博物館ホームページに郷土芸能・伝統行事の短編映像を配信し、また、その短編映像をDVDに記録したものを、市内各学校、校区公民館等に配布するなど情報発信に努め、将来的には郷土芸能・伝統行事のアーカイブとすることを目指していく。

また、指宿まるごと博物館のコンテンツの一つとして、観光にも生かすために各郷土芸能や伝統行事等の上演スケジュールや由来、見どころ、楽しみ方等を記載した郷土芸能・伝統行事のガイドブックを作成する予定である。市内外の人達が、そのガイドブックを携えながら、各地域の公民館等で行われる郷土芸能や伝統行事を実際に観て歩き、郷土芸能や伝統芸能について興味を深め、さらには踊りに参加したい、または継承者になりたいなどといった動きにつながり、これからの後継者の掘り起こしのきっかけ作りになれればと考えているとのことである。

指宿市には、昔天然痘が流行してたくさんの被害が出た時に二度とこのような事態が起こらないよう神に祈った踊り「疱瘡踊（ほうそうおどり）」がある。このように郷土芸能・伝統行事はその地域の出来事を伝える地域の歴史である。はるか昔から語り継がれてきた地域の歴史が失われることなく、さらに発展して次世代へと引き継がれるよう指宿まるごと博物館の今後の取り組みに期待をしたい。



指宿市教育委員会社会教育課　鎌田主査（左）、
指宿市総務部市長公室　奥村主査（右）



**自治体名　鹿児島県指宿市**

- 人　　口：42,751人
- 面　　積：149.01km²
- 事　業　名：指宿まるごと博物館構想推進事業
- 事業開始年度：平成23年度
- 事 業 主 体：指宿まるごと博物館実行委員会

連絡先

指宿市教育委員会　社会教育課
TEL 0993-23-5100　FAX 0993-23-5000
URL http://youkoso-ibusuki.com/marugoto/

# 本　編

## 33事例

# 熊舞

北海道登別市

## ～北海道開拓の歴史と温泉発見の伝説を今に伝える郷土芸能～

## 市町村の概要

登別市は、北海道の南西部に位置し、形状はほぼひし形をなしている。

南は太平洋に面しその海岸線はほぼ一直線、東は登別漁港、クッタラ湖付近で白老町と接し、北はオロフレ峠、来馬岳付近で壮瞥町に接している。

さらに、西は鷲別岬から鷲別岳にかけて室蘭市・伊達市と接している。

支笏洞爺国立公園の中核に位置し、登別温泉やカルルス温泉を抱える北海道有数の温泉観光地である。

## 熊舞の誕生まで

今から33年前の昭和56年に「郷土芸能保存会　登別温泉熊舞の会」が発足した。

郷土芸能の熊舞が誕生したきっかけは、登別温泉の青年有志が中心となり、当時低迷していた登別観光を活性化し、観光客にも喜ばれ、登別観光の一役を担い、さらに次の世代にも受け継いでもらえるものを残そうと、色々と模索し数年をかけて地方の郷土芸能や古来からある獅子舞等を研究し、地域に密着している郷土芸能を参考に登別温泉に相応しく、北海道を代表する生き物の熊を使って新しい郷土芸能を創作しようと、登別観光協会全面協力のもと、花柳流に依頼し誕生したのが「熊舞」である。

熊舞を創る上で基本としたのは、登別温泉が発展できた根源である「湯」への感謝と千客万来の祈願を目的とし、登別温泉の開湯の歴史を織り交ぜ、熊と人間との関わりから地獄谷に導かれ、今の登別温泉が生まれたことを表現することであった。

## 現在の取り組み状況について

数百年前、けもの道しかなかった登別温泉の湯沼に熊やキツネなどの動物達が薬湯に浸かっており、先人がこの地に初めて足を踏み入れた時に山中に熊に出会い、その熊の道案内で地獄谷にたどりついたという伝説が言い伝えられている。熊舞は、心地よい横笛の音色と迫力ある太鼓に合わせて、大自然での熊と人間は敵ではなく、心の通い合う友達であったとの光景を北海道開拓の歴史と温泉発見の伝説をテーマにユーモラ




熊舞（上海万博）



熊舞（のぼりべつ桜まつり）

スな舞で表現した郷土芸能である。文字通り、2頭の熊が繰り広げる舞は圧巻であり、演目終了後には拍手喝采が沸き上がる。

登別市最大のイベントである「登別地獄まつり」や、登別温泉の冬の奇祭と呼ばれている「登別温泉湯まつり」をはじめとする市内の各種イベントで毎年披露している他、市外または道外のイベント、さらには伊勢神宮でも披露した実績を持つ。

また、登別温泉に宿泊する外国人宿泊客や海外から旅行会社やメディアを招請する際にも披露されており、日本人観光客だけではなく、外国人観光客に対しても満足度が高く登別市の観光PRの一端を担っている。その他、登別温泉の宿泊施設からは宿泊客が宴会で登別温泉らしい出し物をとリクエストした際には郷土芸能の「熊舞」が非常に重宝されており年間100回程出演している。

なお、後継者の創出と地元の人達に郷土芸能「熊舞」を理解してもらうことを目的として、地元の中学生を対象に熊舞の指導を行っている。熊舞指導を受けた中学生は、登別市最大のイベントである「登別地獄まつり」等で披露しており、生徒達と地元住民のコミュニケーション向上にも繋がっている。

また、熊舞指導を受けた卒業生の中には「登別温泉熊舞の会」への加入者も出ている。

## 現在の課題について

現在の課題は、熊舞の会のメンバーが自ら数年に一度行っている、熊の衣装補修に要する時間と費用の問題、また、太鼓の張替にも多額の費用がかかり熊舞の会だけで費用を負担するのが難しい状況にある。

熊舞の会のメンバーの殆んどが勤めながらの活動なので、年間の出演回数に限界がある。

また、若い世代に熊舞の会に加入してもらい後継者を育てたいが、若者の減少で地元からだけでは難しい状況にある。

熊舞が誕生してから33年経つが、従来の熊舞の動きに今後は少しアクロバティックな要素も取り入れた熊舞にしたい。



### 自治体名　北海道登別市

- 人　　口：50,613人
- 面　　積：212.11km²
- 事　業　名：熊舞
- 事業開始年度：昭和56年度
- 事 業 主 体：登別温泉熊舞の会

連絡先

登別市観光経済部観光室観光振興グループ

TEL 0143-84-2018　FAX 0143-84-2519

URL http://www.noboribetsu.ed.jp/~iinkai/020/003/003.htm

# 日の本中央まつり

青森県東北町

## ～地域の文化財・歴史を活かした地域活性化～

## 市町村の概要

東北町は、青森県上北郡の中央部に位置する町である。人口は約19,000人で、東北町の町有地で地番を持つ、宝湖と呼ばれる小川原湖を有している。

恵まれた環境を生かし育まれるものは、農業や水産業、いで湯、健康福祉・スポーツなど多岐に渡っている。

## 文化財からまちおこしを

昭和24年旧東北町内で「日本中央」と刻まれた石碑を発見。この石碑の説として、平安時代、日本中央の「日本」は当時の蝦夷地を指す呼び名で「ひのもと」と読み、蝦夷討伐の北進が次第に狭まると陸奥最奥の地「都母（つぼ）」あたりで坂上田村麻呂が朝廷の力を示す為に矢尻の先で刻んだといわれている。「都母」とは現在の東北町と七戸町を中心とした上北地方とされ、当時の日本の領域は樺太までと広く、このあたりが中央とされていた。しかし一方で、坂上田村麻呂の陸奥下向は青森県まで及んでいないともいわれ、石碑「日本中央」を巡る説には真偽論争がわきおこり、いまだ謎とされている。

平成2年に旧東北町において、石碑が有形文化財第1号として指定された。文化財指定を機に、伝統的な地域資源を見直す機運が高まり、9世紀初頭に上北地方を支配していた都母一族が五穀豊穣等について、大たいまつに火を灯し祈りを捧げたと伝えられる「たいまつ祭」を再現することになった。平成9年の湖水まつりから始まり、五穀豊穣を祈願する意を踏まえ、平成17年の町合併から「東北町秋まつり」の際に実施した。翌年、平成18年「東北町日の本中央たいまつ祭」、平成22年「日の本中央まつり」となり、現在に至っている。



たいまつ花火

## 地域一体型のまつり

現在の「日の本中央まつり」では、たいまつ祭が注目されるものの、各町内会より山車や祭囃子、神楽太鼓、仮装大会、流し踊りなどが催され、様々な取り組みが行われている。神楽太鼓と祭囃子は競演会があり、各町内会は定められた規定の中で工夫をこらし、迫力ある演奏を披露している。仮装大会では、地元保育園や女性団体、町に官舎を置く自衛隊も参加し、演者も観客も楽しめるよう工夫している。また、たいまつ祭は河川敷にステージと3mから5mの約10本のたい



ナニャドヤラ



まつり囃子



五穀豊穣奉納の儀

まつを組み、たいまつに火を灯す祭である。開催場所を小川原湖から駅前の河川敷に変更し交通の便がよくなったことと、たいまつの明かりだけで辺りを照らす非現実的な祭典が注目され、今では町外からも観光客を集めている。

次に、この祭を通じて小・中学生への伝統継承を進めている。神楽太鼓やナニャドヤラ（旧南部藩に伝わる盆踊り）などの伝統芸能もあり、祭というコミュニティを利用し、新しい世代へ地元の伝統を受け継ぐ機会としている。

子供の活躍の場を増やすことにより親や家族を巻き込み、同時に地元業者を巻き込み、町の景気に潤いを持たせ、青年が活躍することにより祭に華やかさと活気を持たせている。地域が一体となり、それぞれに役割を持たせ、商工会や町の青年部団体を中心に、各町内会で工夫をこらし、参加団体を減らすことなく祭を年々盛り上げている。

さらに、たいまつ祭の夜は、町内外より多くの観光客を集め、飲食店はもちろん、町の売りである温泉施設の利用も増え、地域経済への影響は大きく、地域活性化に繋がっていると考えられる。

## 祭からまちおこしを

課題としては担い手不足が挙げられる。地元に高校がなく、近隣市町村に大学もないことから、若い年齢層の地元離れが進み、担い手の減少に苦労した。そのような問題もあったが、地元住民が協力し祭を継続した結果、小・中学生時に体験した若年層が地元に戻って参加したり、地元に官舎をもつ自衛隊へ参加を呼びかけ、可能な限り参加者数を増やすことに努めている。

今後は、小川原湖という観光名所や、「いで湯のさと」と呼ばれるほどの源泉など、観光資源を多く所有しているため、日の本中央まつりをきっかけに県外へも東北町をアピールし、一年を通じて足を運んでもらえる売込みを進めていきたいと考えている。



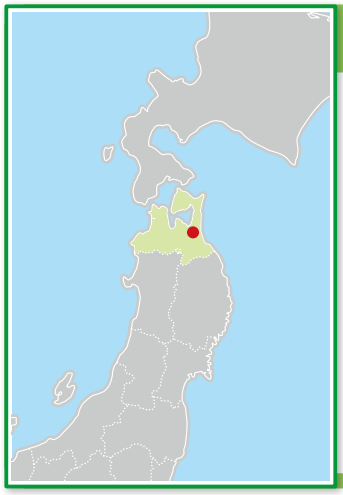
上板橋剣舞




神楽囃子



燈篭流し



**自治体名　青森県東北町**

- 人　　口：18,964人
- 面　　積：326.71km²
- 事　業　名：日の本中央まつり
- 事業開始年度：平成9年度
- 事 業 主 体：日の本中央まつり実行委員会

連絡先

東北町企画課
TEL 0176-56-3111　FAX 0176-56-3589
URL http:// www.town.tohoku.lg.jp/

# 奥州市の文化財継承と創造事業

岩手県奥州市

## ～無形の文化財を伝承するのは人々の情熱と力～

## 市町村の概要

奥州市は、岩手県の内陸南部に位置し、人口は約124,000人である。

市の中央を北上川が流れ、北上川西側には胆沢川によって開かれた胆沢扇状地が広がっており、地域全域が緑のあふれる豊かな自然に恵まれている。

## 「暮らしのありよう」を見つめて

地域に継承されてきた伝統的文化の存続が難しくなってきている。それは、後継者不足によるものである。「暮らしのありよう」が変化し、いわゆる伝統的文化の存在の意義さえも失われつつある。

この地域に伝承されてきた神楽についてみれば、その起源は、殆んどは江戸時代末期（西暦1800年代）頃に始まったとされ、100年を超える時間、地域のものとして伝承されてきた。しかし、その活動が難しくなったのは、ごく最近（昭和50年代以降）のことである。高齢化が原因であり、受け継ぐべき若い世代が興味を示さなくなり、現在はその存続さえもが危ぶまれている。幸いにも、活動中止の危機に瀕したもののなんとか復活したりして、現在のところ全く活動しなくなった団体はないが、伝承の危機にあることにはかわりはない。



ホームページトップページ

いわゆる「郷土芸能」は、その年の五穀豊穣を願い、家内安全、地域の安寧を祈り感謝する行事であり、加えて人々の暮らしを豊かにする娯楽でもあり、その継承は大事である。しかしながら、現在はただ単に継承されてきた地域の芸能でしかなくなっている。そして、子供達にとってその興味は失われてしまうだけのことである。

現在の「暮らしのありよう」を否定するものではないが、以前そうであったように、自然に感謝し、祈りのある「暮らしのありよう」を今一度見つめ直してみる必要があるのではないか。そして、それは子供達とともに行うことが大切である。「郷土芸能」の継承はその一つの手段でもある。

伝統芸能に脈々と生き続けるべき祈りと感謝の心を見直し、次世代に引き継ぐ義務が我々にはある、との考えのもと、その地域に継承されてきた文化、たとえば「神楽」「剣舞」「鹿踊」等々の郷土芸能（地域には約75団体ある。）や、「日舞」「琴」「茶道」等を含む伝統的文化遺産の後継者の育成を目指してこれらの取り組みを始めたものである。そして再度、現在の「暮らしのありよう」を見つめ直すきっかけになってほしい。



おうしゅう伝統文化お琴教室



おうしゅう伝統文化親子茶道教室





こども芸術発表会出演の様子（上下）

## 『教室、発表の場の設置』

「奥州市の文化財継承と創造事業」として3つの取り組みを行った。

1つ目は、平成25年8月のホームページ開設である。（URL　http:// www.oshu-geibun.jp/）

奥州市に伝承されてきた郷土芸能の神楽や鹿踊りの保存会等の検索が可能であり、その演目紹介など、詳細な情報を得ることができる。市内36団体の無形民俗文化財の情報は、広く県内外からのアクセスがあり、サイトを見ての出演依頼等も多くなってきている。

また2つ目は、伝統文化教室の開設にあたっては、地域の文化団体が中心になって生徒を募集し、平成17年から、「伝統文化こども教室（琴）」「伝統文化親子教室（日舞・茶道）」として開設し現在に至っている。近年では、この教室の修了者が新たに指導者として教室に関わるようになってきている。

そして3つ目は、年に一度「子ども芸術発表会～舞台部門～」として、市内の子供達が学び、稽古した成果の発表の場を設けた。子供達にとっては、その成果を発表する場があるということは、励みにもなっている。子供達は、満席となった来場者からの応援をもらい、はにかみながらも笑顔で、その取り組んできたことへの意義を感じているようである。発表の場があるということは、その目標にもなり活動が熱心になってきている。



こども芸術発表会集合写真

また、郷土芸能の保存会等では、小学校児童を対象に熱心に継承活動を行い、青少年健全育成団体として表彰される団体が出てくるなど、それを伝承・育成していくことの意義を理解し、今後の取り組みに熱心になってきており、他団体の目標になるなどその活動は盛んになってきている。

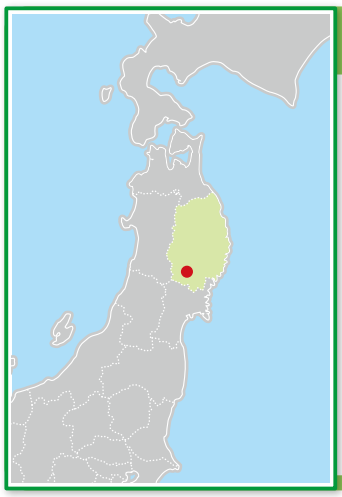
このように、地域の理解と応援を受けながら、少しずつ「伝統文化」の意義を理解し、今後に継承するエネルギーになってきている。そして、この地域が元気になり活性化することを願い、今後とも継続して取り組みたいと考えているところである。




こども芸術発表会ポスター

## 『継続して実施』

指導者の高齢化により、伝統文化の存続が危惧されることから、これらを早急に継承し、安定した保存団体を育成していく必要がある。そのためには、現在、文化庁及び一般財団法人奥州市文化振興財団の支援を受けながら保存継承事業を実施してきているところであるが、今後とも引き続き、各方面からの支援が必要である。



**自治体名　岩手県奥州市**

- 人　　口：123,013人
- 面　　積：993.35km²
- 事　業　名：奥州市の文化財継承と創造事業
- 事業開始年度：平成23年度
- 事 業 主 体：奥州市文化遺産活用実行委員会　奥州市芸術文化協会

連絡先

奥州市芸術文化協会
TEL 0197-22-6622(奥州市文化会館内)
FAX 0197-22-6614(奥州市文化会館内)
URL http://www.oshu-geibun.jp

# すずむしの里づくり事業

宮城県仙台市

## ～すずむしの音色が聞こえるまち仙台～

## 市町村の概要

仙台市は、東北初の政令指定都市であり、東北の中枢都市として発展してきた。市域は785.85㎢で、主要な産業は、商業・サービス業を中心とした第3次産業の比率が高い。海洋性気候のために寒暖の差が少なく、冬は奥羽山脈からの乾いた北西の風のために積雪が少ない。人口は約107万人である。

## ふたたび美しい音色を

すずむしは、藩政時代では伊達家から将軍家へ「七振り鳴くすずむし」として献上された品であり、また秋には、姫君などがすずむしの音色を聞きながらお茶を楽しむなどの鈴虫檀が宮城野原の東側に作られたとされる。宮城野原は、古来、「はぎ」と並び「すずむし」の名所であり、また、「宮城野のすずむし」は、平成8年7月に「日本の音風景100選」に認定されている。このような経緯もあり、仙台市の「市の虫」（昭和46年制定）として親しまれていたものの、自然環境の変化に伴い、現在に至っては宮城野原からすずむしの音色が途絶えて久しくなった。この状況を憂えた宮城野区岩切に住む住民が中心となり、すずむしの里づくり実行委員会を設立した。杜の都仙台の自然環境を守り、貴重な財産を後世に引き継いでいくために、市民の手ですずむしを飼育し、自然界に放虫し、自然の中で生息できるような環境づくりを進め、また、市民の交流と命の大切さや環境問題などを考えるきっかけになるよう、配布会や展示会を実施し、多くの市民がすずむしに触れる機会を創出することを目的として、平成6年度から活動に取り組み始めた。



岩切市民センターでのすずむし配布会



宮城野区中央市民センター内でのすずむし展示



宮城野区役所でのすずむし配布会

## 街中にしみ入る音色

すずむしの里づくり実行委員会を中心に、飼育事業、講師派遣事業、配布会、実験放虫事業、展示・広報事業、交流・交配事業、岩切地区コミュニティまつりへの参加、すずむしの里づくりコンサートの実施など多彩な事業を行っている。

飼育事業では、岩切市民センターの一室を飼育室にして、卵から孵化するところから飼育を始めている。総数70ケース、約5万匹のすずむしを育てている。部屋の温度・湿度の管理を緻密に行うことで、時差で孵化させることができ、長い期間すずむしの音色を聞くことができるようになった。育てられたすずむしは、配布会や実験放虫に使われている。

講師派遣事業では、宮城野区の小学校7校（小学1～



七北田川河川敷での放虫



鶴谷小学校での出前授業

4年生児童625名）で、すずむしの生態や飼育方法、越冬準備などについて出前授業を行っている。授業だけで終わらず、その後も、実際に飼育することで命の大切さや環境保全の大切さを子供達は感じ取っている。

配布会では、区役所前や区内市民センターで、無料ですずむしを配布するだけではなく、ワンコインで手軽に買える虫かごセットを販売したり、実行委員が相談役になってすずむしの育て方の説明をしたりするなど、すずむしを飼う裾野を広げている。また、毎年欠かさず訪れるすずむし愛好家もいて、市民の交流の場、さらには、遠方から来る人もいて、交換をすることで、他地域のすずむしとの交配の場ともなっている。すずむしに限ったことではないが、長い年月同一場所で交配されると血縁関係が濃くなり、いろいろな地域で飼育されたものを掛け合わせることが大切になる。

展示・広報事業では、市役所本庁舎や区役所、JR駅への展示のほか、榴岡公園でのすずむしコンサートや野草園での観月会を実施し、市民との交流を図るばかりでなく、報道関係を利用し広報活動にも力を入れている。県内だけでなく、他県からの問い合わせもあり、今後の交配事業への発展も期待できる。

## 音色を未来に

すずむしの里づくり実行委員会のメンバーの高齢化により、後継者の育成が急務となっている。そのため、すずむしボランティア養成講座（年6回）を市民センターの事業として行っている。現在20名程度まで実行委員が増え、出前授業の講師、飼育ボランティアとして活躍している。今後も講座を継続し、メンバーを増やしていく必要がある。

一方で、宮城野通りの歩道のタイルの模様や植木鉢の模様にすずむしが使われるなど、目に触れる部分が増え、市民の間にすずむしの認知度も上がっている。すずむしが「市の虫」であることをアピールし、市民の関心を高めながら、すずむしが育つ環境づくりについて考える機会を作っていきたい。

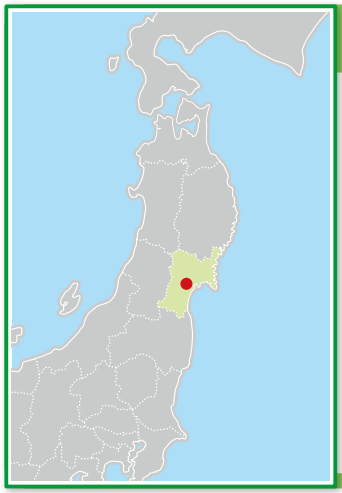
まだまだ長期間の定着は難しいが、七北田川河川敷や仙台市野草園、榴岡公園への総数1万匹以上の実験放虫を毎年続けて、少ない自然の中でも美しい音色が聞こえるような街にしていく取り組みを続けていく。



榴ケ岡市民センターでのすずむし配布会



榴岡公園でのすずむしコンサートの様子（平成25年）



**自治体名　宮城県仙台市**

- 人　　口：1,066,609人
- 面　　積：785.85km²
- 事　業　名：すずむしの里づくり事業
- 事業開始年度：平成6年度
- 事　業　主　体：すずむしの里づくり実行委員会

連絡先

仙台市宮城野区区民部　宮城野区中央市民センター
TEL 022-791-7015　FAX 022-295-2337
URL http://www.city.sendai.jp/miyagino/index.html

# 出羽三山の精進料理プロジェクト

山形県鶴岡市

## ～出羽三山の文化伝承による地域活性化～

## 市町村の概要

鶴岡市は山形県の西部に位置し、江戸期より庄内藩の城下町として栄え、以来、庄内地域における政治・経済・文化の拠点都市として発展。名峰月山を仰ぐ市域の7割を占める森林、庄内米を産する平野、42㎞に及ぶ日本海の海浜・砂丘地など、多彩な自然相をもつ、東北最大の面積の都市である。

## 精進料理を次世代へ

出羽三山は修験道を中心とする山岳信仰の東日本唯一の聖地であり、1400年前に開山した伝承をもっている。修験道は日本古来の自然崇拝が仏教等と融合したものと言われ、これを行う人を山伏、修験者などと言われている。出羽三山の精進料理は生活と精神文化が一体となった羽黒修験道に育まれ伝承されてきた。

これまでは、地域内において伝承されてきた出羽三山の精進料理が、平成23年に初めて海を渡りフランスやハンガリーで紹介された。現地の人々の前で実際に調理し試食を行ったところ、出羽三山の歴史と風土が凝縮された味が、驚きとともに絶賛された。

こうしたことから、平成24年に、出羽三山に伝わる精進料理を通じた「山の文化の伝承」と「地域経済の循環」に取り組み、自然と人間の関係を見直し、新たな時代の地域づくりを展開していくことを目的に、羽黒地域手向地区の宿坊・旅館の後継者を中心に、精進料理プロジェクトを立ち上げ活動することとなった。

## 県内外へ発信！

最初に取り組んだのが、出羽三山の精進料理のメインとも言える「胡麻豆腐」をお互いに学びあうことで再認識することであった。また、手間が掛かることから近年では作らなくなった「湊揚げ」の復活を最初のテーマとし、レシピを知っている地区内の旅館の女将から作り方の指導を受けた。その後、出羽三山の精進料理を地区内外に紹介するために、プロジェクトメンバー・関係者・告知で知った人達が集まり「出羽三山精進料理を味わう夕べ」を開催し「湊揚げ」を披露した。さらには出羽三山の精進料理を広く紹介するために、市内外での各種イベントへ出店し精進料理を販売したり、出羽三山の精進料理を知ってもらうために、東京や山形で出羽三山文化の展示・料理講習会などのワークショップの開催や、地域住民の関心を高めるために羽黒地域公民館事業として精進料理の料理教室を開催した。

精進料理は宿坊固有のものであり、これまで他の宿坊と組むことは考えられなかったが、こうした取り組みを進めるうちに、お互いに料理を学び合う雰囲気が



精進料理を広める夕べ



料理講習会



精進料理と落語会のコラボ

出来てきた。

出羽三山の精進料理プロジェクトでは、それぞれが守ってきた味や特色を守りながら高めあい、地域の結び付きを作っていくことを活動のベースとし、精進料理を学ぶのはもちろん、出羽三山の歴史と文化、その中での精進料理の位置づけを学んでいる。

また、実際に宿坊街に来て食べてもらうために、のぼりや共通パンフレットを作成するなど、受け入れ体制作りを行い、団体向けに旅行会社等へのPR、個人向けにフェイスブックや観光協会ホームページでのPRを行っている。

出羽三山精進料理プロジェクトを始めてから、地元では急速に精進料理に対する関心が高まってきた。宿坊や旅館では精進料理と落語や音楽などとコラボしたイベントも開催され新たな誘客と賑わいにつながっている。

このプロジェクト最大の成果は、これまで、あまり無かった後継者同士のつながりが出来、各宿坊・旅館毎に伝承された精進料理を地域全体で伝承しようとする機運が生まれたことであり、地域に伝わる資源に磨きをかけ県内外に発信することで、地域住民の誇りにつながっている。

## 活気ある宿坊街へ

精進料理は下準備に手間が掛かることや、食材の調達が難しいことから現在は予約制で対応している。予約なしでも食べられる様な対応を求められているが前述の理由から難しい状況である。こうしたことから、当面は食イベントへの出店や、宿坊・旅館での精進料理とコラボしたイベントなどを通じて精進料理を広めて行きたい。

食材は地域固有の旬の食材を使うことから、材料の入手に苦労する場合がある。地元の山菜組合から協力を得ながら、安定供給の仕組み作りを模索するとともに、山菜の保存方法など研究しながら食材の確保を行う必要がある。

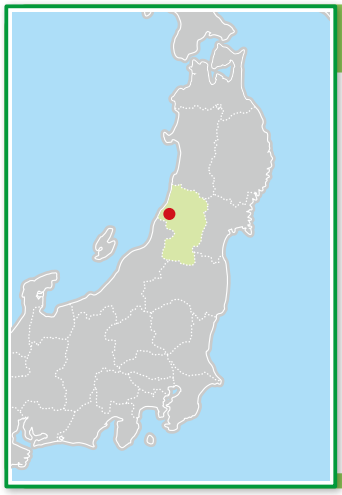
また、羽黒山三大祭（花祭り・八朔祭・松例祭）と精進料理を組み合わせたツアーや、旅行会社と連携して新たな誘客につながる商品企画の造成などにも取り組んで行きたい。

現在検討中である宿坊街の街並み景観整備に合わせて、このプロジェクトも一緒に活動し、宿坊街の賑わい作りにつながればと思う。



食のイベントへ出店


東京でのワークショップ



**自治体名　山形県鶴岡市**

- 人　　口：131,503人
- 面　　積：1,311km²
- 事　業　名：出羽三山の精進料理プロジェクト
- 事業開始年度：平成24年度
- 事 業 主 体：羽黒町観光協会

連絡先

鶴岡市羽黒庁舎産業課観光商工室
TEL 0235-62-4727　FAX 0235-62-4729
URL http://www.city.tsuruoka.lg.jp/

# あいづまちなかアートプロジェクト

福島県会津若松市

## ～五感で楽しむアートプロジェクト～

## 市町村の概要

会津若松市は、福島県西部会津盆地の東南に位置する旧会津松平家の城下町であり、歴史的な名所旧跡も数多い。自然景観に恵まれ、内陸盆地特有の気候であるため、四季折々の風景が楽しめる。

## 文化の振興・継承



7つの大学からの贈り物(2013年)

質の高い芸術文化の発信や鑑賞機会の創出、次世代を担う人材育成などを図るべく、新たな芸術文化事業の実施検討の結果、単なる展示にとどまらず、芸術への興味を喚起し、地域の文化力向上やまちの魅力の再発見につなげるため、まちなかを舞台に地域に寄り添ったアートイベントとして「会津・漆の芸術祭」と「まちなかピナコテカ（絵画展）」を大きな柱とした「あいづまちなかアートプロジェクト」を実施することとなった。

漆は400年ほど前から、会津に産業として根付き、代々受け継がれてきた文化資源であるとともに、会津らしい地域性を発信する文化事業として「漆」というテーマは必要不可欠なものであった。また、漆と芸術という大きな概念で、事業を捉えることで、多角的な情報発信が可能となり、美術館という施設がない本市の状況を逆手にとり、まちなか全体を使った「漆と芸術」という展開で、芸術鑑賞の機会を創出したり、ひいては、地域の活性化まで視野に入れた芸術文化事業を行うこととなった。

## 気軽な地域文化振興

まちなかにある歴史的建造物や趣きのある店舗等を舞台として、会津の文化資源「漆」の魅力を発信するため、漆芸アート作品の展示や漆の技法を身近に感じる体験型ワークショップの開催など、生活用品としての漆器ではない、芸術としての鑑賞機会を創出することで、漆の魅力や可能性を知るきっかけ作りや地域文化の振興を図った。

漆は自然素材であり、その特性として、抗菌作用があり人体に無害であったり、丈夫で長持ちなことや、その温かみのある感触など、さまざまな物であふれる



7つの大学からの贈り物（2013年）



新しいAIZUの美術展（2013年）



京都発・新しい漆の形（2013年）

現代生活の中で、その魅力を多くの人に知ってもらうことは、本当の豊かな生活とはなにかを考えるきっかけとなるものである。「会津・漆の芸術祭」では、そういった漆の魅力を体感できるようワークショップによる漆の作品作りや、漆器を使った食の提供など、観るだけではない、体感型のメニューを充実させ、幅広い年齢層への情報発信を行っている。

また、市が所蔵する美術作品や、会津ゆかりの若手作家の作品等をまちなかの雰囲気のある店舗に展示する「まちなかピナコテカ（絵画展）」もあわせて展開し、文化の振興という枠にとどまらず、文化が生まれるまちの魅力を発信するとともに、都市の文化力向上や交流人口の拡大による地域活性化、地場産業の振興などにも寄与できた。



店舗内展示の様子（2014年）

## 事業の定着が課題

プロジェクトが平成25年からスタートしたばかりであり、地元も含めて、いかに定着を図っていくかということが課題であり、地域の団体などが、開催テーマにそって、自ら企画した事業を展開できるようなステージを提供していくことが、今後事業を継続するうえで求められる。その点では、地域の職人やアーティストにスポットをあてた展開を図っているところである。

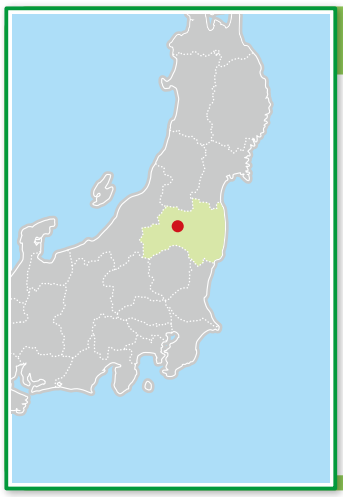
「漆」をテーマとしたアートイベントは、他地域と比較して特徴的であることから、芸術という切り口で、地域の文化資源「漆」の魅力を内外に発信し続けていくとともに、美術館という空間のない本市において、こういったプロジェクトを介しながら、芸術文化に触れる機会を積極的に創出し続けていく。




チラシ表



チラシ裏



**自治体名　福島県会津若松市**

- 人　　口：122,866人
- 面　　積：383.03km²
- 事　業　名：あいづまちなかアートプロジェクト
- 事業開始年度：平成25年度
- 事　業　主　体：あいづまちなかアートプロジェクト実行委員会

連絡先

会津若松市教育委員会文化課
TEL 0242-39-1305　FAX 0242-39-1272
URL http://aizu-artpj.com/

# 常陸太田市指定文化財集中曝涼

茨城県常陸太田市

## ～地域の宝物を活かす～

## 市町村の概要

常陸太田市は、人口約53,000人、茨城県北部に位置し、県内で最も広大な面積を持つ。米や常陸秋そば、巨峰ぶどう等のブランド農作物や、様々な野菜の地場産物が豊富に生産されている。また、佐竹氏の繁栄や水戸藩領地として発展したため、貴重な文化財が数多く残っている。






2014年指定文化財集中曝涼　チラシ表裏合冊

## 集中曝涼開催の契機

地域に古くから伝わる文化財は大事に保存しておくだけではなく、公開・活用を図ることで、文化財としての価値もより一層上がり、今後も大切に保護をしていこうという意識の高揚にもつながる。

市内増井町にある正宗寺において、昭和60年代から毎年10月第3土・日曜日に、所蔵文化財の虫干しを兼ねた一般公開「曝涼」を実施し、文化財の保護と活用にあたってきた。毎年200人前後の来場者があったが、公開する文化財は毎年変わるものではなく、マンネリ化の傾向がみられていた。

平成16年12月1日の市町村合併によって、市内の指定文化財数が増加となったが、正宗寺を除いては文化財を定期的に公開する機会がなく、十分な活用を図ることができていない状況であった。そのため、平成19年度より各所有者等の協力を得ながら、当市の地域資源である文化財の保護と活用を図ることを目的に、「曝涼」を市域全体に拡大した「集中曝涼」として開催した。

事業開始に当たり、耳慣れぬ「曝涼」の名称を使用するかについて、所管課内でも議論となったが、伝統的名称も一つの文化遺産であるとの見地から、敢えて「曝涼」という文字を残す形で実施し、今ではすっかり定着した感がある。

## 資源としての文化財

指定文化財集中曝涼は、毎年10月第3土・日曜日に普段は公開されていない文化財を虫干しを兼ねて一般公開することで、絵画、書跡、建造物、考古資料などの様々な文化財を、1日で何か所も間近に見ることができる貴重な機会であり、文化財の保護と活用を図るとともに、交流人口の拡大にも大きな役割を果たしている。

開始当初の平成19年には6ヵ所のみでの公開であったものが、平成21年度からは隣接する常陸大宮市内でも併せてはじめたことで、市町村の枠を超えた広域的な取り組みに発展し、平成26年度には19か所にも増加した。



菊蓮寺



阿弥陀堂



正宗寺



ボランティアガイド

虫干しということで、雨天の場合は公開できる文化財が限られてしまうため、来場者数は天気によって左右されるが、多い場所では1日500人を超え、平均すると一つの公開場所に200～250人程度が来場していることになる。

本事業への協力団体として、共催の常陸大宮市を筆頭に、常陸太田地方地域家庭博物館網・常陸太田市観光物産協会・グリーンふるさと振興機構などが参画している。特筆すべき点としては、平成24年度より協力団体として参画している茨城大学人文学部 歴史・文化遺産コースと茨城史料ネットによる学生を中心としたボランティアガイドが挙げられる。来場者への解説を行うことにより、学生側としても、文化財に直接触れることができる貴重な機会となっている。ボランティアガイドは事前に文化財を下見し、どのような解説をするかの協議を重ね、工夫を凝らすことで、画一的な解説ではなく大変わかりやすいものとなり、来場者ばかりでなく文化財の所有者や地域住民からも大好評を博している。

各公開場所においては、文化財所有者をはじめとした近隣住民による「おもてなし」の気持ちから、自発的に軽食・湯茶の提供や農作物の直売等独自に趣向を凝らし、来場者を温かく迎え入れることが高い評価を得て、「また訪れたい」という気持ちにさせている。また、平成25年度からはスタンプラリーも併せて開催し、公開場所でのスタンプを集めれば特製缶バッジがもらえるということで、大人から子供まで楽しめる催しとなっている。

そして、集中曝涼の副次的効果のひとつに地域コミュニティの活性化も挙げられる。少子高齢化により過疎化が進んでいる地域ではあるが、集中曝涼の開催を機に、地域の人々が自らの地域に伝わる文化財の価値と重要性を再認識し、地元の文化財を地域の宝として、親から子へ、そして孫の世代へと、地域で協力し合って長く後世に伝えようとする意識が飛躍的に高まり、その結果、地域コミュニティ活動を活性化する契機にもなっている。

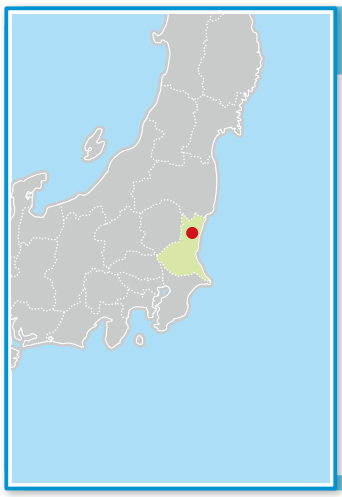
## 集中曝涼と今後の課題

文化財は一朝一夕に増えるものではなく、公開する文化財は毎年同じであることから、いかにマンネリ化を防ぐかが大きな課題である。今後は、集中曝涼におけるそれぞれの公開場所独自の取り組みに工夫を凝らし、来場者を満足させ、同時に来場者数の増加につなげていくこと、加えて、地域独自の「おもてなし」での採算性を確保し、地域全体が元気になっていくように結び付けていくことにも取り組む必要がある。

また、各公開場所が市内全域に分散していることから、来場者から交通の利便性が良くないとの声もある。旅行会社や各種団体・講座のツアーの誘致にも努めてはいるが、大型バスでは乗り入れることが出来ない場所が多いのが現状である。乗用車での周遊性を高める工夫と、マイクロバスを利用したツアーでも満足できるよう、内容の更なる充実に努めなければならない。



指定文化財集中曝涼
スタンプラリー色紙



**自治体名　茨城県常陸太田市**

- 人　　口：53,309人
- 面　　積：372.01km²
- 事　業　名：常陸太田市指定文化財集中曝涼
- 事業開始年度：平成19年度
- 事　業　主　体：常陸太田市教育委員会

連絡先

常陸太田市政策企画部企画課
TEL 0294-72-3111　FAX 0294-72-3002
URL http:// www.city.hitachiota.ibaraki.jp/

# 東吾妻むかし道MTBライド

群馬県東吾妻町

～落ち葉に覆われたシングルトラックを走ろう!!～

## 市町村の概要

東吾妻町は、平成18年3月27日に旧吾妻町と旧東村が合併し誕生した町である。人口は年々減少しており、少子化対策と人口減少への歯止めが重要課題となっている。

気象条件は、標高差と複雑な地形により地域ごとに差があるものの、比較的過ごしやすい気候風土となっている。

町の主な産業は農業であるが、近年町の自然を生かした観光業にも力を入れ、主力にしていきたいと考えている。

## 自然との共生

国内において、まだまだマイナーと思われる「マウンテンバイク（MTB）」を活用し、愛好者などへ町内の豊かな森林資源や観光資源をPRするために平成23年に「東吾妻むかし道MTBライド」が開催された。町の基幹産業は農林業であるが従事者不足であり、さらには過疎の全域指定により様々な施策を講じているものの、解消には至っていない。地域の特徴として小規模な植林地に、特定の樹種に偏らずスギ、カラマツ、ヒノキが程よく分散し多様な景観を形成している。このような中で、地域資源を利用した地域の活性化や地域振興は重要な課題であり、観光資源掘り起こしなどによる交流人口の拡大は必須である。

自然との共生・資源の循環を目指し、今もなお守り受け継がれる森林の中にあるむかし道。険しくも古き良き時代の、何かが伝わるむかし道を「落ち葉に覆われたシングルトラックを走ろう」をコンセプトに開催された。町内各所に点在するむかし道や林道等を線でつなぐことにより魅力的なコース開拓を行い、マップリーディングによる大会を開催している。歴史はまだまだ浅く、改良すべき点は多々あるものの参加者も多く順調なスタートが切れている。




東吾妻むかし道MTBライド・スタート地点

## 東吾妻町の自然と魅力

町内にあるむかし道をMTBで走る「東吾妻むかし道MTBライド」は町総面積の77%を占める森林の自然資源を生かした事業である。毎年10月の実施に向けて、実行委員会を中心に前年度における反省点や改善すべき点を踏まえ実施している。主として登りは舗装、下りは未舗装のシングルトラックや林道を使用する一筆書きのルートで、参加者にはコースマップが配



東吾妻むかし道MTBライドコースの様子①

布される。

コースは、常設の周回可能なきれいに整備されたコースではなく、廃道となった昔からの道や林道等を使うコースなので、廃道の竹藪から再生した山道には伐採した枝が落ちており、林道では粗い石が露出したりしている。そのため、コースクリエイトや試走なども重ね大会当日は事故がないよう細心の注意を払っており、今までに大きな事故やけが人などは出ていない。

東吾妻町では平成25年度より「NPO法人　地球緑化センター」から緑のふるさと協力隊員を1人受け入れており、大会スタッフとして参加している。隊員は1年間東吾妻町に住所を置き、毎日の様々な活動を通して東吾妻町の魅力を町外へ発信することが大きな役割の一つとなっている。1年間の活動を通して沢山の人とのつながりができたことや、東吾妻町の中でやりたいことがあり「この地に残りたい」と言う隊員の希望から「地域おこし協力隊」として平成26年度は活動を続けている。このように町外からの若者を受け入れることによって、沢山の人が町に魅力を感じ興味を持ってもらうことが一番大切だと感じている。







東吾妻むかし道MTBライドコースの様子②

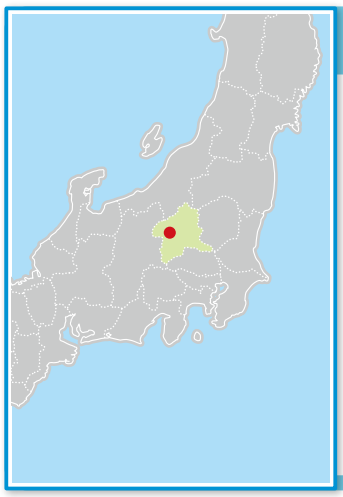
1年目から2年目へと・・・続けていくことも大切だが、「また東吾妻町へ行きたい」と思ってもらえるよう、町のすばらしい自然を上手く活用した観光事業に取り組む必要があると思われる。平成23年は16人、平成24年68人、平成25年123人が大会にエントリーしており、成果としては確実に町の活性化に大いに貢献している事業である。

## 自然資源の活用

課題については、定期的にコース整備ができるボランティア・スタッフの確保である。大会は秋に実施されるため、ゴールデンウィークなどの長期休みを利用し徐々に整備を始めているが、倒木や草木が生い茂ったコースを整備するのは容易な事ではない。そのため、力・体力共に兼ね備えた大勢のスタッフが必要となってくる。町や、MTBライド実行委員会独自のHPなどを活用しての呼びかけは重要となってくる。

年々参加者が増え「MTBライドといえば東吾妻町‼」と言われるような、息の長い事業にしていけるように反省や工夫が必要と考える。参加者が町の施設（温泉施設や宿泊施設）などを利用し、沢山の自然の中に人々が出入りする中で東吾妻町の魅力を町外へ発信し、地域の活性化につながるよう願っている。

そして、まだまだ埋もれている地域資源を掘り起こし、東吾妻町の存在を誰もが知ってくれるような町おこし（地域活性化）につながればと考えている。



**自治体名　群馬県東吾妻町**

- 人　　口：15,475人
- 面　　積：253.65km²
- 事　業　名：東吾妻むかし道MTBライド
- 事業開始年度：平成23年度
- 事 業 主 体：MTBライド実行委員会

連絡先

東吾妻町観光協会

TEL 0279-70-2110　FAX 0279-70-2110

# 鴻巣びっくりひな祭り

埼玉県鴻巣市

～見てびっくり、「ひな人形」でまちを明るく、元気に！～

## 市町村の概要

鴻巣市は、埼玉県のほぼ中央に位置し、中心市街地は江戸時代の中山道の宿場町として栄え、歴史的にも貴重な寺社・仏閣等の資産や、地域を代表する伝統産業である「雛人形」作りの拠点としてのまち並みも残されている地域である。

## 伝統の鴻巣びなで地域活性化を

鴻巣市は、約380年の歴史を持つといわれる「鴻巣びな」の生産地として、「近代関東三大雛市」のひとつに数えられている。現在「人形町」という字名がつく旧中山道界隈では、江戸時代より人形作りが始められ、特に着物の着付けの技術では関東一と称されるなど、貴重な伝統工芸として今に伝えられている。現在も、江戸時代から続く老舗の雛屋から、頭、胴、小道具、赤もの人形などを作る店、近代的なメーカーや新進気鋭の人形専門店、箱屋などの関連業者が揃っており、市を代表する産業ともいえる存在である。

この貴重な伝統工芸を広く市内外に知らしめ、市全体の活性化に繋がる取り組みができないか、市や商工会・ひな人形協会・地元自治会等を中心に話が交わされる中、来訪者へ素直な驚きと感動を伝え、「鴻巣びな」の良さを再認識でき、市民全体でひな祭りを行っている気持ちになれる「見た目にもインパクトを与えるイベントを開催しよう」という機運が高まり、平成16年度から市民ボランティアによる「実行委員会」が組織され、本取り組みがスタートすることになった。



オープニングセレモニー テープカット

## 日本一のピラミッドひな壇とまち全体でひな祭り

平成17年2月を第1回として始まった「鴻巣びっくりひな祭り」は、「目指せ　ひな壇で飾る日本一のピラミッドづくり」を合言葉に、鴻巣市役所のロビーに「26段」のピラミッド型のひな壇を制作し、そこに市民のみならず全国から寄贈を受けた、計1333体もの人形が飾りつけられた。また、内階段・通路等にもひな人形が飾られる等、会場ところ狭しとひな人形が飾り付けられ、それは見るものを圧倒するものとなり、多くのマスコミにも取り上げられ、イベント期間の1か月の間に、約60,000人もの来訪者を数え、多くの驚きや伝統工芸の良さ・大切さといった声が聞かれた。

大好評のうちに終わった第1回目を受け、順調に回



市役所会場ひな壇（2013年）



市役所会場正面玄関飾り

数が重ねられる中、内容も充実していき、平成26年2月の第10回では、シンボルである市役所のピラミッドひな壇は、高さ7m31段、ひな人形1820体まで成長し、「日本一ネット」にて『ひな人形で飾る日本一高いピラミッドひな壇』として、日本一である認定も受けることとなった。

また、市役所のみならず、市内の観光施設・ショッピング施設においても、5角錐や6角錐、8角錐のひな壇が設けられ、土日には各会場を無料巡行バスで結び、1日市内観光を含め、楽しめる工夫が施される他、人形店が軒を連ねる中山道沿道には「まちかどひなめぐり」と称し、歩道にひな人形を飾る等、まち全体でひな祭りを盛り上げるような、仕掛けづくりが行われている。

その他に、イベント施設での鴻巣特産品販売による商業活性化、地元幼稚園児の歌の発表会や地元高校生によるお茶会、ひな人形折紙教室の開催といった文化活動もイベント期間中に行われ、「びっくりひな祭り」の開催目的である、市民全員でひな祭りが楽しめ、まちを明るく、元気にする取り組みとして、広く内外に認知されることとなった。

来場者数も年々増加し、平成26年には10万人近くの観光客が本イベントに来ている中、開催当初より、熱心な地元ボランティアによる「実行委員会」にて企画・運営・飾り付け等の作業が行われており、この点においても、市民主体のイベントとして特徴的と言えるものである。

## 10周年を迎え更なる飛躍

びっくりひな祭りの知名度はこの10年間で全国的な広がりを持ってきているが、イベント開催中以外での、リピーターを増やし、まちの活性化に繋げる工夫が更に必要であると言える。イベント開催中の市の観光・物産・商店のPR拡充や、まち全体の魅力・価値上昇に努めるべく、戦略的な取り組みを行う必要がある。

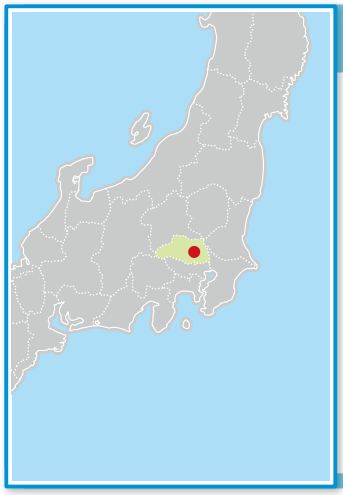
一方、活動の中心は開始当初のボランティアが大部分を支えており、世代交代が一番の課題となっている。本イベントを通じ、伝統文化と触れ合う機会の醸成と、それに伴う活動の楽しさ、感動を共に分かち合えるような、市民協働の更なる盛り上がりに期待したい。



エルミ会場ひな壇



花久の里ひな壇



**自治体名　埼玉県鴻巣市**

- 人　　口：119,494人
- 面　　積：67.49km²
- 事　業　名：鴻巣びっくりひな祭り
- 事業開始年度：平成16年度
- 事　業　主　体：一般財団法人鴻巣市観光協会、鴻巣びっくりひな祭り実行委員会

連絡先

鴻巣市環境産業部商工観光課

TEL 048-541-1321【内線2401】　FAX 048-543-5480

URL http://www.city.kounosu.saitama.jp

# 日本三大くも合戦

千葉県富津市

～くもが紡いだ地域のきずな～

## 市町村の概要

富津市は、房総半島の中西部東京湾側に位置し、南北40kmに及ぶ海岸線と、緑豊かな鹿野山や、切り立った崖の鋸山など、海や山に囲まれた自然豊かなまちである。

東京湾に突出した富津岬は、関東の天の橋立といわれ南房総国定公園にも指定されている。

## 富津発祥の伝承遊び

富津の地元で通称「フンチ」と呼ばれるネコハエトリという1cm程のクモがいる。このクモのオスが、4月中旬から5月上旬の繁殖期にメスを取り合う習性を利用して喧嘩させ、誰の捕まえたクモが強いかを競い合う遊びがある。

この遊びは、江戸時代から漁師が漁の合間に行っていたものであり、富津市発祥として伝わっており、昭和40年代頃までは関東の沿岸部でも盛んに行われ、子供達の間でも人気を博していたが、高度経済成長期へ突入すると、子供達の遊びも変化してしまい、フンチを追いかける子供達も次第にいなくなってしまった。

そうした中、「この伝統ある遊びを次世代に伝え、富津市を盛り上げていきたい！」と立ち上がったグループがあった。ベテランの「森グループ」、中堅の「内房富津フンチ倶楽部」、若手の「闘蜘會（とうちかい）」で組織された「富津フンチ愛好会」である。同愛好会は15年前に発足し、現在会員は10代から80代までの幅広い世代で構成され、約60人ほどの会員が在籍し、年々増加している。彼らが始めた「どのフンチが富津で一番強いか」を決める大会が富津に熱い旋風を起こしている。



横綱決定戦ポスター

## 横綱決定戦

毎年5月の連休に富津八坂神社の境内で「日本三大くも合戦　横綱決定戦」を開催している。平成26年の大会で、16回目となっている。ルールは簡単で、オスのフンチを1匹用意し、40cm角の台上でフンチ同士を組み合わせ、逃げたら負けという簡単なルールである。トーナメント制であり、勝ち残ったフンチがその年の横綱となる。決戦の舞台は小さいが、戦いを見つめる出場者、観客の熱い視線は小さな2匹のフンチに注がれ、手に汗握る戦いが繰り広げられている。

大会を重ねる毎に、地元での認知度は高まっており、大会当日は大勢の見物客が押し寄せ、神社の境内は人だかりとなっている。最近では、一般参加者の募


にぎわう神社境内


決戦を見守るギャラリー



オスのフンチ
（ネコハエトリグモ）



フンチ同士の攻防

集も行っており、誰でも参加できる大会として、地元のみならず、多くの観客やテレビ局を始めとしたマスメディアの関心も集めている。

伝統的でありながらもユニークな取り組みとして、地域の一大イベントとして定着しており、富津市の知名度の向上にも貢献している。文化の継承という観点からは、地元住民の郷土愛の醸成に寄与している。また、オフィシャルホームページも開設し、広く情報の発信や、文献の紹介、歴史についての考察等も行っている。



手に汗握る熱戦



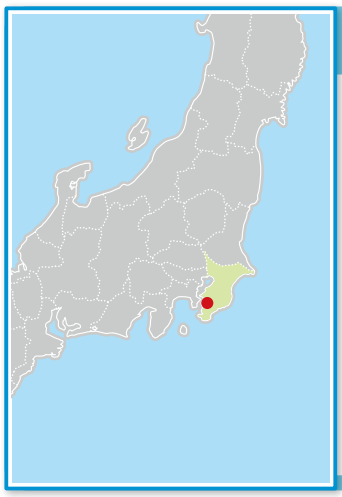
今年のチャンピオンと富津フンチ愛好会のみなさん

現在、人口の減少などにより伝統の継承も難しくなっているが、愛好会が地元の小学校に出向き、現代でも楽しめる伝承遊びであることを子供達に伝え、幅広い世代に親しみを感じてもらえるよう懸命に取り組んでいる。また、「くも合戦」を実際に体験し、楽しんできた老人ホーム等の入所者を訪問し、当時の思い出を語ってもらい懐かしんでもらっている。会員にとって、当時の情景や、人々の思いに触れることで、文化への理解を一層深めることができるよい機会となっている。こうした活動の中から、世代を超えた「クモによってつながる地域のきずなづくり」も行われている。

## 文化の継承

富津市発祥の江戸時代から伝わる「くも合戦」であるが、それを記録した文献があまり残っておらず、詳細な歴史の検証が困難となっているため、歴史調査等を愛好会で行っていきたい。また、魅力的な遊びが溢れている現代の子供達にどのように関心を持たせ、活動に引き込んでいくかが大きな課題となっている。そのため、小学校の訪問活動を継続的に行っていきたい。

今後は、この伝承遊びを通じて、世代に関係なく大人から子供まで誰もが楽しめるものであることを伝え、昭和の時代にあったような地域間の交流が盛んになるような活動とし、富津を盛り上げていきたい。また、継承されてきたこの文化を、研究・保存・継承していくのが愛好会の使命であると考えており、過去の功労者や次の世代の為にも、無形文化財指定に向けた活動を続けていきたい。



**自治体名　千葉県富津市**

- 人　　口：47,411人
- 面　　積：205.35km²
- 事　業　名：日本三大くも合戦
- 事業開始年度：平成10年度
- 事 業 主 体：富津フンチ愛好会

連絡先

富津市企画財政部企画政策課
TEL 0439-80-1223　FAX 0439-80-1350
URL http://www.city.futtsu.lg.jp/

# 練馬大根育成事業

東京都練馬区

## ～練馬の伝統農産物復活を目指して～

## 市町村の概要

練馬区は東京23区の北西部に位置しており、人口は平成20年に70万人を突破し、23区の中では2番目となっている。都市化や宅地化が進み人口が増加することに伴い、みどりが減少している中にあっても、平成23年の調査における緑被率は25.4％と23区の中では第1位であり、また、23区全体の農地面積のうち約4割を練馬区が有しており、都市部の中でも比較的みどりが豊かな住宅都市である。

※緑被率：みどりの量を示す指標。「樹木で覆われている部分」や「草地」、「農地」等の緑被地の面積が区域の面積に占める割合のこと。

## 練馬大根の歴史

練馬区は、かつて江戸・東京で生活する100万人の台所として発展し、この土地柄に適応した農産物が生み出された。その中でも、練馬大根は江戸時代から栽培されるようになり、「大根の練馬か、練馬の大根か」といわれるほど全国にその名をはせた。

練馬大根の誕生にはいくつかの伝承があり、そのうちのひとつに江戸幕府五代将軍・徳川綱吉にまつわるものがある。綱吉が将軍になる前に現在の練馬で病気療養した際、栽培させた大根が非常に良いものであったため、療養後江戸城へ戻った後も栽培させて毎年献上させ、それにより栽培が拡大していったというものである。



練馬大根引っこ抜き競技大会



練馬大根引っこ抜き競技大会に参加した親子

練馬大根は、水分が少なく乾きやすいなどの特徴から沢庵大根としても適しており、保存ができる沢庵漬けは、日清戦争から第二次世界大戦にかけて重宝され、それに伴い、この間、練馬大根の生産は最盛期を迎えた。しかし、戦後、食生活の変化やモザイク病の被害などに加えて、生産に多くの労力が必要なことから次第に栽培されなくなり、ほとんどその姿を見ることができなくなった。

そのため練馬区では、貴重な伝統農産物である「練馬大根」を絶やさぬよう、平成元年から区内農業者やJA東京あおばと力を合わせて、練馬大根育成事業を始めた。

## 練馬大根育成事業

練馬大根育成事業では、区民はもとより、区内外の人に練馬大根に親しんでもらい、練馬の伝統農産物を



長大な形状をした練馬大根



畑一面に広がる練馬大根畑



練馬大根干し風景。沢庵漬け加工用に

継承していくため、生大根の販売のほか、練馬大根の沢庵漬けの販売、収穫を体験するイベントなど様々な取り組みを実施している。

様々な取り組みのひとつに、平成19年度から開始した全国唯一のイベント「練馬大根引っこ抜き競技大会」がある。この大会は、もともとは練馬大根の生産拡大と、伝統継承のために区の子供達に学校給食で練馬大根を味わってもらい食育に活用したいという思いから始まった。しかし、細長く中太りの形状の練馬大根は、大きさが1mを超えるものもあり、引き抜くのに一般の青首大根の3～5倍の力が必要なため、学校給食用に一斉に収穫するための労力をどのように確保するかが課題になった。

そこで、この悩みの種を解決するため、参加者に協力してもらい、大量の練馬大根を一斉に収穫する「練馬大根引っこ抜き競技大会」を発案した。大会は、制限時間内に引き抜く本数を競う「選手権の部」と、制限時間内に抜いた大根の中で最も長い1本の長さを競う「グループ参加の部」などで構成されている。競技大会形式で参加者に練馬大根を引っこ抜いてもらうこの大会は、労力確保の課題を解決するだけではなく、多くの人に練馬の農業にふれあってもらい楽しんでもらう機会の創出にもなり、区内農業振興の一助にもなるなど様々な効能を生み出した。また、大会の翌日以降には、全区立小中学校（99校）の学校給食で使用され、食育と地産地消の促進にもつながっている。現在では、この大会は、練馬区民だけではなく区外在住の人が毎年楽しみにするほど、練馬区を代表する農業イベントになった。

こうしたイベントなどの実施により、練馬大根育成事業を開始した当初は、7戸の農家の協力のもと約5,500本の生産が、平成25年度には20戸の農家から協力を得て約14,000本を生産するに至り、ほとんど生産されなくなっていた練馬大根は、徐々に生産本数を拡大し、少しずつ復活に向けて歩んでいる。



JA東京あおば農業祭での大根販売



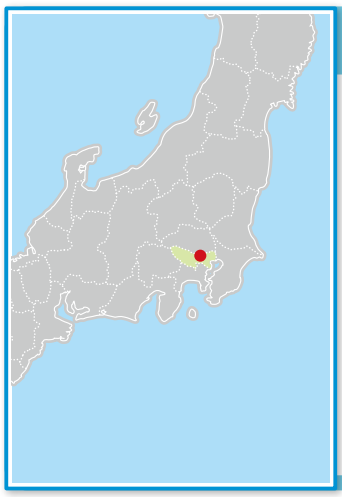
練馬大根を抜くのは大変！

## 練馬大根の今後

練馬大根育成事業に取り組み、多くの人に練馬大根に親しんでもらうことで、練馬区の農業を身近に感じてもらうとともに、住民の都市農業への理解にもつながっている。

収穫時期には味わうだけではなく収穫イベントなどを通じて、多くの人に楽しんでもらっており、現在では、練馬のひとつの風物にもなってる。

今後も、引き続き生産本数の拡大に努めていくとともに、ますます区内外の人に親しんでもらうため、現在行っている取り組みがより一層充実するよう取り組んでいく考えである。



**自治体名　東京都練馬区**

- 人　　口：712,407人
- 面　　積：48.16km²
- 事　業　名：練馬大根育成事業
- 事業開始年度：平成元年度
- 事 業 主 体：練馬区

連絡先

練馬区産業経済部都市農業課

TEL 03-5984-1403　FAX 03-3993-1451

URL http://www.city.nerima.tokyo.jp/

# 「藤沢宿・遊行の盆」事業

神奈川県藤沢市

## ～東海道藤沢宿と遊行寺による郷土愛あふれるまちづくり～

## 市町村の概要

藤沢市は、神奈川県の南岸、湘南海岸の中央に位置し、居住、産業・観光、自然、交通、教育などでバランスの取れた都市としての性格を有する、人口約42万人の湘南の中核的都市となっている。

## 遊行寺と東海道藤沢宿

時宗は一遍上人によって開かれた念仏門の宗派で、その総本山である遊行寺（藤澤山無量光院清浄光寺）は正中2年（1325）第4代呑海上人によって建られたものである。日本三大黒門のひとつである荘厳な山門や樹齢700年の大イチョウなどがあることから、藤沢市の歴史・自然における重要な財産となっている。

この遊行寺に伝承されている踊り念仏は、鎌倉時代に一遍上人が全国を回った際、念仏を唱えているうちに、弟子が突然踊りだし、見ていた民衆もこれにならって踊りだしたというのが始まりで、盆踊り・民俗芸能の起源になったと考えられている。

遊行寺の周辺は、現在も藤沢市の中心的な地域であり、藤沢駅徒歩15分圏内にありつつも、宿場の風情、景観を維持・再生する取り組みが盛んに行われている。

また、藤沢駅周辺地区においては、かつての賑わいと比較して、小売販売額などの相対的な低下傾向が見られており、このため、「遊行寺」の文化や観光資源を活用したイベントを実施し、観光及び商業の活性化を図りたいという機運が地元商業者を中心に高まっていた。

これらのことから江戸時代に東海道6番目の宿場町であった遊行寺門前の藤沢宿を中心に、現代の盆踊りとして、市民の参加を得た「遊行の盆」を平成18年から開催している。

## 市民と創る遊行の盆

藤沢に残された文化を生かして、踊り念仏をモチーフにした藤沢の新しい踊りを創作したものを「阿波踊り」や「よさこい」等のように、全国的な踊りに発展させ、藤沢の観光の目玉とするとともに、周辺商店街において昔ながらの市を開催し、観光・商業の活性化を図っている。

「藤沢宿・遊行の盆」は、「踊り念仏」「市民大盆踊り大会」「遊行おどり」「遊行ばやしコンテスト」「ゆかたコンテスト」「写真コンテスト」を中心に構成し、市民をはじめそれぞれの参加者が嗜好や関心に応じて参加できるよう取り組んでいる。

現代の盆踊りのルーツといわれる「踊り念仏」では伝統的な踊りを継承しつつ、「遊行おどり」では踊り





招致踊り「西馬音内盆踊り」の風景





招致踊り「郡上踊り」の風景（上下）　生唄・生演奏の風景

念仏をモチーフにしつつ、湘南の海のように、明るくハツラツとした囃子に合わせた活気のある踊りである。古くから伝わる藤沢の風物詩を織り込んだ歌詞は遊行寺の門前町にちなんだ小栗伝説や江の島・大山詣、それに東海道で賑わう宿場町の風情などを描き出し、藤沢の新しい盆踊りとして、特色ある創造的な踊りが行われている。「遊行ばやしコンテスト」では、伝統の継承を意識しながら、市民を中心に構成された生唄・生演奏のお囃子で踊られている。

平成25年度からは、日本3大盆踊りである西馬音内盆踊り、阿波踊り、郡上踊りも招致し、これらの集大成として「市民大盆踊り大会」が行われている。

こうした取り組みから「藤沢・遊行寺＝盆踊り」というイメージも浸透してきており、平成26年度で9回目を迎えた「藤沢宿・遊行の盆」は、市民には夏の風物詩として定着し、遊行寺近隣の有形無形の地域資源の継承に繋がっている。





遊行ばやしコンテスト（上下）

また、藤沢駅周辺の商店街でお店の逸品などを無料で振る舞う販促事業としての「ふるまいストリート」や、藤沢の宝を掘り起こし、販売・PRするイベント「湘南藤沢たから市」、そしてゆかたを買う・着る・歩くをコンセプトとした「藤沢ゆかたフェスティバル」など、若手事業者を中心に新しい連動企画が続々と誕生している。これらのイベントは、「藤沢宿・遊行の盆」との相乗効果によって、近隣の商店街にあらゆる客層・来場者層を取り込むことを目的としており、同時開催することによって、地域経済の活性化にも寄与している。

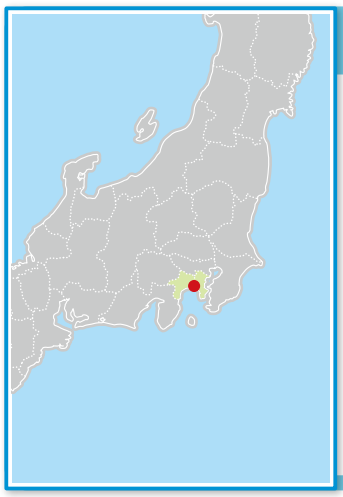
これらに加え、社会／文化のウェブサイトとして「遊行の盆コミュニティ」fecebookページを開設し、開催時期のみにとどまらない賑わいとコミュニティの形成を図っている。

## 郷土愛でつなぐ遊行の盆

一定期間の練習を要するお囃子に参加してくれる市民の確保や、当日に同時開催する商店街の販促事業の認知度の向上をはじめ「藤沢宿・遊行の盆」事業としての魅力と活力の維持向上策が課題として挙げられる。

平成27年度は、節目となる10周年を迎えるため、更なる踊りの工夫等の新たな取り組みにより通例化を解消するとともに、シティプロモーション、商業等各種事業との連携により、商業的・観光的事業効果の向上を図ることを想定している。

こうした新たな展開を模索しつつ、「郷土愛あふれる藤沢」を醸成することで、地域の魅力としての価値を高め、その市民の意識が市外に広がっていくよう、長期的に取り組むとともに、この事業が繋ぐ縁によって、持続的な地域活性化、商業振興を図りたいと考えている。



**自治体名　神奈川県藤沢市**

- 人　　口：418,308人
- 面　　積：69.51km²
- 事　業　名：「藤沢宿・遊行の盆」事業
- 事業開始年度：平成18年度
- 事 業 主 体：藤沢宿・遊行の盆実行委員会

連絡先
藤沢市経済部産業労働課
TEL 0466-50-3530　FAX 0466-50-8419
URL https://ja-jp.facebook.com/yugyounobon

# 端午の節句のぼり旗

新潟県五泉市

## ～願いを込めて大空に高くたなびくのぼり旗～

## 市町村の概要

五泉市は新潟県のほぼ中央に位置する面積351.87㎢、人口約54,000人の市である。平成18年1月1日旧五泉市と旧村松町が合併し、新五泉市が誕生した。古くから絹織物の産地として知られ、戦後めざましい発展をみたニット産業は、全国的な産地である。また、緑豊かな山々と良質で豊富な水資源に恵まれた肥沃な大地からは、全国的にも有数なぼたん、チューリップ、里いも、レンコンなど数多くの特産品の生産地となっている。

## 城下町に許された風習

江戸時代初期より堀家三万石の城下町として栄えてきた五泉市の旧村松町地区。その城下町の伝統を今に伝える行事のひとつに「のぼり（幟）旗」というものがある。「のぼり旗」とは、かつて江戸時代に城下町にだけ許されていた風習で、端午の節句に子供の健やかな成長を願い武家は鐘馗様、商家では武者絵や仙人などを描いた「のぼり旗」を軒先に掲げたのが始まりといわれている。各家々では、その願いが叶うように競って空高く立てたと言われているが、現在では各地の城下町から姿を消しつつある風習である。

村松においてものぼり旗の風習は長い間忘れ去られていたが、商店街の活性化と城下町の風情をどうPRしていくか考えた中で、かつて城下町であった村松の伝統行事である「のぼり旗」を復活させることで地域の発展に結び付けようと、平成15年に地元上町商店街で数本ののぼり旗を軒先に掲げ始めたのがきっかけとなっている。



商店街に掲げられるのぼり旗

## 地域を繋ぐ伝統行事の力

五泉市村松地区の商店街は主に国道290号線沿いに軒を連ね、上町商店街、仲町商店街、本町商店街、共栄商店街の4つの商店街約100店舗からなる。のぼり旗の掲揚は平成15年にこのうちの上町商店街で掲げたことで復活したものである。当初は商店街の軒先に数本



上町本陣では江戸末期～明治期の貴重なのぼり旗などが展示される



上町本陣の様子



多くの見物客で賑わう商店街

を掲げる程度であったが、上町商店街が掲揚を始めた後、他の3つの商店街ものぼり旗を掲げるようになり徐々に数は増え続け、今では大小70本以上ののぼり旗が掲げられている。のぼり旗は長さ6～10メートルあり、これらを丸一日がかりで立てる。のぼり旗の中には江戸時代末期～明治期に作られたものもあり、のぼり旗の掲揚期間中に商店街の店舗内に飾られている。毎年6月の端午の節句の時期には商店街が勇壮な風景となっており初夏の風物詩として定着している。

現在ではのぼり旗の掲揚にあわせて、商店街と商工会青年部・女性部が結集し「のぼり旗祭り実行委員会」を立ち上げ、これに地元自治会の協力も加わり数々の工夫を凝らしたイベントを行う「のぼり旗祭り」を開催するようになった。この「のぼり旗祭り」の開催日には商店街の通りを歩行者天国として来場者が商店街を自由に行き来できるようにし、ステージイベントや特産品の販売、オープンカフェ、地元さくらんど温泉の温泉を使用した足湯、人力車の体験乗車など趣向を凝らしたイベントを行うことで来場者からも好評を得る行事となった。また、開催回数を重ねるごとに内容も充実し、新聞などマスメディアで紹介されるようになり、来場する市民や観光客の数も年々増えていることから、普段商店街に足を運ばない人たちに商店街の魅力を伝える機会にもなっている。

これまでの成果としては、実行委員会と地元自治会が協働して取り組むことで住民同士の一体感が深まり街なかや地域コミュニティが活発になるとともに、商店街が多くの人でにぎわい地域の活性化にもつながるという成果が見られた。また、歴史、文化価値のある展示や催しを行ったことで大勢の人に「城下町村松」を感じてもらうことができ、地域の文化・文化財に対する理解や知名度を上げることにもつながっている。

## 伝統行事で街を元気に

のぼり旗の掲揚はもともと1つの商店街から発生した行事であるが、現在は4つの商店街が一緒になり共同事業として行っているものである。しかし、各商店街の間でイベントに対する温度差があり、一体感が出せず作業に積極的に協力が得られないことに苦心している。

今後は各商店街と地元町内会でイベントに対する一体感をさらに高め、より大きなイベントにして市内外へPRを行い行事を盛り上げていかなければならない。また、地域や商店街のにぎわいに一層つながるよう取り組みを続けていくことが課題である。



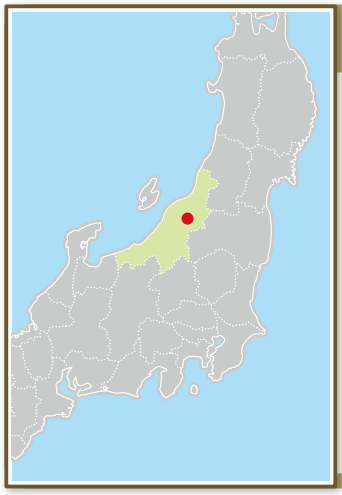
ステージイベントやよさこいおどりが行われる



特産品の販売とオープンカフェ



特産品などの販売



**自治体名　新潟県五泉市**

- 人　　口：53,983人
- 面　　積：351.9km²
- 事　業　名：端午の節句のぼり旗
- 事業開始年度：平成15年度
- 事 業 主 体：のぼり旗祭り実行委員会

連絡先

五泉市企画政策課

TEL 0250-43-3911　FAX 0250-42-5151

URL http://www.city.gosen.lg.jp

# 鐵絵（こてえ）を活かしたまちづくり

富山県射水市

## ～先人の業がいきづくまちづくり～

## 市町村の概要

射水市は、富山県のほぼ中央に位置する港湾都市で、港湾周辺の広大な工業団地、さらには住宅団地やレジャー施設、教育研究機関など、「産・学・住・遊」の都市機能が整っている。豊かな海産物にも恵まれ、白エビやベニズワイガニは広く全国に知られている。

## 左官のまち小杉



まちづくりの拠点竹内源造記念館

江戸時代「小杉新町」と呼ばれた旧北陸道沿いの射水市三ケ・戸破地区では、古くから左官業が発展した。左官職人らは、江戸時代以来の「左官講」の下で団結し、その技術を競い高め「小杉左官」としてその名が知れ渡った。

明治時代になると、土蔵の壁等に左官技術を駆使して漆喰を盛り上げ、吉祥の図柄等を描く「鏝絵」が盛んとなった。中でも、明治末から昭和初期に活躍した名工「竹内源造」は、県内はもとより東京や中国大連にまでその芸術的な作品を残した。

しかし、昭和40年代以降、大規模な住宅団地の造成や大型ショッピングセンターの進出等によって地区南部に新たな市街地が形成されると、かつての小杉新町中心地は、人口流出による空家・空店舗等が増加し、宿場町の景観を形成していた古い家屋や土壁造建物の減少とともに、左官技術の継承も危ぶまれるようになった。

そのような中、平成13年に、源造が手掛けた漆喰彫刻で飾られた旧小杉町役場庁舎（昭和9年竣工）の保存が決定し、翌14年に源造の鏝絵作品を収集・保存・展示する「竹内源造記念館」として開館した。

これをきっかけに、地域の文化である鏝絵を見直すとともに、鏝絵を活用した地域活性化の取り組みが試みられるようになった。

## 鏝絵のあるまちなみ

竹内源造記念館では、平成14年の開館以来、県内各地から現地保存が困難となった源造の鏝絵作品を切取り移設し、その収集・保存を進めている。

また、同館の支援組織である竹内源造記念館友の会は、鏝絵の調査研究を進め、著名な鏝絵作品の展示や鏝絵制作体験等に精力的に取り組み、一般になじみのなかった鏝絵の文化的価値の周知に大きな役割を果たした。

射水市商工会では、平成17年から21年にかけて、三ケ・戸破地区の商店・事業所等に鏝絵看板の設置を進めた。鏝絵看板は、本物の鏝絵と同じ技法で製作されたが、八百屋には野菜、歯科医院には歯とハブラシ、貴金属店には実際に動く時計を埋め込む等、業種に応じたデザインとすることで、三ケ・戸破地区の商店街としての個性を演出するとともに、地域の身近な商店街に日常的に鏝絵のある風景を生み出し、目に見える形で鏝絵のまちのPRが図られた。




歯科医院鏝絵看板



八百屋鏝絵看板



貴金属店鏝絵看板

これと並行し、平成14年から、地元有志による現代アートと地域の歴史・文化を融合させたイベント「まちなみアート」（「旧北陸道アートin小杉」と改名）が開催されている。現在では、地域の秋のイベントとしてすっかり定着したものとなり、平成22～24年には

「見る、参加する、学ぶ、展示する」をキーワードに「鐏絵フェスティバル」を同時開催した。鐏絵フェスティバルでは、鐏絵の保存活用に取り組んでいる静岡・島根・大分県からの参加者を交えた座談会や、ＪＲ小杉駅への鐏絵展示コーナー設置、子どもから大人まで幅広い世代を対象としたミニ鐏絵の制作体験や古い土蔵建物の壁塗り体験等を実施し、写真や文字では伝えにくい鐏絵の魅力と、三ケ・戸破地区の歴史や伝統技術に関する興味関心を呼び起こした。


旧北陸道アートin小杉


鐏絵の制作体験

射水市では、平成24年度に竹内源造記念館の改修工事に着手。建物を昭和9年の竣工当時の姿に復元し、源造の代表作である日本最大級の鐏絵「双龍」を移設展示した。また、新たに鐏絵体験棟を増築し、平成26年4月、住民と行政とが連携したまちづくりを進めるための拠点施設として新たなスタートを切った。

なお、鐏絵や左官をテーマとして扱うことから、様々な場面で専門の左官職人の協力をいただいているが、鐏絵や竹内源造への興味関心の高まりとともに、富山県左官事業協同組合が運営する訓練校において鐏絵の制作が取り入れるなど、鐏絵の技術継承に関する取り組みも進められるようになった。

これまでの取り組みから、三ケ・戸破地区内外における鐏絵や左官文化に対する理解と興味関心は年々高まりを見せているが、最大の成果は、地域団体同士の交流や行政との連携が促進されたことといえる。現在、三ケ・戸破地区では、将来を見据えた地域づくりを担う新たな住民組織の結成が検討されている。

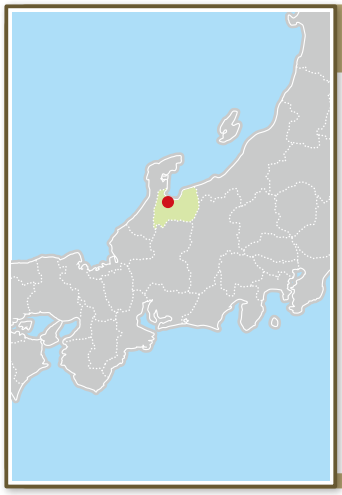
## 鐏絵で繋ぐ過去と未来

三ケ・戸破地区における、「鐏絵を活かしたまちづくり」については、これまでの取り組みを含め、①平時における賑わいの創出、②技術継承、③継続的な取り組みといった点が、主要課題となっている。そのためには、鐏絵・左官技術を、失われた過去のものとしてではなく、生きて発展する文化・技術として継承していく必要がある。

鐏絵の素地となる伝統的左官技術の継承は、一地域の取り組みでは到底達成できず、まだまだ少数とはいえ、全国に存在する鐏絵・左官技術の保存継承に取り組む地域・団体との連携が不可欠である。

平成28年度の開催を計画している「(仮) 全国鐏絵サミットinとやま射水」を通じて、全国的な交流を促進し、三ケ・戸破地区の鐏絵・左官文化を全国に発信する。そして、地域における鐏絵・左官文化の価値の再認識により、地域住民の理解と協力を得て、地域を包括したまちづくりの組織づくりに繋げ、継続的な取り組みを進めるための素地としたい。


鐏絵「双龍」



**自治体名　富山県射水市**

- 人　　口：94,684人
- 面　　積：109.18km²
- 事　業　名：鐏絵を活かしたまちづくり
- 事業開始年度：平成14年度
- 事 業 主 体：射水市商工会、三ケ地域振興会、戸破地域振興会、旧北陸道アートin小杉実行委員会、観光ボランティアつつじの会、竹内源造記念館友の会、射水市

連絡先

射水市教育委員会生涯学習・スポーツ課
TEL 0766-59-8092　FAX 0766-59-8099
URL http://www.city.imizu.toyama.jp/

# あわらの健康「食べ・歩き」おばあちゃんの味の日

福井県あわら市

## ～毎月25日は「おばあちゃんの味の日」～

## 市町村の概要

あわら市は、人口約30,000人、面積約117km²の市で、福井県の最北端に位置する。福井県随一のあわら温泉のほか、美しい日本海、静かな湖や川、緑豊かな山々、太陽をいっぱい浴びた農作物など、自然の恵みにあふれ、気象環境も過ごしやすい。

## 健康は「食」から



市広報紙7月号表紙



おば味レシピ集等写真・イラスト

本市は、水稲、大豆、野菜など豊富な農産物に恵まれ、それらを生かした食文化、郷土料理がある。また、一年を通じて冠婚葬祭や報恩講などの行事においては、地元の豊かな食材を使った伝承料理が親から子へと伝えられてきた。しかしながら、近年、核家族化やライフスタイルの変化などで、行事も簡略化され、仕出しやお惣菜などの利用により家庭で伝承料理を作る機会が減ってきており、親から子へ、中高年から若者へと伝えられてきた地域に根ざした文化が、徐々に忘れ去られようとしている。また、脂肪の多い食品が好まれるなど、健診の結果からも肥満傾向者が増加しており、糖尿病や脂質異常症といった生活習慣病の発症要因にもなっている。さらに、生活習慣病から進行したと思われる「心疾患」による死亡率が国や県と比較してもきわめて高い傾向にある。そこで、市では、毎月25日を「おばあちゃんの味の日」と定め、この日を中心に、生活習慣病である糖尿病や脂質異常症を予防するカリウムやミネラル、食物繊維が多く含まれている伝承料理を家庭に普及推進するとともに、世代間の交流促進を実現することを目的に、平成22年度から事業に取り組んでいる。

## 伝承料理を残すために

取り組みの1つが、「試食会の開催」である。毎月、おばあちゃんの味の日に子育て支援センター利用の親子に試食やレシピの配布を行っている。また、市主催の各種講演会などの会場での試食会も、随時開催している。2つ目は、「伝承料理教室の開催」である。伝承料理を地域で伝えるために、食生活改善推進員が各地区で行う料理教室のメニューへの採用や、平成26年度から、若い世代の人にも慣れ親しんでもらえるよう、おばあちゃんの味を現代風にアレンジしたレシピの普及や親子、中学生、若者、男性などさまざまな世代の人を対象に教室を開催している。3つ目は「給食での



消費者展おば味試食



おば味親子料理教室



おば味親子料理教室のメニュー

普及」である。子供たちにも伝承料理に親しんでもらうための取り組みとして、保育所や幼児園、小・中学校の給食メニューに採用している。最後に「調理方法の紹介」である。広報紙とホームページに毎月１品ずつ伝承料理のレシピを掲載するとともに、ケーブルテレビでも作り方を紹介している。

取り組みにおいて考慮している点として、ケーブルテレビの放映や試食会・料理教室開催時には、単にレシピの提供だけでなく、基本的な作り方や食材を上手に利用できる知恵や調理のワンポイントアドバイス、伝承料理にまつわる昔話などを効果的に伝えている。食生活改善推進員の話の一例「伝承料理は冷蔵庫が無い時代から日持ちするように作られてきた料理なので、少し味が濃く作られている。調味料には主に酢や塩が使われていて、食材の打ち豆や切干大根などはそれ自体が保存食である。伝承料理には先人の知恵がつまっている。伝承料理には地域で取れる食材が使われており、地域に根ざした食材を使った地域独特のもの、つまり、ふるさとの味。伝承料理について学ぶことで土地の歴史や食文化も同時に知ることができる。ふるさとの味のつまった伝承料理は、ほっとする味で日本人に合った食べ物」。


若者向けおば味料理教室


保育所給食

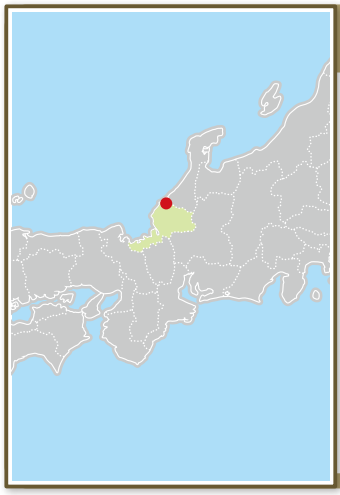
取り組みの成果としては、市民より、「25日はおばあちゃんの味の日」、「子供が美味しそうに打ち豆と千切りの煮物を食べたのが嬉しくて、自宅でも作るようになった」「野菜たっぷりで健康に良い」「おばあちゃんの手作りが手間がかかっていたことを知り感謝したい」「伝承料理はやさしい味、アレンジ版のレシピは食べやすく、親しみやすいので、これを機会に子供たちに作ってあげたい」など、さまざまな感想をもらい、市民への伝承料理の普及がうかがわれる。

## 課題と今後の展望

若い世代が取り組みやすい工夫として、平成26年度より毎月、アレンジ版のレシピを紹介しているが、「食べやすい」、「親しみやすい」という意見があるため、今後も管理栄養士を中心に色々なレシピを考案するとともに、市民からもレシピを募集し、より一層関心を高めていきたい。

次に、事業のプロセスからアウトカム評価までの指標について、アンケートの実施など効果的な指標を検討する。

また、食材の購入方法が不明、食材確保が困難などが理由で、作りたいが作れないとの声も聞かれるため、実際に使用する食材の展示及び購入方法などの情報も提供し、今後も子育て中の家庭をはじめ、若い世代へ普及していくことにより、すべての市民が健康で明るく、元気に生活できるまちの実現を目指していく。



**自治体名　福井県あわら市**

- 人　　口：29,529人
- 面　　積：116.99km²
- 事　業　名：あわらの健康「食べ・歩き」おばあちゃんの味の日
- 事業開始年度：平成22年度
- 事 業 主 体：あわら市

連絡先

あわら市市民福祉部健康長寿課
TEL 0776-73-8023　FAX 0776-73-5688
URL http://www.city.awara.lg.jp/index.html

# 美濃手すき和紙後継者育成制度

岐阜県美濃市

## ～1300年の伝統ある技術伝承～

## 市町村の概要

美濃市は、日本の中央に位置し、清流長良川や緑濃い山々など豊かな自然と1300年の伝統を誇る「美濃和紙」、伝統的建造物群保存地区指定の江戸時代に築かれたうだつの上がる古い町並みが残り、歴史的景観が保たれるなど伝統文化が息づくまち。

## 職人技術を次代に継承

美濃の紙は、古くは奈良の正倉院に残されている702年の戸籍断簡に御野国の名を見ることができる。江戸時代には、武士だけでなく庶民らが生活の中で紙を使うように なったことによる和紙消費量の増加と、その品質の良さと丈夫さで最高級の障子紙として美濃は全国に知られ、和紙問屋は大いに栄え一大和紙産地としての地位を確立した。

明治に入り、障子紙をはじめ謄写版原紙などで一層の隆盛を極めたが、戦後になると生活様式の西欧化と安価な洋紙が使われるようになったことや辛い仕事内容から、4000軒を超えた紙すき職人も廃業や後継者不足に陥った。さらに職人の高齢化も進み、現在では20軒弱が残るだけとなった。

三大産地の一つである「美濃和紙」の技術を確実に次代へ受け継いでいかなければならないことから、美濃和紙の職人を目指す後継者を地元からだけでなく広く他地域からも受け入れ、その育成の取り組みを始め、次代を担う美濃手すき和紙職人の確保を目指す。

## 手すき和紙後継者育成

市の「美濃手すき和紙後継者育成制度」では、美濃和紙の技術の継承を目的とした後継者育成の取り組みを行っている。この制度は、美濃和紙の里会館が開催する「美濃手すき和紙基礎スクール」において製造技術の基礎を１ヶ月間にわたり習得した者がその後、手すき和紙職人の工房で実務研修を経て独立開業するまでの支援を行うものである。

「美濃手すき和紙基礎スクール」の技能講師には、



紙すき作業



すきあげた湿紙を紙床に移す作業



乾燥作業

主に伝統工芸士が指導にあたっている。また、スクール終了後、美濃市に居を移し、技術習得後も引き続き市内において専業的に手すき和紙製造業に従事する意欲があり、満35歳以下の者で美濃手すき和紙協同組合が推薦する者については、２年にわたり月５万円を後継者育成奨励金として交付している。現在、「美濃手すき和紙基礎スクール」は150人ほどのスクール卒業者があり、そのうち16人に関しては手すき和紙関係の仕事に従事している。

職人の減少等により、産地としての活動が低迷する時期もあったが、職人同士がこれからの美濃和紙に対する共通の意識を持ち、さらにこれらの後継者育成支援により、若い職人も加わり、新たな活動への動きが出ている。

後継者の確保への道が見えてきたことで、職人も工房の維持、技術継承への意欲、今後の美濃和紙への期待が高まっている。

## 手すき和紙職人の今後

手すき和紙職人の高齢化により、職人を目指す者の受け入れが困難になりつつあるため、本制度を経て職人となった後継者による本制度への参画、そして新たな後継者への工房の確保が必要。

また、紙すき職人だけでなく、手すき和紙に関わる各種用具の生産者についても後継者不足が深刻化しており、対策が急務である。

生産者だけでなく加工業者を取り巻く環境も、景気の低迷などにより厳しい状況にあるため、和紙製品の需要拡大、消費者ニーズに合った新商品開発を図る必要がある。

今後は後継者の生活基盤充実、展示会や見本市への出展などを積極的に行うことで、販路の開拓や拡大、販売力の強化を目指す。

そして、「和紙　日本の手すき和紙技術」のユネスコ無形文化遺産登録により国際的認知度を高め、国内の和紙技術者との情報交換等を密にし、相互の結びつきを強化していく必要がある。



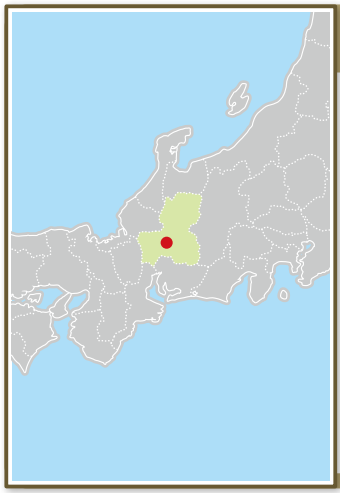
平成26年11月27日ユネスコ無形文化遺産登録　市民報告会



こうぞの寒ざらし



干し板洗い



**自治体名　岐阜県美濃市**

- 人　　口：22,167人
- 面　　積：117.05km²
- 事　業　名：美濃手すき和紙後継者育成制度
- 事業開始年度：平成6年度
- 事 業 主 体：美濃市、美濃手すき和紙協同組合

連絡先

美濃市産業振興部観光課和紙の里会館

TEL 0575-34-8111　FAX 0575-34-8280

URL http://www.city.mino.gifu.jp/minogami/

# 棚田文化の伝承

静岡県菊川市

～先人が汗と涙で築いた貴重な遺産、そして私達を育ててくれた棚田～

## 市町村の概要

菊川市は、静岡県の中西部で面積94.24㎢、人口約48,000人の牧之原台地に広がる大茶園と平野部の田園地帯に囲まれた自然環境と都市機能が共存する地域である。

## 棚田文化の伝承

上倉沢の棚田は、地元では昔から、千枚の田んぼという意味から「千枚（せんがまち）」と呼ばれ、牧之原台地の西斜面へ田んぼが階段状に連なり、面積10.1ヘクタール、最盛期にはその数3000枚以上、毎年500俵余の米を江戸時代の前期頃より生産していた。

この棚田は、1枚1枚の面積が小さかったため、昔、1枚足らないと探したところ、蓑の下に隠れていたという笑い話も伝わっている。

近年の農業を取り巻く厳しさが続く中、減反政策や後継者不足、生産効率の悪さなど悪条件が重なり、昭和50年代よりその数は激減し、9割近くが葦原と化してしまった棚田には、子供の頃に遊んだ昔の面影は残っていなかった。

この棚田が我々の祖先が汗と涙で、何代にもわたって守ってきた貴重な財産であると気づいた時、日本の原風景である棚田を守り、先人の苦労を肌で感じ、子供達に伝えていこうと、平成6年に地元自治会の住民による「千枚田を考える会」を設立し、復田作業を行ったのが活動の始まりである。



棚田風景

## 先人の苦労を肌で感じ、子供達に伝えていこう

日本の原風景棚田を守り、先人の苦労を肌で感じ、子供達に伝えていこうと、平成6年の「千枚田を考える会」設立、平成11年の静岡県「棚田等十選」認定を経て、平成22年2月からはNPO法人「せんがまち棚田倶楽部」が設立された。

「せんがまち棚田倶楽部」では、法人化を機会に、オーナー制の導入やホームページを開設するなどの活動と積極的な情報発信を行っている。

荒廃してしまった棚田を除草し田んぼに戻す復田作業や、復田された田んぼの畔塗りから稲刈りまでの保



田植え（2013年）



草刈り作業（2013年）



生き物教室（2013年）

全活動を行うとともに、この年間の活動を通じて、参加する幼稚園・小学生・中学生への社会教育・環境教育・棚田文化の伝承や、地区センター祭りやイベントでの収穫物の販売等、地域振興に関する活動を行っている。

イベントとしては、田植え後のあぜ道に約700本のロウソクの炎を灯し、苗の植えられた田んぼにほのかに反射して幻想的な世界を創出する「あぜ道アート」や、地元小学生と大学生の企画から演出、運営により、市内外からの出演者が参加する「お月見コンサート」なども千框で開催されている。

「せんがまち棚田倶楽部」と連携する「静岡大学棚田研究会」（通称たな研）は平成22年に設立、月1回の農作業のほか、「せんがまち棚田倶楽部」とともに農作業のインストラクターとして、オーナーの皆さんをサポートしながら地域との交流を行っている。

「静岡大学棚田研究会」の青空農園で育てた作物は、大学祭等のイベント毎に開催する「棚田市場」での直接販売や加工販売を行い、栽培・加工・販売の「農業の六次産業」を実践しながら学ぶなど、精力的な活動を実施している。

## 棚田の恵みを若い世代に

現在復田され、稲作が行われているのは、最盛期から比べてまだ3分の1程であるが、復田は1枚ごとの手作業となるため、根気よく継続していきたい。

また、稲作の代わりにススキやヨシを繁茂させ、刈り取ったススキやヨシを茶園の畝間に敷く、茶草場農法の世界農業遺産認定を契機に、隣接する棚田と茶草場だけでなく周辺も活かした茶草場農法も展開していきたい。

棚田は農業生産だけでなく、国土保全や美しい景観、生き物の生息環境などの、私達に多くの恵みをもたらすものであることを踏まえ、今後の「せんがまち棚田倶楽部」の課題としては、ホームページやブログを利用した活動状況等の情報発信を積極的に行い、稲作だけではない棚田の恵みを若い世代に受け継いでいくよう、取り組んでいく。



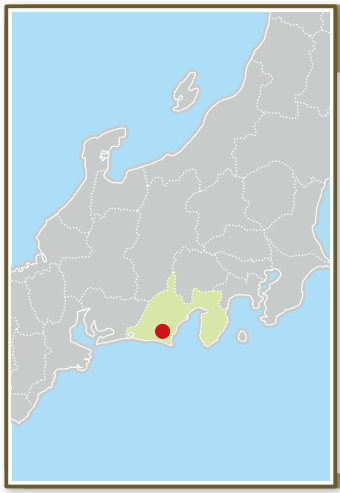
稲刈り（2013年）



あぜ道アート（2013年）



お月見コンサート（2013年）



**自治体名　静岡県菊川市**

- 人　　口：47,835人
- 面　　積：94.24km²
- 事　業　名：棚田文化の伝承
- 事業開始年度：平成22年度
- 事 業 主 体：NPO法人　せんがまち棚田倶楽部

連絡先

菊川市　建設経済部　農林課

TEL 0537-35-0940　FAX 0537-35-2114

URL http://www.city.kikugawa.shizuoka.jp

# 萩原チンドンまつり

愛知県一宮市

## ～チンドンマンが集まる街、萩原～

## 市町村の概要

一宮市は日本のほぼ中央に位置する愛知県の北西部にあり、名古屋市と岐阜市の中間にあって、木曽の清流と温和な気候、風土に恵まれ、古くから尾張地方の経済の中心として栄え、繊維産業の発展に大きく貢献してきた。

## チンドンマンを萩原へ



ステージに集結するチンドンマン

萩原商店街は美濃路街道として古くから栄えた宿場町が起源で、一宮でも有数の古い商店街である。身分の高い人をもてなす場を兼ねた宿問屋場があり、美濃路は奥方様やご息女が通ることから「姫街道」とも呼ばれた。

当時の姫街道の賑わいを忘れないように、商店街の通りには一年中華やかな飾り付けがされている。その萩原において、毎年5月に開催される全国的にも珍しい祭りが「全国選抜チンドン祭」である。

今から50年ほど前、商店街をもっと賑やかに盛り上げ、来街者を呼び込むために春の大売出しにあわせて各商店主が花魁などに仮装して商店街の練り歩きを行ったのが始まり。その当時は商店街の店も忙しい時代だったため、店の奥様から「店の主人が取られては！」と苦情が出て、商店主が出なくて済むイベントがないかと探したところ、富山市でチンドンマンによるイベントがある事を知り、役員がチンドンマンと直に交渉して萩原に来てもらうようになった。

プロのチンドンマンによる各店舗の宣伝とともに、その技能を競うイベントとして実施したところ好評を得て、一宮市内でも有数のイベントとして定着している。

## 地域が一丸となった取り組み



秋の素人チンドン大会

萩原商店街で開催されるチンドン祭りには、毎年5月の第4日曜日に開催されるプロのチンドンマンによる「全国選抜チンドン祭」と10月の第3日曜日に開催される素人による「素人チンドンコンクール」がある。

祭りの目玉は、全国で優秀な20組のチンドンチーム約100人に来てもらう春の祭りで、各チンドンマンが商店街の店舗のスポンサーとなってその店をPRしたり、最優秀賞（県知事賞）目指して競い合ったりするところである。その他にも、サンバや沖縄琉球エイサー、阿波踊りのグループ、大道芸などに参加出演をしてもらい、チンドン祭りに華を添えている。また、人が集まるお祭りを利用して、消防団の消防活動案内、





商店街を練り歩くチンドンマン



阿波踊り

AEDの使用講習会、防犯講座など、様々な啓発活動も同時に行っている。

これだけの規模の祭りを、チンドンの出演依頼、宿泊手配、実施に伴う道路使用許可など警察や所管官庁への申請、当日の案内、後片付けまで、企画・準備・運営の全てにわたり商店主ら自らで行っており、まさに商店街一丸となって取り組んでいる。また、地域学区の小学生はごみの分別案内の看板作成やごみの仕分け作業、中学生はチンドン祭りの看板を作成するなど、地域住民全体でイベントに参加し、盛り上げている。中にはチンドンマンとして祭りに参加している住民もいる。

5月のプロによるチンドンに対して、10月にはチンドンの愛好家や大学生のグループによるチンドン大会を開催しており、一宮市では「チンドンの街、萩原」として定着している。

近年では、商店街のレトロな雰囲気が親しまれてきたことも手伝って、遠く東北や九州からも観客が訪れ、春の大会には毎年約30,000人、秋にも20,000人の見物人が訪れている。

また、チンドン祭りを通じて商店街の存在が広く認知されていることもあり、商店街の商圏は比較的広く、尾西方面からなど、通常時の来街者増にもつながっている。他にも、地元や他の地域からの習い事のサークルや教室での発表の場として、チンドン祭りへの参加依頼が増えたり、老人ホームなどから見学したいという問い合わせも増えた。

## スポンサー募集と世代交代

事業の拡大に伴い、費用面と人手不足が大きな課題として挙げられる。

多くのイベント開催費用が掛かるため、チンドンチームや各種イベント参加チームと交渉をして出演経費を極力抑えるようにしている。また、祭りの協賛金を増やすために、協賛金を集める地域を広くし、様々な企業から協賛金を集める努力をしている。

また、当商店街にも高齢化の波が押し寄せており、事業のさらなる発展を目指すには役員の若返りを図るとともに、伝統およびノウハウの継承をしていかなければならない。

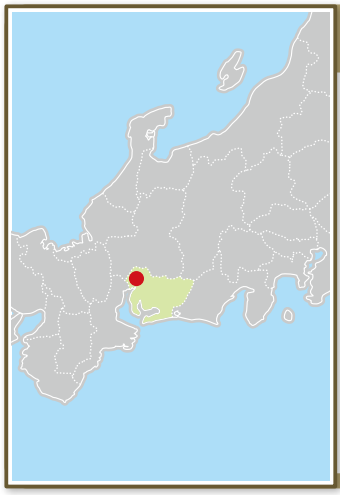
約50年という伝統があり、一商店街のお祭りではなく、市民はもちろん県内外の観光客の関心も高いイベントに成長していることから、市や商工会議所、周辺の教育機関、団体との連携を図りつつ、より強固な事業継続体制を構築し、更なるイベントの充実拡大を目指す。



地元小学生による清掃ボランティア



スポンサーのお店の前で宣伝するチンドンマン



**自治体名　愛知県一宮市**

- 人　　口：386,429人
- 面　　積：113.91km²
- 事　業　名：萩原チンドンまつり
- 事業開始年度：昭和42年
- 事 業 主 体：萩原チンドンまつり実行委員会（一宮市萩原商店街振興組合）

連絡先

一宮市経済部経済振興課

TEL 0586-28-9131　FAX 0586-73-9135

URL http://www.city.ichinomiya.aichi.jp/index.html

# 月の輪田プロジェクト

京都府京丹後市

## ～丹後建国1300年記念事業で地域おこし～

## 市町村の概要

平成16年に6町が合併した京丹後市は、人口58,000人で、京都府北部の丹後半島に位置し、東西約35km、南北約30kmの広がりがある。かつては大陸文化の窓口として経済・文化の先進地「丹後大国」の中心地であったといわれている。

## 稲作発祥の地「月の輪田」

京丹後市に、豊受大神（とようけおおかみ）が天照大神（あまてらすおおみかみ）に奉げるために稲作を始めたといわれる史跡「月の輪田（つきのわでん）」がある。「丹後旧事記（たんごくじき）」によると、稲種を天照大神に奉った田は、三日月形の小さな田で「月の輪」といい、領主は年貢地から除外し、収穫された米は、伊勢神宮に奉納されていた、とある。

豊受大神は食物や産業の神として、伊勢神宮外宮に祀（まつ）られているが、元々は京丹後市にある比沼麻奈爲（ひぬまない）神社に祀られている神である。雄略（ゆうりゃく）天皇の夢枕に天照大神が現れ、「自分一人では食事が安らかにできないので、丹波国（たにわのくに）の豊受大神を近くに呼び寄せなさい」と言われ遷宮されたと、伊勢神宮の社伝「止由気宮（とゆけぐう）儀式帳（ぎしきちょう）」に記述されている。

いつしか耕すことが途絶えてしまった月の輪田だが、平成25年度に「丹後建国1300年」を迎えるに当たって、地区の長老達に地元として何ができるか相談したところ、長年途絶えていた「月の輪田」を復活させることが一番良いことだと意見が一致し、区民の全面的な協力を得て復活に向けた動きが始まった。

## 豊受大神のロマン漂う



知事記念撮影

かつて、豊受大神が初めて稲作をしたとされる「月の輪田」を復活させて米作りをするというのが今回の取り組みである。田植えをするに当たり、長らく耕作されていなかった「月の輪田」復活に向けて、区民総出で取り組みが始まった。



田植え市長と早乙女姿子ども

平成25年2月より有志による打ち合わせを重ねた。栽培する米は、はるか昔の豊受大神に思いを馳せて古代種とした。市内で活動をする古代米保存会に営農指導を受けながら栽培を進めた。4月に月の輪田で比沼麻奈爲神社の宮司が安全と豊作を祈願して種まきをし、耕作されていなかった月の輪田を再び稲作ができるようになるまで田作りをした。月の輪に近づくように形を整え、良く肥えた



昭和3年　月の輪田



田植え前



種まき

土を搬入。水を張って代かきをし、ようやく田植えの準備が出来上がった。京丹後市からは、のぼり旗や水田管理費などの援助を得た。

平成25年6月「稲作発祥の地　神秘の豊受大神　月の輪田田植え式」と銘打ち、区民で田植えを行った。当日は地区の子供達を中心に手植えで行い、早乙女姿の田植え姿で雰囲気の盛り上がりをみせた。また、京都府知事や市長、議員の参加もあり地域住民との交流の機会を持つことができた。取材陣も多数訪れ情報発信もできた。

平成25年10月、稲刈り・収穫祭を開催し、月の輪田で収穫された古代米おにぎりの試食をし、豊穣に感謝をした。そして、平成25年12月には伊勢神宮へ奉納することができ、月の輪田の一連のストーリーを完結させることができた。

取り組みの成果として、月の輪田の整備や、栽培する古代米についての学習、区民の意識向上を狙って歴史教室を開催することにより、区民の興味を引き付けることに成功した。このように、年間を通じて関わってもらうことで、地域の一体感が生まれて交流の機会も増加した。月の輪田の復活に当たっては、年配者でも耕作されているのを見たものがおらず、地域資源の掘り起こしとして重要な位置づけができた。また、若い世代には素晴らしい地域資源を通して地元に対する誇りや愛着を持ついい機会になり郷土愛の醸成に寄与することができた。マスコミ取材で情報発信ができ、パワースポットとして月の輪田を訪れる人が飛躍的に増えたことも大きな成果と言える。そして、この取り組みを後世まで伝えようと地元の有志が集まり「二箇区月の輪田保存会」を結成して、一体感を高めながら活動を続けている。

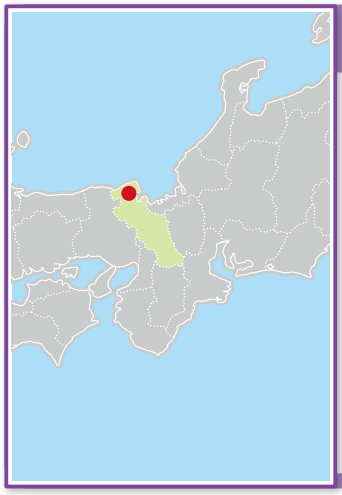
## 将来を見据えた構想で

他地区と同様に少子高齢化が進んでおり、若者の流出が止まらない状況である。また、年々米価が下がり続け農業への情熱が失せ、後継者が不足し、以前の賑わいが消えてしまった。今後は、「月の輪田」という地域資源を活用して地域に賑わいと活気を取り戻すことが重要になる。毎年の稲作は欠かさずに行い、ホームページなどで情報発信する必要がある。

そして、最終的な目標は地区内産の米を「月の輪田」に掛けてブランド化をすること。そうすることによって、より良い条件で取引ができるようになり、農家が潤い、地区内で経済が循環するようになる。また、農家でなくてもこの資源を通じて郷土に愛着を持ち、進学などで地区を出て行った若者が二箇を思い出し帰ってくるように、学習会などを通じて徹底的に教えていきたい。そうすることによって月の輪田を中心とした観光振興にも繋がっていくものと考えている。


黒い穂が出た月の輪田の古代米


歴史講演会



**自治体名　京都府京丹後市**

- 人　　口：58,881人
- 面　　積：501.84km²
- 事　業　名：月の輪田プロジェクト
- 事業開始年度：平成25年度
- 事 業 主 体：京丹後市峰山町二箇区

連絡先

京丹後市市民部峰山市民局
TEL 0772-69-0711　FAX 0772-62-6716
URL http://jl3gwm.wix.com/mooncirclehp#

# 西宮酒ぐらルネサンスと食フェア

兵庫県西宮市

## ～西宮の酒文化を発信！～

## 市町村の概要

西宮市は兵庫県の南東、阪神地域の中央部に位置し、古くより商業の中心、宿場町として発展してきた。昭和38年には「文教住宅都市宣言」を行い、良好な住宅地と恵まれた教育環境を生かしたまちづくりを進めている。

## 宮水と西宮の酒の歴史

「灘の生一本」の産地として有名な「灘五郷」のうち、西宮郷・今津郷を擁する酒どころ西宮。西宮における酒造りの歴史は古く、すでに室町時代には「西宮の旨酒」として知られていたが、灘の酒がその知名度を上げたのは、百万都市となった江戸に向け、上方からの海上輸送が頻繁になった江戸時代の中期。灘は海岸に面していたため輸送に有利で、樽廻船に大量の酒を積み込み、江戸市中へと送り込んでいた。さらに江戸時代後期には酒造りに適した「宮水」が発見され、この水を仕込み水に用いたところ、酒の質が明らかに向上し、灘の酒の人気が不動のものとなったとされている。このような歴史から、西宮の酒をＰＲするイベントとして「西宮酒ぐらルネサンスと食フェア」を毎年秋に開催している。

また、清酒製造業は、西宮の地場産業として発展してきただけでなく、清酒造りに欠かせない宮水の保存活動を通じて、文教住宅都市としての良好な住環境の形成にも大きな影響を与え続けてきたことから、清酒造りの伝統及び技を守り、酒文化を全国に発信し、将来にわたって引き継いでいくため、平成25年7月に「西宮市清酒の普及の促進に関する条例」を制定し、同年10月から施行している。



西宮酒ぐらルネサンスと食フェア

## 灘の酒の伝統を未来へ

「西宮酒ぐらルネサンスと食フェア」は、平成7年に発生した阪神・淡路大震災からの復興を願って平成9年からスタートした西宮の宮水・酒・食と文化を全国発信するイベント。毎年10月の第1土・日に西宮神社をメイン会場として開催され、酒造各社の日本酒を試飲できる「味わい酒ぐらひろば」、バラエティに富んだ酒と食のひろば「日本酒と料理を楽しむひろば」などの多彩なブースのほか、「新酒番船パレード」、「新酒番船一番酒御振る舞い」、「ちんどん」、「大道芸」、「人形劇」、友好都市提携を結ぶ高知県梼原町の「津野山神楽」など幅広い世代が楽しめる様々なプログラムが実施され、毎年約10万人が来場するなど好評を博している。期間中は最寄り駅からメイン会場、周辺の酒蔵等への無料ループバスが運行し、酒蔵地域に点在する酒造各社のアンテナショップでのショッピング等も楽しむことができる。

平成25年度は条例の施行を記念して、タレントの浜村淳さんをメイン会場に迎え、市内各地で同時乾杯する様子をラジオで生中継する記念セレモニーを行ったが、用意した乾杯用の枡2000個がすぐになくなるなど大盛況であった。

その他にも「日本酒振興プロジェクト」と銘打ち、日本酒文化の発信に関する様々な取り組みを行ってい






酒蔵通り　光の宴



にしのみや日本酒学校



「さけもろみこうじ」パンフレット

る。例えば、「酒蔵通り　光の宴」は、白鹿（辰馬本家酒造）を中心とする酒蔵地域一帯を光の演出によって彩り、酒造各社が期間限定のBARを開設するなど、普段とは違う酒蔵のまちの表情を楽しめる企画となっている。また、「にしのみや日本酒学校」は、開校式での一斉講義の後に、酒造各社が提供する講座の中から自分が興味のあるものを選択受講し、日本酒文化に関する一定の知識を修得した受講者には修了証を授与するもので、現代生活と日本酒との新しい関わり方を提案することにつながっている。さらに、西宮文化協会や西宮市立郷土資料館、酒造各社の協力を得て「さけもろみこうじ（酒諸見好時）」という西宮の酒文化のあれこれを解説する冊子を作成し、平成26年6月に阪急西宮北口駅構内にオープンした「にしのみや観光案内所」で配布するなど、継続した情報発信にも取り組んでいる。


蔵開（くらびらき）

各種イベントの実施に加え、条例も制定したことで、各種会合等でも清酒による乾杯の習慣が広まりつつあり、酒造各社も新酒の時期に合わせた「蔵開（くらびらき）」等を積極的に展開するなど、「西宮酒ぐらルネサンスと食フェア」を中心とした様々な取り組みが、地域の活性化につながっている。

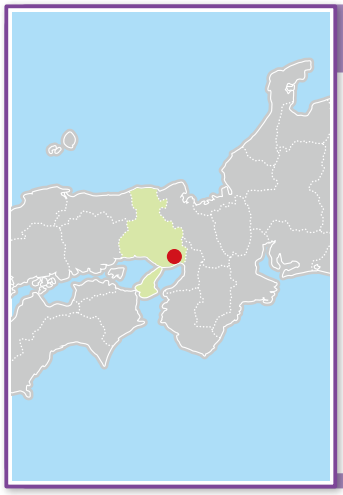
## 新たな楽しみ方を提案

かつては全国の課税移出高総数に占める割合が約15％という醸造高を誇っていた西宮の酒造業であるが、近年は様々な要因により醸造高が落ち込み、10％程度で推移している。今後も「西宮酒ぐらルネサンスと食フェア」をはじめとした各種日本酒振興イベントを継続開催するとともに、西宮観光協会が主催する観光事業「西宮まちたび博」などでも日本酒ツーリズムとして取り上げPRしていく。

また、市内洋菓子店が日本酒を取り入れたスイーツをそれぞれ開発し「SAKE SWEETS」として販売する動きや、酒造各社による美容部門への商品展開などの動きも出ており、新しい日本酒の楽しみ方・取り入れ方として積極的にPRしていきたい。そして、地域ブランドとしての“西宮の日本酒”の歴史と文化を将来にわたって引き継ぐとともに、文教住宅都市としてのさらなる発展を図っていくことが本市の今後の課題である。



西宮まちたび博



**自治体名　兵庫県西宮市**

- 人　　口：486,145人
- 面　　積：100.18km²
- 事　業　名：西宮酒ぐらルネサンスと食フェア
- 事業開始年度：平成９年度
- 事　業　主　体：西宮酒ぐらルネサンスと食フェア実行委員会

連絡先
西宮市産業環境局産業部観光振興課
TEL 0798-35-3331　FAX 0798-33-1160
URL http://www.nishi.or.jp/

# 宇陀松山華小路

奈良県宇陀市

## ～歴史に花を添えましょう～

## 市町村の概要

約33,000人が暮らす宇陀市は、奈良県東部の山間部にある。主産業は農林業、自然豊かで歴史資源豊富な土地柄である。冷涼で寒暖差が大きな気候を活かしたダリアの球根生産が盛んで、県内有数の産地である。

## 知る人ぞ知る、宇陀

宇陀松山華小路の会場となる松山地区は、史跡宇陀松山城跡の麓から南北に流れる宇陀川までの間に展開した城下町を基盤に、江戸時代から昭和初期にかけて宇陀の中心地として栄えた商家町。地区内を走る水路と重厚感のある町家の連なり、遠近に見える山々と相まって、上質の町並み景観を誇る。平成18年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されたが、愛好家の間で評判が高い割に知名度は今ひとつであった。

一方、奈良県が日本一を誇る「ダリアの球根生産」そのうちの約半分を、宇陀市が担っている。この「奈良県が日本一」と誇れるものがあるのに、それを県民も市民も殆どが知らない。町並みもダリアも、専門家や愛好家には認知されていたが、この良さを多くの人に発信する取り組みは、数えるほどであった。

転機は平成20年、馬見丘陵公園で実施された「ダリアの花じゅうたん」である。宇陀で育てたダリアの花を、約1時間かけて馬見へ運び花じゅうたんを作っていると聞いた松山地区の住民が、生産地に近い宇陀松山の町並みでやると面白いのではと直感したのだ。平成21年、奈良県や榛原花卉組合の協力を得ながら、町並みの路地をダリアの花で飾ってみた。



下絵修正

## 花と歴史に希望の光

宇陀松山華小路は、初日の朝から圃場にダリアを摘みに行くところから始まる。花卉組合より、花の摘み方と畑に入る際の注意事項についてガイダンスを受け、花を摘む。摘まれた花はそのまま松山地区の会場へ運ばれ、下絵に従って並べられる。昼過ぎには並べ終わり、そこからは2時間おきに噴霧器で花の水やり、暗くなればライトを点灯、翌朝ライトを撤去する。翌日、石景庵の中庭ではミニライブ、花の会場横にてダリア染め販売と球根予約販売を催し、15時に花の持ち帰りを解禁する。16時から片付けを開始し、17時頃にもとの路地に戻る。

花を並べるイベントで、産地を訪れるものは数少ない。圃場で花を摘むと、花の全貌を見るだけでなく、獣害と戦う生産者の苦悩にも接することとなる。結果だけを享受せず、生産過程や圃場の課題を共有し、参



花並べ



秀逸ショット

加者にも知ってほしいため続けている。ただ、素人が花を集めるために圃場に入ると畑を傷めるリスクが高く、実際に事故も起きたことから、5年目を境に花卉組合から花を買い、花摘みは体験として少しだけ行うことになった。

広報活動は、DM、チラシ、ブログ、SNS、雑誌掲載、ラジオ出演等、お金のかからないメディアを利用している。来場者は初年度900人程度だったが、近年は1200～1400人程度に増加している。イベント規模に対して適切な数字になった。

このイベントはまちづくり活動の一環で、地元の人達にとって楽しみな行事と認識されることを重要視している。現在では、女性から強い支持を得ており、飛び込みで花ならべをする観光客と雑談しながら作業をする姿はとても微笑ましい。

取り組みの成果としては、華小路を通じて町並みの魅力とダリアへの関心が高まったことが挙げられる。また、イベント運営に加わった松山地区外在住のメンバーが、松山地区の空き町家でカフェを開業する等、より一層まちへ踏み込んだ関わりを始めた。このイベントをきっかけに花摘みボランティアに参加した人（元市民で市外へ移転していた若者）が実家へ戻り、ダリアの切り花生産を始めた話を伝え聞き、地域の魅力を見直すイベントにもなっている。

そして平成26年、関西方面への移住を検討中のデザイナーに花のデザインを依頼し、イベント開催時に現場入りの際に空き物件を紹介する運びとなった。産地、町並み、双方に新たな風を送り込むイベントとしてゆるやかに成長している。



路地全景



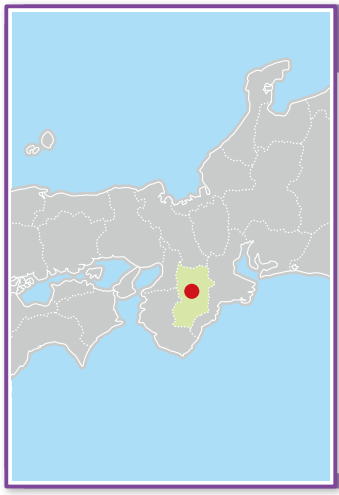
持ち帰り解禁

## 発掘・育成・継続の環を

ダリア産業の振興と、宇陀松山華小路の継続は表裏一体である。生産者には少子高齢化の進行や後継者不足による先行きの不安、イベント運営側には慢性的な予算や担い手不足が課題である。ただ、華小路を始めたことによりダリアに関心を持つ人が確実に増え、町並みに興味はないが花は好きという人との接点ができ、町並みの良さを吹き込むチャンスが増えた。活動を始めて6年目、効果が徐々に見えてきた。

産地の状況を発信し、ダリアの花と町並みの魅力を伝える活動を継続し、地域の人の暮らしをより豊かにしたい。イベントを通じて産業やイベントの担い手を発掘し、人材育成を進め、継続の環ができれば、町並みの住まい手増加、ダリアの休耕地減少、ダリア関連商品の生産等の仕事を生み出し生業につなげられると考える。時間はかかるが、いつかきっと。

ささやかなイベントだが、改善を重ねながら継続し、地域の課題解決に貢献したい。



**自治体名　奈良県宇陀市**

- 人　　口：33,413人
- 面　　積：247.62km²
- 事　業　名：宇陀松山華小路
- 事業開始年度：平成21年度
- 事 業 主 体：宇陀松山華小路実行委員会

連絡先

宇陀市企画財政部　まちづくり支援課
TEL 0745-82-3910　FAX 0745-82-3900
URL http://www.city.uda.nara.jp/

# 根来塗講座事業

和歌山県岩出市

## ～古の伝統工芸　幻の根来塗漆器が鮮やかに蘇る～

## 市町村の概要

岩出市は、和歌山県北部に位置し北は大阪府泉南市及び阪南市、東南は紀の川市、西は和歌山市に接している。このように大都市に隣接するという立地特性を活かしてカーネーション、ストック、観葉植物などの花き栽培がさかんである。

## 伝統工芸の復活を目指して

根来塗は朱漆で塗られた木製の器で、今から400年以上前に根来寺山内とその近辺で作成されていたことから「根来塗」と呼ばれ、古くから多くの茶人や好事家に親しまれてきたが、天正13年（1585年）豊臣秀吉の根来攻めに遭い、建物や漆器類等が焼失、塗師も地方へ拡散して根来塗は途絶えてしまった。

現存する漆器も少なく貴重である根来塗を現代に復活させるべく、平成4年度に根来塗工房を設置し伝統伝承事業として根来塗講座を開講した。根来塗は全国的に有名であり、各漆器産地でも多数作られているにもかかわらず、発祥の地である岩出市ではあまり知られてこなかったこともあり、根来塗講座を通して市民に根来塗の理解を深めると同時に、素晴らしい歴史的伝統工芸を継承する後継者を育成し、後世に伝えていくための取り組みとして事業を行っている。



岩出市民俗資料館

## 根来塗講座

根来塗講座は、毎週水曜・土曜日の週2回根来塗曙山会会長及び講師の指導により開講されている。受講生は年度初めに一般コース受講生を市広報で募集し約30名が3年間受講して根来塗漆器づくりに励んでいる。講座では一年間で最低一つの作品を仕上げることを目標とし、受講生各々の進捗具合によっては複数の漆器を作り上げることもある。一年毎に作品の難易度



根来塗講座





下地塗作業の様子

が上がり、より高度な漆器づくりを目指し、その技術を習得していく中で、根来塗の素晴らしさや作る楽しみを体感するのと同時に理解を深め、歴史感あふれるまちづくりに積極的に貢献できる活動となるように取り組んでいる。

この活動における成果発表として、毎年秋に開催の市文化祭に作品を出品・展示を行い、また毎年3月中旬から4月中旬を目途に民俗資料館において根来塗受講生作品展を開催し、根来塗に対し真剣に取り組んでいる成果を発表している。このように活動を積極的に発表することで、根来塗漆器および根来塗講座をより多くの人に知ってもらうことはもちろん、岩出市の伝統工芸としてさらに後世に継承していくための後継者育成を目的とし、一般コース修了生の中から上級コースに進み、将来においては作家としての人材の育成も視野に入れた取り組みも行っている。現在では多く巣立った講座卒業生の中からOB会も結成されており、その活動がより活発化している。



中塗の様子



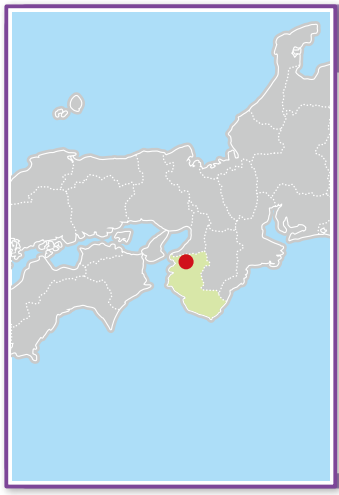
上塗の様子

こうした一連の活動が評価され、一度は途絶えてしまった根来塗の復興を果たしているとして、平成19年に和歌山県知事から県の郷土伝統工芸品『根来寺根来塗』として指定された。この功績により、現在では市民はもとより県内外からも注目され、根来塗漆器目当ての来館者が年々増加している。受講生の実習模様を見物するために講座開講日に合わせた来館者もあり、現代に蘇る色鮮やかな朱塗漆器に関心が集まっている。

## 後継者の育成と特産物としての社会的地位を目指して

根来塗講座を開講して多くの修了生が巣立ち、伝統工芸の伝承という部分についてはある程度の成果は得られるも、後継者・作家クラスの人材が未だに輩出されないまま開講から22年が過ぎている現状であり、この部分が課題である。

何百年も歴史が途絶えていたという点で見ると、短期間で人材を育成するのは困難なことかもしれないが、将来的には地元の特産物としての位置づけも視野に入れており、やはり後継者を育成して、数多くの作り手を輩出することは必要不可欠である。岩出市といえば『根来寺根来塗』と言われるような、一部にとどまらない幅広い認知度の獲得と同時に、歴史的存在価値としても理解を得ることができるように、さらなる事業の活性化、また素晴らしい伝統工芸の灯を絶やすことなく確実に後世へ伝承するために、今後もしっかり事業を継続遂行することが重要である。



**自治体名　和歌山県岩出市**

- 人　　口：53,577人
- 面　　積：38.5km²
- 事　業　名：根来塗講座事業
- 事業開始年度：平成4年度
- 事 業 主 体：岩出市民俗資料館

連絡先

岩出市教育部民俗資料館
TEL 0736-63-1499　FAX 0736-63-3764

# 益田糸操り人形

島根県益田市

## ～127年の伝統を今に受け継ぐ～

## 市町村の概要

益田市は島根県の西端で、北は日本海、南は中国山地に至る。市域の88％を森林が占め、市内を流れる「一級河川高津川」は4年連続水質日本一となるなど、豊かな自然が広がっている。

また、縄文や中世に関する文化財が多く、豊かな歴史、文化資源を有している。




糸操りチラシ

## 唯一無二の人形芝居

益田の糸操り人形は明治20年ごろ東京より伝わったとされている。当時、東京浅草で糸操り人形芝居を興行していた山本三吉が、その衰退を懸念し関西から益田に居を移すと、当時盛んであった浄瑠璃の愛好者達の集まり「小松連（こまつれん）」に迎えられたことに始まる。のちに彼の指導のもと、現在の益田糸操り人形芝居が形作られたとされている。

益田糸操り人形のように古い形態をとどめたまま上演されるのは、わが国で現在上演されている糸操り人形の中で唯一無二のものといわれており、昭和38年7月2日に島根県無形民俗文化財に指定され、さらに、使用される人形も昭和45年10月27日に島根県有形民俗文化財に指定されるなど、芝居だけでなく使用する人形等も大変貴重な文化財として認定されている。

益田糸操り人形保持者会は、昭和42年に設立され、以降、明治20年から続く127年の伝統を今に受け継ぎ、未来へ伝承するために技能の修練と普及啓発活動に努めている。



定期公演

## 伝統を受継ぎ次世代へ

益田糸操り人形芝居は、人形操者、太夫、三味線、後見の4役で構成され、人形の使い手は高さ2mの歩み板の上から「四ツ目」と呼ばれる手板を用い、13本から18本の糸を操ることで、丈約70cmの人形に微妙な動きを与えるものであり、その操法には非常に熟練の技を要す。このため、保持者会では毎週1回定期的・継続的な練習を行い、技術の習得、向上に努めている。また、習得した技術については、年4回島根県芸術文化センター「グラントワ」で開催される定期公演で発揮するほか、小中学校や公民館において年間5回






横田中出張公演

から6回程度開催される出張公演や体験型ワークショップ、さらに、県内他市町村をはじめ、近年では東京や徳島、長野、香川など県外にも積極的に出掛け、公演を行っている。平成24年には第27回国民文化祭とくしま2012全国人形芝居フェスティバルに糸操り人形芝居として唯一の参加を果たした。代表的な演目としては、「寿三番叟」や「絵本太功記　十段目　尼ヶ崎の段」、「傾城阿波の鳴門　順礼歌の段」などがあり、15以上の演目をもつ。

この糸操り人形を次世代にきちんと伝え、継承していくため、現会員の技術の習得、向上に努めるとともに、一緒に伝統を受け継ぐ新規会員の募集を図るため、公演終了後には観客を対象として実際に人形に触り、操ることができる糸操り体験を実施したり、毎週行っている練習を一般公開するなどして市民の興味・関心を得るよう取り組んでいる。

また、127年の伝統を持つ糸操り人形を次世代へきちんと伝承することを目的として、市内の小中学校への出張公演や小中学生を対象とした体験型ワークショップなどを積極的に開催し、次世代を担う若年層への普及・啓発活動にも力を入れている。

その結果、公演終了後の糸操り体験では、子供達を中心に多くの観客に参加してもらっている。これらの継続した普及活動が一定の成果を得て、一般認知度が上がっている。

## 後継者の確保育成

益田糸操り人形は東京の結城座や竹田座に現存する改良された形態とは異なる古い形で、このような古い形をとどめたままで上演されているものは、わが国で上演されている操り人形芝居の中では唯一とされており、非常に貴重な伝統芸能となっている。このため、次世代への伝承は重要な課題であるが、若年会員が少なく後継者の確保・育成が急務となっている。今後も継続して小中学校への出張公演と子供達への体験ワークショップを行い、特に若年層を中心に普及啓発を図っていく。

また、保持者会の運営は行政からの補助金のほか、公演料などを充てているが、その多くは会費で運営している。会の運営には、活動経費だけでなく、舞台や人形などの保存にも多額の経費がかかるため、資金の確保に苦慮している。会員の拡大と公演の拡大により資金の確保に努める。



二川公民館出張公演





匹見小出張公演



**自治体名　島根県益田市**

- 人　　口：49,515人
- 面　　積：733.24km²
- 事　業　名：益田糸操り人形
- 事業開始年度：明治20年度
- 事　業　主　体：益田糸操り人形保持者会

連絡先

益田市政策企画局人口拡大課
TEL 0856-31-0600　FAX 0856-31-0641
URL http://www.city.masuda.lg.jp/

# 倉敷屏風祭

岡山県倉敷市

## ～100年ぶりに復活　ーわが家のおひろめ祭ー～

## 市町村の概要

倉敷市は岡山県南部、瀬戸内海に面し、中・四国地方の結節点に位置する人口約48万人の中核市。年間を通じて降水日数が少なく、天領として栄えた江戸時代の風情を残す倉敷美観地区や、瀬戸内海の多島美を堪能できる鷲羽山等、文化・歴史・自然に恵まれた文化観光都市である。

## 100年の時を経て復活

「倉敷屏風祭」の起源は、江戸時代末期の文化、文政年間（1803年～1828年）から明治時代の初期にかけて行われていた阿智神社（倉敷の総鎮守）の大祭で、商家が通りに面した格子戸を開け放ち、先祖伝来の屏風や飾り花を活け、ある家ではお茶、お酒をふるまう等、お参りにきた人々をもてなし、商家の心意気「粋」を競っていたことに由来する。

倉敷商工会議所の若手議員で構成する政策グループが、中心市街地をもりあげるため、倉敷らしい「おもてなし」で、本当の倉敷の良さを知ってもらえる行事はないかと検討していたところ、メンバーである岡荘一郎氏（現・屏風祭実行委員会委員長）が郷土資料から屏風祭の記述を発見。これがきっかけとなり、地域の人々が心のふれあいや語らいを楽しんだ、古き良き伝統文化を次世代に伝えようと、岡氏を座長に12人の「倉敷屏風祭の復活を願う衆」が結成された。

予算も実績もない手探りの状態で、12人は各町内会への説明や、町家や商家105軒への参加の依頼に奔走。「文化の町倉敷の承継と倉敷の町らしい思いを住民の方々に披露していただき、倉敷の新しい屏風祭をつくりたい」という熱意に応じた本町、東町の町家や商家33軒の賛同を得て平成14年に「倉敷屏風祭」として100年ぶりに復活した。

## もてなしのまちづくり

毎年、阿智神社の秋季例大祭に合わせて10月第3週の土・日曜日に開催され、平成26年で13回目を迎える倉敷屏風祭だが、イベントの発展に向けて様々な取り組みを行ってきた。

まず、毎年、会場となる本町や東町の住民等に対して、事前に告知チラシを配布するとともに、訪問説明により展示場所となる町家や商家の参加を促してきた。イベントの前提として、実施主体が現に地域に住まう人であるということから、地域住民に「もてなす」側として祭りに参加していただくよう、今も地道な説得で根気強く理解と協力を求め続けている。

当然、地域住民は観光関係者ではないので、普段生活している家を見ず知らずの人に開放したり、訪れる人に屏風など展示物の説明をしてもらったりすることは負担が大きい。しかし、江戸時代の町家や商家が多



三味線の演奏によるおもてなし



造り酒屋での展示



国指定重要文化財「大原邸」での展示



旅館玄関での展示

く残る本町や東町は、優れた建築文化の個性を地域の強い意志をもって保存してきた「心意気」をDNAに持つまちである。粘り強い説得で、地域の伝統文化を継承するという趣旨を理解してもらい、年々参加者を増やすことができた。

他方、来訪者へのおもてなし活動にも力を入れてきた。展示会場、休憩ができる飲食店、観光施設等の催物案内を記載したポケットサイズの倉敷屏風祭マップを作成し、配布するとともに、地域の企業や団体等がボランティアで展示場所やトイレを案内する「助っ人衆」など、来訪者のホスピタリティを高めるため、地道な取り組みを行ってきた。こうした取り組みの結果、倉敷屏風祭は、毎年約80,000人が訪れる秋の名物イベントに成長した。これは、ただ屏風が珍しいから見に来るというだけでなく、地域の人々とのふれあいやおもてなしが来訪者に感銘を与えたからと考える。来訪者数の増加に加えて、リピーターが大変多いということがそのことを物語っている。

イベント自体の成功に加えて、倉敷屏風祭は、まちづくり分野にも良い波及効果を生み出した。倉敷屏風祭の実施を通じて、市民の「まちづくり」や「景観」への関心が高まり、空き家の活用、イベント等多くの活動が展開されるようになった。地域住民のおもてなし意識の向上や、まちづくりにおける一体感の醸成により、今まで人が少なかった通りに大勢の人が訪れるようになり、賑わい創出や地域経済の活性化に繋がった。

## 伝統の承継と革新

倉敷屏風祭は、美観地区会場と周辺の協賛展示会場で行われるが、メインとなる美観地区会場の本町、東町では、年々参加者の高齢により展示箇所が減りつつある。倉敷の町並みに一番ふさわしい祭りとして継承していくためには、様々な課題を解決していく必要がある。現在、新たにプロジェクトチームを立ち上げ、伝統を守りつつも新たな取り組みが何かできないか、検討を行っている。先人の心意気とおもてなしの心を守りつつ、新たな倉敷らしさを加えた「倉敷屏風祭」を打ち出していくことにより、これから先、新しい100年の歴史を創っていこうと考えている。


屏風を鑑賞


住民による家宝の展示


町家での展示



**自治体名　岡山県倉敷市**

- 人　　口：483,218人
- 面　　積：354.73km²
- 事　業　名：倉敷屏風祭
- 事業開始年度：平成14年度
- 事　業　主　体：倉敷屏風祭実行委員会（事務局：倉敷商工会議所）

連絡先

倉敷市文化観光部観光課

TEL 086-426-3411　FAX 086-421-0107

URL http://www.city.kurashiki.okayama.jp/1240.htm

# 大林地区の歴史、文化及び伝統芸能の保存継承

広島県広島市安佐北区

## ～「熊谷踊り」の復活を通した地域活性化～

## 市町村の概要

安佐北区は広島市域の北部に位置し、市内8区の中で一番広い。水と緑豊かな自然に恵まれた区で、区内には標高600m以上の山が数多く連なっており、区内外より多くの登山者が訪れているほか、太田川や根谷川、三篠川が流れ、夏には鮎漁が盛んである。





熊谷踊り復活(上下)

## 「熊谷踊り」復活への取り組みのきっかけ

鎌倉時代の初期、関東武士の熊谷氏が三入荘の地頭職に任じられ、大林地区に、拠点となる伊勢ヶ坪城（山城）を構えた。以来、約400年間、熊谷氏は、この三入荘を中心に可部一帯に勢力を持った。この熊谷氏に由来する「熊谷踊り」は地域固有の伝統芸能として踊り継がれていたが、昭和初期の戦争の激化などで途絶え、戦後は、盆踊り向きの踊りに改められ、固有の踊りは復活されないまま約80年の月日が経ち、踊れる者がほぼいなくなってしまった。

しかしながら、大林の伝統文化をこのまま絶滅させるのは忍びないと地域住民が思い立ち、大林地区文化事業実行委員会を発足させて、広島市の「区の魅力と活力向上推進事業補助金事業」を活用し、「住みよい、住んでみたい街」を目指し、熊谷踊りの復活をはじめ、大林地区の歴史・文化遺産を保存、活用する取り組みを推進していくこととなった。

## 復活への取り組みと成果

平成25年度は「熊谷踊り」の復活に取り組んだ。前述したとおり、大林地区においては「熊谷踊り」が消滅寸前であったため、まずは「熊谷踊り」に関する資料の収集を行った。

大林地区から東に4km離れた白木町桧山地区周辺では、10～15年前まで「熊谷踊り」が踊られており、「熊谷踊り」を踊ることができる人を探し訪ね、指導役として招いた。

また、大林小学校に残っていた昭和50年代の桧山地区の盆踊りの口説きの音声テープを復元し、5回の練習会を開催。延べ318人の地区民が練習に参加した。男女交互に輪を作り、男女対面で、口説きに合わせて、扇子を開いたり、閉じたりする場面や、腰を落と



熊谷踊り　児童練習





熊谷踊り　練習風景

して足を運ぶ所作があるなど独特な踊りで、大変盛り上がった。

平成25年8月10日（土）の17時～22時に、大林小学校で「盆踊りの夕べ」が開催され、そこで「熊谷踊り」を披露した。踊りの原型では、男性は刀、女性は薙刀を持って踊っていたと伝えられているが、それを扇子で代用し、衣装もできるだけ中世の服装に近づけた。男性は抹茶色の野袴を着て、灰色の上着を羽織り、たすきがけ、頭には中折れ烏帽子をかぶった。女性はあかね色の武者袴を着て、桃色の上着を羽織り、たすきがけ、頭に鉢巻きをし、伝統の姿に近づけたものにした。

盆踊り当日は、多くの地区民が参加し、自信と笑顔が溢れているのが印象的であった。

平成26年度は昨年度の復活から、継承へと取り組みがステップアップした。

踊りについては、より原点に立ち返り、代用していた扇子から、男性は刀、女性は薙刀に持ち替えて、熊谷踊りを披露した。

「熊谷踊り」が復活したことにより、盆踊りが活気づくとともに、練習会では多世代の参加があり、地域コミュニティが活性化した。

## 今後の会としての課題と展望

平成25年度の取り組みにおいては、「熊谷踊り」を実行委員と地域の一部の人で練習を行い、盆踊りで披露するにとどまったが、保存・継承していくために、当地区の老若男女だれでも踊れるように、工夫をしていくことが必要である。

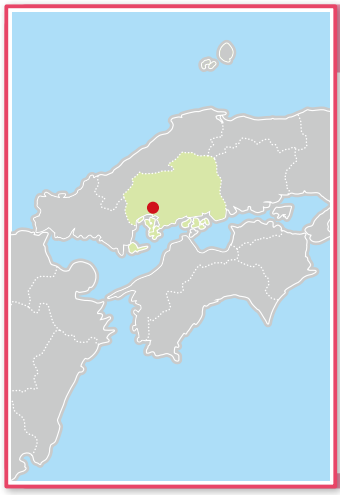
加えて、大林地区民に新たな指導者は誕生しておらず、今後、保存・継承していくためには、地区民の中で指導者を担えるほどの踊り手を育成する必要があることが課題となっている。

今後の大林文化事業実行委員会の取り組みとして、大林地区には熊谷氏の史跡が多く残っており、「熊谷踊り」にとどまらず、史跡を活用するなど新たな取り組みを考えていかなければならない。





熊谷踊り披露



**自治体名　広島県広島市安佐北区**

- 人　　口：151,044人
- 面　　積：353.35km²
- 事　業　名：大林地区の歴史、文化及び伝統芸能の保存継承
- 事業開始年度：平成25年度
- 事 業 主 体：大林地区文化事業実行委員会

連絡先

安佐北区市民部地域起こし推進課

TEL 082-819-3905　FAX 082-815-3906

# 浜崎伝建おたから博物館

山口県萩市

## ～住民主体で開催する、歴史的町並みが舞台のイベント～

## 市町村の概要

萩市は、城下町の佇まいが都市遺産として現存している全国有数の観光都市である。また、県下でも上位の農林水産業地域で、「夏みかん」「萩たまげなす」などの農産物や、「萩の瀬つきあじ」「萩の真ふぐ」などの水産物を萩のブランド産品として全国に発信している。

## にぎわいの復活をめざし

浜崎は、毛利氏の萩転封による城や城下町の建設のため、阿武川河口三角州の突端に形成された港町が起源である。町内には、藩主の御座船を格納する「御船倉」を中心とする萩藩の諸施設が建ち並び、萩の沖合いに浮かぶ島々を統括する代官所も置かれていた。また江戸期を通じて、北国船の廻船業や魚市場を中心とする水産業、各種問屋、醸造業等で栄え、明治から昭和初期には中国大陸との交易等により最盛期を迎えた。大正期に萩まで伸びた鉄道の影響等により、昭和中期以降、浜崎の町は衰退の一途をたどっていったが、地区内には現在でも、国指定史跡となっている「旧萩藩御船倉」をはじめ江戸後期～昭和初期の伝統的建造物が約140棟現存し、良好な歴史的景観を今に伝えている。



イベント当日の賑わい



路上パフォーマンスの様子

以前の浜崎の活気を取り戻したいと願う地区住民が、その手段として国の重要伝統的建造物群保存地区の選定を目指し、平成9年頃から行政と連携した取り組みを進める中で、かつて財をなした地区内の各家々が持つ数々のおたからが話題に上った。そこで、浜崎地区の歴史的町並みを広く紹介するとともに、町並み保存に関する地区内の意識向上を図る目的で、町並みとおたからをセットで活用するイベントである「浜崎伝建おたから博物館」を開催する運びとなった。

## 市の定番イベントに

本イベントは、歴史的景観が豊富に残る浜崎のよさを広く市内外の人々に周知することで、地区の活性化に繋げるとともに、地区内において歴史的景観の保存・活用について、より相互理解・協力を高める目的で、毎年5月の第3日曜日に開催している。

イベントの主な内容は、地区内のメインストリートに沿った家々のうち約20軒の玄関先や、家によっては座敷まで一般公開の上、伝来のおたからを展示する外、港町浜崎で水揚げされる新鮮な海産物を使用し、地区内の浜崎



伝来のおたからを鑑賞する来客



自宅で所蔵民具等を公開

魚市場で提供される「雑魚場定食」が人気を博している。国内で唯一現存する旧藩時代の屋根付き船倉である「国指定史跡旧萩藩御船倉」の内部ではコンサート等が開催され、空家を利用した各種展示やスタンプラリー、伝建地区見学ミニツアー、等々盛りだくさんの内容で、終日多くの来客でにぎわいを見せる。

平成13年に浜崎地区が国の重要伝統的建造物群保存地区（重伝建地区）に選定されたことを受け、平素より、地区の歴史的景観の保存・活用に関して、地区住民が結束して活動を展開している。地区内の清掃活動や、市所有の公開建造物の維持管理、来訪者への町並みガイド、文化財施設を活用したコンサート等イベントの開催、他の重伝建地区の視察等、年間を通じた活動を行っている。

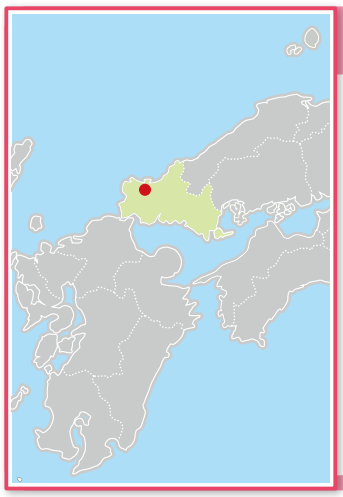
当該イベントは、これらの諸活動中の代表的なものであり、例年1月より地区住民による実行委員会が立ち上げられ、5月の開催に向けて住民が一丸となって準備に取り組んでいる。住民主体の手作り、かつ1日限りのイベントながら、萩市の春期観光イベントとして代表的なものとなっており、例年5000～6000人程度の客が訪れている。浜崎の名も広く周知され、年間を通じて相当数の観光客が訪れるようになった。開催による住民間の結束も強まり、住民活動の活性化に大きく寄与している。町並み保存に対する意欲も高まり、これまでに約40棟の建物が文化庁の補助事業に基づく保存修理を実施している。

## 若い力の導入がカギ

平成10年の開催以来、実行委員会の主要なスタッフはほぼ同じ顔ぶれであり、高齢化が進んでいる。また、公開されるおたからについては、地区内の家々が所有する品数は豊富であり、価値の高いものも多く存在するが、種々の事情によりイベント開催初期と比べ、高価値の品の公開は控える傾向にあり、展示内容が固定化しつつある。また、ここ数年、イベント内容にあまり変化が見られず、リピーター客確保のためには工夫が求められる。さらにイベント会場の設営作業等についても、スタッフの高齢化により厳しい状況にある。地区内に居住する壮年者や若者を実行委員会スタッフに取り込むことが、イベント内容の充実はもとよりイベント自体の存続のためにも必要である。地区内の若い人に多く参画してもらい、柔軟な思考で企画運営を行うことにより、萩市の主要観光イベントとして更なる発展が望めるとともに、世代を超えて地区住民による町並み保存の取り組みが進むきっかけとなることが期待できる。


国史跡施設内のコンサート


地区に伝わる山車の展示



**自治体名　山口県萩市**

- 人　　口：52,031人
- 面　　積：698.79km²
- 事　業　名：浜崎伝建おたから博物館
- 事業開始年度：平成10年度
- 事　業　主　体：浜崎伝建おたから博物館実行委員会

連絡先

萩市歴史まちづくり部文化財保護課
TEL 0838-25-3238　FAX 0838-25-4011
URL http:// www.city.hagi.lg.jp

# 「東寺献上　弓削塩」作り

愛媛県上島町

## ～弓削島の誇れる塩の歴史・文化を後世に伝えるために～

## 市町村の概要



発掘現場

上島町は、瀬戸内海のほぼ中央に位置し、愛媛県の東北部、広島県境に浮かぶ7つの有人島と、18の無人島からなる。平成16年10月1日に弓削町・生名村・岩城村・魚島村の1町3村が合併した。人口約7,500人、面積30.42km²である。「日本で最も美しい村」連合に加盟し、国土交通省の「しまの宝百景」、環境省の「快水浴場百選」にも選ばれた瀬戸内海屈指の多島海美を誇る。

## 弓削島の塩の歴史

弓削島における製塩の歴史は古く、平安末期には、時の権力者、後白河法王の荘園として瀬戸内海有数の製塩地であった。後に後白河法王が皇女の宣陽門院に譲り、さらに宣陽門院が鎌倉時代に、これを弘法大師ゆかりの教王護国寺東寺に寄進され、東寺領としての弓削島荘の歴史が始まり、以後、室町時代まで続く。

近年の愛媛大学考古学研究室の発掘調査により、弓削島および周辺の島々の製塩の歴史は古代まで遡ることが判明した。弓削島において組織的な製塩が、今から1300年～1700年前の古墳時代初頭から後期後半にかけて行われてきたことが明らかになった。このように弓削島では古代から塩作りが主要な産業として栄えてきたが、塩の専売化、近代製塩法の確立に伴い、昭和の中頃までに日本各地にあった塩田が消失したのと同様に、弓削島における塩作りも姿を消していった。



塩4種

そこで、弓削島における塩の歴史文化を継承すべく「弓削塩文化を伝える会」を発足し、愛媛大学考古学研究室の発掘のサポートをしてきた。その後、史実に基づいた塩作りをしようとNPO法人を組織し、教授指導のもと、塩作りに着手し、弓削島における塩作りの歴史を次世代に伝える活動を行っている。



塩づくり体験

## 古代藻塩作り

弓削島周辺の海水およびヒジキ・アマモを原料として、地域住民から提供された廃材・間伐材・剪定枝などの地域資源を燃料として有効活用し、平窯で終始煮詰め製塩しつつ、弓削塩の古代の製法を再現した藻塩作りの体験教室等を行い、幅広い年代層に弓削島における塩作りの歴史を伝えていく活動を行っている。

製塩における設備、ノウハウなどすべてゼロの状態からスタートし、道具なども地域の人達の協力で古いものをこだわって探したり、自分達で作ったりして整備し、紆余曲折を経て塩作りに至るまで4年を要し「東寺献上　弓削塩」を誕生させた。商品名は、東寺の砂原秀遍長者揮毫によるものである。

塩作り体験教室については、愛媛大学考古学研究室及び多数の協力者



県外からの体験者


塩完成間近

により現在の体験を行える状況にまでこぎつけた。今後は、古代の製法を再現した藻塩作りの体験を行うことで、町内外また幅広い年代層の人達に、弓削島における塩作りの歴史を、着実に次の世代へ伝えていく。また、揚げ浜式の塩田を上島町の支援により新たに整備するなど活動に広がりをみせている。

活動成果としては、「東寺献上　弓削塩　ひじき塩・あまも塩」、広島県神石高原町との海山交流から紅塩（梅塩）、白塩、塩を使った関連商品を開発できたことである。これらの商品は毎年4月1日の献上式を実施後に様々な販路にて発売されている。販売先としては、中国、四国地方道の駅、町内外土産物店、都内料理屋、東京スカイツリー、せとうち旬彩館、東寺、愛媛大学、松山市内料理店数店、ラーメン店、アイスクリーム店、うどん屋等である。また、藻塩作り体験の伝承活動については、島外の観光客はもちろん、地元園児、小学生、中学生、高校生の授業にも活用され島の歴史文化の継承の一役を担っている。これらの活動は、地元のマスコミである広島放送等はもとよりNHKやテレビ東京等、雑誌等にも取り上げられており、全国から注目されている。


塩道具

## 弓削島の塩の歴史を後世に

京都府立総合資料館所蔵の国宝「東寺百合文書」が、世界記憶遺産の登録候補として日本ユネスコ国内委員会ユネスコ記憶遺産選考委員会から推薦されることとなり、ユネスコ記憶遺産国際諮問委員会の審査（平成27年5月頃の予定）で承認されれば、この中に弓削島の京都東寺の「塩の荘園」としての歴史を伝える古文書が多くあることから内外への周知に絶好の機会となる。

今後も歴史文化の継承と自然環境の保護及び地域の財産である人の交流を目的に、地域の誇れる歴史である京都東寺の「塩の荘園」としての塩作りを中心として、地域の課題に向き合いながら活動の展開を図り、循環型社会の確立を目指し、事業の拡大により地域の活性化に寄与していく。


揚げ浜式塩田完成



**自治体名　愛媛県　上島町**

- 人　　口：7,082人
- 面　　積：30.42km²
- 事　業　名：「東寺献上　弓削塩」作り
- 事業開始年度：平成22年度
- 事 業 主 体：特定非営利活動法人　弓削の荘

連絡先

上島町　総務部　企画政策課
TEL 0897-77-2500　FAX 0897-77-4011
URL https://www.town.kamijima.lg.jp/

# 芦屋釜復興事業

福岡県芦屋町

## ～茶の湯釜の名器、芦屋釜の復興に挑む～

## 市町村の概要

芦屋町は、福岡県の北端に位置する町である。響灘に面しており、美しく変化に飛んだ海岸線を有する。町のほぼ中央には、一級河川遠賀川が流れており、海と河川の交わる要港として、古くから栄えた地域である。

## ふるさと創生が契機に



芦屋霰地真形釜
（室町時代　芦屋釜の里蔵）

芦屋釜とは南北朝時代頃から筑前国芦屋津（現在の福岡県遠賀郡芦屋町）で製作された鋳鉄製の茶の湯釜である。その特徴は、胴部に表される優美な文様と真形（しんなり）とよばれる端整な形にある。室町時代には、京の貴人達の間で一世を風靡した。しかし、室町時代末期になると庇護者であった大内氏の滅亡や、京での釜造りが隆盛したことにより芦屋での鋳物業は著しく衰退し、芦屋釜の製作は江戸時代初期頃に途絶えてしまう。その後も茶道界においては、芦屋釜は茶の湯釜の名器として非常に珍重されてきた。芦屋釜の美術的・技術的評価は今なお高く、国指定重要文化財の茶の湯釜9点のうち8点までを芦屋釜が占めている。芦屋町では平成元年の「ふるさと創生事業」を契機として、芦屋釜の復興を行うことが決まり、平成7年に芦屋釜の里が建設された。芦屋釜の里では復興工房を建設し、芦屋釜の調査・研究に基づく復元製作を行うとともに、16年間の養成期間を設定し鋳物師の養成を進めている。

## 鋳物師の養成

現在、芦屋釜の里内の工房において、芦屋釜の復元製作と鋳物師の養成を進めている。芦屋釜をはじめとする伝統的な鋳造技術を身に付けた鋳物師を現代によみがえらせ、再び芦屋で鋳物業を地域の産業とすることが目的である。なお、鋳物師は町の嘱託職員として雇用し、16年間の養成期間を設けている。

本事業を始めるにあたり、芦屋釜の製作技術は400年前に途絶えており、その製法を記した文献も無く、芦屋に鋳物師もいなかった。そこで、まず重要無形文



芦屋釜の里　大茶室



茶の湯釜の鋳込み

化財「茶の湯釜」保持者角谷一圭氏の協力を得て、平成7年から3カ年、角谷氏の工房より技術者を派遣してもらった。その間、町が雇用した鋳物師（嘱託職員）に対し、技術的な指導を受けた。また、鋳物師と研究員が共同で全国に残る芦屋釜を調査し、そこから復元のための技術的要件を抽出し、復元の指針を定めた。客観的な意見と評価を得るため、日本の金工界の著名な識者3人を招聘し、指導委員会を開催した。それらを基に、現在では不可能といわれる芦屋釜復元に挑んでいる。事業開始から20年が経過し、成功率は低いながらも復元の要件を備えた作品もでき始めている。あわせて、多彩な鋳造技術を身に付けるため、梵鐘などの鋳造技術についても、調査と復元製作を行っている。平成25年度、16年間の養成期間を終え、芦屋釜復元の技術を身に付けた鋳物師が1人独立した。平成33年度にはさらに1人独立する計画である。

独立した鋳物師が生計を立てることができなければこの事業の継続は望めない。そこで、主たる需要者である茶道界に芦屋釜の復興を広めるため、普及活動を行っている。平成25年度に独立した鋳物師は、釜の注文や修理の依頼等が入ってきており、現在のところ良い状態を維持している。

公の機関が直接人材を雇用し、一旦途絶えた伝統技術を現代によみがえらせるという事業は、日本の工芸史上初めての取り組みであろう。近年では、茶の湯釜の名器、芦屋釜が復興していることが徐々に周知されてきており、全国的な芦屋町の周知にもつながっている。また、誇るべき文化財・工芸品があることが地域にも徐々に認知され、地域の新たな郷土意識、ふるさと意識づくりに貢献している。



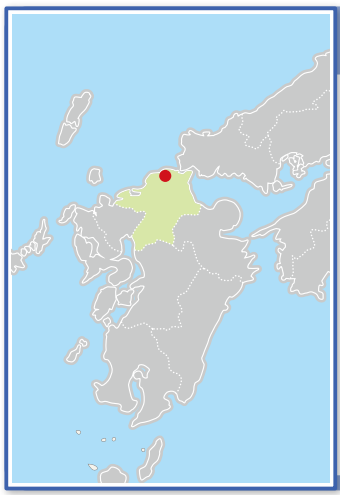
鋳型へのへら押し

## 全国的な周知に向けて



復元された芦屋釜
（浜松図真形釜）

芦屋釜復興を永続的なものとするためには、3点の取り組むべき課題がある。1点目は、需要の拡大を図るため、全国的な周知を図ることである。特に茶道界での認知度を上げることが重要な課題である。2点目は、技術の継承を図るため、後継者の育成や技術の低下を防ぐための規準の設定など、長期的な展望に立った計画の策定が必要である。3点目は、新たな産業として地域の人々に認知してもらうべく、求めやすい価格帯の小物品などの開発を行うことである。芦屋釜の復興を進め、芦屋町だけでなく、将来的には福岡県の代表的産物となるよう、事業展開を行いたい。



**自治体名　福岡県芦屋町**

- 人　　口：14,743人
- 面　　積：11.49km²
- 事　業　名：芦屋釜復興事業
- 事業開始年度：平成7年度
- 事 業 主 体：芦屋釜の里

連絡先

芦屋町教育委員会生涯学習課文化係
TEL 093-223-5881　FAX 093-223-5882
URL http://www.town.ashiya.lg.jp/navigate/public/mu1/bin/

本編

# ～小城どこでんミュージアム～ 屋根のない博物館事業

佐賀県小城市

## ～小城のお宝を市民と共に守り伝える～

## 市町村の概要

小城市は佐賀県のほぼ中央部に位置し、北は標高1,046mの天山を望み、南は六角川を介して有明海に面している。人口は約46,000人で、夏は温暖で、冬は乾燥した北西季節風が強い。平野部には田園地帯が広がっており、農業が盛んである。特産品として小城羊羹や鯉料理が有名で、史跡土生（はぶ）遺跡などの文化財も豊富である。



小城羊羹

## 合併後の文化財活用

平成17年3月1日、小城町・三日月町・牛津町・芦刈町の旧小城郡4町が合併し、小城市が誕生した。合併によって、小城市の範囲は北は天山から南は有明海までと広大なものとなった。4町はそれぞれ独自の長い歴史・豊かな文化に彩られた地域であり、長い時間蓄積されてきた人的・物的な資源、文化財が存在しており、保護・活用の方法も町ごとに異なっていた。これらの貴重な資源や文化財を適切に保護して後世に守り伝えていくとともに、小城市として一体的に有効活用してまちづくりや観光に活かしていくために、小城市全域を野外博物館（フィールドミュージアム）と位置づけた「～小城どこでんミュージアム～屋根のない博物館構想」を平成18年度に策定した。「どこでん」とは、佐賀弁で「どこでも」という意味である。この構想に基づいて、文化財の保護を進めるとともに、まちづくりや観光に活かしていくためにさまざまな取り組みを展開している。また、平成25年2月に策定された、「城創伝心」“小城の歴史と伝統を受け継ぎ、文化を創造する豊かな心を育み後世へ伝える人づくり”を基本目標とした「小城市教育振興基本計画」の下、さらに取り組みを進めている。

## 野外博物館での活動

### （1）主な取り組み

小城市立歴史資料館を拠点として、歴史や地域性を考慮して市内を7つの展示館に分けている。その中で、①市内に点在する文化財への説明板と案内板の設置②史跡土生遺跡公園において、子供達を主な対象として弥生時代の体験を行う「土生遺跡公園まつり」の開催③市内の登録有形文化財建造物や「まちの駅」（広く人々が入ることができる施設で、来訪者にトイレや休憩所を提供し、また、観光地等への道案内も行う場のこと）、商店をギャラリーとした「小城のお宝展」の開催④「小城市民学芸員」の認定試験実施や認定後の活動の支援⑤小城の歴史をわかりやすく紹介した『小城歴史読本』の作成、市内小中学校への配布と一般販売⑥市民団体と連携して実施する市内石造物の調査といった取り組みを実施している。

### （2）取り組みの特徴

屋内だけでなく、屋外に存在する文化財に目を向けている。文化財説明板と案内板は観光客や地域住民を対象として、指定されているものか否かを問わず市内に存在する文化財や史跡に設置している。「小城のお宝展」は、登録有形文化財建造物や「まちの駅」、商店などと連携して開催している。『小城歴史読本』は平成24年度に刊行したが、再増刷に合わせて平成26年度に読本を使った歴史講座を全10回開催予定である。




文化財案内板



文化財説明板

そのうち4回は市内の史跡探訪会を実施予定である。

### (3) 取り組みにおいて工夫した点

行政だけの取り組みではなく、市民との協働も含んだ取り組みとしている。「小城市民学芸員」は市民から公募を行い、試験を実施して認定した。「土生遺跡公園まつり」は、その「小城市民学芸員」の協力によって開催している。『小城歴史読本』の作成と歴史講座の開催は、郷土史愛好家が集う「小城郷土史研究会」の協力あってのものである。市内石造物の調査は、石造物愛好家団体である「牛津砥川石工の里を未来に伝える会」の協力の下、少しずつ進めているところである。

### (4) 取り組みの成果

この取り組みを進めていくことで、市民の地域の歴史や文化に対する理解が進んだ。「小城のお宝展」は、当初登録有形文化財建造物とギャラリーを持つ商店を会場とした小城の中心市街地でのイベントだったが、「小城市中心市街地活性化協議会」（小城市内の「まちの駅」を統括している）の協力もあり、現在では市内全体に会場が広がっている。また、「小城市民学芸員」の人材育成につながり、現在は観光ボランティアとして、観光客だけでなく、地元の小中学生や住民にも案内を行っている。地域の歴史や文化の保存・活用・掘り起こしによって郷土愛が育まれ、人材育成にも繋がっている。

## 更なる発展に向けて

### (1) 課題

課題として、説明板・案内板設置のPR不足と外国語表記、「小城のお宝展」に参加する団体・個人によって取り組みに差があること、「小城市民学芸員」の高齢化が進んでいて後継者の育成が急務であることが挙げられる。このうち、説明板・案内板設置のPRは、平成26年度から小城市役所ホームページと、市報「さくら」で広報している。外国語表記については、これも平成26年度から英語で簡単な説明を加えている。「小城のお宝展」については、「小城市中心市街地活性化協議会」の協力もあり、温度差の解消に取り組んでいる。「小城市民学芸員」については、追加募集を検討している。

### (2) 今後の展望

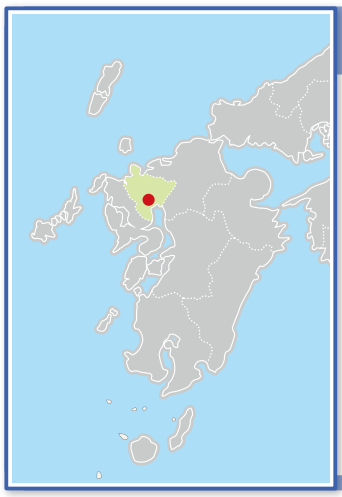
行政だけの取り組みではなく、市民協働事業の一つとして、市民団体や個人を巻き込んだ形で小城市の歴史や文化の継承に取り組み、まちづくりや観光に活かし、小城市が更に発展することができるようにしたい。



土生遺跡公園まつり



小城のお宝展



**自治体名　佐賀県小城市**

- 人　　口：46,029人
- 面　　積：95.85km²
- 事　業　名：～小城どこでんミュージアム～屋根のない博物館事業
- 事業開始年度：平成18年度
- 事　業　主　体：小城市教育委員会

連絡先

小城市教育委員会文化課

TEL 0952-73-8809　FAX 0952-71-1145

URL http://www.city.ogi.lg.jp/

# 長崎ペーロン選手権大会

長崎県長崎市

## ～長崎市におけるペーロンの取り組み～

## 市町村の概要

長崎市は日本の最西端、九州の最北部に位置している。長崎港を中心に鉢状の独特な地形になっており、市内には急な坂が点在している。

“日本初のまち歩き博覧会”である「長崎さるく博06」が起点となって「歩くこと」が観光資源のひとつとなっている。

## ペーロンの歴史

長崎港でペーロン競漕が行われたのは、明暦元年（1655）のことで長崎港に碇泊中の唐船が暴風雨に襲われて難破し、多くの溺死者を出した。そこで、在留の唐人達が、海神の怒りを鎮めようと端舟を借り集めて、長崎港で競漕したことが始まりと言われている。

当初は5月5日の端午の節句に中国人が始め、それを町の子供たちが真似をし、いつしか大人達の競漕になっていったようで、そのうち血の気の多い若者が喧嘩を始めたり、飲み食いに使うことで無駄にお金を浪費するという理由で、奉行所から禁止令が出たが、すたるどころか延々と続けられ、脈々と受け継がれてきた。

初期の頃のペーロンは15尋（ひろ）から20尋又は30尋の物まであり（1尋は5尺すなわち約1.515m、ないし6尺すなわち約1.816m）、漕ぎ手も40人から60人と船の大きさに比例して乗る人数も増えてきた。

現在では、大漁祈願のためにするもの、竜神まつりと称するもの、“足あらい”と称して田植の済んだ後に行うもの、いろいろな意味を持ちながら継続され、約14mの長さのペーロン舟に26人の漕ぎ手が乗り組み、太鼓とドラの拍子にあわせ、往復1,150mの距離を競漕する。

## 選手権大会

長崎のペーロン競漕は、長崎市内各所で地区のペーロン大会が6月上旬頃から開催され、各地区代表チームが長崎市松ヶ枝の埠頭で行われる「長崎ペーロン選手権大会」の一般対抗レースに出場する。

例年、県内の各地区代表、中学校、職域、女性チームを一同に参集させ、国内のペーロンチームにも参加を呼び掛け「長崎ペーロン選手権大会」を開催している。会場内では、長崎の特産品の出店や有料でゆっくり観戦できる観覧席、無料ペーロン観覧船、体験ペーロンも併せて実施している。長崎港の賑わいを創出することにより観光客の誘致に努め相互間の交流を行っている。



一般対抗レース



職域対抗レース



女性対抗レース



中学校対抗レース



職域応援（観覧席）

〈長崎ペーロン選手権大会実績〉

| | | |
|---|---|---|
| 25年度 | 観客数 | 7月27日（土）　21,000人<br>7月28日（日）　23,000人<br>合　　計　　44,000人 |
| | 出漕チーム数 | 職域対抗レース　16チーム<br>（内県外1チーム）<br>中学校対抗レース　10チーム<br>女性対抗レース　3チーム<br>一般対抗レース　22チーム<br>（内県外3チーム）<br>合　　計　　51チーム |
| 26年度 | 観客数 | 7月26日（土）　19,000人<br>7月27日（日）　21,000人<br>合　　計　　40,000人 |
| | 出漕チーム数 | 職域対抗レース　17チーム<br>（内県外1チーム）<br>中学校対抗レース　12チーム<br>女性対抗レース　6チーム<br>（内海外1チーム）<br>一般対抗レース　22チーム<br>（内県外2チーム、海外1チーム）<br>合　　計　　57チーム |

また、ペーロンを広く知ってもらうため、同日開催する「ながさきみなとまつり」花火大会との連携及び、市内宿泊施設と連携し、花火観覧、ペーロン観戦、さるく（まち歩き）をセットにし、旅行代理店へツアー造成の働きかけを行っている。また、市内各地区のペーロン大会スケジュールの作成やJR九州一円の駅にポスターの掲載を行い宣伝に努めている。

このような取り組みにより認知度を高めるとともに、競技者数増加にまで繋げていく必要がある。そのために、ペーロンの魅力を実際に経験してもらえる機会として、体験ペーロンに力を入れ、修学旅行の体験学習として組み込むなどの取り組みも行っている。

## 地域活性への貢献

地域全体で取り組みが継続されていること、またペーロンを通して繋がっている他市町村との関係もあることから、地域内外との交流もより活発になったように思える。広く事業を展開することにより、新地・唐人屋敷界隈及び港の賑わい創出を行い観光の活性化に大きく貢献しているといえる。

ここ数年観客動員数が微減しているのは少子高齢化と、それによるチーム数の減少も影響していると思われる。今後も市内外両方からの集客を意識した取り組みを継続させ、大会の盛上げに繋げていきたい。

〈課題〉

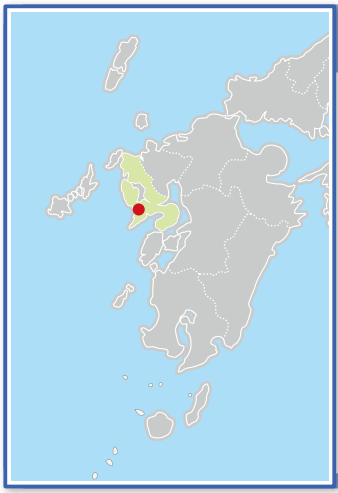
・主に女性チーム数を増加させること。
・27年度以降のペーロン舟、揚げ降ろし場所について、旧魚市跡地の使用が不可のため代替地の選定をすること。



海上パレード



体験ペーロン



**自治体名　長崎県長崎市**

- 人　　口：437,315人
- 面　　積：406.47km²
- 事　業　名：長崎ペーロン選手権大会
- 事業開始年度：昭和52年（ペーロン自体は西暦1655年より続いている）
- 事　業　主　体：長崎国際観光コンベンション協会、長崎県、長崎市

連絡先

長崎市文化観光部観光推進課
TEL 095-829-1314　FAX 095-829-1232
URL http://www.city.nagasaki.lg.jp/

# 文化遺産を活かした地域活性化事業（八代妙見祭）

熊本県八代市

## ～祭の復興と地域活性化に向けて～

## 市町村の概要

八代市は山・川・海そして広大な平野と多様で豊かな自然に恵まれ、全国有数の農業生産地、県内有数の工業都市として発展してきた。平成17年8月に近隣６市町村が合併し現在人口約13.2万人、約680k㎡の県下第二の都市である。

## 八代妙見祭のこれまで



祭礼衣装着付け教室

八代の妙見信仰は、白鳳9年（680年）妙見神が中国から亀蛇に乗って現れ、八代の竹原の津に上陸したことから始まると言われている。その後795年に妙見上宮が創建され、中宮、下宮（現八代神社：旧妙見宮）が順次創建された。八代妙見祭は、確認できる古文書によると、16世紀にはすでに下宮から中宮への神幸行列が行われていた。一時衰退した時期もあったが、1632年、細川忠興（三斎）公が八代城主として着任すると、細川家の家紋と妙見宮の神紋が同じ「九曜紋」「引両紋」であることに縁を感じ、自ら神輿を寄進する等その復興に努め、家老の松井氏が城主となってからも八代地方の総鎮守として明治に至るまで手厚く保護してきた。八代妙見祭の柱をなす神幸行列は、元禄時代に入り、獅子舞・木馬・笠鉾・亀蛇等が裕福な町衆から奉納され始め、次第に現在の形となり、九州南部を代表する都市祭礼となった。



祭礼絵巻展示

しかし、平成に入り、地域経済の疲弊や市民の価値観の多様化が進み、参加者の減少や出し物の傷みが顕著になってきたため、ふるさと創生事業にて神幸行列の復元修復に取り組み、神輿・笠鉾等が熊本県重要民俗文化財に指定された。さらに平成22年度の国重要無形民俗文化財の指定を契機に妙見祭の保存・継承への意識が高まり、もう一度八代市民の団結と誇りを取り戻すことを目指して、八代妙見祭の復興事業に取り組むこととなった。



砥崎河原亀蛇演舞

## 祭礼絵再現を

八代妙見祭が衰退した原因の一つは、特定の地域や団体等祭り関係者だけで祭りを行うものとの認識が強かったためである。そこで、全市民が自分たちの祭り・八代市全体の宝として認識するための取り組みが必要であった。

復興事業を大別すると、神幸行列の復元、後継者育成、地域活性化に分けることができる。

神幸行列復元のキーポイントとなったのは、民俗調査の過程で江戸時代の妙見宮祭礼絵巻が京都にて偶然発見されたことである。この絵巻の買い戻しをするために八代市民から寄附を募ったことで、妙見祭が八代市民の宝として再認識され、また「祭礼絵巻の再現」を行列復元のスローガンに掲げたことで、明快な目標と行列の品位と格式を保たなければいけないという共通認識が出来、参加者の意識向上につながった。さらに、平成19年度から祭礼衣装



八代駅前笠鉾勢ぞろい


ちびっこ妙見祭

着付け講座を実施し、現在では各家庭で祭礼衣装の着付けが出来るようになってきている。

また、笠鉾・獅子・亀蛇等の有形民俗文化財について、修復や衣装整備を行ってきたが、資料的なものが少ないため、保存会や有識者と協議を重ね、平成25年度に保存・継承するための指針となる「八代妙見祭保存管理計画」を策定した。さらに同年には、八代高等職業訓練校の木工技術者が祭屋台等製作修理木工技術者として認定され、協力体制も出来つつあり、地元での保存・継承に向けた体制が整備されてきている。

後継者育成については、平成19年度から役員が各学校に出向いての出前講座や本物の出し物を体験させる「出し物体験教室」を行っている。さらに小中学生も演舞ができるように、子供獅子・子供亀蛇など子供が使える出し物を作成するとともに、練習の成果を発表する機会を設けるため、平成20年度から「ちびっこ妙見祭」を開催している。また、高校生も妙見祭当日に参加者や運営スタッフとして協力しており、園児から高校生までどの世代でも妙見祭に関わりを持つことができるようになり意識向上につながっている。さらに年間を通じて妙見祭と関わりをもつことを目的として、平成25年度に出し物をテーマにした子供向け絵本「ガメさん絵本」を市民公募により作成した後、保育園・幼稚園・医療機関等に配布した。

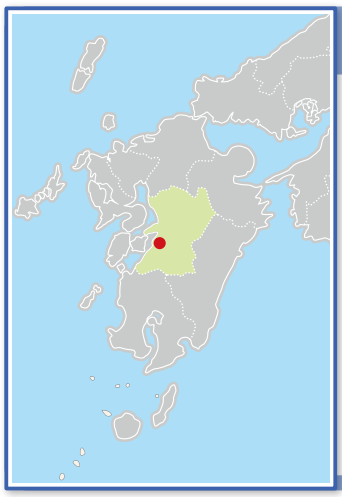
最後に、地域活性化については、平成10年度から妙見祭の前夜祭として「御夜」を開催している。笠鉾を始め、全ての出し物が、本町アーケードに展示され、子供能や伝統芸能の披露、茶会も行われる。御夜を実施することで、市民同士や県南地域との交流を始め、海外との交流も活発になったと考える。


ガメさん絵本

## 八代の伝統を世界へ

八代妙見祭は、他の地域や人との交流を重ねながら、良い面を積極的に取り入れたり、時代の流れに即した変化をしながら形づくられてきた。このような八代の風土を反映した現在の姿が評価され、国指定重要無形民俗文化財となり、現在はユネスコ無形文化遺産登録を目指しているところである。今後は「妙見祭」だけでなく「妙見祭」を軸として八代市内に存在する伝統行事の活性化を図り、八代の伝統文化全体を世界に発信したいと考える。具体的には、妙見祭を始めとする伝統行事を年間を通じて感じられるような仕組みづくりや前夜祭である「御夜」の活用、クルーズ船等外国の観光客へのPRを拡充させ、妙見祭をきっかけとした地域や国内外の人の交流促進に努めることで、伝統を活かした地域活性化が図られ、更なる八代市の発展に寄与できるものと考える。


御夜　獅子舞大集合



**自治体名　熊本県八代市**

- 人　　口：132,735人
- 面　　積：680.6km²
- 事　業　名：文化遺産を活かした地域活性化事業（八代妙見祭）
- 事業開始年度：平成22年度（保存会発足年度）
- 事　業　主　体：八代妙見祭保存振興会

連絡先
八代市企画振興部企画政策課
TEL 0965-33-4104　FAX 0965-32-8944
URL http://www.city.yatsushiro.kumamoto.jp

# 西神野風流杖踊り（にしかみ の ふ りゅうつえおど）

大分県臼杵市

## ～地域の熱い思いで伝統復活!!～

## 市町村の概要

臼杵市は、大分県の東南部に位置する、面積291.08㎢、人口約40,000人の地方都市である。豊後水道に面した臼杵湾では、新鮮で多品種な海産物が水揚げされ、内陸部では広大な畑地が広がり有機農業による「ほんまもん農産物」などの生産が盛んである。また、国宝の臼杵石仏やかつての城下町の名残を色濃く残す町並みを中心に観光の町としても知られているところである。

## 途切れた伝統

西神野風流杖踊り（以下「風流杖踊り」）は、臼杵市野津町西神野地区に古くから伝わる伝統の踊りである。建久4年（1193年）、鎌倉幕府より豊後国守護（ぶんごこくのしゅご）として派遣された大友能直（おおともよしなお）が東神野（ひがしこうの）の熊野権現を参拝した際に、地元民が、代々伝えられている鞍馬流の棒術を披露したのが始まりとされている。太鼓や口説き、笛やカネに合わせて、花棒といわれる両端に紅白の房が付いた長さ2m弱の杖を振ったり回したりしながらの舞い踊りは、古武士の棒術を思わせる勇壮なものである。大分県の無形民俗文化財にも指定されており、同地区にある熊野神社の夏祭りの際に代々奉納されてきたところである。



風流杖踊り　踊り手

このように、長年に渡り継承されてきた風流杖踊りであったが、臼杵市野津町の山間部に位置し、大分県が進める小規模集落対策のモデル地区でもある同地区の過疎化・高齢化が進むにつれ、担い手の数も徐々に減少していった。そして平成15年の奉納を最後に休止せざるを得ない状況となった。



地域の祭りでの演舞

しかし、休止してから数年ののち、「西神野地区の象徴的な祭りである風流杖踊りをどうしても復活させたい」という地区住民の思いが高まり、復活に向けた取り組みが始まった。

## 伝統の復活

風流杖踊りには花棒をもった踊り手や大小の太鼓、笛など約20人が必要であるが、復活させるにあたり、一番の課題はこの人数の確保であった。

中でも、とりわけ踊り手は非常に体力を使うため、高齢化著しい西神野地区の住民だけで踊り手を揃えることは不可能であった。そこで、地区住民だけでなく、現在は地区外に住む地区出身の若者などにも声を掛け、協力を要請したところ、かつて西神野小学校の授業の中で風流杖踊りをしていたことなどもあり、懐かしさと、地区の伝統を復活させたいという思いが重なり、皆一様に快く引き受けてくれた。

こうして集まった20代～70代の約20人が、週1、2回、数カ月間に及ぶ練習を重ねていった。そして、平成21年8月、約50人の地区住民や関係者などが見守る中、風流杖踊りがついに復活し、6年ぶりに熊野神社に奉納されることとなった。

その後も、数十年使い続けてきた衣装の新調を行うなど、風流杖踊りの継承活動に対する地区の気運はま



風流杖踊りの様子

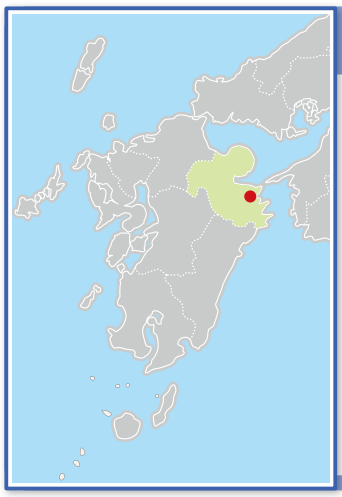
すます高まりをみせ、毎年の熊野神社への奉納のほか、市内外の各種イベントへの参加など精力的な活動を行っているところである。また、6年ぶりの復活では、全部で16種ある楽曲のうち一部しか奉納できなかったが、すべての楽曲復活に向け、継続して練習や研究を行っており、平成26年現在では5種の楽曲を復活させるに至っている。

まとめとなるが、この風流杖踊り復活に向けた取り組みによって、地区住民や地区出身者があらためて西神野地区という地域コミュニティを見直すきっかけができた。また、練習などを通じて多くの人が地区に集まるようになった。そしてそれが、風流杖踊りの復活という形で実を結び、現在も受け継がれていることから、この取り組みが同地区のコミュニティの再生ならびに活性化に果たした役割は非常に大きいといえるであろう。

## そして子供達へ

見事復活を果たした風流杖踊りであるが、担い手の確保については今後も大きな課題である。そのため、今回、復活に携わったメンバーが今後も主力で活動を続けていくことはもちろんのこと、次の時代を担う子供達に杖踊りの技術と復活の原動力となった地域の熱い思いをしっかりと引き継ぎ、後継者を育成していかなければならない。

また、地域の伝統芸能が見直されている昨今、この風流杖踊りについても、積極的に外部に情報発信し、新規担い手の発掘や一層の活性化に努めていきたい。



**自治体名　大分県臼杵市**

- 人　　口：41,300人
- 面　　積：291.08km²
- 事　業　名：西神野風流杖踊り
- 事業開始年度：平成21年度　※西神野風流杖踊りが復活した年
- 事 業 主 体：西神野地域活性化推進協議会

連絡先

臼杵市協働まちづくり推進局
TEL 0972-63-1111（内2302）　FAX 0972-63-7713
URL http://www.city.usuki.oita.jp/

# 創作市民劇公演事業

沖縄県宜野湾市

## ～地域の歴史・文化・人材を活用する沖縄方言劇（うちなーぐち）～

## 市町村の概要

宜野湾市は沖縄本島の中南部に位置し、市の中心部には市面積の25％を占める米軍基地がある。西海岸地域にはビーチや大型商業施設等があり、賑わいを見せている。特産品として農作物で「田いも」が、工芸品で「琉球紅型」がある。



海に面する宜野湾市宇地泊区

## はなしの舞台は地域

### （1）事業の趣旨と実績



地元出演者との打ち合わせ

平成4年度に市政30周年事業の一環で実施したことが始まりで、地域の貴重な歴史、伝承・伝統文化、文化財等を題材に地域の特色を活かした創作市民劇を上演し、公演をとおして自ら住んでいる地域に関心と誇りを持ち、芸術文化の創造、地域おこし及び人材育成につなげていくことを目的とする。沖縄戦前の13集落（旧あざ）毎に自治会単位の輪番による隔年ごとの実施で、1年目に脚本を作成し、2年目に地域住民が主体となって演劇に出演する。平成25年度までに計12回実施した。

### （2）第12回創作市民劇「カミアチネーの知恵（じんぶん）」

平成26年2月に宜野湾市民会館で開催された第12回創作市民劇「カミアチネーの知恵」は、宜野湾市唯一の漁村であった宇地泊（うちどまり）を舞台としている。対象となった自治会は宜野湾市内西海岸の南西部に位置する宇地泊区自治会。宇地泊は、古い時代から半農半漁を営む村で、経済的にも恵まれた村であった。ストーリーは、鮮魚をいれた籠を頭のうえにのせて売り歩く行商「カミアチネー」の主人公ナビーが真志喜（ましき）村の古老から学んだ知恵により、沖縄中を襲う干ばつや隣村間で起こる事件の解決に奮闘する沖縄方言（うちなーぐち）をセリフに取り入れた内容となっている。



稽古の様子

## 公演までの流れと成果

### （1）取り組みの概要

1年目の脚本家選定について、公募により脚本家の登録リストを作成し、また対象地域に脚本が執筆できる人材の調査等を行い、その中から自治会の意見も参考に脚本家を選定する。脚本作成は地域の歴史、伝承・伝統文化、文化財等を題材とすることから、事前に対象区の自治会に協力を呼びかけ、脚本作成に係る地域への調査・聞き取りをサポートしてもらう。

2年目、市民劇公演までの流れは、まず自治会を拠点に郷友会、青年会、婦人会、老人会、子供会、学校等の各種団体を網羅して一致団結し、自治会長を中心に上演運営委員会を設置して運営する。出演者は公募とするが、対象区内からの出演者は自治会長がまとめ、沖縄芝居の重鎮が数名特別出演し指導をする。ま



観客席は超満員



地元の子どもたちも出演します

た、他の自治会にも宣伝、チケット販売等の協力を求める。さらに、対象区へは脚本作成前から、地域からの脚本家や演出家の人材探しをはじめ、市民劇への協力要請と区各種団体の活動及び指導状況について情報交換の機会を設ける。

### (2) 主な実施成果

① 地域の歴史・文化を市民劇の脚本・演出に組み込み、題材として活用することにより、出演者だけでなく地元の観覧者にも歴史・文化を再認識する機会を与え、文化振興に根差したまちづくりと地域アイデンティティーの共有化が推進される。それにより、市民劇を機に、途絶えていた文化・伝統行事等が復活した。例として第8回創作市民劇「じのーん産泉（うぶがー）」の舞台である宜野湾区では、途絶えていた伝統行事の綱引きが「宜野湾大綱引き」として60年ぶりに復活し、現在も4年越しで開催されている。また、第10回創作市民劇「ターバルガマからの叫び」の舞台である野嵩（のだけ）1区では、古くから野嵩にあった伝統芸能の「棒巻（ぼーまち）」が30年ぶりに市民劇の幕開けで披露された。

② 劇のセリフは沖縄方言（うちなーぐち）を用いるので、沖縄方言普及の機会としても活用される。

③ 公演を通じて地元出演者間に地域の繋がりが生まれ、老若男女の世代を超えた絆が育まれている。

④ 平成26年2月に開催された「第12回創作市民劇　カミアチネーの知恵」では、開催地である宜野湾市民会館の定員数1,200席が満席になるほど大盛況に終わり、文化振興の面からも地域を拠点とした文化・芸術活動の推進に貢献している。



第12回創作市民劇
「カミアチネーの知恵」


感動のフィナーレ!!.

## 課題と今後の展望

公演に向けての脚本家、演出家、出演者等の人材確保から日々の稽古を自治会が中心となり進めていく事業運営のため、自治会の負担が大きい。

また、今後は地域の人材育成の観点から、市内の若手脚本家・演出家・出演者を早期に発掘・起用できるように、公演実施年度以前から自治会の他にも、市文化協会等の文化団体と情報共有を密にし、市民劇を文化・芸術関係に優れた人材発掘の場とすることにより、そこで活躍した人材を市内から輩出する仕組みづくりを構築していきたい。



**自治体名　沖縄県宜野湾市**

- 人　　口：95,706人
- 面　　積：19.7km²
- 事　業　名：創作市民劇公演事業
- 事業開始年度：平成4年度
- 事 業 主 体：宜野湾市教育委員会

連絡先

宜野湾市教育委員会生涯学習課
TEL 098-893-4433　FAX 098-892-4434
URL http://www.city.ginowan.okinawa.jp/organization/syougaigakusyuuka/

# 資料編

## 86事例

# 資　料　編　（86事例）

## 北海道


1. 北海道三笠市　三笠北海盆おどり …… 111
2. 北海道根室市　日本の100名城「国指定史跡：根室半島チャシ跡群」の活用 …… 111
3. 北海道利尻町　利尻麒麟獅子舞う会 …… 112


## 東　北


4. 青森県八戸市　中世の田んぼ跡活用による八戸市南郷区島守地区の活性化 …… 112
5. 青森県中泊町　津軽中里駅常設　金多豆蔵人形劇場、シアター …… 113
6. 青森県南部町　甦れ‼伝統野菜～南部太ねぎ復活事業～ …… 113
7. 岩手県北上市　伊達藩最北のまち口内　浮牛城まつり …… 114
8. 岩手県紫波町　赤沢まるごと博物館プロジェクト …… 114
9. 岩手県金ケ崎町　火防祭・囃子屋台 …… 115
10. 岩手県一戸町　フジを活かしたまちづくり …… 115
11. 秋田県秋田市　大正寺おけさまつり …… 116
12. 山形県南陽市　かぼちゃプロジェクト …… 116
13. 山形県鮭川村　WEBサイトによる伝統食文化の継承 …… 117
14. 山形県小国町　萱野峠敷石惚れ掘れ探検隊 …… 117
15. 山形県白鷹町　伝統工芸村「深山工房　登り窯」再建による交流推進プロジェクト …… 118
16. 福島県郡山市　郡山市指定重要無形民俗文化財「柳橋の歌舞伎」 …… 118
17. 福島県只見町　ユネスコエコパーク関連事業
「自然首都・只見」伝承産品ブランド化支援補助事業 …… 119


## 関　東


18. 茨城県土浦市　小町の里整備基本計画 …… 119
19. 茨城県古河市　お休み処坂長 …… 120
20. 茨城県筑西市　小栗判官まつり …… 120
21. 栃木県足利市　足利ひめたま …… 121
22. 栃木県栃木市　とちぎ秋まつり …… 121
23. 埼玉県さいたま市　国指定史跡見沼通船堀閘門開閉実演 …… 122
24. 埼玉県所沢市　重松流祭囃子競技会 …… 122
25. 埼玉県横瀬町　寺坂棚田ホタルかがり火まつり …… 123
26. 千葉県白子町　南日当の獅子舞 …… 123
27. 千葉県鋸南町　内宿区鯨唄愛好会 …… 124
28. 東京都葛飾区　柴又宵まつり …… 124
29. 東京都江戸川区　お江戸投網まつり　～粋なお江戸の船遊び～ …… 125
30. 東京都八王子市　八王子まつり …… 125

31. 東京都調布市　深大寺そばまつり …… 126
32. 東京都小平市　小平グリーンロード灯りまつり …… 126
33. 東京都日野市　日野の祭ばやし …… 127
34. 神奈川県茅ヶ崎市　ちがさき丸ごとふるさと発見博物館企画展 …… 127

## 北陸・甲信越

35. 新潟県三条市　小路の魅力発掘事業 …… 128
36. 新潟県村上市　地域のお宝再発見！ 越後村上 涼風の“お地蔵様めぐり” …… 128
37. 新潟県糸魚川市　バタバタ茶を活かしたまちづくり …… 129
38. 富山県魚津市　たてもん協力隊（たてもんボランティア） …… 129
39. 石川県加賀市　坂網鴨ブランド化事業 …… 130
40. 石川県能美市　加賀押しずしの魅力の伝承・普及 …… 130
41. 石川県津幡町　歴史国道イベント「くりから夢街道ウォーク 加賀vs越中　源平大綱引き合戦」 …… 131
42. 石川県中能登町　（昭和35年 石川県指定無形文化財指定）能登上布振興事業 …… 131
43. 長野県長和町　中山道和田宿の保全活用に関わる活動 …… 132
44. 長野県高森町　吉田の煙火 …… 132
45. 長野県松川村　有明山語りの会 …… 133

## 東　海

46. 岐阜県瑞浪市　中山道維持管理事業，文化財調査保存事業 …… 133
47. 静岡県静岡市　駿府匠宿における伝統工芸品の情報発信 …… 134
48. 静岡県沼津市　大瀬まつり …… 134
49. 静岡県三島市　エコセンター（旧三島測候所）の再生 …… 135
50. 静岡県島田市　愛するあなたへの悪口コンテスト …… 135
51. 静岡県御殿場市　「御殿場みくりやそば」普及促進活動 …… 136
52. 愛知県岡崎市　東海道藤川宿における地域資産を活かした景観まちづくり事業 …… 136
53. 愛知県半田市　伝統的な食文化「串あさり」を活用したまちおこしプロジェクト …… 137
54. 愛知県安城市　安城凧あげ大会 …… 137
55. 愛知県西尾市　塩づくり体験事業 …… 138

## 近　畿

56. 京都府福知山市　丹波の漆かき …… 138
57. 大阪府守口市　守口大根 「なにわの伝統野菜」 …… 139
58. 大阪府富田林市　「浴衣で来てね」七夕じないまちバル …… 139
59. 大阪府寝屋川市　田んぼアート、どろりんピック …… 140
60. 大阪府大東市　野崎まいりクルージング＆ウォーキングツアー …… 140
61. 兵庫県姫路市　地域夢プラン事業 …… 141
62. 兵庫県尼崎市　尼崎地名めぐり …… 141

63. 兵庫県洲本市　洲本城まつり …… 142
64. 兵庫県香美町　紙漉きの復活 …… 142
65. 奈良県河合町　砂かけ祭（御田植祭） …… 143
66. 奈良県野迫川村　「こうやまき」の挿し木 …… 143
67. 和歌山県かつらぎ町　太鼓の音が響くまち　四郷（四郷千両太鼓） …… 144

## 中国・四国

68. 島根県益田市　「中世の食」再現プロジェクト …… 144
69. 島根県益田市　高津やぶさめ …… 145
70. 島根県江津市　江津本町甍街道　ふらり［fula:Re］ …… 145
71. 広島県江田島市　ぐるぐる海友舎プロジェクト …… 146
72. 山口県光市　ふるさとの火まつり「周防柱松」 …… 146
73. 山口県柳井市　伝統織物「柳井縞」の復活 …… 147
74. 愛媛県鬼北町　歴史文化を活用した活力ある地域づくり事業 …… 147

## 九州・沖縄

75. 福岡県北九州市　市制50周年記念
福岡県指定有形民俗文化財「小倉祇園祭のだし（山鉾）」展示 …… 148
76. 福岡県北九州市　火まつり行事 …… 148
77. 福岡県大野城市　大野城市に古くから伝わる伝統料理「ぼっかけ」の普及啓発 …… 149
78. 佐賀県みやき町　蝋しぼり、和ろうそく作り …… 149
79. 熊本県熊本市　「ゑんま祭り」・奇習「すり鉢舞い」の復活による
地域コミュニティの活性化 …… 150
80. 熊本県玉名市　ふれあい仁〇加館事業 …… 150
81. 鹿児島県垂水市　大野棒踊り …… 151
82. 鹿児島県南種子町　宝満神社のお田植え祭り（県指定文化財）で伝承されている古代赤米を
活用した地域活性化 …… 151
83. 鹿児島県喜界町　追い込み漁 …… 152
84. 鹿児島県伊仙町　徳之島地域文化情報発信施設「徳之島なくさみ館」 …… 152
85. 沖縄県浦添市　9月3日（組）踊観光・文化振興事業 …… 153
86. 沖縄県南風原町　津嘉山区「村あしび」・組踊「忠臣身替の巻（一名：八重瀬）」 …… 153

## 北海道三笠市　三笠北海盆おどり

① 毎年、8月13日は子ども盆おどり、14日は、子ども盆おどりとステージショー及び三笠北海盆おどり、15日（メイン）は、ステージショー納涼花火大会、仮装盆踊り、北海盆おどり、その他に仮装コンテストや浴衣美人コンテストも行っている。

② 北海盆唄のルーツは、昭和15年頃、札幌の民謡家「今井篁山（こうざん）」氏が幾春別の炭鉱の盆踊りを訪ねそこで「ベッチョ踊り」といわれるにぎやかな盆踊りに魅了される。これを普及させようと「ベッチョ踊り」の中で歌われていた「ベッチョ節」の歌詞を改め、メロディーも多少編曲してできた「北海炭坑節」が今の「北海盆唄」の原型になったと言われている。平成4年には、北海道民謡連盟最高師範「吉田源鵬（げんぽう）」氏が日本民俗音楽学会で「三笠市の幾春別地区で歌われていた唄が、北海盆唄のルーツであると発表。また、開庁120年の平成13年には市内中心部の中央公園に櫓を建設し、翌年の平成14年を第1回大会として、本年まで12回開催している。北海盆おどりの櫓は、市のシンボル的なものとして、通年で北海盆おどり並びに三笠市のPRに寄与している。また平成13年には、三笠北海盆おどりが「北海道遺産」に選ばれている。

③ 毎年、商工会、建設協会、観光協会、教育委員会により実行委員会組織を立ち上げ、市役所関係及び商工会関係の企業などに協賛金の依頼等や櫓の飾りつけ、のぼりの設置、市外市町村へのチラシ配り、また、毎年札幌市で行われる、大通りビアガーデンのステージによる宣伝を行っている。

④ 三笠市の郷土芸能文化の伝承と振興を図るため、「三笠太鼓」「三笠甚句保存会」「三笠睦（神輿）」「岡山傘踊り保存会」「幌内獅子神楽保存会」に補助金を交付し支援している。

⑤ 伝統文化の保存と継承するにあたって、少子高齢化を反映して、後継者確保が最大の課題と認識している。団体の自主性を確保しながら、行政として伝統的文化や芸能の伝承に対して支援しているが、個人の趣味趣向の違いもあって、非常に難しいが、郷土芸能にふれあえる機会を創出することを目指している。

⑥ 北海盆唄の発祥の地三笠で毎年行われている「北海盆唄全国大会」に民謡協会の協力で新規に十数名入会し、大会に参加している。また、太鼓についても平成24年から市立三笠高校が開校し生徒及び教員が三笠太鼓に入会して北海盆おどりの櫓の上で太鼓を披露している。入りこみ人数が3日間合計で13,000人を超え、市外からの観光客の増加が見込まれる。

⑦ 三笠市の一大イベントとして開催しているが、市外からの交流人口の増加に伴って経済効果があり、まちの活性化と地域振興のため、また三笠市の文化の伝承のためこれからも市民・企業・団体などと連携し、今後、内容についてもより魅力的なものとしていきたい。

◆ 自治体名　北海道三笠市
◆ 人口　9,611人
◆ 面積　302.64km²
◆ 事業開始年度　平成14年
◆ 事業主体　三笠北海盆おどり実行委員会

**連絡先**
三笠市教育委員会社会教育課
TEL 01267-2-3591　FAX 01267-2-6238

## 北海道根室市　日本の100名城「国指定史跡：根室半島チャシ跡群」の活用

① 北海道根室半島にはチャシ跡（アイヌの砦）が集中しており、24か所が昭和58年と同59年に国指定史跡となっている。 平成18年、日本100名城（1番）に選定され、スタンプラリーが平成19年6月から開始されると、全国の城郭マニア等から注目を浴びるようになった。

② チャシは16世紀から18世紀にかけて造営されたもので、道外の戦国時代から江戸時代にあたる。チャシは一般的には「砦」と考えられているが、見張場や聖地、談判の場としても活用されていたと推測される。北海道内には500か所以上のチャシ跡があり、根室半島チャシ跡群は現在でも各チャシ跡の壕は保存状態がよく遺構が確認できる。しかし、チャシ内にどのような建造物が建てられていたか等の詳細は、現在のところ不明である。地元では、教育委員会の管理のもと、24か所のチャシ跡に史跡柱を建て、見学可能な所には説明版を設置してPRしていたが、市民の認知度が低いままの状態が続いていた。そこに日本城郭協会の日本100名城として選定され、観光客が訪れるようになってきたため、急遽、環境整備が進められた。チャシ跡には、他の名城のような石垣も天守閣等の建物も無く、異彩を放った名城となっている。

③ 主要道路からの誘導看板の設置、説明掲示版の更新等の環境整備とともに、平成26年度からは、官民の文化財活用プロジェクト会議を立ち上げ、チャシ跡の保護と観光戦略を協議している。教育委員会では平成26年度、根室市歴史と自然の資料館のサテライト展示により、文化財等の周知につとめる。

④ チャシ跡には、不明な点が多い。このため、観光客をがっかりさせないため、現地ガイドの養成、興味をそそるストーリー性の開発を進め、民間の協力でチャシ跡の空撮画像と動画を展開、さらにイメージキャラクター「チャシ女子」が創作され、多方面での活用が期待されている。

⑤ 急に観光客が訪れるようになったため、市側の対応も遅れている。市民の認知度もまだ低い状況で、市民向けのPRと、観光用のPRを同時に進めることが必要である。とくに駐車場の整備が急務で、安心して見学できるよう対策が求められている。

⑥ 平成25年度には推計で1,000人の観光客がチャシ跡見学のために来ており、今後も、増える見込みである。100か所の名城のなかで、もっとも行きづらいところとしても有名になってきている。

⑦ 24か所のチャシ跡のうち、比較的容易に見学できるのは、ヲンネモトチャシ跡、ノツカマフ1号2号チャシ跡の2か所で、残りは民有地の奥にあるなど見学困難となっている。ひとつでも多くのチャシ跡を見学したいとの要望が強く、根室市内での滞在時間を延ばすためにも、コース設定の見直しが課題となっている。

◆ 自治体名　北海道根室市
◆ 人口　28,315人
◆ 面積　512.72km²
◆ 事業開始年度　平成19年度
◆ 事業主体　根室市

**連絡先**
根室市教育委員会社会教育課文化財担当
TEL 0153-25-3661　FAX 0153-25-3661

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 北海道利尻町　利尻麒麟獅子舞う会

① 明治41年（1908年）に鳥取から利尻島に渡って平成16年にほぼ100年ぶりに復活した麒麟獅子舞を保存・伝承し、故郷鳥取との繋がりを続けながら、利尻島の郷土芸能として活動している。

② 鳥取から利尻島仙法志に渡った人達が心の支えとなる故郷の伝統芸能を明治41年に持ち込み、鳥取の人達だけで舞っていた。それがすぐに途絶え、麒麟獅子は木箱に入って長い眠りに入った。それを利尻町立博物館が確認し調査した。その結果、現在の鳥取市秋里にある荒木三嶋神社の麒麟獅子舞が利尻島に渡ったことが明らかとなった。それによって鳥取市秋里から麒麟獅子舞を復活してほしいとの依頼があり、平成15年に利尻麒麟獅子舞う会を立ちあげ、平成16年にほぼ100年ぶりに復活した。

③ 定期的に例会を開き、舞等の修練を重ねており、毎年6月20日午後6時から、長浜神社（利尻町仙法志字長浜）で奉納舞を行っている。あわせて舞の復活に利尻町が支援していることから、6月20日の午後3時から特別養護老人ホームほのぼの荘で舞っている。

④ 現在、12人で利尻麒麟獅子舞う会を組織している。麒麟獅子舞は猩々・頭・後剣・太鼓・鉦・笛の6部分がある。それらを誰でもできるように、3年から5年を契機として役割を変えている。さらに島内外からの舞いなどの依頼があったときには、可能な限り応じている。

⑤ 舞の復活での鳥取からの来島や鳥取へ行くことなどの事業費の確保が大きな課題であったが、利尻町からの支援や補助メニューの紹介などにより、復活奉納舞が達成できた。

⑥ 麒麟獅子舞を復活してから平成26年度で11年となる。復活奉納舞がテレビや新聞等で大きく取り上げられたことにより、島内はじめ島外での舞いの依頼が続いている。できるだけ依頼に応じることにより、利尻島に麒麟獅子があることが知れ渡り、利尻島のイメージアップに繋がっている。

⑦ 利尻麒麟獅子舞を継続するために現在は麒麟獅子が残っていた利尻町仙法志字長浜に縁のある人達だけで舞う会を形成している。これからも継続していくために舞う会の参加者を仙法志地域、利尻町地域に拡大していかなければならない。

◆ 自治体名　北海道利尻町
◆ 人口　2,260人
◆ 面積　76.49km²
◆ 事業開始年度　平成15年度
◆ 事業主体　利尻麒麟獅子舞う会

**連絡先**
利尻町総務課企画振興係
TEL 0163-84-2345㈹　内線223　FAX 0163-84-3553

## 青森県八戸市　中世の田んぼ跡活用による八戸市南郷区島守地区の活性化

① 八戸市南郷区島守地区において、鎌倉時代後期のものとみられる「中世田んぼ跡」が発見されたことを契機に、この「中世田んぼ跡」の保存、活用を通じた地域の活性化に貢献するための民間ボランティア団体が発足し、活動を行っている。

② 島守地区の「中世の田んぼ跡」は、建武2年（1334年）に書かれた根城南部家文書に記載されている当時の水田のあった地名を、平成24年10月に東北芸術工科大学の研究グループが現地調査し、中世に水田がつくられていた条件と現在の場所の条件が一致することが確認され一般に知られることとなったもので、中世の水田跡が確認された事例としては国内で3例目となっている。なお、この「中世の田んぼ跡」は、当時から現在まで水田として利用され続けてきたものと思われている。

③ 取り組みの主体である「すまもり中世の田んぼクラブ」は、地元の有志（15人）を中心に平成26年1月に設立され、トップを「村長」、活動方針は「寄り合い」で決定するなど、中世の村をイメージしたユニークな体制をとっている。

④ 具体の活動については、交流人口の拡大につながるイベントを実施するもので、島守地区の中世の田んぼを借上げ、平成26年5月25日に手作業による米作りを行う「第1回すまもり村　田植えまつり」を開催した。秋には稲刈りを行うなど、田んぼでの作業イベントを実施して広く参加者を募り、地区住民との交流を進める予定である。

⑤ 中世の田んぼ付近は目立った施設もなく、中世の田んぼを表示する案内板を設置しているわけでもないため、初めて来る人には場所がわかりにくい状況である。今後、案内板等の設置や市内の施設にチラシを配布するなどの方法で場所の周知に努めたい。

⑥ 上記「第1回すまもり村　田植えまつり」には地区内外から約70人の参加者があり、広く交流が図られた。また、「米作り700年！」を前面に押し出し地域のイメージアップを図ることで、地区を見る目に変化が起きることなどが期待される。

⑦ 国内で同様の先行事例が2例あり、2例とも文化財保護法の「重要文化的景観」の選定を受けている。
文化庁では「文化的景観」の調査事業を補助事業として行っているので、この事業を活用して「重要文化的景観」の選定を視野に入れた事業展開を図りたい。

◆ 自治体名　青森県八戸市
◆ 人口　237,981人
◆ 面積　305.4km²
◆ 事業開始年度　平成25年度
◆ 事業主体　すまもり中世の田んぼクラブ

**連絡先**
八戸市南郷区役所地域振興課
TEL 0178-82-2113　FAX 0178-82-3517

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 青森県中泊町　津軽中里駅常設　金多豆蔵人形劇場、シアター

① 津軽地方で約100年にわたり相伝されてきた「金多豆蔵人形芝居」。主に津軽地域を巡業する形で公演されていたが、平成21年に中泊町無形民俗文化財に指定され、津軽中里駅に劇場が常設された。また、平成23年にはシアター上映スペースが完成。町民や観光客に、より親しみやすい形となって町のPRに貢献している。

② つがる市（旧木造町）の野呂粕次郎によって始められた人形劇で、明治40年から上演されている。現在の一座主宰者は3代目である。すべて津軽弁で上演される芝居は津軽民謡や風俗、世相や風刺を取り入れており、テレビやラジオが無かった時代から、長きにわたり津軽の人々に愛されてきた。特に酒呑みで失敗ばかりする金多と、おっちょこちょいだが情にもろい豆蔵によるかけあい漫才は、人々の笑いを誘い、人気がある。「金多豆蔵」という名前の由来は、人は「豆」々しく働けば、お「金」が「多」く入り「蔵」が立つ、ということからきている。

③ 劇場で月に1度行われる定例公演や、町内外での出張公演等、年に数十回上演している。シアター上映については、毎月第1・3日曜と年末年始以外毎日行っている。人形一座主宰者の木村巌氏は中泊町イメージアップ大使に任命されており、芝居を通じて町のPR活動をしている。民間鉄道である津軽鉄道のストーブ列車を利用した旅行企画や、町の観光協会が主催するツアー行程に劇場での観劇が組み込まれることもあり、平成25年、26年には町民や観光客を対象に人形作り・芝居体験を実施した。

④ 夏祭りや秋の町民文化祭、津軽中里駅でのイベント等、幅広い世代が集まることが想定される場面では無料公演を行っている。平成25年、26年には町民や観光客を対象として、人形作りと芝居体験（計7回程度のワークショップ）を実施し、津軽に根差す人形劇の楽しさを伝える試みを行った。

⑤ 子供や若者世代の人形劇に対する関心が低い。夏祭りや町民文化祭等、幅広い世代が集まるイベントにおいて、人形劇を無料で上演し、親子連れや孫連れに観てもらうことを狙いとしている。

⑥ 青森県内では「中泊の人形劇」として町の知名度向上に役立っている。年配の町民には愛着を持っている者も多く、根強い人気がある。人形劇が行程に組み込まれた観光ツアーはリピーターが多く、中泊を経由するコースでは芝居鑑賞が定番コンテンツとなっている。

⑦ すべて津軽弁で上演される「青森県中泊町の人形劇」として、県内に留まらず全国規模で知られること。芝居への興味をきっかけとして、他の中泊町の魅力にも触れてもらい、交流人口を増やしていくこと。

◆ 自治体名　青森県中泊町
◆ 人口　12,316人
◆ 面積　216.34km²
◆ 事業開始年度　平成21年度
◆ 事業主体　金多豆蔵人形一座

**連絡先**
中泊町総務課企画係
TEL 0173-57-2111（内線162）　FAX 0173-57-3849

## 青森県南部町　甦れ!!伝統野菜～南部太ねぎ復活事業～

① 絶滅寸前となっていた地域の伝統野菜である「南部太ネギ」を、地元の農業高校の生徒達が復活させる取り組みを行い、それに共感した若手農家が、「南部太ネギ」を新たな地域の特産品としてブランド化を目指した活動。

② 地元の伝統野菜の研究をしていた名久井農業高校が、絶滅寸前の在来種「南部太ネギ」の存在を知り、この伝統野菜の復活を目指して取り組んだことがきっかけである。

③「南部太ネギ」は非常に甘みのあるネギであるが、栽培管理が難しいことから、生産者が一人まで減り、絶滅寸前になっていた伝統野菜である。
このネギの栽培について、名久井農業高校とNPO法人青森なんぶの達者村が、全国の栽培方法を調査して新たな栽培方法を考案したほか、食品成分分析を行い、成分的にも優れた品種であることの確認も行っている。

④ 名久井農業高校の生徒たちが取り組んだ栽培方法の検討や街頭PRなどにより、このネギの可能性を感じた町内の若手農家が、この取り組みに賛同して本格的な生産に取り組んでいるほか、農家を支援しているNPO法人では、この伝統野菜の生産組織づくりや新たな販売方法などについて検討、PRを行っている。

⑤「南部太ネギ」は、昭和39年に品種登録されており、登録した生産者へ連絡したところ、既に栽培されておらず、生産している方を人づてに探し回り、やっと一人の生産者を見つけることができた。種を分けてもらい、栽培を始めたものの、このネギは、葉が軟らかく分岐点が一般のネギより広いため、土が入りやすく生長点が隠れやすいという性質があった。そこで、生徒達は全国の栽培方法を調査し、「たて穴法」という栽培方法を考案した。
現在は、この取り組みに賛同した農家とともに、更なる生産の効率化と伝統野菜の復活を活かした新たな販売方法などについて取り組んでいる。

⑥ 地元の農業高校と若手農家の取り組みによる伝統野菜の復活は、町や地域の飲食店なども巻き込み、さまざまなイベントの開催など、広がりを見せている。
また、住んでいる地域の名前がついている伝統野菜であることから、野菜に対する思い、地域に対する思いが強くなり、生産農家のモチベーションの向上や、住民が地域の食文化に対して誇りを持つことができるなど、地域全体の活性化にも役立っている。

⑦「南部太ネギ」の生産について復活したものの、生産・流通に関してはまだまだ不安定な面が多いため、関係者による検討会、講習会を開催している。
名久井農業高校と生産農家、関係機関が連携して、安定的な生産に向けた生産基盤の強化への取り組みを進めるとともに、イベントでの試食などのPR活動も行っている。
また、地域野菜としてブランド化を図り、地域の活性化にもつながるように展開していきたいと考えている。

◆ 自治体名　青森県南部町
◆ 人口　19,753人
◆ 面積　153.15km²
◆ 事業開始年度　平成24年度
◆ 事業主体　県立名久井農業高等学校 伝統野菜班、特定非営利活動法人青森なんぶの達者村

**連絡先**
南部町企画財政課
TEL 0178-84-2112（内線132）　FAX 0178-84-4404

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 岩手県北上市　伊達藩最北のまち口内　浮牛城まつり

① 「浮牛城まつり」は、北上市口内町にある伊達藩最北の要塞「浮牛城址」と大名行列、また町内に多数継承されている民俗芸能を後世に伝え守っていくことで、地域文化に誇りを持ち、地域の活力を醸成することを目的として平成19年から始まった一大イベントである。

② 口内町自治協議会が実施した町の活性化に関する住民アンケートの中で、「たくさんの人が訪れるようなイベントがない」という回答が多かった。そこで、同協議会が主催となり、大名行列の復活に向けた装束・道具の準備や、長い間手つかずで荒れていた浮牛城址の整備を始め、平成19年に歴史資源を活かしたイベントとして第1回浮牛城まつりを開催するに至った。

③ 毎年8月16日に行われるまつりでは、浮牛城主が家臣を従えて口内に入る様子を再現した大名行列のほか、民俗芸能公演、灯篭流しや供養花火が行われている。さらに、より一層楽しめる内容にするべく、大名行列への町外出身者や女性の参加枠の設置、芸能団体のコラボ公演、マスコットキャラクターの制作など毎年新しい試みにも挑戦している。

④ 浮牛城まつりは、様々な伝統が継承されないと成り立たない。例えば大名行列では、隊列を崩さないように歩いたり所作を覚えるため、7月頃から練習を始める。さらに、装束の着付けでは、美しく早く着せられるよう年々研究を重ね、着付けのマニュアル作りにも取り組んでいる。役者が履く「わらじ」も町内の年長者から作り方を学び、外注することなく揃えられた。
また、民俗芸能公演に向けて、町内各芸能団体が一年を通して稽古に励んでいるほか、地域の保育園、小学校にも伝承活動を行っている。

⑤ 第5回まつりまでは自治協議会が主催だったが、内容や担い手の気持ちにマンネリ化が見られてきたため、第6回より自治協から独立した新たな組織として実行委員会を立ち上げた。10名ほどで構成されたこの委員会が現在企画・運営を恒常的に行っている。
このことにより、多くの良い効果が生まれたが、一方で実行委員や、事務局への負担が大きく、地域住民の協力を得にくい状況は変わらない。

⑥ まつりを行うことにより、伝統や文化を単に継承するだけでなく、地域の魅力を町内外に広く発信することができた。また、まつりの中では町外に住む孫や、職場の仲間と一緒に大名行列に参加したり、同級生が集い懇親を深めたりと世代間交流や思い出作りの場にもなっている。

⑦ 今後の継続のためには、資金と担い手をどのように確保していくのかが重要である。資金は現在町民や企業による寄付金が中心となっており町民の負担も大きい。今後は関連グッズの販売を促進し自主資金を多く生み出せるような取り組みが必要である。
また、今は出演者やスタッフがまつりを楽しめる余裕がないため、より多くの町民をまきこみ、それぞれが小さな役割を担えるようなアイディアや取り組みが必要である。

◆ 自治体名　岩手県北上市
◆ 人口　93,594人
◆ 面積　437.55km²
◆ 事業開始年度　平成19年度
◆ 事業主体　浮牛城まつり実行委員会

**連絡先**
北上市まちづくり部地域づくり課
TEL 0197-72-8299　FAX 0197-63-3121

## 岩手県紫波町　赤沢まるごと博物館プロジェクト

① 町は、平成18年度から地区創造会議事業に取り組み、地区の住民が自ら地域の未来を考え、その実現に向けて取り組むための支援を行ってきた。赤沢地区では、地区創造会議をより充実した地域独自の活動とするため、活動名を「赤沢まるごと博物館プロジェクト」とし、平成24年7月から活動を開始した。

② 赤沢地区の伝統的な郷土芸能として、地域の神社に奉納する「赤沢神楽」、鹿の扮装をして踊る「紫野鹿踊（ししおどり）」、金山の石掘職人が始めたといわれる「船久保さんさ」、豊作祈願の「山屋田植踊」「遠山田植踊」の5つがある。いずれも地域の芸能保存団体により伝承されていて、中でも「山屋田植踊」は昭和56年に国の重要無形民俗文化財に指定された。そのほかの郷土芸能も、昭和50年から昭和54年までの間に紫波町の無形民俗文化財に指定されている。

③ 5つの郷土芸能保存団体それぞれの活動は活発に行われていたが、発表の場が限られていたことから、地域の中でも郷土芸能を見たことがない住民が増えていた。また、前述の「赤沢まるごと博物館プロジェクト」の中で、地域づくりのための活動として、具体的に何を行うかが課題となっていた。そこで地域住民による話し合いの結果、全ての郷土芸能を一度に見られる場として「赤沢まるごとまつり」を企画した。

④ 赤沢地区の中心にある公民館を会場とし、全ての芸能保存団体に発表を依頼した。団体によって発表に必要な道具や演舞の時間などが違うため、事前の打合せを綿密に行った。「船久保さんさ」については、小学校、児童館でも練習していることから、子供による発表の場も用意した。

⑤ 多くの人に関心をもってもらうことが課題となった。広報紙、ホームページ、ポスターなどにより、まつりの開催を広く町内外に周知した。また、郷土芸能だけではなく、屋台、写真コンテスト、ゆるキャラ募集など、幅広い層が楽しむことができるよう工夫した。

⑥ 地域住民だけではなく、地域外・紫波町外からの来場者もあり、郷土芸能を多くの人に見てもらうことができた。また、芸能保存団体にとっても、それまでの活動の成果を発表したことが、今後のやりがいにつながった。

⑦ 平成25年度、26年度については、地域づくりを専門とするNPO法人や岩手大学学生の助力が得られ、かつ農林水産省の交付金が採択されたことで、大規模な活動を実施することができたが、今後は地域の力を主とした、自立した取り組みとして定着させていくことが必要となる。

◆ 自治体名　岩手県紫波町
◆ 人口　33,830人
◆ 面積　239.03km²
◆ 事業開始年度　平成24年度
◆ 事業主体　地域住民、紫波町、NPO法人岩手地域づくり支援センター、岩手大学学生

**連絡先**
紫波町経営支援部企画課協働支援室
TEL 019-672-2111（内線3241）　FAX 019-672-2311

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 岩手県金ケ崎町　火防祭・囃子屋台

① 火防祭で運行されていた囃子屋台が、平成11年の運行を最後に、高齢化や少子化を理由に運行を断念。次世代への歴史と文化の継承、地域の活性化を願って街地区自治会連合会が、生涯教育の町宣言30周年に合わせて、地区の記念事業として復活運行を計画した。

② 金ケ崎火防祭は昭和3年（1928年）に始まり、4年後に奥州市水沢区の日高火防祭（ひたかひぶせまつり）の様式を取り入れ囃子屋台の運行を始めた。当時は5自治会が運行していたが、少子化や担い手の高齢化などで年々屋台数が減少。平成11年（1999年）の町下自治会の運行を最後に途絶えていた。

③ 町の「生涯教育の町」宣言30周年記念事業として企画したが、10年間運行が途絶えたことにより、運行のノウハウがわかる者がおらず、町下地区の長老に指導を受けながらの企画であった。また、実行委員会を立ち上げしても、運行は翌年4月であり、その時には自治会長のほとんどが代わるという状態であったので熱意が薄く、スムーズな対応をすることができなかった。しかし、各自治会が一丸となって取り組んだことで、成功裏に終了でき、地区民から感謝の言葉と継続実施してほしいとの声が多く、連合会で隔年運行することに決定した。

④ 隔年運行であるが囃子屋台を運行することにより、地域の伝統文化を改めて見つめ直し、次世代への歴史と文化の継承と地域の活性化を図ることを目的として取り組んでいる。

⑤ 少子化に加え、衣装代等負担が高額で、特に三味線の搭乗希望者が少なく搭乗者の決定に難航している。

⑥ 平成26年の運行も晴天に恵まれ、桜も満開と好条件の下で伝統行事がよみがえり、懐かしさに心躍る一日となり、地域は華やかな雰囲気に包まれた。
事業実施にあたり、役割分担を各自治会の協力により、街地区全体の事業として取り組むことが出来た。その結果街地区の結束が図られた。

⑦ 平成26年までの3回は街地区自治会連合会が、囃子屋台実行委員会を立ち上げ実施したが、将来は囃子屋台保存会のような形態で実施するようにしたい。
運行が連鎖反応となって、いろいろな町おこしなどに広がることを期待したが、それまでには至っていない。

◆ 自 治 体 名　岩手県金ケ崎町
◆ 人　　口　15,964人
◆ 面　　積　179.77km²
◆ 事業開始年度　平成20年度
◆ 事 業 主 体　火防祭・囃子屋台実行委員会

**連絡先**
金ケ崎町街地区生涯教育センター
TEL 0197-42-3608　FAX 0197-42-3608

## 岩手県一戸町　フジを活かしたまちづくり

① 一戸町小鳥谷地域には、国指定天然記念物の「藤島のフジ」がある。「藤島のフジ」は樹勢が衰えていたが、樹勢の回復と併せて地域にフジの植樹を広めたり、フジまつりを行うなど、フジを活かしたまちづくりに取り組んでいる。

②「藤島のフジ」は日本最大のフジとして昭和13年に国の天然記念物に指定された。その後、台風の影響や主幹や根元の腐朽、老木であることから虫害が発生したり、自らが作り出す陰により日光が行き渡らないなどで樹勢が大変衰えるという状況となった。そこで、平成14年に地域の宝である「藤島のフジ」の樹勢を回復するために地域住民が、管理を行う教育委員会とともに取り組みを始めたものである。

③ フジの管理で実績を持つ塚本こなみ氏に指導を受けながら、管理方法の指導や講演を行った。その後、平成19年には地域の努力が実り、見事な花を咲かせた。

④ 地域住民は小鳥谷地域振興会を組織して取り組みを進めた。会では、「藤島のフジ」の樹勢回復を図る一方でフジを地域に普及させたり、機運を高めるためにフジが満開の時期に「藤島のフジまつり」を企画してPRを行っている。また、小鳥谷地域振興会だけでなく、小鳥谷婦人会や小鳥谷小学校児童など地域の関係団体も環境整備に加わり、フジを活用したまちづくりの輪が広がった。また、「藤島のフジまつり」では夜間のライトアップの取り組みや保育所園児や老人クラブなどのまつりへの参加などにより世代を超えたつながりを地域にあらためて築くことができた。

⑤「藤島のフジ」は老木のため、樹勢の回復が大変難しく、当初は手探り状態で作業を行った。しかし、指導する塚本こなみ氏が手掛ける栃木県のあしかがフラワーパークを視察したり、文化庁の現地指導を受けるなど意欲的に活動し、「藤島のフジ」はある程度の樹勢を回復するまでに至った。

⑥ しばらくの間、樹勢が衰えていた「藤島のフジ」だったが、地域全体でフジの樹勢回復やフジを活かした地域活性化に取り組むことで、地域の学校の校章や校歌にも歌われるほど大切に扱われてきたフジの価値に改めて気づくことができた。また、小鳥谷地域振興会はフジを活かしたまちづくりに続き、平成18年には小鳥谷バイパスが開通したことを契機に40年ぶりに小鳥谷まつりでの山車運行を復活させ、さらなる地域活性化に取り組んでいる。

⑦ 少子高齢化が進む中で取り組みの主体を次世代へ継承し、さらに活性化させていくことが今後の課題と考えられる。

◆ 自 治 体 名　岩手県一戸町
◆ 人　　口　13,839人
◆ 面　　積　300.1km²
◆ 事業開始年度　平成14年度
◆ 事 業 主 体　小鳥谷地域振興会

**連絡先**
一戸町総務部まちづくり課
TEL 0195-33-2111　FAX 0195-33-3770

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 秋田県秋田市　大正寺おけさまつり

① 昭和初期まで歌われていた民謡の復元による地域の活性化につながる郷づくりと、全国に伝播された民謡であることを知り、そのルーツ探しとともに全国の仲間づくりを進めながら、民謡文化の保存継承と地域の活性化を図っている。

② 昭和59年に地域の若者たちの会合の席で「大正寺おけさ」という民謡が、全国民謡集に掲載されていたという話題がきっかけで、地元の教頭先生から「この民謡は、全国とつながりのある貴重な民謡だ」との話を聞き、おけさ復活のため、三味線名人位の浅野梅若師匠に依頼し、歌と伴奏、踊の創作を依頼し、昭和60年8月に「大正寺おけさの郷夏祭り・盆踊り」を開催した。

③ 平成に入り、おけさのルーツ探しなどを進め、「長崎県平戸市の田助ハイヤ節」「熊本県の牛深ハイヤ節」「新潟県佐渡の小木おけさ」などの全国でハイヤ系民謡とされる保存団体との交流を進めてきた。平成11年には、全国ハイヤサミットin雄和を開催し、全国から多くの保存団体を招き、全国との絆を深める機会を得た。また、長崎県平戸市では、商店街で踊流しを行っていたことをヒントに、大正寺おけさ総踊りを新波商店街で開催することとした。

④ 民謡「大正寺おけさ」は、地元の民謡家が唄った曲と浅野梅若師匠がアレンジした曲と2曲が現在も存在している。前段の曲の歌・伴奏は、保存会が継承し、地元の小学校に伝承活動を行っている。また、踊りの普及活動は、大正寺おけさ祭実行委員会員の踊りチームが、練習会や要請により相手方の練習会場に出向いて指導している。

⑤ 総踊りを継続するため、地元の保育所や小学校、中学校に総踊り参加をお願いしているが、地元の地域婦人会など高齢化などにより参加人数が減少傾向にある。そのため、市の広報やホームページなどで参加者募集を行っている。

⑥ 今年30年目を迎えるが、「大正寺おけさまつり」を地域住民が地域の宝として支援してきたことが、継続につながり、県内や全国にも知られるようになり、地域や実行委員会の活性化につながっている。また、県内のイベントへの出演依頼も増えており「大正寺おけさ」の認知度が高まっている。

⑦ 有志で進めている実行委員会も、徐々に高齢化が進む傾向にあり、後継者育成が課題となっている。今年の30回を契機に若い世代に引き継ぐため、若い世代の担い手を増やすための検討と組織改革が必要となっている。

◆ 自治体名　秋田県秋田市
◆ 人口　318,186人
◆ 面積　905.67km²
◆ 事業開始年度　昭和60年度
◆ 事業主体　大正寺おけさ祭実行委員会

**連絡先**
秋田市　市民生活部　雄和市民サービスセンター　産業建設担当
TEL 018-886-5545　FAX 018-886-2154
URL http://daishoujiokesa.ec-net.jp/

## 山形県南陽市　かぼちゃプロジェクト

① 地元の若者が、以前、地区内で栽培されていたかぼちゃ在来種『土平かぼちゃ』のルーツを探るとともに、かぼちゃを活用した様々な取り組みを通して、地域と農業の活性化を目指した取り組み。かぼちゃへのこだわりと農商工連携の取り組みが、地域と若い世代をつなぎ、地元と農業のPRに大きな効果を生んでいる。

② 南陽市梨郷地区は、大きく4つの地域に分かれ、どの地域でも作物に適した肥沃な土地柄は、古くからの野菜の産地として農業が盛んに行われてきた。司馬遼太郎の『街道をゆく』でも紹介されるほどで、土平（どだいら）かぼちゃは、かつてこの地の「土平」地域で盛んに栽培されていたことから名づけられたものだが、現在では栽培されていない。

③ 活動当初は、かぼちゃをカーリングのストーンにみたてたかぼちゃ雪上カーリング大会、輪投げやボーリングなどかぼちゃを用いた様々なレクリエーション種目を集めたかぼリンピック、地元シンガー作曲・市民公募作詞によるかぼちゃソング制作、地元の豆腐店の協力を得て開発したかぼちゃドーナツなど、「土平かぼちゃ」をルーツにかぼちゃにこだわる活動に取り組むかぼちゃプロジェクトとマスコミにも取り上げられた。その後、地元に目を向けた活動へと重心を移し、地域の小学生や親子とのかぼちゃ栽培、収穫したかぼちゃの地元朝市出品など、地元に根差し関わりを重視した活動を展開。現在は、地元児童施設と連携し、かぼちゃの栽培から加工・販売、文化祭やハロウィン・料理教室など各種イベントと世代間交流を絡めた通年型の体験事業を実施している。

④ 子供達とのかぼちゃ栽培を軸にした通年体験活動は、地元の青年が古くからの生活文化である農業と作物への理解を直下の世代に対して伝える食農文化伝承の取り組みであると同時に、近所の若い兄ちゃん達が、地元に残り活き活きと働き生きる姿を子供達に見せることで、子供達に地元で育まれる豊かな人間関係とつながりの喜びを実感させる後継者育成の取り組みである。

⑤ 活動の中心である20代の独身者は、当初は地域との連携の仕方や子供達との活動に苦手意識があり、周囲の理解が得られず取り組みに苦心したが、頻繁に足を運び関係を築きながら顔を覚えてもらうことで、共感を得てきた。

⑥ この取り組みにより、地域の子供達と20代の青年という次代を担う若い世代同士の縦のつながりが、地域の伝統と生活文化の共同体験を通して新しく生まれた。若い世代が地域とつながることで、地域の絆とコミュニティ拡大につながっている。

⑦ 今後は、地区内の連携を進め、年間の活動プログラムを団体等と共有化しさらには新しいプログラムの共同開発を行っていく。プロジェクトと地域の双方のノウハウを持ち寄り、プロジェクト単独の取り組みから地域一体となった「かぼちゃプロジェクト」を展開していきたい。

◆ 自治体名　山形県南陽市
◆ 人口　33,181人
◆ 面積　160.7km²
◆ 事業開始年度　平成20年度
◆ 事業主体　かぼちゃプロジェクト

**連絡先**
南陽市教育委員会社会教育課
TEL 0238-50-1140　FAX 0238-50-1139

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 山形県鮭川村　WEBサイトによる伝統食文化の継承

① 鮭川村は、自然の恵みをうけて育った「食材」の宝庫であり、村オンリーワンの郷土料理と食文化は有形無形の財産であり村民の健康の源である。WEBサイトの開設により、村の郷土料理と食文化を広く発信する事で、地域資源の活用と地域の活性化になっている。

② 昭和54年に設立された鮭川村食生活改善推進協議会は、地産地消をコンセプトに食文化の伝承に取り組み、大きな視点から「食」を考え、村づくりに取り組んでいる。山・川・里の豊富な食材と、先代から受け継いできた食文化は、オンリーワンの財産である。その伝承と発信は地域活性化の重点として位置づけられ、平成9年に食文化の本を発行し、時代の変遷にあわせ平成25年度よりWEBサイトでの伝承活動に取り組んだ。

③ 郷土料理を紹介する出版物、「伝えたい残したいふるさとの味さけがわ」をこれまでに3,400部発行しすでに完売の状況である。
そこで平成25年にWEBサイトを作成し、本の情報を加筆修正した上で、約140品目のレシピを公開している。更に動画撮影を行うことで、郷土料理の作り方や文化的背景についても紹介している。

④ 地域の食文化について会員を通じて情報を収集するとともに、講習会等を実施して普及・伝承に取り組んでいる。子供達を対象とした料理教室の開催や、伝統食文化の現代的アレンジの研究・普及を図るなど積極的に継承に取り組んでいる。この度作成したWEBサイトでは動画での説明が加わり、次世代への伝承が確実なものになっている。

⑤ 伝統食文化は時代の変遷とともに途絶えつつある。食材や道具が手に入らない現状も見受けられる中、会員の創意と工夫により手軽にできる手段を紹介している。動画を加えたサイトは、郷土料理に関心の薄い若い世代にも受け入れられるものである。

⑥ 村内外から100人/日ほどがこのサイトを閲覧しており、通算では36,000人（延）にのぼる。閲覧者の中には鮭川村の名前を知らなかった人も多い。こういった取り組みは、将来の交流に向けての大きな一歩であり、閲覧者の増加を通じて地域活性化につながっていくであろうと考えられる。

⑦本村は、農産物の6次産業化、米の消費拡大、地産地消の推進、また村民一人ひとりの健康寿命延伸を目標とした健康づくりが行われている。鮭川村食生活改善推進協議会は、村内に隈なく広がるネットワークを持ち、「地域に根ざした食育活動をすすめよう」をスローガンに掲げて、村に伝わる食文化や郷土料理を伝承し、地域の「食」を見直す活動を実践している。こうした活動は住民の意識向上につながっており、今後ますますの発展が期待される。そして、県内でも先駆けて取り組んだWEBサイトの活用は、未知の可能性を持っており、今後の事業展開により、村が目指す活力ある豊かな村づくりの一助を担うものと多大な期待を寄せている。

◆ 自治体名　山形県鮭川村
◆ 人口　4,658人
◆ 面積　122.3km²
◆ 事業開始年度　平成25年度
◆ 事業主体　鮭川村食生活改善推進協議会

**連絡先**
鮭川村総務課
TEL 0233-55-2111　FAX 0233-55-3269

## 山形県小国町　萱野峠敷石惚れ掘れ探検隊

① 越後米沢街道・十三峠の一つである「萱野峠」は、大永元年（1521年）に街道が開削されて以来、敷石が整備され物資輸送に利用されたが、明治17年以降、約130年間放置され敷石も埋没していた。しかし、敷石を掘り起こすこと自体をイベント化し、現在まで11回実施され多くの観光客を誘致している。

② 越後米沢街道・十三峠は、大永元年に伊達稙宗（伊達政宗の曾祖父）が大里峠を開削したのが始まりである。萱野峠は同時期に整備された街道の一つであり、米沢伊達氏と、越後上杉氏が姻戚関係だったことから、軍事・経済両面で街道の整備に力を注いでいたと考えられる。伊達政宗が小田原参陣の際に通ったほか、明治時代のイギリス人旅行家イザベラ・バードも通った街道である。

③ 毎年7～10月頃に「萱野峠敷石惚れ掘れ探検隊」を実施している。1回当たり40～70人が参加し、総延長900m程度の敷石を掘り出した。大人数で一気に敷石を掘り出すのではなく、少人数で少しずつ掘り出すことにより、「眠っていた敷石を掘り当てた感動」と「歴史を遡っているかのような感動」をより多くの参加者が長く楽しめるよう取り組んでいる。

④ 当該地区の小・中学校は廃校になったが、地区の若者等が中心となって、廃校活用や地域の自然や文化、歴史を活かしたグリーンツーリズムを推進しようと組織した「玉川がっこう倶楽部」が積極的に参加している。また、町内小・中学校の親子行事やスポーツ少年団活動においても積極的な参加が見られており、次世代へつなげていこうと工夫している。

⑤ 地域の協力者が高齢化していることから、当該地区で地域づくりの実習等を行っている大学生に作業等を手伝ってもらっている。

⑥ これまでの7年間で11回実施し、延べ約600人が「萱野峠敷石惚れ掘れ探検隊」に参加している。その参加者へ地元の食材（山菜や雑穀、キノコ等）を提供したことがきっかけで地元ならではの特産品開発や研究等に波及し、新たな食材が生まれるなど活性化が図られている。さらには、参加者が新潟県や東北各県に及ぶため、前泊、後泊等の宿泊施設の利用などにより、地元経済の活性化にも寄与しているイベントとなっている。

⑦ リピーターが多く参加しているが、新たな参加者を、小国町に関わっている多くの大学生や緑のふるさと協力隊等を通じて確保していきたい。また、現在、大学生は当日だけの手伝い・参加等であるが、今後は実行委員会にも参画してもらい地域の人たちとの交流・連携・協働のきっかけをつくっていきたいと考えている。

◆ 自治体名　山形県小国町
◆ 人口　8,421人
◆ 面積　737.55km²
◆ 事業開始年度　平成19年度
◆ 事業主体　萱野峠敷石惚れ掘れ探検隊実行委員会

**連絡先**
小国町総務企画課
TEL 0238-62-2264　FAX 0238-62-5464

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 山形県白鷹町　伝統工芸村「深山工房　登り窯」再建による交流推進プロジェクト

① 平成23年3月11日の東日本大震災により、窯に亀裂が入り崩落。再建に向け耐火煉瓦の再利用を前提に地区民が手作業により解体し保存した。地区住民や町内外のボランティアやサポーターを募集し、窯再建ワークショップを開催している。

② 深山焼は窯跡だけが見つかっていたものの、古文書や伝承にまったく記録が見られず、幻の窯といわれていた。深山焼に強くひきつけられた地元の教師梅村氏は、出土した陶片を手がかりに土探し、土づくりからはじめ、昭和58年にようやく窯を復元した。その後、平成14年、周辺施設と一体整備を行うため、町が譲り受け、平成19年度からは深山区が指定管理者として管理運営している。平成23年の東日本大震災により窯が崩落し、ボランティアの力を借り再建に向け活動している。

③ 窯再建の前段階として、耐火煉瓦を再利用するためには煉瓦に焼付いた釉薬を剥離しないと利用できないため、より多くの人に関わってもらいながら、窯再建準備ワークショップを行い、作業者をサポーターとして育成し、組織化を目指している。栃木県益子町の窯師に設計監理を委託し、全行程について作業指導員を置き、地域ボランティアなどによる窯再建ワークショップを行っている。

④ 栃木県益子町の窯師に設計監理を委託する際に、地区の陶芸家の代表者1名を作業指導員とし、再建する窯について、当地に見合った規模、構造などを窯師とともに研究し作業手順・方法、作業日程、人員配置計画を立てた。併せて、構造を理解し軽微な修繕に対応できる人材を養成した。登り窯完成後は若手陶芸家のネットワークの拠点となり、活動や移住定住の支援を行う。

⑤ 地区民や町内外のボランティアを募集し、ワークショップを開催し窯の再建を行っているが、普段の作業について人手が足りない状況である。そのため、窯が完成しても薪が足りないなどの理由により火入れができない。薪割体験ワークショップなどを開催し、周辺環境を整えていく必要がある。

⑥ 窯再建準備ワークショップや窯再建ワークショップにおいて、地区民や町外の方々にボランティアを要請し共同作業を通じて、窯を中心とした新たなコミュニティを構築している。

⑦ 深山地区民を対象とした作陶ワークショップを開催する。作陶、火入れ、窯出し、展示会をそれぞれ開催し、より身近な施設として愛される施設づくり、サポーターとしての組織化を目指す。また、白鷹町文化交流センターと共催で作陶ワークショップを年間を通じて開催する。窯出し後の自主事業として講師との懇談会などを開催し、愛好者の発掘、育成、参加者相互の交流を図り、活動が継続・展開されることを目指す。

◆ 自治体名　山形県白鷹町
◆ 人口　15,536人
◆ 面積　157.74km²
◆ 事業開始年度　平成25年度
◆ 事業主体　白鷹町

**連絡先**
白鷹町産業振興課
TEL 0238-85-6126　FAX 0238-85-2128

## 福島県郡山市　郡山市指定重要無形民俗文化財「柳橋の歌舞伎」

①「柳橋の歌舞伎」は、江戸時代末期から行われてきたといわれており、明治以降しばらく上演されなかった時期があったが、昭和55年の保存会結成以降は毎年上演され、現在に至る。毎年9月には定期公演を行い、市内外から多くの観光客が訪れている。

② 郡山市中田町柳橋地区の柳橋歌舞伎は、江戸時代末期より上演されてきたといわれている。この地区は江戸時代、天領であったため芸能が自由に行われ、菅布禰神社の祭りに村人が芝居や歌などを楽しんでいたことが歌舞伎の始まりになったといわれている。その後、しばらく上演されなかった時期もあったが、昭和55年に地区ぐるみの支援を得て保存会が結成され、地域の民俗芸能の継承を図りながら、現在に至る。

③ 昭和55年の保存会結成以降は、柳橋地区が一丸となって民俗芸能の継承・伝承に努めており、保存会を中心に毎年9月の定期公演に向けて、練習や広報活動を行う他、後継者育成として地元中学生への歌舞伎指導、他地域歌舞伎団体との交流活動や出張公演等を行うなど、精力的に活動している。

④ 柳橋地区では、現在4つの民俗芸能が文化財に指定されている。後継者育成として地元中学生に演技指導を行い、定期公演では中学生による演目を上演している。また、更なる資質の向上を目指し、他の歌舞伎団体との交流や視察を行ったり、県内外へ出張公演に出向いたりと、地元だけに留まらない積極的な活動を進めている。

⑤ 伝統芸能の灯を消さないためにも、柳橋住民一丸となって文化の継承に努めている。また、東日本大震災以降は、被災して伝統文化の継承に支障を来たしている浜通りの住民との交流を図りながら、相互の復興に取り組んでいる。

⑥ 歌舞伎の定期公演については、保存会を中心としてＰＲ活動を行っている他、郡山市としてもウェブサイトや広報こおりやま等に掲載するなど、観光客の誘致に協力しており、年々、県内外へ周知されつつある。また、大震災により被害のあったいわき海星高校の生徒達による「じゃんがら念仏踊り」（平成24年度）の披露等、被災地支援を行い、併せて地元中学生との意見交換の場を設けるなど、次世代を担う若者達の文化交流を行った。

⑦ 柳橋地区は、過疎・中山間地域でもあり、農業従事者が多く、少子高齢化が進む中、東日本大震災以降住民の不安や落胆など地域の活力が低下したが、地域住民の絆で歌舞伎の公演ができたことが、地域復興への意志を芽生えさせた。今後も地域が結束して後継者の育成や伝承されてきた伝統芸能を守り育てていくことで、柳橋地区の未来を創造するための次の世代への足がかりとなる活動に取り組んでいきたい。

◆ 自治体名　福島県郡山市
◆ 人口　328,135人
◆ 面積　757.06km²
◆ 事業開始年度　昭和58年度
◆ 事業主体　柳橋歌舞伎保存会

**連絡先**
郡山市教育委員会生涯学習部文化課
TEL 024-924-2661　FAX 024-935-7834
URL http://yanagihashi-kabuki.jimdo.com/

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 福島県只見町　ユネスコエコパーク関連事業「自然首都・只見」伝承産品ブランド化支援補助事業

① 只見地域の豊かな自然環境や天然資源をより所にした伝統的な地場産業の育成・発展を目的とする。只見町の伝承産品の技術伝承、開発、販売を行う町内業者に対して支援を行い「自然首都・只見推奨品」として、ブランド化し、販売をする。

② 平成26年6月12日に只見町は「ユネスコエコパーク」に登録された。ユネスコエコパークとは自然と人との共生を目指すものであり、本事業はユネスコエコパーク関連事業として平成25年より開始した。只見町は豪雪に特徴づけられる特異な自然環境を有しており、古くから、厳しくも豊かな自然から得られる天然資源を持続可能な形で利活用し、伝統的な暮らしを続けてきた。春のゼンマイ折りや、冬の手仕事マタタビ細工、凍ん餅、あめなど、自然を上手く利用した暮らしをもう一度掘り起こし、「自然首都・只見推奨品」としてブランド化し、統一したパッケージで販売した。

③ 平成25年度は「雪国只見の手仕事マタタビ細工」「村のcafé風光舎のぜんまい綿毛コースター」「奥会津ただみ山採り乾燥ぜんまい」「奥会津ただみ天然乾燥わらび」「奥会津ただみ山採り乾燥うるい」「自然首都只見あめ」「奥会津ただみコクワジャム」「奥会津ただみ凍ん餅」「自然首都只見山蜂があつめた天然はちみつ」「奥会津ただみのククサカップ」の7件について、伝統工芸の技術伝承や、伝統的な食文化を自然首都・只見のブランド品として作成し、販売した。

④ 特に只見町のマタタビ細工は古くから日用品として日常的に作られていたが、現在はその技術を持った古老が少なくなりつつある。このままでは貴重な伝統が絶えてしまう恐れがあったため、町内の古老を師匠に伝統技術を学ぶ講座に対して講師料を補助し、より多くの人が伝統工芸に触れ、習得できる体制を支援した。

⑤ 町内の土産品売り場で特設コーナーを設けて販売しているが、7件すべてが四季折々の自然を利用した季節限定商品であるため、年間を通じての量産が難しく、在庫の確保ができない状況がある。解決方法としては、今後さらに生産者を増やしていくこと、またより売れる体制をとっていくことで商品の増加を目指す。

⑥ 只見産の商品として、町の厳しい基準をクリアした推奨品であり、またユネスコエコパークの理念にそった商品であるためブランド力が高く消費者から目につきやすい。また生産業者も「自然首都・只見推奨品」のロゴを使用することによって意識が高まり、品質の向上につながった。

⑦ 平成25年度作成分については、商品の質の維持と在庫の確保が最大の問題。季節限定の少量生産になってしまうため、利益率が低い。平成26年度も同様に補助事業を行い、「自然首都・只見」伝承産品ブランド化支援事業をさらに充実させていく。

◆ 自治体名　福島県只見町
◆ 人口　4,578人
◆ 面積　747.53km²
◆ 事業開始年度　平成25年度
◆ 事業主体　只見町、町内業者等

**連絡先**
只見町　総合政策課　地域振興係
TEL 0241-82-5220　FAX 0241-82-2117

## 茨城県土浦市　小町の里整備基本計画

①「土浦市小町の里整備基本計画」（平成21年度策定）に基づき、土浦市の小野地区を中心とする「小町の里」周辺に存在する地域資源を発掘し、広域的一体的に捉え、整備することで、観光拠点としての一層の魅力化を図る。

② 平安時代の歌人小野小町が旅の途中、土浦市小野地区で病に倒れ亡くなったといわれており、周辺には小町が越えたとされる「小野越峠」や、小町の墓と伝えられる「五輪塔」のほか、最仙開基と伝えられる「東城寺」や大同2年（807年）に創建されたといわれる「清滝寺」、東城寺を守る鎮守杜として建立された「日枝神社」が点在する地域である。小野地区には、これらの史跡のほか、「朝日峠展望公園」や桜の名所である「竜ヶ峰」、観光拠点施設として「小町の館」等が点在している。当市ではこのエリアを「小町の里」と定義し、観光・文化拠点として整備することとなった。

③ 観光拠点施設「小町の館」には観光情報コーナーや地元名産のそば処があるほか、そば打ち体験や田植え体験等の体験講座を実施している。
また、朝日峠展望公園やハイキングコースの整備など、歴史・文化に留まらず、自然環境や食育、ふれあいの拠点としても活用している。

④ 小町の館においては、小野小町伝説の民話伝承のための小町ギャラリーを設置しているほか、小野小町伝説の伝承と短歌・俳句の文化伝承を目的とした「小野小町文芸賞」を実施している。
日枝神社では毎年4月、県指定無形民俗文化財である「流鏑馬まつり」を実施している。
また、東城寺や清滝寺等の寺社については、土浦市の観光ボランティア協会が希望者にガイド活動を行っている。

⑤ 日枝神社で行う流鏑馬まつりは、駅からのバス路線がなく、見物客の交通アクセスが良くないが、同時期に開催される「土浦桜まつり」会場と日枝神社を往復するバスを臨時に運行している。

⑥ 観光客動態調査によると、小町の里の年間来訪者数は、整備計画が策定された平成21年度では約94,000人であったのに対し、平成25年度は約126,000人と順調に伸張している。

⑦ 公共交通機関での来訪者については、JR土浦駅から小町の里にアクセスするバス路線がなく、駅からの二次交通機関の整備が課題となっている。

◆ 自治体名　茨城県土浦市
◆ 人口　142,094人
◆ 面積　122.99km²
◆ 事業開始年度　平成21年度
◆ 事業主体　土浦市

**連絡先**
土浦市産業部商工観光課
TEL 029-826-1111　内線7605　FAX 029-823-9220

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 茨城県古河市　お休み処坂長

① お休み処坂長は江戸時代初期から城下で営んでいた商家の建物を、伝統的技法を用いて修復したカフェやショップ、ミニギャラリーを含む複合施設であり、市民の憩いの場や来訪者の回遊拠点となっている。

② お休み処坂長は、江戸時代からの商家であり、旧古河城の遺構といわれる店蔵・袖蔵をはじめ、文庫蔵、中蔵、石蔵の蔵5棟と主屋1棟が集積しており、いずれも国の登録有形文化財に指定されている歴史的建造物である。市では、これらの歴史的建造物を取得し、お休み処や来訪者及び市民の憩いの場として整備し、回遊軸の拠点施設として観光・文化及び地域活性化に寄与できるよう再生・活用することを目的としている。

③ 施設内には伝統的技法を用いて修復した5つの蔵と主屋1棟があり、店蔵では古河の特産品やお土産を買うことのできるセレクトショップになっている。主屋1階は創作オランダ料理が楽しめるカフェやダイニングがある。主屋2階には6畳と10畳の和室があり、貸室として市民講座に利用されている。文庫蔵では古河と坂長の歴史を知る展示施設になっている。袖蔵、石蔵は市民ギャラリー、多目的ホールとして有料の貸スペースとして利用されている。中蔵は蔵をトイレとしてリフォームしている。

④ 坂長本店の店蔵や袖蔵などの姿は市民の記憶に長い間親しまれてきた。坂長本店の改修に際しては、登録文化財6棟の歴史的価値を活かしながら、付近に点在する歴史博物館や文学館、篆刻美術館などを結ぶ中継拠点的役割を担い、訪れる観光客のみならず、市民の日常生活に根付き、将来に街並みを継承することを目指した。

⑤ 施設の持つ歴史的・文化的価値を損なわないように改修することに苦心した。外観は、損傷や新建材で修理されている部分を、伝統工法を用いて修理し、文化財的価値の保存と継承に努めた。色彩に関しては当初の仕上げの色を復原した。喫茶部分に関しては、歴史的建造物の中に新しい木造架構のデザインを組み込むことにより、お互いが引き立つ関係を創り出した。土壁についても伝統的技法を用いて修復した。可能な限り当初の材料や技法を活用し、耐久性を高めるため十分な乾燥期間を設け、仕上がりまで約10ヶ月を要した。

⑥ 平成24年4月の開館から来客数は順調に増えており、施設を活用したコンサートや美術展等、多様な文化の発信地として多くの市民に利用されている。

⑦ 現在も坂長主催イベントとしてサマーフェスタや映画会、クリスマスディナーパーティー等を行っている。また、商工会議所や文化協会などと連携したイベントを開催し、施設の有効活用を図っている。今後は、施設の持つ文化的・歴史的価値を活かした坂長独自の取り組みが求められる。

◆ 自治体名　茨城県古河市
◆ 人口　145,429人
◆ 面積　123.58km²
◆ 事業開始年度　平成24年度
◆ 事業主体　古河市（指定管理者：株式会社雪華）

**連絡先**
古河市産業部商工政策課
TEL 0280-92-3111　FAX 0280-92-9502

## 茨城県筑西市　小栗判官まつり

① 協和地区に伝わる小栗判官伝説を再現するまつり。華麗な戦国絵巻を思わせる武者行列、馬にまたがった小栗判官が御所車に乗った照手姫をはじめ、侍女、十勇士、子供武者等総勢200人を引き連れJR新治駅前通りを練り歩く。

② 小栗判官まつりは、平成元年に現在の筑西市協和地区に伝わる、小栗判官伝説でまちおこしをしようという地域の住民により始まった。その昔、この地域を治めていた常陸の国・小栗一族の15代目城主 小栗助重は、「小栗判官伝説」のモデルとして知られている。康正元年（1455年）、小栗城は古河公方足利成氏に攻められ落城し、小栗の歴史は途絶えるが、その悲話は、説話の格好の題材となった。助重とその父、満重の伝説は、歴史書「鎌倉大草紙」に記され、その後、寺社の布教活動とともに各地に伝わり、人形浄瑠璃や芝居、歌舞伎の世界に広まっていく中で脚色され、よりインパクトの強い物語が作られた。このような知名度のある説話をもとに協和のPRと、地域住民同士の交流を図るために小栗判官まつりの取り組みが始まった。

③ 毎年12月に小栗判官まつりを開催している。実行委員会をこまめに行い、前年の改善点を次年に持ち越さぬよう日々話し合いを行うことにより、前年よりも良いまつりを作り上げている。
昨年は、「小栗判官スイーツ」を考案し、小栗判官まつりのPRを強化した。また、国の重要無形文化財に指定された小栗内外大神宮大々神楽（おぐりないげだいじんぐうだいだいかぐら）も毎年披露されている。

④ 旧協和町（近隣の）3小学校の6年生がまつりのメインでもある武者行列に、協和中学校の生徒がメインステージでの吹奏楽部の演奏・よさこいソーラン等に参加している。地域の小中学生がまつりに参加することで、地域の若者に小栗判官まつりへ関心を持ってもらうきっかけを作っている。

⑤ 取り組みにおいて苦心している点は若年層のまつりへの興味関心の薄さ及び興味関心の持続である。
そのため、毎年同じことを繰り返すのではなく、同じことの中にも流行に乗った新しい試みをできる範囲で行っていくことが必要と考える。

⑥ 小栗判官という題材をもとに武者行列などを開催することで歴史ファンを取り込み、小栗判官役として著名人などを起用することにより、さらに多くの層の集客が見込める。こうした取り組みは小栗判官まつりだけでなく、筑西市自体の知名度向上に繋がると考えられる。

⑦ 今後も若年層の関心を向けるということは課題になる。観光客のニーズをよく考え、取り入れていくことで、筑西市への観光客を増やしていきたい。

◆ 自治体名　茨城県筑西市
◆ 人口　105,237人
◆ 面積　205.35km²
◆ 事業開始年度　平成元年
◆ 事業主体　小栗判官まつり実行委員会

**連絡先**
筑西市経済部商工観光課
TEL 0296-20-1160　FAX 0296-20-1186

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 栃木県足利市　足利ひめたま

①「縁結び」で知られる足利織姫神社と、「縁切り」で知られる門田稲荷神社を活用した萌えキャラを設定し、各種イベントの開催、商品開発を行い、足利のまちを活性化するために活動している。

② 足利織姫神社は、約1200年ほど前より機業地として栄えていた足利の産業の守護神とされ、宝永2年（1705年）が起源とされている。現在の朱塗りの社殿は昭和12年5月に完成し、平成16年6月に国の登録有形文化財に認定された。門田稲荷神社は、下野國一社八幡宮の境内にある。別名、縁切稲荷とも呼ばれ、榎木稲荷（東京）、伏見稲荷（京都）と並ぶ日本三大縁切稲荷のひとつである。男女間、病、薬、賭け事などから縁を切りたいと願って参拝する人が多い。縁切に関する絵馬も数多く残っており、往時の風俗や悩みなどをうかがうことができる。平成20年、市内に賑わいを取り戻そうという市民有志により「足利ひめたま製作委員会」を立ち上げ、古くから「縁切り」「縁結び」の神社として知られていた上記の神社を活用した萌えキャラを設定、織姫神社のキャラクター「はたがみ★おりひめ」（通称：ひめちゃん）、門田稲荷のキャラクター「かどた★みたま」（通称：たまちゃん）とした。

③ 足利ひめたま製作委員会では、キャラクターを活用し、次のような取り組みを展開してきた。

1. オリジナル商品の開発、販売

キーホルダー、ストラップ、缶バッヂ、下敷き、クリアファイル。その他、市内の事業所とコラボした商品の開発。（ソース、ワイン、ラムネ、足利の水）

2. イベントの開催

両キャラの誕生日設定に基づき、2月には門田稲荷を会場とした「みたま生誕祭」、5月には織姫神社を会場とした「おりひめ生誕祭」を開催。

自動車をキャラクターで装飾した、通称「痛車」を一堂に集めた「あしかが痛車フェスタ」を6月と10月の年2回、市の河川敷駐車場を会場に実施。

④ 上記2つのキャラクター設定から、まず、キャラクターを認知してもらい、さらに各イベントに多くの人に参加してもらうことで足利市に賑わいを取り戻すことができている。そのうえでキャラクターやイベントの背景（各神社の歴史・風俗など）を知ってもらうことで、足利市の歴史・文化への理解を深めてもらうことができている。

⑤ 各神社にイベントの趣旨を理解してもらうこと。

⑥ ひめたまをキーワードに多くの人が来訪する現象となる他、市内でも地元キャラクターとして、徐々に認知度が向上している。「痛車フェスタ」にあたっては、300台収容の会場であることから、エントリーは「先着300台」、ネットでの募集としているが、わずか30分で定数に達する反響の多さで、全国的に注目を集めるようになっており、地道ながら地域経済に貢献しているものと思われる。

⑦ 運営組織である製作委員会は、任意の団体であることから、今後は、“NPO法人”などの法人転換を計画中。

◆ 自治体名　栃木県足利市
◆ 人口　150,483人
◆ 面積　177.82km²
◆ 事業開始年度　平成20年度
◆ 事業主体　足利ひめたま製作委員会

**連絡先**
足利市産業観光部観光振興課
TEL 0284-43-8788　FAX 0284-43-3333
URL http://www.himetama.jp/news.html

## 栃木県栃木市　とちぎ秋まつり

① 豪華絢爛な江戸型人形山車が蔵の街を巡行する「とちぎ秋まつり」は、江戸から明治にかけての栃木市の繁栄を今に伝える祭り。5年に1度の祭りを隔年開催にするとともに、市内全域の小学生の参加を募り、市民全体の祭りとして開催している。

② 栃木に山車が誕生したのは、明治7年、県庁構内でおこなわれた神武祭典の時。明治6年～明治17年まで、栃木県庁は現在の栃木市にあった。倭町三丁目が東京日本橋の町内が所有する山王祭出御の静御前の山車を購入し、泉町が宇都宮から買い求めた諫鼓鶏（かんこどり）の山車を賑やかに参加させたのが祭りの始まり。

明治26年、栃木県最初の商業会議所開設認可に係る祝典では、万町一・二・三丁目が三国志の人形を、倭町二丁目は神武天皇の人形を乗せた山車を、東京日本橋本石町に住む人形師・3代目原　舟月に依頼し新調して参加した。新旧六台が競演することになり町をあげての喜びにひたった。

また、明治39年の神明宮・招魂社祭典では、室町が桃太郎の山車で参加して今日のかたちが出来上がった。さらに、大町の弁慶の山車や明治の初めに購入した倭町一丁目の獅子頭がまつりに華やかさを添えている。

とちぎ山車まつりの名目は、当初は神武祭となっていた。その後、神明宮・招魂社祭典を主軸に、会議所の祝典、ご大典奉祝祭に巡行してきた。昭和12年の市制施行祝賀を境にして、おおよそ5年毎に開かれることとなり、市発展のまつりへと姿がかわり、平成18年から隔年開催となった。

③ 11月中旬に開催する秋まつりに備え、5月上旬には、山車所有町内、とちぎの山車祭り伝承会や栃木商工会議所、栃木市観光協会、栃木市等により構成される「とちぎ秋まつり実行委員会」を設立し、6つの部会に分かれて、円滑な事業運営や、より華やかな祭りとなるように検討、調整を進めている。

④ 各山車所有町内における手古舞やお囃子の伝承に加え、合併した栃木市全域の小学校を対象とした「こども山車まつり」を開催し、各山車を曳いて、子供達への伝承や郷土愛の醸成を行っている。

⑤ 各山車所有町内の住民の高齢化が進み、後継ぎ問題が喫緊の課題となっており、市全体で支える体制づくりが求められている。このため、山車所有町内との意見交換を密に行い、今後の支援体制への意見集約を行わなければならない。

⑥「とちぎ秋まつり」は市内の栃木地域だけではなく、都賀地域のお囃子連も参加しており、市全体の一体感の醸成に繋がっているように思える。さらに祭りの効果は、祭りの観客数が平成26年には37万9千人を記録するなど、地域経済への影響も絶大である。

⑦ ・とちぎ秋まつりに広く一般市民が参加し、市民全体でまつりを支える仕組みを構築する。
・とちぎ秋まつりを前面に出して、旧1市5町が合併した新しい栃木市の魅力を広くPRしたい。

◆ 自治体名　栃木県栃木市
◆ 人口　146,456人
◆ 面積　284.82km²
◆ 事業開始年度　平成18年度
◆ 事業主体　とちぎ秋まつり実行委員会

**連絡先**
栃木市産業振興部商工観光課
TEL 0282-21-2509　FAX 0282-21-2683

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 埼玉県さいたま市　国指定史跡見沼通船堀閘門開閉実演

① 見沼通船堀は、江戸時代中期の江戸幕府による見沼新田開発に際して、年貢米等の物資輸送のために開削された運河である。3mの水位差のある運河に船を通すために関（閘門・こうもん）の開閉によって水位の調節を行う様子を再現し、見沼通船堀を活用する事業である。

② 見沼通船堀は、江戸時代中期の江戸幕府による見沼新田開発に際して、江戸と見沼地域との物流の幹線として開削された運河で、当時の土木技術の粋を集めて構築された。こうした重要性から、見沼通船堀は国史跡に指定され、平成6年度から平成9年度に江戸時代の様子が復原された。これを契機として、関（閘門）を開閉して水位差を調節する閘門開閉実演を開始した。

③ 毎年8月に閘門開閉実演を実施している。復原した舟を浮かべ、水位の変化をわかりやすくしたり、船頭が唄っていた通船舟歌の地元の保存会による披露など、歴史的事実をわかりやすく再現できるよう、工夫している。また、復原した舟は、通船を差配していた鈴木家の附属建物と共に、毎週土・日曜日に公開している。

④ 開閉実演を実施する関（閘門）は、発掘調査や文献史料などの調査に基づき、実際にあった場所に復原した。その関を実際に使用して、江戸時代の方法で開閉することによって、水流の迫力を感じながら、江戸時代の技術に触れ、歴史的遺産や伝統を継承する意義に理解を深める機会としている。

⑤ 実演で使用する水流は、農業用水（見沼代用水）から取水しているため、実演での使用が可能な時期がほぼ8月に限られている。史跡の保存と活用について、水利権者の理解と全面的な協力によって実施している。

⑥ 実演の日には毎年、全国からおよそ3,000人の観覧者が訪れ、夏の風物詩としても定着している。史跡保存のための整備を活かし、史跡学習の場及び観光資源として、市民の地域理解深化と集客とに効果が生じている。

⑦ 前回の整備から20年近くが経過し、再整備が必要となっている。早期の再整備実施に向け準備を進め、より効果的に実演を実施するための施設整備等も再整備において実現を図っていく。

◆ 自治体名　埼玉県さいたま市
◆ 人口　1,255,743人
◆ 面積　217.49km²
◆ 事業開始年度　平成8年度
◆ 事業主体　さいたま市教育委員会

**連絡先**
さいたま市教育委員会生涯学習部文化財保護課
TEL 048-829-1723　FAX 048-829-1989
URL http://www.city.saitama.jp/004/005/006/001/005/001/001/p000146.html

## 埼玉県所沢市　重松流祭囃子競技会

①「重松流祭ばやし」は、所沢生まれの古谷重松が編み出した囃子の流派で、所沢市内だけでなく多摩地域にかけて広く伝わり、現在まで継承されている。競技会は、重松流を継承する各団体が練習成果を発表するとともに交流を深める場にもなっており、後継者育成と地域の伝統芸能の発展に寄与している。

② 創始者の古谷重松は、天保元年（1830年）に所沢で生まれた。重松流創案の経緯は明らかではないが、重松は家業の染料藍玉の行商で近郷近在を回りながら、その先々で囃子を伝授したと伝わる。競技会は各地域で重松流継承に取り組む団体の成果を発表する場を作り、団体の交流・活性化と後継者の養成を目的に始められ、平成26年度には第10回を迎える。

③ 毎年9月に公民館ホールで開催している。出演団体数は十数団体で、所沢市内だけでなく市外の団体も参加し、各団体の特徴を発揮した演奏が繰り広げられ、多くの市民に披露されている。また、近年は小学校のお囃子クラブも特別出演しており、練習成果の発表の場を提供している。

④ 日頃の取り組みは、各町内単位で組織された支部（囃子連）において行われており、定期練習による技術向上と後継者育成を基本に、各地域のお祭りや行事などに参加している。各支部（囃子連）により組織されているのが「所沢市重松流祭囃子保存会」であり、全市的なイベントへの参加や技術の記録、団体間の交流事業などを行っており、10年前から「重松流祭囃子競技会」を開催している。

⑤ 伝統芸能の後継者育成において課題となるのは、子供達が興味をもって練習に参加しても、中学・高校に進学すると受験や学校のクラブ活動などへ関心が移り、止めてしまうことである。これに対し、練習の成果を発表する場を多く設け、目標へ向けた練習を行い達成感や満足感を得ることが、意欲の継続に繋がるものと考える。

⑥ 競技会の出演者には、今後の重松流の継承を担う20～30代の青年層が多い。彼らが他の団体の演奏を見ることで刺激を受け、また同世代間の交流を深めることにより、個人の意欲向上や団体活動の活性化に繋がっている。

⑦ 取り組みがマンネリ化しないよう、新たな出演団体の確保や開催要領の点検・見直しを行う。また出場者の意欲を高めるために優勝盾を作成し今後毎年の優勝団体で保持していくこととする。一方で観客を意識した演出が本来の囃子の原形から離れてしまわないように、指導者の育成や映像記録等に引き続き努めていく。

◆ 自治体名　埼玉県所沢市
◆ 人口　342,564人
◆ 面積　71.99km²
◆ 事業開始年度　平成17年度
◆ 事業主体　所沢市重松流祭囃子保存会

**連絡先**
所沢市教育総務部文化財保護課
TEL 04-2998-9253　FAX 04-2998-9128

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 埼玉県横瀬町　寺坂棚田ホタルかがり火まつり

①「寺坂棚田ホタルかがり火まつり」は、寺坂棚田に携わる方々が、より棚田を親しむイベントとして平成19年度から実施している。約600個の灯が作り出すその美しい棚田の景色を一目見ようと、今では町民をはじめ、遠方からも、大勢の人が来るようになった。

② 寺坂棚田は、埼玉県内最大級の棚田といわれながら、農業従事者の高齢化や後継者不足などにより、大部分が耕作放棄地となって荒れ果てていた。しかしながら、平成13年から地元農家が中心となって棚田を長期的に保存・活用しようと団体を組織し、都市住民の稲作体験等を始めとした様々な事業を行い、棚田の再生に努めてきた。ホタルかがり火まつりも、棚田を気軽に楽しめるイベントとして、地元住民が中心となって平成19年度から開始したものである。

③ 毎年、ホタルが舞う時期の7月初旬にまつりを開催している。平成19年当初は、都市交流活動を事業主体とした団体である寺坂棚田学校が中心となってまつりを実施していたが、平成24年からは、歴史と伝統ある寺坂棚田の将来に向けた積極的な保全を活動の目的として組織された寺坂棚田保存会が、関係団体等との協力の下に事業実施している。

④ 寺坂棚田保存会は、企業などとの共同取り組みにより、小学生を対象とした稲作体験など、様々な事業を実施している。まつり当日は、そのような事業に携わる方々や都市交流活動などの参加者といった多くの方にも積極的に参加してもらっている。あらゆる関係者の参加を促すことで、イベントの継続性、発展性につなげている。

⑤ 事業実施主体である団体（寺坂棚田保存会）のメンバーは全体的に高齢の方々である。まつり自体も、棚田がしっかりと管理されている状態ではじめて実施できるもので、棚田の荒廃が進めば、まつりも実施ができなくなる。地元住民だけでなく、都市住民との協力の幅を広げ、棚田オーナーなどの新たな展開を図ることが、今後のまつりの発展につながるものと考える。

⑥ まつりを実施することで、棚田に携わる方々の結束がより強くなった。また、県内・県外から多くの方々にお越しいただき、横瀬町の大きなイメージアップにつながっている。まつりを通じ、心和む観光スポットとして、今や横瀬町になくてはならない憩いの場となっている。

⑦ これまでは、都市交流活動などの取り組みが中心であったため、地元からの参加は、どうしても棚田周辺地域住民が中心となっていた。今後は、より地元郷土愛の醸成に寄与するまつりとして、地元小学校や中学校との連携による取り組みを考えていきたい。

◆ 自 治 体 名　埼玉県横瀬町
◆ 人　　口　8,863人
◆ 面　　積　49.49km²
◆ 事業開始年度　平成19年度
◆ 事 業 主 体　寺坂棚田保存会

**連絡先**
横瀬町まち経営課政策グループ
TEL 0494-25-0112　FAX 0494-23-9349

## 千葉県白子町　南日当の獅子舞

① 獅子舞を通して地域内外の人達との交流の機会をつくり、地域の活性化に貢献できるよう活動に取り組んでいる。

② 南日当の獅子舞は、江戸時代末期に山武地域から伝わったといわれ、小錦流という流派で荒神楽が多いことが特徴であり、明治中期には近隣の獅子連と盛んに競演し、大正時代には芝居も織り込んで演技に新風を添えた。昭和44年に町無形文化財に指定され、活動に活気を与え現在に至っている。主な演目は、囃子に「鎌倉」、「中山」、「馬鹿」、「東金」、「本納」、等があり、舞には、天の岩戸開き・鈴と御幣の「平獅子」から、「蛇遊び」、「四つ足」、「亀と舞う」、「草刈り」、「達磨取り」、「蝶」等の下手舞がある。

③ 南日当の獅子舞は、無病息災・家内安全・五穀豊穣を祈念して舞われるものであるため、地区の新年会、水神宮の春・夏・秋の祭りに舞を奉納している。また、近隣の老人ホームへの慰問や毎年11月に行われる町文化祭をはじめ、平成25年度は「房総の郷土芸能2013」にも出演し、町内外を問わず広く活動している。

④ 獅子舞は伝統芸能であるため、地域の若者達に積極的に参加を呼び掛けるとともに、町・学校の協力のもと、子供達が獅子舞にふれる機会を増やし、後継者の確保に努めている。また、毎月第1・第3土曜日に地区の自治会館で練習を3時間程行い、併せて会員相互の親睦・融和を図っている。

⑤ 獅子舞には音符・楽譜がないことから、習得するには相当数の時間が必要であるため、現在の若者達の人生観・生活様式の多様化により積極的な参加者が減少しているのが実情である。現在は、舞・囃子を電子媒体に収録・複写し、興味を持つ人達が個々に獅子舞に触れることが出来る機会を増やしている。

⑥ 様々なイベントに積極的に参加することで、地域内外の人達と交流を図ることができた。

⑦ 獅子舞は地区の伝統芸能という意識から脱却し、興味があれば誰でも気軽に加入できるような環境を整え、町ぐるみで後継者の育成に取り組んでいきたい。

◆ 自 治 体 名　千葉県白子町
◆ 人　　口　12,073人
◆ 面　　積　27.46km²
◆ 事業開始年度　昭和45年4月1日
◆ 事 業 主 体　南日當獅子舞保存会

**連絡先**
白子町生涯学習課
TEL 0475-33-2144　FAX 0475-33-7461

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 千葉県鋸南町　内宿区鯨唄愛好会

① 鯨唄発祥の地「鯨の都」として栄えた鋸南の「鯨唄」を後世に唄い継ぎ、先祖が残してくれた大事な文化を後世に伝承する。また、本活動を通じて、「きょなん」のPRと地域の活性化を図ることを目的としている。

② 江戸時代初期、勝山の醍醐新兵衛定明によって、勝山の捕鯨が組織化された。この大船団が漁に出て、鯨をモリで突き、漁に出た男衆達は、仕留めた鯨を引き連れて意気揚々と鯨唄を歌いながら帰ってくる。その船が帰ってくる知らせを聞きつけた勝山の女衆達も歓喜して浜辺で鯨唄を歌い出迎えたと伝えられている。鯨唄は、船と浜辺でコラボレーションし勝山の町を盛り立てた。鯨漁がされていない今でも地元の祭礼などで歌われている。

③ 毎年7月に浮島神社祭礼時に当愛好会で鯨唄を披露している。浮島神社から加知山神社に御霊を安置するために移動する際に、浮島神社から勝山漁港まで船で渡り、勝山漁港から加知山神社まで提灯行列で御霊送りをする際に披露している。本活動が始まる平成23年1月以前は、カセットテープで代行していたが、「先祖が残してくれた大事な文化を守りたい」「鯨唄をよみがえらせたい」という思いからテープを手本に練習に励み、実に38年ぶりに生唄での御霊送りが復活した。

④ 平成25年に雑誌の取材を受け、安房勝山鯨紀行として全国に発信され、鯨唄が世に伝わった。また、映画の出演依頼などもあり、町内外に本活動を知ってもらうきっかけになっていると思われる。祭礼時だけではなく、地元の各種イベント、学校訪問などに積極的に参加し、鯨唄を通して鋸南町の残された鯨文化を町内外へ発信している。

⑤ 鯨唄は最初、保存会という形で活動していた団体だったが、高齢化で活動が難しくなり、平成23年1月に会員を募り、今の鯨唄愛好会が組織された。現在も17人で活動しているが、この会員集めに大変苦慮した。現在も残っていたテープを師匠に練習を重ねており、地域のコミュニケーションは深まっているが、高齢化によりこの先の活動には不安がある。雑誌の取材や映画の出演により、鯨唄が周知されることによって、この文化が再認識され若い世代が伝承していくことを期待している。

⑥ 楽器もなく、伴奏もない唄をテープのみを使って皆で覚えた。愛好会の会員で練習に取り組んでいく中で、地域のコミュニケーションの高まりとともに、この活動が町外からも認知され広まっていると感じている。

⑦ 今後、担い手について自分達の地域のみでは限界を感じており、地域問わず声掛けを行いたいと思っている。更なる普及活動を行い、鯨唄を通して鋸南町の残された鯨文化を全国に発信していきたいと考えている。また、若い世代に伝承していき、コミュニケーションをとって、後世に唄い継いでもらいたい。

◆ 自治体名　千葉県安房郡鋸南町
◆ 人口　8,673人
◆ 面積　45.16km²
◆ 事業開始年度　平成22年度
◆ 事業主体　地域住民

**連絡先**
鋸南町総務企画課企画財政室
TEL 0470-55-4801　FAX 0470-55-1342

## 東京都葛飾区　柴又宵まつり

① 柴又神明会が発足した大正元年は宵庚申が一番華やかな時代である。「柴又宵まつり」は、昔の宵庚申のように華やかな時代をコンセプトとし、活気ある参道を演出したイベントを行うお祭りである。

② 柴又帝釈天では、帝釈天信仰が高まった江戸時代より庚申の日の参詣が盛んであった。庚申の日の前夜は、宵庚申と呼ばれ、とても賑やかな一夜であった。見渡す限りの田園風景には提灯が続き、大勢の人が連なって参道に向かった。参道には人々が溢れその活気は朝まで続いていた。大正元年には柴又神明会が発足し、宵庚申が一番賑やかな時代だと言われている。その後、現在では帝釈天が所有する纏（まとい）とうちわ太鼓を手にした人々（帝釈天に属する「睦会」の会員）が、柴又駅から帝釈天参道まで続く参道商店街を練り歩き、纏の奉納を行っている。

③ 柴又駅前広場、帝釈天境内では、様々な催し物が開催され、参道各店舗では当日限定メニューを販売するなどお祭りを楽しむことが出来る。また、宵庚申が華やかであった時代の雰囲気を再現するため、帝釈天境内ステージでは「大正ロマン仮装コンテスト」、参道では「大正ロマン仮装パレード」の催し物が行われた。

④ 通常、夜間営業を行っていない参道店舗も、宵まつり当日は夜間まで開店し昔の宵庚申と同じような活気のある参道を演出する。

⑤ 催し物の一般参加者の募集にあたって、当初、アナウンス不足によりなかなかコンセプトに沿った参加者が集まらなかった。打開策として、ホームページやフェイスブックにより募集することで、参加者は増え、イベントに間に合わせることが出来た。

⑥ 江戸時代より続いていた宵庚申は時代とともにその慣習が失われていった。柴又の地元の若者たちも宵庚申を知らない者がほとんどであったが、一番賑やかであったと言われる大正時代の宵庚申を「柴又宵まつり」として再現することで、若い世代が宵庚申を知るきっかけとなり、後世に伝承していくことが可能となる。また、大正や昭和の風情を残す柴又のまちの魅力を宵まつりにより、さらに魅力的に発信することが出来る。柴又地域にとっては、地域住民が一体となって楽しめるお祭りにすることで、地域の活性化へつながる。

⑦ 宵庚申という地域ならではの伝統を活かし、柴又の魅力を高め広くPRしていくためのイベントとして継続していくためには、毎年の企画運営に創意工夫が必要となる。そのためにもイベントへの参加者を増やすなど、地域でイベントを盛り上げていく体制を強化していく必要がある。

◆ 自治体名　東京都葛飾区
◆ 人口　448,680人
◆ 面積　34.84km²
◆ 事業開始年度　平成18年度
◆ 事業主体　柴又神明会

**連絡先**
葛飾区地域振興部観光課
TEL 03-3838-5558　FAX 03-3838-5551

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 東京都江戸川区　お江戸投網まつり ～粋なお江戸の船遊び～

① 江戸川区の河川流域には伝統漁法「投網」があり、その技術を披露して投網漁をする屋形船も多い。高度経済成長期の水質悪化による魚の減少や屋形船の大型化によって一時期下火になったが、「投網を未来に残そう」と投網まつりが開催された。現在では本区の水辺文化を代表する春の風物詩となっている。

② 江戸川区の伝統漁法「投網」は「細川流投網」と言われ、歴史は江戸時代と古く、参勤交代で江戸にいた細川藩（熊本県）の藩士によって伝えられたとされる。投網は陸から投げるのが一般的であるが、細川流投網は「本振り」といい体をダイナミックに動かし、船の上から網を勇壮・華麗に打つのが特徴である。この伝統漁法を後世に残すために始められたのが「投網まつり」である。

③ 毎年5月5日に「お江戸投網まつり」を開催している。平成26年で13回目。伝統的地域資源である「投網」漁法の継承と「屋形船」の知名度向上を目的に、江戸川区の若手船宿経営者らによって発足した「江戸投網保存会」によって広く一般の人達に披露されている。毎年、募集開始と同時に応募が定員を超えしまうほど人気のイベントとなっている。

④ 伝統漁法を継承するべく、先代から網の打ち方等を教わりながら、投網の歴史を調べるなどしている。また、不定期ではあるが、投網講習会を行うことで投網技術を磨くと同時に一般の方が講習に参加できるなど、伝統文化の継承と普及に努めている。

⑤ これまでの伝統漁法「投網」と高級な遊びとして知られていた「屋形船」を投網まつりという形で広く知ってもらい、新たな観光資源としての仕組み作りに苦心した。具体的には、誰でも気軽に利用できるような少数乗合方式の導入、船頭が藍染めの法被をまとって風情を演出、天ぷらや刺身、投網で獲れた魚を船上で調理して振る舞うことで、身近で魅力的なまつりになるよう心掛けている。

⑥ 毎年応募者数が定員を超えるなど、投網と屋形船が貴重な伝統的地域資源として認識されてきたように思える。継続的な「投網まつり」の実施が、地域ブランドの向上と江戸川区の伝統的地場産業の振興に大きく貢献している。

⑦ 今後は、「投網まつり」だけでなく、一年を通じて江戸情緒と下町風情を味わえる投網と屋形船の魅力をPRしたい。具体的には花見、花火、納涼、ハゼ釣り、月見、忘年会、新年会などのような楽しみ方があるため、四季を通じて屋形船を利用してもらい、地域交流人口の増加につなげたい。また東京オリンピックを見据えて、海外観光客へも魅力的な伝統漁法「投網」と屋形船文化の発信に努めたい。

◆ 自治体名　東京都江戸川区
◆ 人口　676,598人
◆ 面積　49.09km²
◆ 事業開始年度　平成14年
◆ 事業主体　江戸投網保存会

**連絡先**
江戸川区生活振興部産業振興課農産係
TEL 03-5662-0539　FAX 03-5662-0812
URL http://www.edoyakatabune.com/

## 東京都八王子市　八王子まつり

① 伝統ある地域文化の創造と継承、市民相互の連帯と融和、観光都市八王子のイメージの高揚を図ることを目的に行われる、八王子最大の夏祭り。現在は770,000人の人出で賑わう。

② 本市中心地区にある八幡・八雲神社と多賀神社の2つの神社の例大祭において、江戸時代の享保～安永年間（1772～1788年）が起源とされる山車祭りは、江戸中期から明治中期にかけて人形山車の祭りとして、明治後期以降は彫刻を前面に施した彫刻山車の祭りとして親しまれてきた。
昭和36年に「3万人の夕涼み」として始まった市民祭は、昭和43年の第8回に「八王子まつり」と改称した。この年から2つの神社の例大祭を一部併合し、氏子たちが引く山車は、八王子まつりに大きな役割を果たしてきた。

③ 毎年8月第1週の金曜日から日曜日の間、中心市街地の甲州街道周辺を会場として開催している。山車19台の巡行や神輿の渡御、太鼓・民踊等の伝統行事の披露、氷の彫刻展、夜店などにより祭りを盛り上げる。

④ 伝統ある地域文化を継承するとともに、住民の交流の場を創り出すため、平成14年に山車と神輿を中心とした伝統まつりを目指して、行事内容の改革を行った。
なお、現在は19台の山車が八王子まつりで巡行しており、明治や大正時代に製作された山車もある。

⑤ 少子高齢化が進む中、町会では山車の引き手の確保に苦慮している。山車を所有する町会の中には、市内の他の地域に呼びかけを行っており、山車引き体験が、郷土の祭りとして感じてもらうことにつながるように取り組んでいく必要があると考えている。

⑥ 来場者数は、伝統まつりへの改革を行った平成14年の360,000人から、平成26年の770,000人と、年々増えており、山車・神輿を祭りの中心としたことによる成果を上げているとともに、地域経済に対して多大な影響を与えている。
また、市外からも多くの来場者があり、本市の観光PRに貢献している。

⑦ 山車・神輿を中心とする伝統まつりとして、より多くの市民に山車の引き手などで参加してもらい、さらに活気ある祭りに発展させるとともに、次世代につないでいきたい。

◆ 自治体名　東京都八王子市
◆ 人口　561,985人
◆ 面積　186.31km²
◆ 事業開始年度　昭和36年
◆ 事業主体　八王子まつり実行委員会

**連絡先**
八王子市市民活動推進部協働推進課
TEL 042-620-7401　FAX 042-626-0253
URL http://www.hachiojimatsuri.jp/

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 東京都調布市　深大寺そばまつり

① 毎年、新そばの季節である11月末から12月初旬にかけて「深大寺そば」が結ぶお客様とのご縁の感謝と深大寺を訪れる人々の良縁を願って行われるイベントである。

② 江戸時代、深大寺周辺の土地が、米の生産に向かないため、小作人は蕎麦を作り、米の代わりにそば粉を寺に納め、寺では蕎麦を打って来客をもてなしたのが、深大寺そばの始まりと伝えられている。深大寺そばが有名になったのは、元禄年間（1688～1704年）、天台宗関東総本山東叡山寛永寺御門主第五世公弁法親王にそば切を献上して賞賛を得てからといわれており、その後深大寺そばは「献上そば」とも称され名高い諸家から深大寺へ蕎麦の使者がたつほどになった。

③ 深大寺そば祭りのイベントの目玉である「献そばの儀」は地元深大寺の蕎麦屋の店主が深大寺本堂の前で、そば打ちを実演する。できた蕎麦を献上し、五穀豊穣を祈願する。
また、祭りでは出店ブースを設け、子供遊びのアトラクションや観光物産などの販売の実施のほか、「そばがき作り体験」も行っている。

④ 現在の深大寺の蕎麦屋では、残念ながら深大寺産の蕎麦は使われていない。時代とともに蕎麦を栽培する環境ではなくなってしまった事と大勢の観光客に対応するだけの量は収穫できなくなったからである。現在の深大寺には二十数件の蕎麦屋が軒を連ね、深大寺そばを目当てに大勢の観光客が訪れている。深大寺そば祭りは、江戸初期より400年あまり続く深大寺そばの長い歴史と伝統を若い世代へ継承するために開催され、今回で33回目を迎える。

⑤ 特に若い世代に深大寺そばの歴史や伝統の継承が薄れていく中で、幅広い年齢層を集客し、上記に述べたようにそば打ちの実演やそばがき作り体験を通じて、蕎麦を作ることの喜びや蕎麦の美味しさを実感してもらい、歴史や伝統を受け継いでいくことが必要であると考える。

⑥ 深大寺そば祭りを地元そば組合が主体となって取り組むことによって、地域内での交流も活発になった。また、そば祭りに参加することで、地域の歴史や伝統に触れることができ、深大寺の魅力を感じてもらえるきっかけになると考える。

⑦ 今後は外国人観光客にも、英語版のほか外国語版深大寺の観光マップやリーフレットを活用するなどして紹介していきたい。

◆ 自治体名　東京都調布市
◆ 人口　223,947人
◆ 面積　21.53km²
◆ 事業開始年度　昭和56年
◆ 事業主体　深大寺そば組合

**連絡先**
調布市生活文化スポーツ部　産業振興課観光係
TEL 042-481-7180　FAX 042-481-7391
URL http://www.csa.gr.jp/（調布市観光協会）

## 東京都小平市　小平グリーンロード灯りまつり

① 小平市では、昔から神社の祭事として灯ろうを、神社の参道や各氏子の家の門口に飾る風習があった。この風習を伝統文化のひとつとしてとらえ、小平グリーンロード沿いにある公園や広場に、市民の皆さんが思い思いに描いた手作り灯ろうを持ち寄り、新たな形で再現する。

② 小平市内で神社の祭礼の際に家の門口に「地口行灯」を飾る風習があったが、時代の流れとともにそうした光景も徐々に少なくなってきた。そのため、こうした地域の伝統を次の世代に伝え、小平の魅力をしっかりと受け継ぎながら、夏のふるさとイベントに育て上げていくため、平成18年度から実施している。

③ 毎年8月第一土曜日に開催している。自治会や青少対、NPO団体などが実行委員となり、事前の準備や灯ろうの作成方法を指導する工作教室の開催のほか、会場内での灯ろうのレイアウトを作成し、当日の会場の運営を担っている。平成25年度は15会場で開催されるなど、徐々に会場数も増えており、小平市の夏のふるさとのイベントとして定着しつつある。

④ 昔から伝わる「地口行灯」を新規会場を中心に配置し、昔ながらの風習を知ってもらう機会を設けている。また、灯りまつり開催前に行う灯ろう展示会の際に地口行灯を展示して周知するほか、地口行灯や地口についての説明をチラシに掲載している。

⑤ 出展される灯ろうは、地口の灯ろうよりも市民の手作りの灯ろうが多いため、来場者や参加者が増えるにつれ、灯りまつりの由来が薄れていってしまう可能性や伝統的な「地口行灯」が少なくなっていく可能性もある。そのため、実行委員を中心に出展する灯ろうの中に地口行灯を入れるようにしたり、広報等で使用する灯ろうの画像は地口行灯が写るように工夫をしている。

⑥ 来場者数は毎年増加しており、平成25年度は約40,000人の来場者があった。また、小平グリーンロードを中心とする市内15か所の会場に、市民手作りの灯ろうが約3,400個、ペットボトルの飾りが約4,100個集まり、市内各地が灯ろうの明かりに包まれた。

⑦ 規模の小さい会場は市や実行委員の持ち込みの灯ろうに頼る部分が大きく、独自で会場運営を行うまで時間を要する場合もある。しかし、他会場でも回数を重ね会場の周辺住民に認知されていくことにより、徐々に灯ろう数が増えていった経緯から、継続的実施することが必要と思われる。

◆ 自治体名　東京都小平市
◆ 人口　185,846人
◆ 面積　20.46km²
◆ 事業開始年度　平成18年度
◆ 事業主体　小平グリーンロード灯りまつり実行委員会

**連絡先**
小平市市民生活部産業振興課
TEL 042-346-9581　FAX 042-346-9575
URL http://kodairagreenroad.com

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 東京都日野市　日野の祭ばやし

① 市内で活動する7つの連が、幕末から明治初期に起源をもつ祭ばやしを、神社の祭礼にとどまらず、様々なイベントで披露し、地域の活性化に貢献している。伝統継承のための日々の稽古や公演には、幼児から熟年世代まで様々な世代が関わり、地域の多様な絆づくり、子供たちの健全育成のためにも重要な役割を果たしている。

② 嘉永2年（1849）に市内東光寺地区に伝わったが、一度廃れ、明治初めに目黒流といわれる囃子が移入され、定着し、市内各地に拡散していったと考えられている。主として神社の祭礼時に演奏されていたが、後継者不足で衰退していく地域がある一方、再興していく地域もあった。紆余曲折を経たが、師匠からその弟子へ、さらにその子たちへと3世代にわたって継承され、日野市では現在7つの連がそれぞれに個性を発揮しながら、流派にとらわれず、様々な活動を展開している。

③ 昭和58年には日野市内囃子連6団体により、日野市祭囃子連合会が結成されたが、後継者不足などで脱退する団体が相次ぎ、平成15年に活動を休止した。しかし、平成20年、交流と相互協力に基づく伝統文化の継承及び地域貢献、次世代育成を目的に5団体によって、日野市祭ばやし連合会が再結成された。毎年10月の東光寺安産薬師大祭では、連合会加盟の囃子連による合同演奏会を行なっている。これら連合加盟の連や他2団体の活動が評価され、平成26年3月28日、「日野の祭ばやし」として市の無形民俗文化財に指定された。また平成26年12月7日に狛江市で開かれた多摩川流域郷土芸能フェスティバルには、今年度、初参加した。

④ 次世代の健全育成を念頭に、地域の子どもたちを受け入れ、地道に練習を行なうとともに、神社の祭礼に限らず、地域のイベントには積極的に参加、演奏し、地域住民に親しまれるよう取り組んでいる。

⑤ 市からの補助金は連合会に対して年間10万円あるものの、活動費すべてをまかなうには限りがある。楽器類の維持や更新にはかなりの金額がかかるため、財政面での強化が課題となってこよう。

⑥ 披露する機会を増やし、練習をこまめに行うことで、連内部での交流が密になり、連加盟者を通じた地域の絆形成に貢献している。また地域イベントを盛り上げ、地域の活性化に貢献している。

⑦ 今後もそれぞれの地域で継承されていくよう、団体の自助努力に加え、公共セクターや様々な団体からの支援や協力も必要になってくると思われる。平成25年度末に文化財指定されたことをうけ、市としても情報発信を含め、様々な形で側面支援していきたいと考えている。

◆ 自治体名　東京都日野市
◆ 人口　179,771人
◆ 面積　27.53km²
◆ 事業開始年度　平成20年に祭ばやし連合会を再結成
◆ 事業主体　日野市祭ばやし連合会加盟5団体のほか2団体

**連絡先**
日野市教育部生涯学習課
TEL 042-585-1111　内線5321　FAX 042-583-9684

## 神奈川県茅ヶ崎市　ちがさき丸ごとふるさと発見博物館企画展

① 茅ヶ崎の都市資源や都市資源を生かした活動を一体的に発信し、市民に、ふだんなにげなく暮らす茅ヶ崎のまちを全域巡り、「ふるさとちがさき」の魅力を再発見してもらう都市型エコミュージアムのキャンペーン事業。

② 茅ヶ崎市内には、海があり、山があり、都市部があり、文化・歴史・自然・産業・人など、有形無形の都市資源がたくさんある。一方で地域コミュニティの希薄化や地域を知らない人の増加といった現代的課題が顕在化している。そこで、市内全域を屋根も壁もない博物館と見立て、市民が茅ヶ崎の都市資源を知って（学んで）、好きになって、愛着を持って、活用を考え、行動するエコミュージアム事業「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館」は平成15年12月に事業の検討がはじまった。

③ 平成24年度、25年度は企画展「つながるちがさき」と題して事業を実施した。都市資源について学んだ市民が、企画展期間中、まち歩きガイドや展示会で成果を発表し、参加者の市民にとっては「自分が住んでいる茅ヶ崎のことをもっと知りたい」という「学びのサイクルづくり」のきっかけとなり、市民自らが「わがまち」「ふるさと」を見直す確かな機会となった。

④ 企画展期間中に開催される、祭囃子や祝い唄、作業唄などの郷土芸能や、古民家を活用した年中行事、市内に点在する遺跡などを、「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館手帖」で一体的に発信。まち歩きやスタンプラリーを通して、それらをつなぎ、広く市民に知ってもらう機会をつくった。

⑤ 都市資源を生かした「丸ごと博物館」的な活動をしている市民・団体・事業者は、後継者不足や顧客の固定化等、共通の課題を抱えており、各活動同士をゆるやかなネットワークでつないで新たな価値を創り出す機能を備える「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館」が期待に応えたと言える。

⑥ 参加した市民から「今まで行ったことのないところに行けてよかった。こういうイベントはないのでとても有意義だと思う」「とても親切に次の行き先の道など教えてくれてよかった。とても楽しくて、また来年もやってもらいたい」「歩く目標ができてよかった」「バスや自転車を使ってまわった。茅ヶ崎にこんなにいろいろなところがあるとは知らなかった」等の感想・要望をもらっている。

⑦ 都市資源を生かした「丸ごと博物館」的な活動をしている市民・団体・事業者や、「茅ヶ崎を1から知りたい」「茅ヶ崎にふるさとの実感を得たい」と願う市民からの期待に応える、「つなぐ」人材、コンテンツ、仕組みのさらなる充実が必要。

◆ 自治体名　神奈川県茅ヶ崎市
◆ 人口　237,269人
◆ 面積　35.76km²
◆ 事業開始年度　平成24年度
◆ 事業主体　茅ヶ崎市教育委員会（ちがさき丸ごとふるさと発見博物館アクションプロジェクト）

**連絡先**
茅ヶ崎市教育委員会教育推進部社会教育課
TEL 0467-82-1111　内線3341　FAX 0467-58-4265

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 新潟県三条市　小路の魅力発掘事業

① 長い歴史があり、地域の生活文化に深く根付き、さらに街並みの特徴となっている小路に地域住民とともに花を植えたプランターを設置して管理することにより、花を介した地域の交流と小路文化の発信に繋げるもの。

② 江戸時代に行われた町立てからいわゆる「うなぎの寝床」といわれる町家が密集して建てられ、主要道路を繋ぐように小路が幾筋も形成され、100本を越える小路が迷路のように広がっているのが当市の街並みの特徴となっている。しかし、当地域は高齢化と人口減少が加速し、空洞化が進んでいる。そこで、小路文化を見つめ直しまちなかの賑わい創出に繋げつつ、高齢者が明るく楽しく元気よく過ごせる環境づくりを進める取り組みとして、地域の人から発案があり実施に至った。
花のプランターを設置する箇所は、当市が誇る金属加工産業の嘗ての拠点であり、町工場が軒を連ねていたものづくりの面影の残るまちなかのエリアの中で、江戸時代頃から存在する歴史の長い小路を選定し、今年度から実施する。花を植えて整備した小路を、その背景のストーリーと併せて発信し、地域内外の人達にその魅力を感じてもらい、訪れてもらうためのPRを行う。

③ 活動開始時に一斉に行った花植え作業には、地元自治会、地元の小学生、その他ボランティアと合計65人が参加し、4種類の花を植えたプランター46基を設置した。その後の花の水やりと管理は地域住民が主体的に行っている。随時、花の様子と併せて小路の魅力の情報発信を行う。

④ 当市の小路文化の周知のために、まちあるき講座を開催して小路文化の学習の機会を提供したり、小路標柱の設置やマップの作成などの取り組みを通して、地域資源や歴史の再認識を促進し、まちを歩く人口の増加や地域の回遊性の向上につなげ､地域経済の活性化につなげている。

⑤ プランターの花植え作業や花の管理は地元自治会が主体となって行い、特に毎日の水やりは地域の高齢者を中心にボランティアで行うもので、地域住民の合意が得られるまで説明や説得を繰り返して苦労した経緯はある。また、水やりの水や備品の保管場所の確保のために、消防等を含む様々な団体や施設との調整に苦労した。

⑥ 地元自治会の中のボランティアが自主的に集まり、水やりや掃除を行う中で、新たな人を巻き込みながらボランティアの人数も増加しつつある。この取り組みを通して「地域の方とよく話をするようになった、良い関係ができた」との声もあり、小路が地域の交流の場となって、コミュニティの醸成につながっている。

⑦ この取り組みを多くの小路や周辺地域に拡大し、歴史的建造物や町家との取り組みと連携することで、小路を巡って歩く機会の促進につなげ、情報発信を行っていく。

◆ 自 治 体 名　新潟県三条市
◆ 人　　口　102,143人
◆ 面　　積　432.01km²
◆ 事業開始年度　平成26年度
◆ 事 業 主 体　三条市・八幡町自治会

**連絡先**
三条市経済部地域経営課
TEL 0256-34-5511（内線336）　FAX 0256-36-5111
URL http://www.city.sanjo.niigata.jp/chiikikeiei/page00261.html

## 新潟県村上市　地域のお宝再発見！ 越後村上 涼風の“お地蔵様めぐり”

① 村上市に、江戸時代から伝わる「お地蔵様祭り」という子供達が中心となり行う伝統行事がある。近年では関心が薄れ、お参りに訪れる地域住民が減少していたが、この祭りにスポットライトを当て、地域住民が参加できる行事になった。

② 村上のお地蔵様祭りは、京都、大阪の「地蔵盆」と大変よく似ており、江戸時代の延宝8年（1680年）の記録では、「けふは、地蔵の御えん日にて、町々の辻に、わらべども、供物、灯明をかかげてまつる也」とある。当地域と京都、大阪との交流の歴史を感じる伝統行事である。
お地蔵様を真ん中に据え、子供たちが鉦を叩き、「南無地蔵　カンカンカン・・・」と唱える。各町々から鉦の音が聞こえてくる情緒ある祭りである。

③ 毎年7月23日に行われる「お地蔵様祭り」の10日前程度からの期間で、地域内20箇所を超えるお地蔵様の内6箇所にスタンプ台を設置し、親子や友人同士でまちを巡る「お地蔵様スタンプラリー」を実施している。また、祭り当日には、地域の商店街に綿あめ、射的、輪投げや足湯を設ける「にぎわいイベント」を開催し、多くの地域住民が甚平や浴衣姿で参加するようになってきている。

④ お地蔵様祭りの由来や各自治会等で維持しているお地蔵様の由来や特徴をまとめた、お地蔵様めぐりマップを作成し配布している。
また、交流事業として、お地蔵様のない自治会から子供達の参加を募集し、少子化による担い手不足を解消する取り組みも行われている。

⑤ お地蔵様祭りの由来やそれぞれの自治会などで維持しているお地蔵様の由来や特徴を調べるのに苦労した。地域住民からの聞き取りや過去の記録等を調べた。
また、ただのイベントで終わらないようにスタンプ台の設置場所を毎年変えるなど、地域住民に関心を持たせる仕組みづくりに苦心している。

⑥ スタンプラリーでは、歩いたことがない小路や寺院を訪れ、地域の歴史や伝統文化を感じることができる機会となった。にぎわいイベントでは、広くスタッフを募集したところ、専門学校生が参加しイベント運営を学び、地域との交流の場にもなった。

⑦ 今後は、地域の商店街や各種団体も巻き込んで実施をしたい。具体的には、商店街の空き店舗などを活用し商店街の活性化を促すきっかけになるよう取り組みたい。

◆ 自 治 体 名　新潟県村上市
◆ 人　　口　65,190人
◆ 面　　積　1174.24km²
◆ 事業開始年度　平成24年度
◆ 事 業 主 体　村上地域まちづくり協議会

**連絡先**
村上市自治振興課
TEL 0254-53-2111　内線332　FAX 0254-53-3840（代表）
URL http://www.city.murakami.lg.jp/site/murakami/

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 新潟県糸魚川市　バタバタ茶を活かしたまちづくり

① 糸魚川地域に古くから伝わるタテ茶の一種「バタバタ茶」を復活させ、バタバタ茶を活用することで糸魚川市のPRを行い、交流人口の拡大に寄与している。

② 糸魚川地域に、江戸時代後期頃から庶民の間で伝承されてきたといわれる「バタバタ茶」の伝承を目的として、平成5年4月に「バタバタ茶の会」が設立された。会では、市内の学校等や各種イベントでの普及活動、茶葉の栽培・販売、マスコミへの取材対応などを精力的に行ってきた。

③ 主に以下5点の取り組みを行っている。
・学校行事、こども大会、福祉関係のイベント等で振る舞い。
・郷土の文人相馬御風の邸宅（県史跡）において月1回の振る舞い茶会の開催。
・バタバタ茶の材料であるカワラケツメイの栽培。
・バタバタ茶特有の茶筅「夫婦茶せん」の制作指導。
・ペットボトル「バタバタ茶」のプロデュース。

④ バタバタ茶の紙芝居や記録映像を製作し、イベント時の振る舞いに合わせて上演することで、小学生や保育園・幼稚園児など若い世代に対してバタバタ茶の歴史や郷土の風習をわかりやすく伝承している。

⑤ 一度途絶えた文化であり、地域の関心を取り戻すことは容易ではなかったが、バタバタ茶の会はまちのイベント等に積極的に参加し、地道にバタバタ茶の名前をPRした。その際、イベント会場に草花や囲炉裏など設えを工夫し、お茶についても昔よりも飲みやすい味を開発するなど、イベントだけで終わらない取り組みを展開したことで、市民もバタバタ茶への関心を取り戻していった。

⑥ 若い世代を中心にバタバタ茶の名前が浸透している。また、市外からの問い合わせもあり、バタバタ茶に対する関心は高まっている。

⑦「バタバタ茶の会」会員の高齢化により、会の活動の維持と材料の確保が課題である。

◆ 自 治 体 名　新潟県糸魚川市
◆ 人　　口　46,144人
◆ 面　　積　746.24km²
◆ 事業開始年度　平成5年度
◆ 事 業 主 体　バタバタ茶の会

**連絡先**
糸魚川市教育委員会文化振興課
TEL 025-552-1511（内線2262）　FAX 025-552-8292

## 富山県魚津市　たてもん協力隊（たてもんボランティア）

① 魚津市が誇る“たてもん祭り”は、江戸時代より続く伝統的な海の祭りである。祭りを担っている地区（7町内）のうち、担い手不足が著しい町内では、毎年の参加が難しくなってきている。伝統行事の継続的な開催のため、担い手不足を補うとともに皆で祭りを盛り上げるための“たてもん協力隊”が結成された。

② たてもん祭りは漁師達の信仰があつい諏訪神社の祭礼である。豊漁と航海の無事安全を祈願するため、江戸時代の中頃から現在まで約300年続く伝統行事である。「たてもん」は、高さ約16mの柱に、90余りの堤灯を三角形に吊るし、総重量数トンとされるそり台に立てた船型の構造物で、80人ほどの人々（担ぎ手と引き手）によって引きまわすものである。各町内で1基のたてもんを持ち、現在は7基のたてもんが運行されている。昭和47年に「たてもん」が県の有形民俗文化財、平成9年には「魚津のタテモン行事」として祭り自体が国の重要無形民俗文化財の指定を受けた。

③ たてもん祭りは、毎年8月の第一金・土曜日に開催され、近年の少子高齢化の影響で担い手（担ぎ手や引き手）が不足しており、運行が難しくなっていたところ、魚津市教育委員会とたてもん保存会の共催により、町内を問わず広く募集する「たてもん協力隊」を結成した。小学生以上ならだれでも参加可とすることで幅広い参加を促し、近年は参加者が200人を大きく超え、毎年参加する常連の団体（地区の婦人会や綱引き同好会等）も多い。参加者には毎年デザインが異なる「たてもんＴシャツ」を渡し、皆で着ることで一体感を高めるとともに協力隊参加のリピーター確保に努めている。

④ 大人を対象とした通常募集のほかに、親子での参加も可能とすることで、郷土の伝統行事に対して親子で関心をもってもらえる仕組みとした。協力隊参加当日は、説明会を必ず開催し、たてもんの歴史や各町内の特徴などについて、たてもん保存会の方に解説してもらうとともに、引き回す際の独特の掛け声やコツなども参加者と実践している。

⑤ 担い手不足は、今後も継続的な問題であるため、町内以外から広く持続的に協力を得られるようになることが重要と考える。

⑥ 従来は漁師町の祭りという認識だったものが、国や県の文化財指定やたてもん協力隊の取り組みを契機に、次第に市を代表する祭りとなってきている。町内の努力だけでは祭りの継続が難しくなってきていたが、この取り組みを毎年継続して行うことで、7基そろっての運行が可能となっている。

⑦ 毎年協力してもらっている団体の高齢化もあり、引き手の新規開拓なども必要となってきている。また、従来より旅行業との提携が指摘されているが、参加条件や活動時間帯などクリアすべき問題もあり、実現には至っていない。持続的活動を行うためにもあらゆる検討が必要である。

◆ 自 治 体 名　富山県魚津市
◆ 人　　口　43,832人
◆ 面　　積　200.63km²
◆ 事業開始年度　平成10年度
◆ 事 業 主 体　魚津市教育委員会、魚津たてもん保存会

**連絡先**
魚津市教育委員会生涯学習・スポーツ課文化係
TEL 0765-23-1045　FAX 0765-23-1052

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 石川県加賀市　坂網鴨ブランド化事業

① 加賀市のラムサール条約登録湿地「片野鴨池」周辺で江戸時代より「坂網猟」という伝統的な鴨猟が続いている。近年、坂網猟師の高齢化が進み、存続が危ぶまれていたが、この猟で捕獲した坂網鴨のブランド化を進めることで、後継者育成とともに観光誘客事業を展開している。

② 坂網猟は江戸時代より300年以上続いており、以前は武士の鍛錬として行われていた。銃で撃たないその猟法ゆえ捕獲数は少ないが、鴨を傷つけずに捕獲できることから捕獲した坂網鴨は最高のジビエであるといわれている。第2次大戦後、米兵が鴨池で銃を撃ちまくったが、当時の捕鴨組合長の村田安太郎が単身GHQに直訴し、命をかけて銃猟をやめさせたという歴史がある。昭和44年には石川県有形民俗文化財に指定された。

③ 11月から2月の猟期間中に地元で「坂網鴨食談会」を開催し、首都圏をはじめ都市部から一般客を誘客している。一方、東京では著名人を招き「加賀の晩餐会」を開催し、実際に坂網鴨を食べる機会を設け、情報発信を行っている。開催に際してはフードコーディネーターの専門的アドバイスをもらいながら進めている。

④ 猟が行われないオフシーズンには、子供達を対象とした坂網猟体験教室や、後継者育成のための坂網猟説明会などを開催している。そのほか、鴨池周辺の保全活動では坂網猟師や地元住民をはじめ地域全体で取り組むことで、坂網猟が続いてきた所以である「ワイズユース（賢明な利用）」の理念を伝えている。平成25年度には、「坂網猟稽古場」を整備し、猟師の技術向上をはじめ、子供達や観光客を対象とした体験施設としてさらなる情報発信を行っている。

⑤ 都市部でブランド化PRは行っているが、年間200羽程度しか捕獲されない限定的なものであることから、単独では誘客効果として弱い部分がある。様々な要素を結びつけ、多面的に発信していくことが結果的には地域全体を盛り上げていくことにつながると考えられる。また、地元においても知名度は決して高いとはいえないため、都市部と合わせて地元でも情報発信を行っていくことが必要である。

⑥「坂網鴨」というキーワードを旗印として、自然、山から海までの多様な食材、伝統工芸、観光施設、温泉など地域全体の魅力ある要素を関連付けることで、一つの観光事業として活発化した。今後ますます知名度が上がることで、さらなる経済効果も期待できる。

⑦ ブランド化を行う事で高まる需要に対する供給の仕組みづくりの一環として、今後は坂網鴨だけではなくその他の天然鴨も利用し、昔から地域に根づいてきた鴨料理文化の発展を目指す。また、後継者となる人のやりがい創出と、文化的地位の向上を目的として国指定重要民俗文化財の指定についても検討を行いたい。

◆ 自治体名　石川県加賀市
◆ 人口　70,885人
◆ 面積　306km²
◆ 事業開始年度　平成22年度
◆ 事業主体　加賀市

**連絡先**
加賀市地域振興部環境課
TEL 0761-72-7892　FAX 0761-72-7991

## 石川県能美市　加賀押しずしの魅力の伝承・普及

① 郷土料理「押しずし（お祭りのときに作る寿司。すし飯を小さなおにぎりにしたものの上に、家庭ごとで異なる具を載せ、笹や柿の葉で包み、すし桶で押したもの）」を未来に引き継いでいくために、作り方の講習やイベント出店を行っている。

② 加賀押しずしの起源は明らかではないが、南加賀地方の各家庭で祭りになるとそのお祝いの食べ物として地域独特の郷土食として定着している。また加賀押しずしづくりは、家族総出で役割分担して作られていた（おばあちゃんがすし飯をにぎり、孫たちが笹を並べて具を載せ、お母さんが笹を包み、お父さんがすし桶に並べて押す）ため、自然な多世代交流を生む場となっていた。

③ 加賀押しずし研究会に所属する、ほのかグループ員、あい奈ずし員、食生活改善委員、JA女性部員、押しずし大好きな男性・女性などから構成される会員が、それぞれ無理なくできる範囲で「加賀押しずしの作り方講習」や普及のためのPR活動としてイベント出店を行っている。

④ 核家族化で「加賀押しずし」を知らない家庭も増えたことに危機感を抱き、市内で開催されるイベントを中心に、気軽にこの郷土食を知り、食べることができるよう「加賀押しずし」の販売を行っている。また、公民館行事や国際交流イベント（毎年8月に日本国内の留学生が石川県内でホームステイをする「JAPAN　TENT」など）で「加賀押しずし」の作り方講習を行って、食文化伝承の機会を創出している。

⑤ これまで能美市の郷土食として各家庭に自然になじんだものであったために、その作り方の調査が本格的に行われてこなかった。そこで、平成24年度に加賀押しずし研究会が地域資源発掘事業（観光交流課）と連携し市内の各家庭を対象に押しずしの作り方（レシピ）に関する調査を行い、各家庭ごとに異なる具材の詳細や里山では笹の葉、平野部では柿の葉が使われていることが分かった。

⑥ 平成24年度の調査結果をもとに、「加賀押しずし」の作り方や歴史をわかりやすくまとめたパンフレットを作成した。また、国際交流イベントで「加賀押しずし」作り講習を行う際、魚肉類を食べられない留学生向けに野菜だけを使った野菜ずしを考案し、郷土料理の新たな挑戦に成功した。

⑦「加賀押しずし」が地域で愛されていることを大切にし、また、加賀押しずし研究会の活動を身の丈に合ったものにしたいと考え、補助金に頼らず、負担が大きい市外へのPR活動は控え目にして、市民に愛される郷土食として市内での伝承・普及に努めたい。

◆ 自治体名　石川県能美市
◆ 人口　49,648人
◆ 面積　83.85km²
◆ 事業開始年度　平成23年度
◆ 事業主体　加賀押しずし研究会

**連絡先**
能美市市民生活部地域振興課
TEL 0761-58-2212　FAX 0761-58-2291
Facebook https://www.facebook.com/kagaoshizushi
URL http://kagaoshizushi.com/

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 石川県津幡町　歴史国道イベント「くりから夢街道ウォーク 加賀vs越中 源平大綱引き合戦」

① 津幡町と富山県小矢部市の境に位置する倶利伽羅峠の山頂で、咲き誇る八重桜の下、両市町からの参加者が源平合戦をモチーフにした大綱引きを行う。大綱引き合戦の後は、津幡、小矢部それぞれの方向に分かれて旧北陸道を散策しながら峠を下る。

② 倶利伽羅峠は、寿永2年（1183年）に木曾義仲率いる源氏軍と平維盛率いる平家軍が戦いを繰り広げた地である。この時、義仲軍は、牛の角にたいまつを付け敵中に放つ「火牛の計」という計略を用いて勝利したと伝えられている。この地を通る旧北陸道は、加賀藩の参勤交代で用いられるなど、その歴史的・文化的価値が評価され、「歴史国道」に認定されている。また、峠一帯は、「昭和の花咲かじいさん」と呼ばれた高木勝己翁が19年間にわたり八重桜の苗木を植え続け、「加越の吉野山」とも呼ばれる八重桜の名所となっている。

③ 歴史国道イベント「くりから夢街道」は、平成8年から毎年様々な趣向を凝らして開催されてきた。平成15年から（平成15年は雨天中止のため、実際は平成16年から）は源平倶利伽羅合戦をモチーフとした大綱引き合戦を実施し、毎回約200人が参加し、大変盛況である。

④ 大綱引き合戦の前に、子供向けのクイズ大会を行い、倶利伽羅峠の歴史への興味関心が高まるよう工夫している。また、旧北陸道の散策時には、観光ボランティアガイドによる街道沿線の歴史解説を行い、知識や理解が深まるよう工夫している。

⑤ 毎年ほぼ同じコースや内容で開催してきたことから、近年参加者が減少傾向であった。そこで、昨今の「ウォーキング」ブームをヒントに、コースや内容はほとんど変えず、イベントのタイトルに「ウォーク」を付け、募集チラシの全体イメージも変更したところ、平成26年は過去5年間で最多の参加者数となった。

⑥ 歴史国道イベント「くりから夢街道」を通して、参加者は、地域の歴史の舞台を実際に訪れ、地域資源としての「倶利伽羅峠」を再認識することができる。また、津幡側と小矢部側に分かれて対戦する大綱引きは、それぞれの地域住民としてのアイデンティティを刺激するアトラクションである。これらのことから、当イベントは住民の郷土愛の醸成に大きく寄与しているものと考える。

⑦ 参加者の確保が課題であるが、その点は創意工夫を重ね、小矢部市と共にこのイベントを継続していきたいと考えている。また、予算の大幅な増額は期待できない現状で、この地の特徴を最大限に活用し、地域住民の中で「ご当地イベント」として定着できるよう取り組んでいきたい。

◆ 自治体名　石川県津幡町
◆ 人口　37,764人
◆ 面積　110.44km²
◆ 事業開始年度　平成8年度
◆ 事業主体　歴史国道イベント実行委員会、北國新聞社、北日本新聞社

**連絡先**
津幡町産業建設部交流経済課
TEL 076-288-2129　FAX 076-288-6470

## 石川県中能登町　（昭和35年 石川県指定無形文化財指定）能登上布振興事業

① 中能登町には、約2000年の伝統がある「能登上布」があり、昭和35年に石川県の無形文化財に指定されたが、完全な手工業のため生産性が低く、「織り子」と呼ばれる織工の高齢化や後継者問題で衰退してしまった。
平成3年から能登上布の復興を目指し、商品化や特産品を開発し、観光客を誘致するまでになった。

② 能登上布は、約2000年前に崇神天皇の皇女淳名杵入姫命が、この地に滞在した際に機織を教えたことが始まりと伝えられている。大正・昭和・平成と時代を経るに従い、化学繊維の出現や洋服の普及などで次第に需要が減り、生産が低下していき、昭和57年には1軒の織元を残すのみとなり、昭和60年代に入るとついに1軒も無くなった。
そこで、平成3年に能登上布の復興を目指し、「能登上布ビジョン作成委員会」を結成した。その後、平成8年に「能登上布会館」を建設し、作業場・体験コーナー・着物や小物の展示即売室を備えた発信基地が誕生した。

③ 能登上布を愛する町民で組織された、「能登上布振興協議会」が能登上布会館の指定管理者となり、先人の偉業を忘れず、伝統の技を次の世代に伝え継ぐ取り組みをしている。

④ かつて輝かしい発展をとげた能登上布に、再び人々の関心が集まりつつある。それは、天然素材を通しての自然志向や、人のぬくもりが感じられる手作り志向ともつながっているように思われる。そこで能登上布のもつ独特の風合いを守りながら、着尺にとどまらず、幅広い商品展開を試みている。

⑤ 一度、衰退した産業であるため、専門技術を持つ人材を探すことや特産品の商品化に苦労した。能登上布会館を基点とした新たな商品開発や販売実績を挙げることで、織り子も増えてきた。
商品の販売促進や製品作りに生きがいを持ってもらえるシステム作りをして行くことが、解決策の1つだと思われる。

⑥ 風土と住民の心が一体となった手織りの能登上布に誇りをもち、時代の流れの中で伝統産業を継承してきたことで、平成26年4月、町内の国道沿いにオープンした道の駅「織姫の里なかのと」での展示・販売は、県内外の方々から好評を得ており、着実に販売実績を伸ばしている。また、それに伴い能登上布会館への来場者も増加しており、誘客資源の乏しい当町において明るい兆しを見せている。

⑦ 今後の課題としては、織り子の高齢化に伴う後継者の育成が挙げられ、どう後世に末長く能登上布を存続させていくかを検討している。
また、今後の展開としては、平成27年3月14日開業予定の北陸新幹線や平成27年春の能越自動車道の七尾市までの開通を機に、中能登町へ訪れる人が増えることが予想されることから、更なるPRを図り、交流人口の拡大、販売促進の計画や方法にこれまで以上に力を注ぎ、伝統産業の継承・振興に努めたい。

◆ 自治体名　石川県中能登町
◆ 人口　19,114人
◆ 面積　89.36km²
◆ 事業開始年度　平成3年度
◆ 事業主体　能登上布振興協議会

**連絡先**
中能登町企画課
TEL 0767-74-2806　FAX 0767-74-1300
URL http://www.town.nakanoto.ishikawa.jp

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 長野県長和町　中山道和田宿の保全活用に関わる活動

① 中山道や和田宿に残る歴史資産を保全し、活用していくことで、当地域の文化的価値を高め、地域振興にも寄与するボランティア活動を行っている。

② 江戸時代、中山道の難所である和田峠を控えた和田宿は、逗留する旅人も多く、賑やかな宿場町であった。時代の変遷とともに、先人らが育み残してきた歴史資産も希少となってきたなかで、地元住民の有志により、中山道や和田宿に残る歴史資産を保全し、これを活用することを目的に、平成19年に「和田宿おてんまの会」が設立された。

③ 現在会員は20人で、史跡中山道の道普請や草刈り作業や、和田宿の歴史的建造物の保全作業などを月1回のペースで行っている。また、地元中学校の総合学習における「和田宿学習」では、講師として、生徒らに宿場の歴史や現在に至る経過等の教示を行っている。

④ 歴史的文化資産を有効に活用する先進地を訪ね、当該活動への参考としている。

⑤ 会設立から7年が経過し、会員の高齢化が課題となりつつあり、今後、若手や他地域からの会員募集も視野に入れたいと考える。
また、中山道や歴史的建造物の幾つかは、国史跡に指定されており、峠道への標柱設置というようなアイデアは、関係機関との協議が必要となることもあり、実行するまでに時間を要するケースがあるが、現在、町では「中山道保存管理計画」を策定中であり、当会における歴史資産活用のアイデアも早期に実施できるよう検討を行っている。

⑥ 和田峠山中の中山道は、良好に維持されて、近年、ここを通る歩行者も増加するなかで、度々お礼や声援の言葉を受け、会員らのさらなる活動の励みとなっている。会員らの献身的な活動は、中山道や和田宿における歴史資産の保存活用面においても、「点」の維持が「線」として繋がる役割の一端をも担うものである。また、先述の地元中学校での「和田宿学習」では、会員らが「生き字引」として生徒と直接触れ合うことで、生徒が故郷を宝として誇れるような意識も着実に浸透しつつあるように感じられる。

⑦ 少子高齢化が深刻化する当地域にあって、宿場の歴史遺産を良好に保存し、次世代に伝えていくにはここに暮らす住民らの意識の高揚が必至であり、会員らの献身的な活動は少なからず影響を与えているものと考えるが、行政と住民らが一体となった地域振興全体のあり方が問われるものである。

◆ 自治体名　長野県長和町
◆ 人口　6,780人
◆ 面積　183.95km²
◆ 事業開始年度　平成19年度
◆ 事業主体　和田宿おてんまの会

**連絡先**
長和町企画財政課まちづくり政策係
TEL 0268-68-3111　FAX 0268-68-4011

## 長野県高森町　吉田の煙火

① 高森町の吉田地区で開催される奉納煙火。南信州（飯田下伊那地区）で最も古い歴史を持つ煙火の一つ。一時期途絶えていたこともあるが、その都度復活し継承してきた。今年、町の無形民俗文化財へ指定された。子供も含め、区民全体で煙火を盛り上げている。

②「吉田の煙火」は、天下太平や疫病退散、五穀豊穣を祈って、地区内の神社「吉田神社」への奉納煙火として元禄年間から花火を打ち上げてきた。戦中・戦後また昭和36年の水害(36災害)の時期には中断したこともあるが、その都度復活させ、保存会を立ち上げて継承してきた。

③ 毎年、9月最後の土曜日に地区内で奉納煙火を行う。昔使っていた花火を打ち上げるための用具を大切に保存し、区民会館で展示している。常に人の目に触れるようにしていることで、大変保存状態が良い。さらに、この用具は飯田下伊那地域での歴史的価値も高いため、飯田市美術博物館にて期間展示を行った。また、今年、町の無形民俗文化財に指定された。これをきっかけに「吉田の煙火」と「高森町吉田地区」を町内外にアピールしていく。

④ 区民の参加を促す一つの手段として、平成10年以降、子供花火や保育園の子供の踊りも加えた新しい取り組みを行っている。このことにより、地域の活性化につながっている。また、煙火に対する区民の理解を深めるため、「寺子屋講座」と題し、この煙火のことが記載されている古文書の解説講座を区民会館で開催した。また、区民会館のロビーには、過去の煙火用具が展示されているほか、会館の入口は獅子舞の屋台をかたどるなど会館全体で祭りをイメージし、区民の伝統芸能継承の意識を高めている。

⑤ 花火の打ち上げは費用がかかることなので、事業を続けていくことに苦労している。煙火用具の保存に関する補助は町教育委員会にあるが、花火の打ち上げ自体はどこの補助もなく、全て自己（吉田区）負担。これは、地域住民の協力あってこそできることなので、保育園児に参加してもらうなど、新しい取り組みを行い、子供のころから地域の伝統である煙火を守る気持ちを育てていく。

⑥ 子供達の参加に取り組んだことにより、区民の世代を超えた交流につながった。また、「寺子屋講座」により、煙火に対する区民の理解が深まった。何より、煙火をきっかけに地域のコミュニティが形成され区民の結びつきがより強まった。

⑦ 歴史的価値が高いとされている過去の煙火用具を、どの様に保存していくか。区民会館に展示し、常に区民の目に触れてもらうことで、この煙火と煙火用具を守っていく気持ちを区民の中に育てていきたい。

◆ 自治体名　長野県高森町
◆ 人口　13,527人
◆ 面積　45.26km²
◆ 事業開始年度　平成26年3月に町の無形民俗文化財に指定
◆ 事業主体　吉田煙火保存会

**連絡先**
高森町経営企画室
TEL 0265-35-9441　FAX 0265-35-8294

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 長野県松川村　有明山語りの会

① 松本・安曇地区に伝わる歴史や民話を題材に、語りと邦楽音楽で伝統文化の継承と再発見を目的として結成。民話・伝説・歴史を新たな世代に伝え、地域交流により郷土の魅力の情報を発信し、観光PRもしていく。

② 本団体は、日本の伝統楽器をバックにした語り演奏に興味を持った団員が、次世代の子供に信州安曇野のふるさとの民話・伝説・歴史を継承することができないか、と考え、平成18年11月に設立された。

③ 村内のボランティア活動から活動に入り、村内外のイベントに参加。信州DCキャンペーンでは、駅からハイキングのおもてなし活動や、ガイド役もこなした。また、JRリゾートビューふるさと号で大糸線沿いの景観を大切にしながら、常念岳や有明山の民話伝説を紹介し、観光客への普及活動を行っている。また、県外との交流も深めている。平成25年度の活動では、三重県の紀北町と交流活動を行い、紀北町内の「種まき権兵衛保存会」と文化交流をし、郷土の民話や歴史などの文化面からの交流をした。

④ この地域の特異性を生かし、松川村細野地区の舟方郷に関係した鈴虫と舟方さまの伝説や、西行法師や戸放ケ岳、うずめ神社に関係した”有明山の風の語らい”神話伝説も紹介しており、毎年うずめ神社の春祭りには奉納演奏をし、伝統継承のため活動している。平成25年度の活動としては、先述のJRイベントや、8月には阿部県知事との伝統文化を生かした地域づくりについての意見交換会に参加するなど、積極的な伝承活動を行っている。

⑤ グループ活動がマンネリ化しないような成長と発展が課題である。メンバーのモチベーションを上げ、継続させていくことを考えることが重要である。また、活動を活発にするにはコストもかかり、資金面のやりくりが難しく、無償ボランティアの限界もある。打開策として、①語りの実力の向上　②観光イベントの参加（資金吸収のできるような舞台の選択）　③JR関連の活動の積極的参加（北陸新幹線や東京オリンピックを視野に）　④事業の選択（いくつかの事業を別組織へ移行する）　この4案を考えている。

⑥ 村民に、成果報告の写真展やうずめ神社の祭りのDVDの作成などを行うことで、文化風土の継承地域の知名度の向上を見込むことが出来た。それによって、村のPRにもつながり、地域の活性化に繋がっていくと考える。

⑦ 以下の3点が課題と今後の展開である。
- 語りの深さを専門的に追求しながらレベルの向上を図る。
- いくつかの事業を関連団体に移行すること。
- ボランティア路線と活動資金の確保路線を層別して活動する。

◆ 自治体名　長野県松川村
◆ 人口　10,072人
◆ 面積　47.08km²
◆ 事業開始年度　平成18年度
◆ 事業主体　地域住民

**連絡先**
松川村総務課政策企画係
TEL 0261-62-3111　FAX 0261-62-9405

## 岐阜県瑞浪市　中山道維持管理事業、文化財調査保存事業

① 貴重な歴史・文化遺産である中山道を良好な状態で後世に伝え、また活用を図るために国史跡の指定を目指す。
また往時の面影を残す大湫町（旧大湫宿）の建造物の保存・活用のための計画を策定する。

② 瑞浪市内の中山道は、市北部の丘陵地帯である日吉町・大湫町・釜戸町を横断し、全長は約14.3㎞である。一部が県道65号線（主要地方道恵那御嵩線）と重複してアスファルト舗装等がなされているが、約5.2㎞が地道のまま残っており、また一里塚等の交通遺跡も良好な状態で保存されている。
また、瑞浪市内には大湫宿、細久手宿という二つの宿場が設置され、特に大湫町内には往時の面影を残す建物が多数残されている。

③ 瑞浪市では、平成4年度から平成19年度にかけて道路、一里塚等の整備を実施し、その保存に取り組んできた。現在、整備箇所を国の史跡に指定するために図面作成や地権者との協議を行っている。
また平成26年度から、大湫町内の建物群を保存するため基本構想を策定する。

④ 中山道整備箇所の大部分は市道に認定されており、管理者である土木課と協議を行い修繕等を実施している。史跡指定後は保存管理計画を策定する予定である。
また、大湫町内の建物については商工課と協議等を行い計画を策定中である。

⑤ 大湫町内では人口移動や高齢化、また世代交代等によって街並みの維持が困難になりつつある。空き家となる建物もあり、修繕の費用が大きな負担となっている。
伝統的建造物群保存地区に選定されれば、修繕等に際して行政からの補助が可能となるので、地域住民と協議を行いながら、景観や建物を保全するための方法を検討し、制度化を目指していきたい。

⑥ 後世に道筋が変えられてしまった道路を改変以前の道筋に復元するなど、史跡の価値を高め、また安全性の向上等に効果的であった。

⑦ 大湫町神明神社・白山神社の例祭、また例祭に用いられる山車、地域の食文化など、中山道や旧大湫宿周辺には、まだ広く知られていない有形・無形の文化財が多数存在すると思われる。今後、これら文化財の調査を行い、積極的に活用していくことが必要と考える。

◆ 自治体名　岐阜県瑞浪市
◆ 人口　39,414人
◆ 面積　175km²
◆ 事業開始年度　昭和29年度
◆ 事業主体　瑞浪市

**連絡先**
瑞浪市教育委員会スポーツ文化課
TEL 0572-68-7710　FAX 0572-66-1122

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 静岡県静岡市　駿府匠宿における伝統工芸品の情報発信

① 駿府匠宿では、今川、徳川時代から受け継がれてきた漆器、蒔絵、指物、染物等の伝統工芸の数々と、その後興った近代産業をテーマに、「創る、遊ぶ、触れる、観る、味わう」といった、静岡市ならではの生活文化を幅広い年齢層の人達に体験してもらい、静岡市の伝統産業の振興を図っている。

② 静岡市の伝統工芸の集積は、江戸時代の静岡浅間神社造営等に起因し、全国より優れた技術を有する職人が集められ、その技術を地域の人々に教え伝えていったことが、静岡市の地場産業の始まりといわれている。
現在、経済産業大臣指定伝統工芸品として駿河竹千筋細工、駿河雛具・駿河雛人形の3業種があり、静岡県指定郷土工芸品として、駿河指物、駿河蒔絵など7業種がある。

③ 駿府匠宿では、伝統工芸品を中心とした地場産品をテーマに、工芸品の展示（常設展示及びギャラリー展示など)、創作体験、職人による工芸品の製作実演などを通じて、来場者に洗練された職人技術、優れた素材など、伝統工芸品の価値や魅力を伝えている。
中でも、伝統工芸の技に自ら挑戦できる体験型施設として「創作体験工房」があり、「染竹工房」など3工房において、7種類の工芸が体験できる。来場者は豊富に用意されたキット・材料を選び、インストラクターの指導のもとで、職人の優れた技術を感じながら工芸品づくりを楽しむことができる。

④ 伝統工芸のより高度な技術を学びたい人のために「教室体験（カルチャー教室)」を開設。伝統工芸について、より深く学ぶことができ、講師である職人の手仕事に触れ、卓越した技術や伝統工芸品が有する美しさを体感する機会となっている。また、体験工房内には、竹千筋細工や漆器など、本物の職人が、仕事の現場を見せる「実演コーナー」があり、来場者が伝統工芸の洗練された技術を間近で見ることができる。

⑤ 工芸品の製作実演、教室体験（カルチャー教室）の講師を伝統工芸の職人が務め、また、創作体験用キットも職人が製作したものを使用するなど、伝統工芸業界と密接に関わり、連携しながら取り組みを進めている。また、多彩な展示会・即売会の実施、各種イベント等の実施により、賑わいを創出し、観光バスによる団体観光者の誘客も実施。多くの来場者に伝統工芸品を中心に地場産品に触れる機会を設けている。

⑥ 駿府匠宿の常設展示やギャラリー展示を通じて、来場者に広く伝統工芸品の魅力や価値を情報発信することで、地場産業の振興に貢献している。

⑦ 今後は、伝統工芸品を取り入れたライフスタイルを提案できる施設をめざし、伝統工芸品等の価値や魅力の情報発信を強化していく。また、これまでの広く一般向けへのPRに加え、地場産品に関心の高い層など、ターゲットを絞った誘客宣伝活動を展開することで、施設の来場者数の増加や伝統工芸品等の販売促進を図っていく。

◆ 自治体名　静岡県静岡市
◆ 人口　716,450人
◆ 面積　1,411.93km²
◆ 事業開始年度　平成11年度
◆ 事業主体　静岡市

**連絡先**
静岡市経済局商工部産業振興課
TEL 054-281-2100　FAX 054-284-3987

## 静岡県沼津市　大瀬まつり

① 沼津市で100年以上の伝統をもつ「大瀬まつり」は、毎年4月4日に西浦地区にある「大瀬神社」にて開催されている。一時期はまつりの関係者も少なくなったが、行政と地元関係者の協力の下、関係者の確保及び、PR活動を実施した結果、現在では沼津を代表する春の風物詩として多くの観光客を誘致するまでになった。

② 駿河湾沿岸にすむ周辺住民は、海の守護神として崇敬されている大瀬神社の祭神「引手力命（ひきてちからのみこと)」に対し、海上の安全と大漁を祈願し、事あるごとに報賽をしていた。
毎年4月4日に開催されている例大祭では、男の神である引手力命を、漁師の男たちが喜ばせるため、女の長襦袢を着て、顔を白く塗り、オカメやヒョットコの面を頭に乗せ、両手にはそれぞれ扇子を持って摺鉦や太鼓に合わせて「チャンチャラオカシチャラオカシ、アノコノシャッツラマダオカシ」と歌いながら船上での踊りを始めたことが、現在の大瀬まつりにおける「勇み踊り」のルーツと言われている。

③ 毎年4月4日に開催している大瀬まつりであるが、平成元年度からは内浦漁港で行われる「内浦漁港祭」と同時開催をしている。内浦漁港祭では、漁港内を「勇み踊り」の踊り手が乗る「踊り船」が周回・披露するなど、沼津市内外に広く周知している。

④ 沼津市西浦・内浦地域の少子高齢化により、大瀬まつりの経験者および、「勇み踊り」の踊り手が徐々に減ってきており、大瀬まつりの中で地元住民の有志による「勇み踊り」を披露し、積極的な伝統文化の継承活動を行っている。
また、行政においても、大瀬まつり開催に伴い、職員有志による「勇み踊り」を披露する「踊り船」を出船させ、大瀬まつりの伝統文化の継承活動を支援している。

⑤ 少子高齢化が今もなお進行しており、大瀬まつりの詳細を語ることのできる人材が年々少なくなってきている。今後は沼津市西浦・内浦地域は勿論、沼津市全体の住民を増やしていくとともに、大瀬まつりの市内外への更なるPR活動、大瀬まつりの歴史の継承および「勇み踊り」の継承活動をしていく必要がある。

⑥ 現在では、沼津市の春の風物詩として定着しており、近年では市内外から来客数が20,000人（大瀬まつりと内浦漁港祭の合計）を超えるまつりになっている。

⑦ 今後は、市内外へのPRは勿論、大瀬まつりに興味を持ってもらった人々に大瀬まつりの名物「勇み踊り」を体験してもらい、実際に踊りを覚えてもらう等の活動を実施していく。

◆ 自治体名　静岡県沼津市
◆ 人口　203,806人
◆ 面積　187.13km²
◆ 事業開始年度　平成元年度
◆ 事業主体　大瀬神社、大瀬海浜商業組合

**連絡先**
沼津市企画部政策企画課
TEL 055-934-4704　FAX 055-934-5011

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 静岡県三島市　エコセンター（旧三島測候所）の再生

①「三島市エコセンター」は、かつて三島測候所として使用されていた建物の建築的・歴史的価値に着目した三島市が国から購入し、環境教育、環境ボランティアの拠点として整備し、一般公開している建物である。

② 本建築物は、昭和5年に測候所として建てられたもので、市内で一番古い鉄筋コンクリート造の建築物である。
玄関入り口の半円形欄間のステンドグラスや、内装の大理石、細部に工夫が凝らされたヨーロッパ風のモダンなデザインが特徴の建物である。
平成15年3月の無人化により、測候所としては不要となり、取り壊す予定であったが、地元住民からの保存に対する強い要望を受け、平成19年3月に、建物と土地の一部を市が購入し、土地は、測候所記念公園として整備し、建物は、修繕や地球温暖化防止の啓発資料等の整備を行い、平成21年4月から一般公開するとともに、環境ボランティアの活動拠点としても活用している。

③ 平成21年度よりストップ温暖化推進協議会等の環境ボランティア団体の協力により、富士山に関する講演会、小中学生を対象とした環境に関する学習会、工作教室の開催など、環境学習、環境に関連する人材の育成の場等に広く活用されている。
また、地元町内会の祭りが毎年開催されるなど、地域コミュニティの拠点としても活用されている。

④ 市民に文化的・歴史的価値を広く知ってもらうため、昔に使用されていた観測機器を一般に公開している。また、当時の三島測候所と関連の深い測候所の元所長に精査してもらい、埋もれていた希少な観測装置の展示を今後も増やしていきたい。

⑤ 利用者の増加を目指して、環境啓発関連の展示品の更新やイベントを毎年行っている。
また、敷地内に地元住民が管理する花壇を造成したり、環境関連図書の貸出しを行うなど、施設の魅力向上のほか、利用可能団体の範囲を拡大し、環境ボランティア団体に限定することなく、多くの団体や町内会との連携を図り、使用しやすい施設を目指していく。

⑥ 成果としては、以下の3点である。
・歴史的・文化的価値のある建造物を後世に継承することができた。
・地域のコミュニティの形成に一役買うことができた。
・市民の環境意識の向上につながった。

⑦ 更なる環境教育の充実のため、体験機器等の整備が必要である。
建物は鉄筋コンクリート製とはいえ、建築後84年が経過し、多くの修繕が必要とされているが、財政上の制約で困難な面がある。

◆ 自治体名　静岡県三島市
◆ 人口　111,236人
◆ 面積　62.13km²
◆ 事業開始年度　平成21年度
◆ 事業主体　三島市役所環境政策課

**連絡先**
三島市環境市民部環境政策課
TEL 055-983-2647　FAX 055-976-8728

## 静岡県島田市　愛するあなたへの悪口コンテスト

① 島田市柳町に、江戸時代から人々が悪口を披露しあうというユニークな風習を行っていた通称「悪口稲荷」がある。一旦衰退したこの風習を現代風にアレンジして、悪口コンテストとして復活させた。

② 島田市柳町の稲荷神社は、人々が親しみをこめて、「御陣屋のお稲荷さん」と呼んでいる。伝承によれば、もと島田代官所の屋敷神だった御陣屋稲荷は、人の出入りを禁止されていたが、新春初牛祭事には開放した。この祭りの際は、付近の町並みでは献燈を軒につらね、付近数箇所に町の珍しい出来事を風刺した人形を造って飾りつけ、参詣人の興を引かしめた。風刺人形は、賽銭箱に投げ込まれた地口（悪口）の文句を基に造られる。この風習が、ずっと継承されて「悪口稲荷」の通称が定着していたが、プライバシーを尊重する現代においては、一旦は、衰退する事となった。10年前に、地域活性化施策として、この風習を現代版にアレンジして悪口コンテストとして、復活させた。

③ 平成25年度で第10回をむかえた。毎年、9月～12月初旬にかけて、全国公募を行っている。毎年5,000を超える作品が送られてくる。12月末から2月上旬にかけて審査を行い、2月中旬に発表を行う。最終入選者の表彰式は、3月下旬の御陣屋稲荷の祭典の際に行っている。

④ 単なる「悪口」のコンテストでなく、「愛のある悪口」とした事で、一旦、衰退したこの風習のネガティブな部分を払拭し、復活させた。島田市はじめ「悪口稲荷」を全国に発信しようという企画であるため、全国版の公募情報誌やインターネットを使って公募している。また、地元の若い人にこのユニークな風習を知ってもらうため、生徒の応募を促すよう近隣の中学・高校へ案内し、授業やクラブ活動の一環として学校単位での応募を呼びかけている。

⑤「悪口」への抵抗感を払拭するため、愛のある悪口である事が一番の選考基準である事を徹底して来た。また、審査委員長に直木賞作家　村松友視氏を据える事で、コンテストのステータスを上げる事ができた。一方、回を重ねる毎に認知が広がり、応募数が増えたが、作品の質にこだわろうという方針で、1人の応募数に制限を設けた。現在は1人10作品までとしている。

⑥ 応募数は、1人の応募数制限があるにもかかわらず、毎年、日本全国から5,000を越える応募がある。また、近年、このコンテストを理解される先生達が増え、学校単位での応募も増えている。第10回では、高校生の作品が大賞を受賞した。また、ユニークなコンテストであるため、マスコミからの取材も多く、島田市の認知拡大にも繋がっている。

⑦ 全国的な関心が広がっているのに比べ、地元からの応募が少ない。足元への広報を更に強化し、かつて、地元の人々の楽しみであったこの風習を理解してもらうよう努めたい。

◆ 自治体名　静岡県島田市
◆ 人口　101,159人
◆ 面積　315.9km²
◆ 事業開始年度　平成16年度
◆ 事業主体　愛するあなたへの悪口コンテスト実行委員会

**連絡先**
島田市企画部政策推進課地域振興係
TEL 0547-36-7197　FAX 0547-34-1425

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 静岡県御殿場市　「御殿場みくりやそば」普及促進活動

① 御殿場地方に古くから独自に伝わる郷土料理「御殿場みくりやそば」を普及・促進することで、御殿場の食文化や歴史に触れながら、市内認定振舞店舗への観光客の取り込み等を図り、市内の活性化や町の賑わいの創出を進めている。

②「御殿場みくりやそば」は、古くから御殿場（みくりや＝御殿場の古い地名）地方の農家等において、お祝い事やお祭り、農繁期が終わった時に、親せきや近所の人を自宅に招く人寄せを行い、その際、招いた客人に対する「おもてなし」として家の人が色々な料理とともに、主に家の女性が山芋をつなぎに使った御殿場地方独自のそばを打って振る舞うという風習があった。

③ 観光協会や青年会議所等の各種団体の協力のもと平成24年2月に「御殿場みくりやそば」を普及促進するボランティア団体（「御殿場みくりやそば」あなたのそばで振舞隊）を結成し、「御殿場みくりやそば」の定義を定めた。更に市内外で行われる各種のグルメイベント等に積極的に参加し、「御殿場みくりやそば」の普及促進を図っている。また、市内店舗に協力を仰ぎ普段から「御殿場みくりやそば」を気軽に食べられるように認定振舞店制度を設け、平成26年6月1日現在32店舗が登録されている。

④ 近年では家に人を招くことも、そばを打つことも少なくなり、市民の中には「御殿場みくりやそば」自体を知らないという人も増えてきたため、市内小学校における「親子そば打ち教室」の開催や、振舞隊自主イベントにおいて市民を対象とした「そば打ち教室」を開催し、多くの皆さんに「御殿場みくりやそば」の存在をPRするとともに、次世代に渡り継承できるように独自の打ち方・製法を伝承している。

⑤ 振舞隊員は皆ボランティアで活動している為、平日の仕事の合間を縫って主に土・日曜日に開催されるイベントに出店の手伝いを行っているが、イベント自体数多くあり、ボランティアの負担が大きすぎるため、市内の各種ボランティア団体にも振舞隊に加入してもらい、振舞隊が出店できないような場合やイベントが重なった場合には、出店にかかる全ての活動を全面的にお願いしている。

⑥ 市民の中にも「御殿場みくりやそば」が浸透しつつあり、また各店舗においても注文数が明らかに増えていることから、観光客等が実際に食べに来る機会が増えていると思われる。各種の新聞やテレビ・雑誌等の取材も頻繁に来るようになり、御殿場の知名度向上に大きな貢献を果たしていると思われる。

⑦「御殿場みくりやそば」を更に普及する為、御殿場市内で操業している工場等の事業所の社員食堂等で「御殿場みくりやそば」をメニューとして提供する「協力事業所」の募集や、企業と相互のPR活動を行う「企業サポーター」制度を導入し、更なる普及促進に努めている。

◆ 自治体名　静岡県御殿場市
◆ 人口　89,193人
◆ 面積　194.85km²
◆ 事業開始年度　平成23年度
◆ 事業主体　「御殿場みくりやそば」あなたのそばで振舞隊

**連絡先**
御殿場市産業部商工観光課
TEL 0550-82-4622　FAX 0550-84-3286
URL http://gotemba-mikuriyasoba.com/

## 愛知県岡崎市　東海道藤川宿における地域資産を活かした景観まちづくり事業

① 東海道藤川宿として栄えた地域の歴史を今に伝える町家であり、現在は空家となっている旧野村家住宅（米屋）を藤川まちづくり協議会が所有者より借り受け、内部の一般公開や物販の販売を行うなど地域の生きた資産として保全・活用の取り組みを行っている。

② 旧野村家住宅は天保年間頃（1830～1844年）に建築されたと推定され、米穀商として地域経済の中核を担っていた。戦後に薬局となり外観は大きく変更されたものの、内部は日本の伝統建築である堅牢な柱や梁の構造、部屋を有効に使うための階段、広い土間など十分に当時の暮らしを偲ぶことができる建築物である。平成20年度に藤川まちづくり協議会が地域資産として保全・活用すべく現所有者の理解を得て借り受けることとなった。平成21年度に内部の一般公開に向けて清掃活動等を開始し平成22年度に一階部分の全面公開に至った。

③ 当初は毎週日曜日の一般公開のみであったが、平成25年7月より小箱ショップ「むらさき小町」をオープンさせ地域住民らの手作り品などの持ち寄り販売を行っている。また平成26年3月には、地元有志らによる寄付金や市の補助金を活用して、よりオリジナルに近い形での外観改修を行った。

④ 地元小学校である藤川小学校児童らが総合学習の一環として、町家様式ならではの構造や意匠を体感的に学ぶとともに、今後の活用方法についての提案するなど米屋への愛着を高めている。また上述した外観改修の際には、愛知産業大学学生や藤川小児童も関わるなど、若い世代への継承という視点を持って取り組んでいる。

⑤ 平成21年度の一部一般公開以降、平成25年7月の小箱ショップオープンまでに3年以上の月日を費やしている。その間に、勉強会や内覧会の開催、米屋の活用を考えるワークショップ（市主催）などを積み重ね、地道にその存在自体の周知やそれに関わる主体の拡大、新たな活用方法などを模索してきた。そうした人材の確保、手法のノウハウ、資金の調達などが苦労している点であるが、様々なノウハウを持つ主体との連携、地域特産である「むらさき麦」を活用した資金調達、ファンドの設立などを試みることで、これらの解決に努めている。

⑥ 保全・活用の取り組みを通じて、米屋が地域活動の一つの拠点となっていると同時に、幅広い年代の住民らの交流が生まれ、地域への誇りや愛着を高めている。こうした地域コミュニティを育むプロセスで様々な活動が生まれて展開されている。特にむらさき麦商品の開発にあたっては、藤川地区内の連携・成果にとどまらず、食を中心に市全域へ主体の関わりを広げ、市の新たな名物として地域の活性化に資している。

⑦ 建物内部においても傷んでいる箇所が多くあり、これらの改修のための資金をどのように確保していくかが今後の大きな課題である。協議会はじめ関係者らが知恵を出し合い、その解決に努めている。

◆ 自治体名　愛知県岡崎市
◆ 人口　379,264人
◆ 面積　387.24km²
◆ 事業開始年度　平成21年度
◆ 事業主体　藤川まちづくり協議会

**連絡先**
岡崎市都市整備部都市計画課
TEL 0564-23-6263　FAX 0564-23-6514

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 愛知県半田市　伝統的な食文化「串あさり」を活用したまちおこしプロジェクト

① 古くから受け継がれている亀崎地区の伝統食「串あさり」の生産に際し、手作りの生産加工技術を持った高齢者等と地元企業が協力し、亀崎地区の高齢者の生きがいづくりとまちおこしを同時に実践しているプロジェクトである。

② 亀崎地区の伝統食「串あさり」は、江戸時代末期から家庭で作られるようになり、各家庭で親から子へ継承されてきた。毎年5月3日、4日の「亀崎潮干祭」では、祭のごちそうに無くてはならないものであり、お土産に持ち帰ってもらうのが定番である。「串あさり」は、生剝きしたあさりを6個、水管へ等間隔に串（ホセ）を刺して一昼夜天日干ししたもので、一本一本手作りのため手間暇がかかることから、なかなか手に入らない貴重な郷土の味であり、亀崎の食文化である。

③ 平成23年頃から亀崎地区の自発的な地域活動として始まった。毎年5月上旬の「亀崎潮干祭」に向けて、あさりが旬を迎える3月下旬から生産活動が始まり、地元企業が販売とPR、生産管理等を担当し、地元NPO法人が「串あさり」の作り手として高齢者等の人材確保を担当している。期間中、作り手の高齢者達は、週6回程度集まり、2～3時間程度の作業をしている。作られた「串あさり」は、地元お土産品として「亀崎潮干祭」の際に販売している。

④「串あさり」は、家庭内で親から子へ伝わってきた伝統食である。しかし近年では、核家族化等の社会的要因もあり、あまり作られなくなってきた。そこで、亀崎地区において、熟練の技を持った高齢者やNPO法人、地元企業等が協力して、伝統文化の継承と地域の活性化を図るため、取り組みがスタートした。また、「亀崎伝統の味を楽しむ集い」などの講習会や地元お土産品としての販売などを通じて、幅広い年代へ伝統継承と、亀崎地区以外へもPRを行っている。

⑤「串あさり」製作で、特にあさりの「生剝き」については、作り手の熟練の技が必要とされる。20人程度の製作に関わるメンバーのうち、7人程度しか剝くことができず、生産量を増やすことが難しくなっている。そこで、市民活動団体等と連携し、作り方講習会や活動の中で熟練の技を幅広い年代へ伝えている。

⑥ 熟練の技が必要な「串あさり」の製作を通じて、伝統技術の継承と亀崎地区のまちおこし効果が期待できる。また、高齢者が地域活動に参加することで、生きがいづくりによる健康寿命延伸の効果も期待できる。

⑦「串あさり」製作は、あさりが旬を迎える3～5月に期間が限定されるため、今後は、1年を通して「あさり」を軸にした地元特産品を開発し、活動の幅を広げていくよう努めたい。また、地域の高齢者だけでなく、若者を巻き込んだ取り組みを実施し、伝統の継承につなげていきたい。

◆ 自治体名　愛知県半田市
◆ 人口　119,100人
◆ 面積　47.24km²
◆ 事業開始年度　平成23年度
◆ 事業主体　NPO法人亀崎まちおこしの会、半田中央印刷㈱、地域住民（高齢者）

**連絡先**
半田市企画部市民協働課市民交流センター
TEL 0569-32-3430　FAX 0569-32-3447

## 愛知県安城市　安城凧あげ大会

① 安城市桜井地区には、桜井凧という伝統的な凧がある。唯一の桜井凧技術継承者であった岩瀬良吉氏の逝去を契機として、平成15年にその保存伝承と普及を目的に桜井凧保存会が発足した。現在の会員数は約120人である。保存会が中心となり、桜井凧製作の機会の提供と凧と自然に親しんでもらうことを目指し、安城に流れる矢作川の河川敷にて「安城凧あげ大会」を企画・実施している。回を重ねるごとに盛況になり、正月の風物詩となっている。

② 桜井凧は、元禄年間（1688～1704年）に名古屋から西端（現碧南市西端地区）に伝えられたものが祖だと考えられ、その後、西三河南部地方で多様な発展を遂げた。桜井地区で製作が始められたのは、幕末か明治時代の初めのことである。基本的に風袋を持ち、人物や動物、昆虫などをかたどった複雑な形態と、色鮮やかな色彩を特徴としている。現在、風袋を持つものが11種類、これに角凧を加えた計12種類を見ることができる。なかでも天神凧は、左右非対称の凧として、広く知られている。
元来、桜井凧は、農家の農閑期の副業として製作されてきた。戦後は徐々に製作が縮小し、大正9年には19人いた製作者・仲買人は、保存会が発足した平成15年では、前出の岩瀬氏ただ一人だった。

③ 毎年1月に「安城凧あげ大会」を開催している。地域の小中学校、町内会、ボランティア団体の協力参加を得て年々盛況となってきた。また、事前に小学校での凧つくり教室の実施や、各種イベントで桜井凧の展示を開催するなどして、大会への参加を広く呼びかけている。

④ 現在、凧づくり技術の継承者は20人程度で、定年退職した60代が中心となっている。毎月2回の定例凧つくり教室を実施し、技術の向上に努めている。この教室は一般の人の参加も可能で、桜井凧に気軽に触れることのできる場となっている。また小学校での凧つくり教室も実施しており、学年に応じて簡単な凧から桜井凧まで製作できるように指導をしている。

⑤「安城凧あげ大会」を桜井地区の代表的な行事とするため、地区の全町内会に凧づくりと凧あげ大会に参加してもらっている。また、現在は市内からの参加者が主であるが、市外からの参加者が増えるよう、PRに努めていきたい。

⑥ 小中学校や町内会など団体での参加が増え、大会の規模は大きくなってきている。大会に出場する凧の種類も、大凧や連凧など、みんなで作り、力を合わせてあげる凧が多く見られるようになっている。地区の行事として「安城凧あげ大会」は定着しつつあるといえる。

⑦「安城凧あげ大会」を、桜井凧をアピールできる大会として他の大会との差別化を図りたいと考えているが難しく、今後の課題である。また、凧作り技術の継承を志す新規加入者が少なく、新しい仲間の参加を促すことも重要な課題に挙げられる。

◆ 自治体名　愛知県安城市
◆ 人口　184,074人
◆ 面積　86.01km²
◆ 事業開始年度　平成15年度
◆ 事業主体　桜井凧保存会・安城凧あげ大会実行委員会

**連絡先**
安城市生涯学習部文化振興課文化財係
TEL 0566-77-4477　FAX 0566-77-6600
URL http://www.sakurai-tako.com/

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 愛知県西尾市　塩づくり体験事業

① かつて西尾市の沿岸部では、塩田による塩づくりが盛んで、良質な「饗庭塩（あいばじお）」の産地として知られていた。「饗庭塩」の歴史をPRするため、西尾市では、吉良歴史民俗資料館の復元塩田を用いて、「吉良入浜式塩田保存会」の指導により塩づくり体験を行っている。

② 西尾市の三河湾沿岸地域では、戦国時代から昭和46年まで塩田が営まれてきた。この地域で採れた塩は「饗庭塩（あいばじお）」と呼ばれ、岡崎の八丁味噌に用いられたほか、信州伊那地方まで流通した。真偽は定かではないが、「忠臣蔵」刃傷事件の原因を塩田をめぐる確執に求める説もある。当地の入浜式塩田は中部地方以東では最も大規模なもので、昭和30年に新式の流下式塩田に改築された。

③ 7・8月の夏休み期間中の毎土曜日に塩づくり体験を実施するほか、小・中学校、高校や一般の団体からの申し込みによる塩づくり体験を実施している。塩田作業から塩焼きまでの一連の工程を体験するには、9時30分から15時ごろまでかかるため、1時間程度で塩焼きや砂撒きを体験できる体験メニューも設けている。この他、イベント出展による塩焼き体験を年間延べ4日行っている。

④ 平成23年度までは市学芸員が塩田体験の運営を行っていたが、平成24年度からは、入浜式塩田の伝統技術の継承を図るため地元有志によって組織された「吉良入浜式塩田保存会」に体験の運営を委託している。このため、講座の実施回数を大幅に増やすことができた。西尾市（旧吉良町）では、平成22年度に製塩業に携わった関係者の聞き取り記録を収録し、当地の塩田の歴史や製塩方法をまとめた『吉良の塩田』を発刊し、平成24年度には塩田体験ボランティア養成講座を開催した。

⑤ 入浜式塩田は昭和28年で廃止になったため、塩田経験者は80歳以上となっている。したがって、製塩技術をいかに正しく継承できるかが課題となっている。今年度は製塩経験者による製塩方法の記録映像の作成を計画している。

⑥ 平成25年度の体験参加者の実績は、塩づくり体験416人、イベント参加者1,118人である。夏休みの塩田体験参加者の過半数は市外からの親子での参加である。塩田による製塩体験ができる施設は、全国でも瀬戸内地方に2～3か所あるのみである。昨年実施したアンケート結果では、参加者の満足度が非常に高い結果が出ており、指導する保存会会員のやりがいにつながっている。

⑦ 現在、西尾市では、西尾市吉良歴史民俗資料館の敷地内に新たに約200㎡の復元塩田を整備するとともに、常設で塩焼きの体験が可能なスペースを整備する計画を進めている。設備の充実により、より多くの来訪者が訪れることが期待され、吉良入浜式塩田保存会と協力して受け入れ体制を充実させていきたい

◆ 自治体名　愛知県西尾市
◆ 人口　169,890人
◆ 面積　160.3km²
◆ 事業開始年度　平成24年度
◆ 事業主体　西尾市・吉良入浜式塩田保存会

**連絡先**
西尾市教育委員会文化振興課
TEL 0563-56-2459　FAX 0563-56-2787

## 京都府福知山市　丹波の漆かき

① 福知山市夜久野地域は、江戸時代から漆が特産物として有名だったが、漆器の需要減少や輸入漆の増加で漆産業が衰退するも近年「京都府指定無形民俗文化財」「ふるさと文化財の森」の指定を受け、漆の植林・後継者育成に取り組んでいる。

②「養老律令」や「古事類苑」などに、丹波から朝廷への税として漆液が納められていたことが記されており、丹波は約1300年前に漆の生産地となっている。江戸時代の福知山藩では漆が特産物とされ、主に夜久野でとれた漆は「丹波漆」と呼ばれ良質の漆とされていた。明治になると、殖産振興策として漆は重要な産物となった。

③ 昭和23年に夜久野の漆かきの歴史を受け継いだ衣川光治氏が「丹波漆生産組合」を立ち上げ、平成3年に丹波の漆かきが「京都府指定無形民俗文化財」の指定を受けさらに、衣川氏没後、伝統を引き継いできた岡本嘉明氏が平成18年「森の名手・名人」に選ばれ、平成21年に文化庁から夜久野の漆植栽地が「ふるさと文化財の森」に設定された。また、後継者問題や植栽の充実を図るため、平成24年に「丹波漆生産組合」を「NPO法人丹波漆」に移行した。本市も平成12年に「やくの木と漆の館」を建設し漆産業の振興を図っている。

④ 丹波漆を伝承するには、採取まで10年以上かかる漆の木を数多く植栽することと漆かきの技術を伝承するために後継者の育成をすることが必要であり、NPO法人丹波漆を中心に植樹イベントや漆かき職人の見学会や講習会、地元小中学校の生徒の体験学習、漆工芸の作品展などを開催しPRしている。また、本市においても平成24年度に京都美術工芸大学と「文化芸術振興」協定を結び、学生をインターンシップとして受け入れている。

⑤ 昭和62年に「丹波漆生産組合」が再興されたが、漆の植栽地の確保が進まず、衣川氏没後「丹波漆生産組合」の活動も低迷した。平成12年「やくの木と漆の館」ができたことを機に当時、組合長だった岡本嘉明氏が奮起し、毎年50～100本の植栽活動を再開した。

⑥ NPO法人丹波漆では、毎年、漆かき講習会の開催、漆の木の植栽、漆工芸の作品展など開催している。また、平成25年に京都美術工芸大学からインターンシップの受け入れを行い、地域資源となる丹波漆を提供することにより、相互交流を通じて文化芸術の振興と地域社会発展に向けたシステムができた。さらに、定住後継者（1人）も出来、成果をあげてきている。

⑦ 漆の植栽事業を進めているが、植栽後、漆を採取できるようになるには10年以上かかるため、漆の木の維持管理や後継者育成に長期の取り組みが必要である。NPO法人化したことで、取り組みに理解を示した会員や京都府下の文化財（仏像、美術工芸、建造物）の修理や工芸等の従事者の協力や交流も生まれている。今後、生産体制が確立し、丹波漆のブランド化を進めることにより、京都府の漆産業に寄与することができる。

◆ 自治体名　京都府福知山市
◆ 人口　80,760人
◆ 面積　552.57km²
◆ 事業開始年度　平成24年度
◆ 事業主体　特定非営利活動法人丹波漆・福知山市

**連絡先**
福知山市地域振興部夜久野支所
TEL 0773-37-1101　FAX 0773-37-5002
URL http://www.tanbaurushi.org

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 大阪府守口市　守口大根 「なにわの伝統野菜」

① 平成17年に大阪府の要請を受け、市内農家の協力を得て守口大根の復活に取り組む。また、平成19年「なにわの伝統野菜」に認証される。

② 守口大根は諸説あるが、総合すると、室町時代の守口、淀川周辺の畑にて誕生したと言う説があり、「宮前大根」に改良が施され更に長くなったと考えられる。河内国守口特産の糟漬けの材料に用いた事から、守口においても生産が広まる。特徴として直径3㎝全長150㎝ほどと、極細で他に類似品種も無く、世界一長い希少の品種とされる。天正13年（1586年）、守口村で休息をとった豊臣秀吉が糟漬けを食し、賞賛したことから「守口漬け」と名付けられ、「守口大根」と呼ばれる事となった。後に、守口宿の名産品となったが、原材料の酒糟は高価であり入手困難だったため、希少な贅沢品とされた。明治に入り一般的にも広く賞味されるが、街の発展に伴う守口宿の衰退により、「守口漬け」の生産も減少していった。その後、酒粕漬けの加工は奈良県へうつり、「守口大根」の生産は岐阜県で盛んになった。現在では岐阜県・愛知県で「守口大根」が生産され「守口漬け」に加工されている。

③ 平成20年より守口都市農業研究会が主体となって、生産を開始する。計40mの畝に作付け、収穫は平均600本。また、守口大根料理コンクール（3回）、守口大根長さコンクール（2回）を開催している。

④ 守口大根料理コンクールによる「お料理レシピ」の開発や、製品化の模索、飲食店メニューの考案などを通じて、周知活動をする。また、市内農家、一般家庭、小学校、保育所・幼稚園、各種団体の協力により長さコンクールを開催。守口大根の栽培を通じ身近に感じる事、収穫の喜びを感じる事で、家庭菜園による栽培を広め、定着させることにより復活と伝承を試みる。

⑤ 栽培に適した土壌は限られており、人為的に最適な環境を再現し、維持管理を行う事は困難である。また、収穫時に大根を傷つける可能性があるため、特殊な畝・方法を用いて作付けを行う。そのような圃場整備を行い、また、それに伴う管理体制を構築する。

⑥ 関心は高まりつつあるが、流通には至ってはいない。

⑦ 栽培に適した環境であれば順調に収穫できるが、効率は極めて悪い。その為、生産量を確保できず流通や製品化の実現は現段階では困難。安定供給を実現し、特産品とするまでにはコストの面からも困難であるため、現在は栽培方法の改良と家庭菜園の実現化を課題に、伝統野菜としての伝承を展開していく予定。

◆ 自 治 体 名　大阪府守口市
◆ 人　　口　145,307人
◆ 面　　積　12.73km²
◆ 事業開始年度　平成17年度
◆ 事 業 主 体　守口都市農業研究会

**連絡先**
守口市市民生活部地域振興課
TEL 06-6992-1490　FAX 06-6994-1691

## 大阪府富田林市　「浴衣で来てね」七夕じないまちバル

① 薬師大祭の日に併せて、七夕の風情を感じながら寺内町と周辺商店会をまち歩きする。食べ歩き、お買い物・体験などをしながら、寺内町周辺地域を関係者と来訪者がともに活性化していく。

② 富田林寺内町は永禄元年頃（1558年）、興正寺門跡証秀上人によって創建された興正寺別院を中心として誕生し、現在も創建当時の六筋七町の町割りや、重要文化財旧杉山家住宅、大阪府指定文化財仲村家住宅など往時の繁栄を偲ぶ重厚な町家などが数多く残されている。また、大阪府内で唯一の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。薬師堂の薬師如来は寺内町内にある浄谷寺の境外地（南会所町）に安置されており、聞き伝えによれば、仏像は信者の若い男女の恋文で貼り重ね、その上に漆を塗り固め、金箔を押した像であるとのロマンチックな逸話がある。また、夏になると薬師堂の前に夜市が並び、明治以前は非常に盛大であったと伝えられている。

③ バル参加店舗には笹とポスターを配布。笹は園児たちの七夕飾りを装飾し、店舗前に飾る。バルチケットは短冊型で雰囲気を出した。また、バルチケットの表紙はお願い事が記入出来る切り目付きの短冊になっており、記入した短冊は店舗前を含むバル地区内の笹に飾る事が出来る。当日浴衣を着たバルチケット購入者には、先着で記念品を贈呈し、寺内町地区における浴衣・着物のイメージを推進した。リピーターの確保については、燈路お絵かきコーナーを設置し、書かれた絵を翌月末にある寺内町燈路で行灯に張り出すようにした。

④ 薬師大祭に出展される夜市は年々減少。富田林の夏の風物詩を伝承していく為、七夕イベントを企画した。

⑤ バル開催地区は寺内町と周辺商店街であり、住宅地と商業地が混在する所である為、町の景観にそぐわないものや、住民・商業者の賛同のないイベントは開催できない。イベント開催に際し、地区自治会長・地区内全店舗（連絡の取れない店舗もあり）へ説明に行き、地区全体の協力を求めた。富田林市は、地域の活性化は住民・商業者の満足度を高める事からスタートすると考えている。

⑥ 地区内外で多数の協力があり、十分なPRができた。また、マスコミにも注目され、販売予定のバルチケットは早期完売。イベント開催による費用対効果は抜群で、実施後の店舗アンケート調査では、日頃の来訪年齢層より若く新たな客層の獲得に繋がったなど多数の意見があり、今後も同様のイベントがあれば参加したいという店舗が約9割を占めた。

⑦ バルとしての課題は、参加出来なかった店舗の処遇についてどのようにしていくのか。今後の展開としては、バルに限らず、住民と商業者と来訪者がさまざまな立場でより一層の協力をし、共同で、富田林寺内町界隈を活性化していく事である。

◆ 自 治 体 名　大阪府富田林市
◆ 人　　口　116,489人
◆ 面　　積　39.66km²
◆ 事業開始年度　平成25年度
◆ 事 業 主 体　富田林市観光協会

**連絡先**
富田林市産業環境部商工観光課
TEL 0721-25-1000　内線483　FAX 0721-26-2020

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 大阪府寝屋川市　田んぼアート、どろりんピック

① 江戸時代以前から13代に渡り営まれてきた南農園。その南農園の田んぼを舞台に、色が異なる数種の稲を使って大きな絵を描く「田んぼアート」を北大阪で初めて実現した。田植えから始まる作業には地域の人達が参加し、秋には田んぼに描かれた絵を見るため多くの人が訪れた。

② 南農園を営む南氏の先祖は江戸時代以前に三井の地に土着したといわれ、先祖代々地域の文化や食育、人と人をつなぐコミュニケーションから情報発信まで様々な営みに寄与してきた。その様な地域でのアドバンテージを、ただ家系を守ることに限定せず、地域の一員として社会に還元するため、平成25年から田んぼアートの取り組みが始まったのである。

③ 田植えの時期である6月頃に、田んぼアートの「絵具」となる稲を植える作業を地域の大学生や住民との協働により行っている。同日には「どろりんピック」と冠し、子供達が田んぼの泥にまみれながら綱引きやかけっこを行う運動会も開催している。この日だけは大人も子供も関係なく泥にまみれ、一味違う農業の醍醐味を味わうことができる。
この企画には市内の大学生が主体的に参加し、田んぼに描く図柄を決めたり、子供達を見守るスタッフを担うなど、まさに地域が一体になるイベントである。イベント後に収穫した“田んぼアート米”は、近隣の保育所でのお餅つきなどに活用され、約半年間の「田んぼアート」のストーリーが完結する。

④ 地域の人達と共存・共栄し、都市農業が社会に貢献できる取り組みを行っている。時代の流れと共に農業の果たす役割は変化しており、人間関係が希薄になりつつある現代においては、もはやただ土を耕しているだけでは農業を継承していくことは難しい。代々築き上げてきた地域住民の信頼という大きな強みを活かし、自ら中心となって人と人とをつないで顔の見える関係を築くなど、農業継承のために従来の枠にとらわれない活動を続けている。「田んぼアート」や「どろりんピック」もその取り組みの1つである。

⑤「田んぼアート」の実現に多くの人が賛同し、それぞれの得意分野で力を発揮してもらったため、苦心した点は特にない。

⑥ 地域の人達の距離感がグッと近くなった。「田んぼアート」という1つの取り組みに多くの人が関わり、協力し、工夫することで田んぼを中心に新たなまとまりと元気が生まれた。

⑦ 農地面積に限りがあることや、子供の安全を守る人員の確保等の関係で、イベントに参加できる人数が限られる。そのため、イベントの事前周知等があまり大々的にできない面はあるが、稲穂が育ち、季節が移るにつれ浮かびあがる美しい田んぼアートを多くの人に見てもらうための情報発信に努めたい。そして、地域を盛り上げる取り組み等を通して都市農業の大きな可能性を示し、全国のモデルケースとなりたい。

◆ 自治体名　大阪府寝屋川市
◆ 人口　241,003人
◆ 面積　24.73km²
◆ 事業開始年度　平成25年度
◆ 事業主体　南農園、地域住民、ふるさと青年塾、摂南大学、介護付有料老人ホーム「ぽぷら」、大阪府、寝屋川市

**連絡先**
寝屋川市経営企画部ブランド戦略室
TEL 072-824-1181（代表）　FAX 072-825-0761

## 大阪府大東市　野崎まいりクルージング＆ウォーキングツアー

① 野崎まいりは、大阪東部生駒山系飯盛山のふもと（大東市内）に建つ慈眼寺（愛称：野崎観音）まで参拝する行事で、大阪市内から庶民が日帰りでできる観光として江戸時代に人気を博した。当時の野崎まいりは、土手を歩く人と船に乗る人とがふり売り喧嘩をしながら行く様が落語で語られるように、大阪市内八軒家浜から船に乗り川を遡って行く水路と、旧街道等を徒歩で行く陸路とがあったが、鉄道の発達等により姿を消してしまった。当事業は、当時の陸路および船による野崎まいりを今日に復活させるものである。

② 野崎まいりは、正式名称を無縁経法要といい、親類縁者、動植物も含めたすべてに感謝のお経をささげる行事で、毎年5月1日～8日まで行われ、元禄時代から300年以上続く。当時、陸路と水路があったが、明治になると鉄道の発達により参拝者のほとんどが鉄道利用となった。昭和47年と昭和51年に発生した水害対策として高さ3mを超える垂直護岸が整備され、河川から陸上へ上がることができなくなり、水路での野崎まいりはなくなった。

③ 大東市観光ボランティアガイド「やまびこ」は、当時の陸路ルートの野崎まいりを多くの人に体験してもらうため、ルート上の史跡等を案内しながら散策するツアーを開発・実施している。
また、水路では大阪の河川観光事業を営んでいる大阪水上バスと大東市との協働で水路での野崎まいりを行っている。

④ 大東市は、歴史、文化、自然など、市民目線で案内するための観光ボランティア養成講座を実施。その卒業生で構成する大東市観光ボランティアガイド「やまびこ」が市内の観光案内を行っている。また大阪水上バスは、枚方方面への淀川舟運の復活等、伝統文化の保存と継承に関わる事業を展開しており、野崎まいりの時期における寝屋川のクルージングも検討していた。
大東市においても市域に多く存在する歴史的な資源を集客やまちの活性化に活かしていくための事業展開を進めており、市民団体や事業者の取組と協力により、当時の陸路と水路での野崎まいりの復活を進めることとなった。

⑤ 水路について、既存の船着場がなかったため、河川から陸上へ船の乗客を誘導するために台船とタラップによる仮設桟橋を臨時で整備した。

⑥ 乗船者を一般公募したところ、定員120人に対して438人の応募がある盛況ぶりであった。市民のみならず大東市外から多くの参加を頂き、参加者から好評を頂いている。市の伝統文化を通じた市の知名度の向上、魅力の発信、市民の郷土愛の醸成に大きく寄与できたと感じている。

⑦ 取り組みを継続していく中で、主体を民間へと移行していきたい。
そのための設備環境として河川と陸上との常設的なアクセス（船着場）整備を進めていく必要があると考えている。

◆ 自治体名　大阪府大東市
◆ 人口　124,267人
◆ 面積　18.27km²
◆ 事業開始年度　平成26年度
◆ 事業主体　大東市、大阪水上バス株式会社、大東市観光ボランティアガイド「やまびこ」

**連絡先**
大東市政策推進部企画経営課
TEL 072-870-0404　FAX 072-872-2291

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 兵庫県姫路市　地域夢プラン事業

① 姫路市内の各地域には多様な地域資源が数多く存在しており、地域住民が中心となって、それらを掘り起こし、その価値や素晴らしさを再認識することで、地域がより一層魅力的になるような住民参加による活力あるまちづくりを進めることを目指してスタートした。
② 地域夢プラン事業では、約1,800件もの地域資源が掘り起こされ、地域資源巡り、イベント、調査研究や保護・保全、看板製作、冊子作りなど、これまでに700件を超える事業が行われ、地域の歴史や文化を包括的に捉えた取り組みや個々の地域資源にスポットを当てたものを通じて、地域の魅力を見つめ直す機会となり、地域住民の協働意識の醸成にもつながった。
③ 平成16年度から各中学校区に、様々な地域団体で構成された地域夢プラン策定委員会が設置され、「地域夢プラン」を策定した。その後、同委員会を引き継いだ地域夢プラン実行委員会によって、イベントや講演会などのソフト事業が実施された。このような地域の取り組みに対して、事業経費の支援や地域担当職員の配置など、行政として支援に取り組んできた。平成21年度から5年度間、より地域に密着した取り組みができるようにするため、中学校区よりコンパクトな小学校区単位での取り組みを支援する地域夢プラン展開事業を実施した。
④ 地域の名所や遺跡、自然などを対象に地域資源巡りを行ったり、地域資源の学習や調査研究、保護・保全活動を通じて郷土愛を育む取り組みも行われており、各地域がそれぞれの地域の特色を活かした取り組みを通じて、伝統継承に貢献している。
⑤ 金銭的な支援だけに限らず、事業開始当初から市職員を地域担当職員として各地域に配置し、地域夢プランの策定や地域夢プランに基づくソフト事業実施のサポートなどの人的支援も行い、地域住民がより取り組みやすいように環境を整えることができた。
⑥ 地域へのアンケート調査において、「地域の魅力を再確認」、「地域の活性化」、「地域の一体感を育成」、「地域コミュニティ活動の充実」、「世代間交流の推進」などの項目で評価が高く、また今後については「行政の支援制度があれば実施する」、「支援制度の有無に関係なく自主的に実施する」など、前向きな回答が多数を占めている結果から、地域において好意的に受け入れられていることがわかる。また、大河ドラマ「軍師官兵衛」の影響もあり、大いに話題となっている黒田官兵衛についても、地域で盛り上げていこうという気運も高まってきており、それが姫路を訪れる多くの人々に対する「おもてなし」の精神にも大きく寄与している。
⑦ 今後の展開として、平成26年度からは、行政による支援制度を見直し、学校や企業のグループ、NPOなどの新たな事業主体の参画を可能にしたり、地域の枠組みを越えた取組みも対象にすることで、多様な主体による参画、広域的な連携など事業の幅広い展開を視野に入れた制度の運用を始めている。

◆ 自治体名　兵庫県姫路市
◆ 人口　534,185人
◆ 面積　534.43km²
◆ 事業開始年度　平成16年度
◆ 事業主体　地区連合自治会等

**連絡先**
姫路市市長公室企画政策推進室
TEL 079-221-2206　FAX 079-221-2384
URL http://www.city.himeji.lg.jp/s10/2212203/tiikiyumeplan.html

## 兵庫県尼崎市　尼崎地名めぐり

① 人気アニメ「忍たま乱太郎」の登場人物名に尼崎の地名が付けられていることから、ファンがそれらの地名をめぐる現象が起きている。訪れるファンが尼崎の良さを体験できるよう、さまざまな取り組みを展開している。
② 尼崎市在住の漫画家尼子騒兵衛さん原作の人気アニメ「忍たま乱太郎」の登場人物名に、古い歴史を持つ尼崎の地名が付けられていることから、ファンがそれらの地名をめぐる「聖地巡礼」現象が起きており、本市を訪れた人々へのおもてなしとしてさまざまな取り組みを行っている。
③ おもてなしの内容として、平成24年度に市役所内に「忍たま乱太郎」のグッズや漫画を並べたコーナーを設けるとともに、記念撮影用に地名をデザインしたバックボードを作るなどの取り組みに加え、平成25年5月からは、「忍たま乱太郎　あまがさきウェルカムカード」の配布を開始した。このカードは、市外から本市を訪れ、自ら本市のPRを行う「影の尼崎観光特使」に登録した人に配布するもので、尼子騒兵衛先生のご協力のもと、主要キャラクターが描かれているカードが好評を得ている。平成26年からは地名と地形をデザインしたカードもあわせて配布している。その他関連イベントや地域企業などと協力して地名めぐりツアーを実施したり、本市の地名を活用した市内ホテルの宿泊プランや郵便局が発売した切手の作成に協力した。
④ 尼崎市は弥生時代から人々の暮らしがあり、奈良時代の寺社や荘園などが由来となった地名も多く、古の人々の暮らしが垣間見える遺跡なども残る。本市では地名そのものが地域資源であるととらえ、古い歴史を持つ地名の由来をまとめたパンフレットを地名めぐりのツールとしてファンに配布している。
⑤ 地名が地域資源であるということを理解してもらうことに苦心したが、「影の尼崎観光特使」の実績やイベントの状況などを受け、民間団体にも理解されつつある。
⑥「影の尼崎観光特使」にはこれまでに2,000人以上が登録され、47都道府県のみならず、海外からも多くの観光客が本市を訪れている。地名をデザインしたせんべいや切手、特典として地名手ぬぐいが付く市内ホテルの宿泊プランなどが商品化されたほか、SNSでの本市の情報発信も若い世代を中心に盛んに行われている。
⑦ 平成26年7月に初めての地名めぐりファン向けのイベントを実施した。イベントではファンの描いたイラストの展示や抽選会などを行い、100人以上の参加者が本市の魅力を体験した。これをひとつのきっかけとして、今後も引き続き本市を訪れたいと思う人が増えるような仕組みづくりが必要である。

◆ 自治体名　兵庫県尼崎市
◆ 人口　447,597人
◆ 面積　50.27km²
◆ 事業開始年度　平成24年度
◆ 事業主体　尼崎市

**連絡先**
尼崎市シティプロモーション推進部都市魅力創造発信課
TEL 06-6489-6385　FAX 06-6489-6793

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 兵庫県洲本市　洲本城まつり

① 国の指定史跡である洲本城跡を中心に「洲本城まつり」を開催している。地域住民や観光客に洲本城や、洲本の歴史を知ってもらい、洲本城の認識を高めてもらいたいとの思いから、平成22年度より毎年実施している。

② 洲本城跡は、市街地の南にそびえる標高136mの三熊山山上にあり、戦国時代から江戸時代にかけて淡路国統治の拠点となった城で、現在は往時をしのぶ石垣が残っている。城郭は戦国時代の様式をよく表しており、保存状態も良く、国の指定史跡となっている。城跡には東西800m、南北600mの範囲に、西日本最大級の総石垣造の曲輪（くるわ）が見られる。現在の天守閣は昭和3年の御大典記念に建てられたもので、鉄筋コンクリート製の模擬天守閣としては日本最古のものである。洲本城を築城した脇坂安治が、洲本から伊予大洲へ移封されてから400年を記念する 行事 、「洲本城400年祭」を平成21年度に実施したのを契機に、平成22年度より「洲本城まつり」として毎年実施している。

③ 平成25年度までは年1回の開催であったが、平成26年度より春と秋にイベントを開催している。内容は、武者行列（市街地、洲本城跡内）、お茶席、洲本城にまつわる特別講演会、キッズコーナー（手裏剣投げ、だるま落とし等）、馬とのふれあいコーナー（乗馬体験）、ぜんざい等の振る舞い、舞台イベント（和太鼓、ほら貝演奏、もちまき等）を実施している。

④ 城下での武者行列に加え、甲冑の着付け体験や、洲本城の歴史や成り立ち、時代背景等の特別講演会などを通じて、洲本城や洲本の歴史に興味を持ってもらうとともに、より身近に感じてもらえるようなイベントを行うことにより、伝統の継承を図っている。

⑤ 中心市街地から洲本城跡が少し離れているため、シャトルバスの運行や、複数のメディアを通じた広報活動、旅館やホテル宿泊者へのチラシ配布等、多くの方に訪れてもらえる取り組みを行っている。

⑥ まつりの観客数は平成22年度の約200人から平成25年は約1,500人と年々増加しており、地域経済への波及効果も上がってきている。また、「洲本城まつり」の開催日以外にも、地元の有志がボランティアガイドを実施し、旅行会社のツアーの一つとして取り入れられるようになり、地元の方だけではなく、島外の方の認知度も上昇している。

⑦ 今後も「洲本城まつり」を継続し、多くの人達が洲本城に対する親しみや、歴史認識を高められるよう、これまで以上に趣向を凝らしたイベントを実施していきたいと考えている。

◆ 自 治 体 名　兵庫県洲本市
◆ 人　　口　46,732人
◆ 面　　積　182.48km²
◆ 事業開始年度　平成22年
◆ 事 業 主 体　洲本城まつり実行委員会

**連絡先**
洲本市企画情報部商工観光課
TEL 0799-22-3321㈹　内線1213　FAX 0799-23-0978

## 兵庫県香美町（かみ）　紙漉（す）きの復活

① 古くから、当地域では和紙の原料となるこうぞ、三椏（みつまた）の栽培がおこなわれるとともに和紙の生産がおこなわれていた歴史がある。和紙づくりも昭和40年代に終わりその後途絶えていたが、この度、当地域で復活させ、多くの方に和紙づくり体験を行っていただけるよう取り組みを開始した。

② 長須区では、早くから集落営農に取り組んできたが、少子高齢化が進行し過疎化を食い止めることが非常に困難となっていた。そのような折、兵庫県「地域再生大作戦」の事業を知り、村の将来をみんなで考えるようになったことがこの取り組みのきっかけとなった。長須の資源（お宝）とは何か、課題とは何か、それを解決する方法は何か、いつごろ、だれがするのか、公民館の活用といった小さなことから、お米の販売戦略といった大きなことまで、様々な事柄について1年間じっくり話し合いを行った。そのなかで、昔、長須では和紙＝射添紙（いそうし）が作られ、それぞれの自宅にもその面影を残す道具が僅かながら残っており、老年者からも懐かしくもう一度紙漉きをしてみたい、そしていろんな人に長須に来ていただいて紙漉きを体験してもらいたいと、紙漉きを復活させる取り組みに取り掛かった。

③ 当時の紙漉き材料もほとんど残っておらず、また、こうぞ、三椏も栽培がおこなわれていないことから、山間部に樹生するものを探し材料を確保した。併せて、集落住民全員が試験的に紙の補助剤である「トロロアオイ（花オクラ）」の栽培を手がけた。また、紙漉きの道具も残存するものを探す一方、集落内の老年者から道具の形状等をお聞きし、再現を行った。

④ 紙漉き技術の確立のため県内外の紙漉きを行っている地域を訪ね、紙漉き方法の研究を行うとともに、地域の高校と連携し、モデル的に紙漉き体験をしてもらうなど受入態勢及びその方策、併せて、紙漉き技術の向上に努めた。

⑤ 原材料の生産及び安定的な確保、紙漉き技術の確立。

⑥ 高齢化が進む当地域に高校生等が訪れ、地域のみなさんと紙漉きを通じた交流が生まれるとともに、地域ににぎわいが復活し、紙漉きを通して更なる住民のコミュニティーの醸成が図れた。

⑦ 国の過疎集落等自立再生対策事業により整備した施設を地域のコミュニティーの場として活用するとともに、メディアなどを通じ効果的な情報発信を行い、紙漉き体験施設として安定的な運営が可能となるようターゲットを親子に絞るなど顧客の確保に努める。また、和紙の生産のみでなく、和紙を利用した行燈作成キットや葉書など副産品を開発し、和紙のもつ独特の魅力を演出するとともに販路の拡大を図る。

◆ 自 治 体 名　兵庫県香美町
◆ 人　　口　19,720人
◆ 面　　積　369.08km²
◆ 事業開始年度　平成25年度
◆ 事 業 主 体　長須区

**連絡先**
香美町企画課
TEL 0796-36-1962　FAX 0796-36-3809

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 奈良県河合町　砂かけ祭（御田植祭）

① 1300年の伝統をもつといわれる「砂かけ祭」は、砂をかけあい五穀豊穣を祈願するという奇祭で、砂は雨を表し、昔から砂を激しくかけ合うほど田植えの時期に雨がよく降り、豊作になるとされている。

② このお祭りは、天武天皇4年（675年）に天武天皇がこの地に水の神を祭り、五穀豊穣を祈願する祭りを始めたのが起源とされおり、祭りの午前中は、田人と牛のお面をかぶった牛役が苗代作りや田作りを行う「殿上の儀」に続き、午後の部「庭上の儀」では、田人と牛役と参拝者たちが激しい砂のかけ合いを行う。この祭りは、五穀豊穣と雨水の多量を願うと共に厄除けを願うという祭りでもある。

③ 現在は、毎年2月11日に「砂かけ祭」を開催。河合町のイメージキャラクター「すな丸」は、公募で誕生した砂かけ祭をイメージして作られた愛くるしいキャラクターであり人気を博している。また地元町民協力のもと、参拝者へ「もてなし茶屋」を出店し「おもてなし」を行っており、平成25年度の砂かけ祭では、1日で約4,500人の参拝者が廣瀬神社を訪れた。

④ この「砂かけ祭」は、平成21年12月11日、河合町指定文化財第5号として指定された。長い歴史と伝統のある祭りとはいえ、継承に向けた取り組みとして、地域に誇りや愛着をもってもらうこと、そして、伝統文化を活かしたまちおこしを行うことも重要であると考えている。例えば、児童・生徒に町の奇祭を知ってもらうために町内小中学校・幼稚園の各保護者への啓発活動を行ったり、イメージキャラクターの効果的な活用や町の観光ボランティアガイドの会の協力も得ながら、砂かけ祭とともに周囲の名所をたどる「砂かけウォーク」イベントを開催するなど多方面から伝統文化の継承への取り組みを行っている。

⑤ 近年、「砂かけ祭」に使う小道具の松苗（松葉を束ねて苗に見立てている）の材料の入手が困難になってきている。この松苗は祭りの最後に参拝者へ配っており、現在、協力者に松を植えてもらうなどの方法により解決を目指している。

⑥「砂かけ祭」を通して、様々な取り組みを実施し、河合町の知名度が上がった。

⑦ ・来場者の増加に伴い、参拝者に祭りをどう見せ、どう参加を促すかについて、今後検討する必要がある。
・河合町の古き良き歴史を探り、この祭りを出発点として、地域づくりへの取組や地域交流を活発にしていきたい。

◆ 自治体名　奈良県河合町
◆ 人口　18,734人
◆ 面積　8.27km²
◆ 事業開始年度　約1300年前
◆ 事業主体　廣瀬神社

**連絡先**
河合町生涯学習課
TEL 0745-57-2271　FAX 0745-57-1165

## 奈良県野迫川村　「こうやまき」の挿し木

① 野迫川村内に数多く生育されている「こうやまき」を村の産業振興の一つとして苗木の生産を目的とした「挿し木」に取り組んでいる。こうやまき「のせがわのまき」は、他の地域のものとは違い、色が濃く非常に艶があり良質な物であることから村の大切な資源の一つとしてPRしていきたい。

②「こうやまき」は、野迫川村内で古くから生育されており、伝統的な地域資源の一つである。村は人口減少に伴い農地は耕作放棄地が増加傾向であり、同じく林業も低迷傾向にあり担い手不足に悩んでいる。耕作放棄地である農地に「こうやまき」を植えている所が多くみられる。このことから、産業の掘り起こしを図り、雇用の促進、人口増加につなげていくための一つの産業として村内に多数生育されている「こうやまき」の苗木生産の取り組みとして「挿し木」を始めた。

③ 平成25年4月から挿し木に取り組み、ビニールハウス内において一定の温度を保つよう休日を問わず毎日徹底した管理をし、平成26年4月に発根調査を行った。その結果、全体で約58％の確率で発根に成功している事が分かった。今後も引き続き挿し木を行い、安定した生産が可能か検証していく予定である。

④「こうやまき」の挿し木技術を多くの村民に伝え、次世代の担い手に継承していけるよう、現在は研究段階であるため、継承の取り組みは行っていない。しかし、安定した生産が可能となった後は、村の産業としての位置づけを行っていき、次の世代へ継承していきたい。

⑤ 挿し木は、一定した温度・湿度等の管理が非常に難しく、寒冷地であるため、積雪等もあり、日々の管理が大変であった。休日にかかわらず温度・湿度の管理をしなければならない為、管理にはかなりのストレスを感じていた。

⑥ 挿し木を実施した結果として、約58％が発根に成功した。今後も引き続き安定した生産が可能な方法を検証していく予定である。

⑦ 挿し木の発根が約58％の成果を得たが、1回の結果だけでは成功したとは考えにくいため、今後も取り組んでいくことが大切である。現在、前回取り組みを実施した職員以外で再度実施している。挿し木の技術は現段階では誰でも出来る訳ではなく、また、休日を問わず毎日、温度・湿度の管理を徹底しなければならないのが課題であり、徹底管理するにはそれなりの設備が必要であることから、費用面でどの程度必要になるか検証し、低コストでの生産が可能となるよう模索することが必要と考えている。

◆ 自治体名　奈良県野迫川村
◆ 人口　477人
◆ 面積　155.03km²
◆ 事業開始年度　平成25年4月
◆ 事業主体　野迫川村集落支援員（野迫川村）

**連絡先**
野迫川村産業課
TEL 0747-37-2101　FAX 0747-37-2107

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 和歌山県かつらぎ町　太鼓の音が響くまち　四郷（四郷千両太鼓）

① かつらぎ町四郷地域は、四百数十年の伝統を誇る特産・日本一の串柿で有名な山里である。少子高齢化、若者の転出などにより地域活力の減退がみられるようになったため、地域の伝統芸能である四郷千両太鼓を中心として魅力的な地域づくりに取り組んでいる。

② 四郷地域に古くから伝わる伝統芸能に「千両踊り」という太鼓を使った踊りがあり、毎年秋祭りに四郷の大宮神社で奉納されている。この流れを継承し平成元年に和太鼓グループ「四郷千両太鼓」が結成された。結成以来、地域コミュニティの中心的存在として活性化に寄与するとともに、今では、近隣の市町村イベントや福祉施設などでの演奏など活動の機会が増えており、地域の魅力の一つとなっている。

③ 定期的な練習活動のほか、年間を通じて地域内外の様々なイベントでの演奏活動、年1回の発表会の企画・実施などを行っている。また、新たな取り組みとして太鼓の演奏と運動を組み合わせた「太鼓ビクス」を企画・実施し、今まで太鼓になじみのなかった人にも関心を持ってもらい、交流人口の増加による地域の活性化に向け活動している。

④ 結成以来、「打つ、聴く、観る」ものとして、四郷地域全体に活力を与え、また四郷地域全体で太鼓活動を支えることにより、地域文化への意識や継承を行う土壌が養われている。
また、四郷千両太鼓クラブでは、地域内外の小中学生を対象に太鼓教室を開催し、青少年の健全育成、郷土愛の醸成そして伝統文化の保存、継承に取り組んでいる。

⑤ クラブへの加入者が増える中で普段の練習場所が狭くなっており、練習場所の確保が課題となっていた。そこで、何度も協議を重ねる中で廃校となった四郷小学校の活用において太鼓の練習場を確保し、新たに道具類を購入することで、さらなる演奏活動の推進や体験教室、太鼓ビクスの実施に向けて態勢を整えた。

⑥ 四郷地域の財産として地域の人々に深く根付いている「四郷千両太鼓」の今後の活動について話し合い、新たな目標ができたことは地域全体の活性化につながるとともに、移住交流人口の拡大にもつながるものである。今後も太鼓活動を中心に活発なコミュニティ活動が期待できる。

⑦ 今後は、平成26年の和歌山デスティネーションキャンペーン、平成27年度のわかやま国体、高野山開山1200年大法会などの大きなイベントが予定されていることから、四郷千両太鼓のみならず、四郷地域で行われている取り組みを広く周知するとともに、受け入れ態勢を整えていく予定である。

◆ 自治体名　和歌山県かつらぎ町
◆ 人口　18,139人
◆ 面積　151.73km²
◆ 事業開始年度　平成25年度
◆ 事業主体　四郷千両太鼓育成クラブ

**連絡先**
かつらぎ町企画公室
TEL 0736-22-0300　FAX 0736-22-6432

## 島根県益田市　「中世の食」再現プロジェクト

① 鎌倉時代から室町時代にかけて益田市一帯を治めていた中世の豪族、益田氏に関する古文書「益田家文書」に記された「食」の再現に取り組み、試食会などを通じた中世の文化を活かしたまちづくりを進める。また、再現料理の商品化を図る。

② 益田市では、鎌倉時代から室町時代にかけて交易地として栄えた益田市に数多く残る益田氏の遺跡や古文書を活用し、中世の歴史・文化を活かしたまちづくりを進めている。こうした中、「中世の食」に関する講演を聞いた市内商工業者が「中世の食」の再現を決意し、平成20年8月に再現プロジェクトを立ち上げた。

③ 益田家文書に記されている「中世の食」に関する記述（永禄11年／1568年）に時の益田家当主である益田藤兼が毛利元就を接待するためにひらいた祝宴に関する資料）に基づき、料理研究家等の協力を得ながら、古文書の解釈や、奈良時代から明治時代にかけての料理書などの調査などにより、古文書に記された献立や料理素材について、解読や復元を試みた。苦労して再現された中世の祝い膳は平成21年5月に島根県文化芸術センターグラントワで開催された「室町文化フェスティバル」等で初めてお披露目した。

④ 初披露以降、民俗学者や料理研究家などの専門家の指導を仰ぎながら、定期的に歴史講座を交えた試食会を開催している。また、メンバーの各事業所における再現料理の商品化や、試食会と庭園観賞などをセットとした観光商品の開発など文化活動のみならず経済活動にも広がりを見せている。

⑤ 古文書に記された膨大な資料をひとつひとつ調べ、解読し、その内容を奈良時代から明治時代の料理書に基づき、整理、復元し、再現を行った。
再現料理を提供するには、当時の食文化だけでなく時代背景やしきたり等についても理解していなければ適切な提供や説明が出来ない。

⑥ 試食会では試食した人から料理としての評価はもとより、中世に対する意識の広がりや食文化に対する見直しなどの声が聞かれている。
この取り組みを通じ、新たな商品開発を行うなど経済活動にもつなげている。

⑦ メニューや再現料理の商品化など取り組み自体の広がりは出ているが、市民の関心や認知がまだまだ限定的である。更なるPRや大きなイベントでの試食会開催などにつなげていきたい。
今後も再現料理の商品化や観光商品としての活用など経済活動にも広げていきたい。

◆ 自治体名　島根県益田市
◆ 人口　49,515人
◆ 面積　733.24km²
◆ 事業開始年度　平成20年度
◆ 事業主体　益田市内商工業者

**連絡先**
益田市政策企画局人口拡大課
TEL 0856-31-0600　FAX 0856-31-0641

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 島根県益田市　高津やぶさめ

① 約350年の伝統をもつといわれる「やぶさめ」という伝統行事について、一時期農耕馬の減少等から二度にわたる中断を経て、平成17年に地区内の若者を中心に再生を計画、再度復活となった。今や地域を代表する一大伝統行事として多くの観光客を誘致している。

②「高津やぶさめ」は寛文元年（1661年）に始まったとされる古来からの伝統行事、古来は柿本神社の参道を使って、2日間にわたり行われていたが、人通りが多くなり、危険な状態となったため、場所を高津川河川敷に移して地区の伝統行事として開催している。

③ 毎年9月1日に「やぶさめ」を開催している。二度の中断はあったものの、三度そのような事態にならないように毎年事前に改善点のチエックを欠かさずに行っている。高津地区内だけでなく全市より諸役を募集するとともに衣装も新しくし、素晴らしい伝統行事であると実感している。

④ 地区の生活形態の変化、資金難や会員の不足により二度の中断に見まわれた、若者を中心に約60人が神事としてでなく地区古来の伝統行事として位置付け継承、発展につとめている。また、諸役を全市に募集し、若手を参加させるように努めている。射手も地元の若手を育成している。地域行事としての意識や伝統の継承が続くように努めている。

⑤ 二度中断した伝統行事であるため、地域住民の関心を取り戻すことに苦労している。行事終了後反省会をもち、毎回改善点を探っている。地域の伝統行事を盛り上げるため、地域住民に寄付をお願いするなど、関心を持ってもらうことに努め、地域の活性化の一つとして住民の意欲の向上に努めている。

⑥「やぶさめ」に地域全体で取り組むようになって、地域内での交流も地域外との交流もやぶさめを通して活発になってきた。また、神社の参道では八朔祭も同時に開催されており、観客数の増加につながっている。

⑦ 今後は「やぶさめ」だけでなく、八朔祭と連携して地域の売り込みをし、交流人口拡大に努めていきたい。また、諸役、射手等に高校生を募集し、古来伝統行事に触れる機会を持つことにより、子供達のふるさとに関する認識や親しみを深め、ふるさとを愛し、誇りを持つ心を育むよう努める。

◆ 自治体名　島根県益田市
◆ 人　口　49,515人
◆ 面　積　733.24km²
◆ 事業開始年度　平成17年
◆ 事業主体　高津やぶさめ保存会

**連絡先**
益田市政策企画局人口拡大課
TEL 0856-31-0600　FAX 0856-31-0641

## 島根県江津市　江津本町甍街道　ふらり［fula:Re］

① 江戸時代から舟運と海運の要所として栄えた江津本町のPRとその価値の再評価を進めるため、市内有志、地元住民及び市外の協力者が企画運営するまち歩きイベント。

② 江津本町は、古くから江の川の舟運と日本海の海運の要所として栄え、寛文年間（1661～1673年）に上方航路が開かれると北前船の寄港地や天領米の積出港として賑わっていた。川岸から町中に向けて多くの廻船問屋の蔵屋敷が軒を並べ、その中心を山陰道が貫き東は大森銀山、西は浜田へと向かっており、陸路、海路そして陰陽を結ぶ大動脈であった江の川の河の道などの交通接点として経済的な発展をし、当時は大森銀山に次ぐ石見第二の賑わいを見せる石州赤瓦の光り輝く天領の町だった。幕末の慶応2年（1866年）には長州軍の一個大隊が進駐し、明治2年までの3年間にわたり本陣が置かれた。近代化の伸長により、市中心地が平野部に移るにつれて衰退が進んだ江津本町だが、往時を偲ばせる歴史的な建造物やまち並みは現代まで残されていた。

③ 平成18年に第1回を開催した。平成26年5月までに合計12回のイベントを開催し、来場者は年々増加傾向にある。内容は、地域の伝統的なお菓子や行事の再現、手作りの食べものや市内外のカフェの出張販売などをまちのそこここに配置し、自然とまち歩きをしながら江津本町の魅力に気付く仕掛けが施しており、市内有志に加えて地元住民や市内外のボランティアによって運営されている。

④ 石州瓦が連なる家々、明治維新の際に同所に敷かれた長州軍の陣、明治期に建てられた旧本町郵便局の疑様式建築など江津本町に伝わる歴史的な出来事及び建築物等を毎回のテーマとして定めることにより、イベント参加者に対して、歴史的文化的な意義を伝えている。

⑤ 回数を重ねるごとにイベントの規模が拡大しているため、運営側のスタッフの確保が年々厳しい状態になっている。このため、地元住民や組織の協力や大学生などのボランティアの受け入れなどに力を注いでいる。

⑥ 忘れられていた江津本町の価値が、市民だけでなく多くの来場者に認識され、まちのファンは増加中である。また、地域住民の間には、まちの元気を取り戻す取り組みへの理解と行動が見られるようになり、今後は江津本町を活性化する活動の輪がより広がっていくだろう。

⑦ 一番の課題は「続けること」。古参のスタッフが多く、運営者側の人の入れ替わりが少ないため、将来にわたって持続可能な取り組みとなるように、若者をスタッフとして取り込む仕組みづくりが課題。

◆ 自治体名　島根県江津市
◆ 人　口　25,091人
◆ 面　積　268.51km²
◆ 事業開始年度　平成18年度
◆ 事業主体　ふらり実行委員会

**連絡先**
江津市総務部政策企画課地域振興係
TEL 0855-52-2501（内線1318）　FAX 0855-52-1380

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 広島県江田島市　ぐるぐる海友舎プロジェクト

① 江田島市に残る築100年の海友舎（旧江田島海軍下士卒集会所）を、地域内外の交流の場に再生することで地域コミュニティの活性化を目指す。また、海友舎周辺地域の歴史調査も進め、新たな地域の魅力を創造する。

② 海友舎は、明治末に海軍兵学校で働く兵士や下士官用の娯楽兼福利施設として建てられた。戦後、民間に払い下げられ、健康器具販売の会社が利用した。職業普及事業の一環として、洋裁教室の場としても使用された。平成24年9月に海友舎を利用していた会社が撤退することが決まった。平成24年10月「海友舎を後世に残したい」という思いを持った江田島市内外の有志が集結し、「ぐるぐる海友舎プロジェクト実行委員会」を設立した。

③ 平成24年、活動当初、延べ100人を越えるボランティアの協力により倉庫状態だった海友舎を活動スペースとして甦らせた。現在、毎月第一日曜日に、ボランティアにより海友舎の清掃活動を実施している。海友舎を舞台に「手入れする」「使う」「学ぶ」「発信する」の4つの軸に沿った活動を展開している。平成26年5月には、島で活動する人の交流イベント「ぐるぐるしましまあるある」を実施、2日間で島内外から500人を越える人が海友舎に集結した。

④ 平成26年度、専門家の協力により登録文化財を念頭においた調査を実施している。また、建物の保存再生のみならず、江田島独自の歴史文化の継承も目指している。一般財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団の助成を獲得し、周辺地域に住む高齢者からヒアリング調査および江田島独自の暮らし文化に着目した勉強会を実施し、報告冊子の制作に取り組んでいる。

⑤ 海友舎のある江田島町中郷地区では過疎化と高齢化が深刻である。海友舎の再生利用をとおして、江田島市に若者を集めて地域の問題を地域内外の力で解決していくことを目指している。

⑥ 海友舎の移り変わりを調べ、活用法を考える事で、島内外から江田島に思いを持つ人が集まってきた。歴史的建造物の再生は地域コミュニティ活性化に繋がる。また、江田島に残る資源を活用することで、観光振興にも寄与する。

⑦ 海友舎の保存再生をきっかけに集まった有志により、海友舎を活かした地域活性化を目指す。
継続的に活動すべく運営組織の強化を計る。周辺の観光施設や商店などさまざまな団体と連携し江田島市の活性化を目指す。

◆ 自治体名　広島県江田島市
◆ 人口　25,572人
◆ 面積　100.98km²
◆ 事業開始年度　平成24年度
◆ 事業主体　ぐるぐる海友舎プロジェクト実行委員会

**連絡先**
江田島市企画部企画振興課
TEL 0823-40-2762　FAX 0823-40-2072

## 山口県光市　ふるさとの火まつり「周防柱松」

① 江戸時代、五穀豊穣や疫病の退散を祈願して始まった火祭り「柱松」（15m程度の柱の先に、麦わらで編んだ漏斗状の籠に、火のついた松明を投げ入れ、籠の中の萩の葉が火の粉となって舞い落ちるもの）を守るべく、地域住民の有志による保存会が発足し、その伝統の継承に努めている。

② 宝暦年間（1750～1764年）の頃、防長国（現山口県）内に痘瘡が流行し、多くの住民がその犠牲になったことから、悪魔の息のかからない高いところへ火を投げ上げて疫病の退散を祈ったのが始まりとされている。戦時中一時途絶え、昭和39年に地区の子供会の手で復活され、その後昭和47年からは、場所を島田川にかかる旭橋の河原に移し、周防青年団が本格的に行ってきた。
しかし青年団の解散に伴い、祭りの伝統が失われることを危惧した地元の有志により、平成9年5月、「周防柱松保存会」が発足し、地域の人達が一丸となってこの伝統を承継し現在に至っている。

③ 6月上旬から萩の葉取りに取り掛かり、その1週間後に葉落としを行う。落とした萩の葉は、開催当日まで天日干しをし、完全に乾燥させる。
開催日1週間前に柱松の本体、投げ入れ用の松明を作成した後、7月の最終日曜日には、午前中から柱松を立てた後に夜6時からイベントを開始し、夜8時より火入れとなる。

④ 子供達へ火の大切な役目を教え、盆前に空から降りてくる諸聖霊の供養や無縁仏の供養なども主な目的でもあったと言い伝えられていることから、地元小学生へ指導等を行い伝承している。
その結果、地元小学校による周防柱松に関する学習活動の発表も行われ、「燃やそう柱松」という歌とその歌に合わせた踊りも作られ、当日や運動会等で披露されている。

⑤ 開催まで約2ヵ月準備期間が必要であり、周防地区内の自治会や有志など長期にわたり多くの負担がかかっていたが、保存会発足を契機に重機等を導入し若干改善された。また、保存会メンバーの拡充を目指し、小学校や公民館、連合自治会への理解と協力を求めながら、裾野の拡大を図っている。

⑥ 柱松が復活して約半世紀、保存会として取り組みを開始してから18年目を迎え、地元の行事としてかなり定着し周防地区の学校・自治会・商工連盟等各団体からの協力も得られるようになってきている。
この行事は、地元地域の活性化の一助も担っている。

⑦ 現在は、一部役員が個人的に重機等で土砂搬入・会場整備等を行い当日の実施にこぎつけているが、保存会自体資金力に乏しく、業者へ依頼するということも予算的に困難であり、実施にあたっての会場整備方法が大きな課題である。
また、警察等関係機関からの規制も増え、イベント開催に向けての課題も山積みであるが、継続開催に向けて地域全体で協力していきたい。

◆ 自治体名　山口県光市
◆ 人口　53,326人
◆ 面積　91.94km²
◆ 事業開始年度　平成9年度
◆ 事業主体　周防柱松保存会

**連絡先**
光市教育委員会文化・生涯学習課
TEL 0833-74-3607　FAX 0833-72-2246

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 山口県柳井市　伝統織物「柳井縞」の復活

①「柳井縞（やないじま）」は、素朴な木綿織物として、古くから親しまれてきた伝統織物である。柳井が商都として栄えていた江戸時代に発達したが、明治時代の後半から急激に衰退し、大正時代初期以降は幻の織物となった。平成6年、伝統の芸を復活させようという声を受け、新生「柳井縞」として再現した。

②「柳井縞」は、素朴な木綿織物として、古くから親しまれてきた伝統織物である。柳井が商都として栄えていた江戸時代に発達したが、明治時代の後半から急激に衰退し、大正時代初期以降は幻の織物となった。平成元年、市内で使用されていた機（はた）が市に寄贈されたのをきっかけに平成5年に「柳井縞の会」が発足し、平成6年、新生「柳井縞」として再現した。

③ 複合型観光施設「やない西蔵」内に、柳井縞コースター・ランチマット・テーブルセンター等の製作体験ができるスペースを設置している。また、近隣に事務局兼販売所（不定期）を設け、小物等の販売に取り組み、認知度を高めるよう努力している。

④ このままでは後継者がいなくなり存続が危ぶまれることから、平成26年度から、助成金を活用し、「柳井縞」の継承者を増加させる取組を行うこととしている。興味のある方を募集し、一から取り組んでもらえるよう指導を行うこととしている。

⑤ 大正時代初期に幻の織物となり、人々の記憶から失ってしまったものを復活するのは大変なことだった。関心を持たれる方は多々あるが、本気で取り組むには、期間もさることながら技術の面もあるため、なかなか進歩しないのが現実である。小物等を作ったり、地域や市外のイベントに参加することにより、少しずつ関心を持たれ始めてきており、リーフレットの作成等、地道にこつこつやっていき、よりアピールしていくことを考えている。

⑥ 柳井市地域ブランドに認定され、山口県特産品振興奨励賞を受けているが、認知度が高くないことから、平成25年度に、商品を詳細に紹介するリーフレットを作成、配布した。そのことにより、柳井縞への人々の関心は確実に強くなっている。

⑦「柳井縞」の製品を単に見て買うだけでなく、江戸時代には品質の良さで全国に名を馳せていた柳井縞が大正時代に途絶えた歴史や特長などを知り、また自分の手で染めてみたり織ったりと体感することで、柳井地域にもこんな魅力ある織物文化があることを再発見させ、担い手の育成につながるものと考えている。
今後は柳井縞に興味を持ってもらい、後継者を育てることで柳井縞の素晴らしさを伝え続けていき、認知度のアップと発展により、柳井市の伝統織物と言えば「柳井縞」と誰もが口にするような取組をしていきたい。

◆ 自 治 体 名　山口県柳井市
◆ 人　　口　34,055人
◆ 面　　積　139.91km²
◆ 事業開始年度　平成5年度
◆ 事 業 主 体　柳井縞の会

**連絡先**
柳井市総合政策部政策企画課
TEL 0820-22-2111　内線472　FAX 0820-23-4595

## 愛媛県鬼北町　歴史文化を活用した活力ある地域づくり事業

① 鬼北町下鍵山の中心部・明星ヶ丘とその周辺に広がる昭和初期の町並みをイベントを通じて積極的な活用を図り、風情ある町並みの景観や、私財を投じて町づくりに奔走した初代村長・井谷正命の町づくりにかけた思いを後世に伝える様々な活動を展開している。

② 日吉村初代村長・井谷正命（1868～1934）は、就任以降、地域の発展のため交通網の整備、町の建設を推し進める。こうして、明星ヶ丘の下に広がる幸田町（現・下鍵山商店街）と、町の中心部で十字路となった道路が整備された。町には家が軒を並べ、活気あふれる商店街が形成されていくが、昭和10年の大火により焼失し、一年後幸田町が再建される。再建にあたって、通りに面する町屋の間口や高さ、階層を揃えた町並みを形成。こうした事例は全国的にも珍しく貴重である。

③ 昭和初期の面影を残す風情ある下鍵山の町並みと、井谷正命が生涯をかけて奔走した郷土の発展への思いを継承するため、歴史文化を活用した活力ある地域づくり事業として、8月に「ひよし星降るキャンドルナイト」、3月に「四万十街道ひなまつり」を開催している。これにより、町内外から多くの来場者が訪れ、地域の歴史文化を見直し、地域活性化につなげようという機運が盛り上がりつつある。

④ 伝統文化の継承のためには、それを伝える地域の人材育成が必要であるため、明星ヶ丘文化施設を拠点に、歴史文化の継承と地域の文化・文化財を地域資源として活用していくボランティア団体の育成に努めた。こうして結成されたのが「明星ヶ丘いきいき会（会員20人）」である。この会により、イベントが企画立案・実行され、伝統文化の継承・文化財保護の啓発に大いに貢献している。

⑤ ただ歴史を語るだけでは、文化的景観としての町並み保護や井谷正命の「町づくり」への精神が受け継がれていくことは難しいため、子供達や地域住民がより関心をもってもらえるようイベントを通じた歴史文化の継承に取り組んだ。これにより、イベントを楽しみながら、多くの住民に町並みのよさに触れてもらい、歴史文化の魅力を再認識してもらえた。

⑥ 行政・地域が連携し、町並みを活かした取り組みを積極的に展開することにより、地域の歴史文化の魅力を再認識し、地域住民や子ども達の郷土に対する愛着心を醸成する効果に繋がっている。また、町の魅力として町外に対しても広く情報発信でき、鬼北町全体のイメージアップにつながった。

⑦ 鬼北町は、人口の減少による過疎・高齢化など様々な問題を抱える中で、先人達が築き、継承してきた歴史文化をどう守っていくかが今後の課題である。地域の歴史文化・景観はその活用をうまく図れば、新たな町の魅力として、町内外に地域の魅力をアピールできるとともに、今後このような地域資源の掘り起こしによる活性化策、交流人口の増加を図るという地域住民への意識付けを図っていく。

◆ 自 治 体 名　愛媛県鬼北町
◆ 人　　口　11,207人
◆ 面　　積　241.87km²
◆ 事業開始年度　平成25年度
◆ 事 業 主 体　明星ヶ丘いきいき会　鬼北町教育委員会

**連絡先**
鬼北町教育委員会生涯教育課
TEL 0895-45-1111　FAX 0895-45-2061

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 福岡県北九州市　市制50周年記念 福岡県指定有形民俗文化財「小倉祇園祭のだし（山鉾）」展示

① 福岡県指定有形民俗文化財である「小倉祇園祭のだし（山鉾）」を一斉に展示することにより、小倉の伝統的な祭である小倉祇園太鼓の魅力を広く発信し、観光客の誘致と地域ブランド力の向上、さらに市民の誇りの醸成を図る。

② 元和3年頃（1617年）から始まったとされる小倉祇園祭であるが、江戸時代から明治時代にかけて、小倉祇園には各町内から趣向を凝らしたいろんな山車が御神幸に随従していた。しかしその後しだいに姿を消し、さらに第二次世界大戦によってほとんどが絶えてしまったが、古い小倉祇園の形態を伝える山車5台がそれぞれ町内に保存されており、福岡県有形民俗文化財に指定されることとなった（昭和38年12月24日指定）。

③ 毎年300,000人程度の集客を誇る北九州市を代表するお祭りの一つである。北九州市制50周年という節目の年であり、共に歩んできた小倉祇園の素晴らしい伝統を、沢山の人に見てもらいたいという思いから、展示に取り組む事となった。

④ 実際に町内に飾られていたのは30年ほど前であり、存在を知らない関係者も多かった。5台のうち2台は保存状態が悪かったため博物館の収蔵庫に保管され、人目に触れることもなかった。
一堂に会する、小倉祇園開催期間中に展示する、一番人通りの多い所に展示する、ということに重点を置き、多くの人が小倉祇園祭を意識し、伝統が継承されることを狙った。

⑤ 古い物であるため、輸送や展示方法など、取扱には細心の注意を払った。また、県指定の文化財であるため、県の許可はもちろん、所有者を探して許可をもらうなど、展示を実現するまでにかなりの苦労があった。
地域の関係者や小倉祇園太鼓保存振興会の協力もあり、無事に展示を実現することが出来た。

⑥ 普段、一堂に会する機会の無い5台の山車だが、市内最大の乗降者数を誇るJR小倉駅の改札口前に並んだ姿は圧巻であった。新聞やテレビにも取り上げられ、150,000人程度の集客があった。
長い歴史を持つ小倉祇園祭の素晴らしさを、沢山の人に感じてもらえたと思う。

⑦ 県指定有形民俗文化財であるため、取扱には細心の注意が必要となる。展示等にも多額の費用がかかるため、次に一堂に会す機会があるのかは不明であるが、小倉祇園太鼓保存振興会が主体となり、伝統継承及び山車展示の場として祇園会館を設置するという計画がある。

◆ 自治体名　福岡県北九州市
◆ 人口　963,267人
◆ 面積　489.6km²
◆ 事業開始年度　平成25年度
◆ 事業主体　北九州市 小倉北区役所 総務企画課

**連絡先**
北九州市 小倉北区役所 総務企画課
TEL 093-582-3335　FAX 093-581-5496

## 福岡県北九州市　火まつり行事

① 毎年7月下旬頃午後7時より実施。市内外から平成25年は1,600人が参加。若松駅近くの久岐の浜広場での「かっぱ祭り」にはじまり、高塔山山頂にある「かっぱ地蔵尊」まで参加者が燃えるたいまつを掲げて約2kmの道のりを歩き、たいまつを奉納する。

② 明るい人心の回復が求められていた戦後、若松出身の芥川賞作家・火野葦平が、「すさんだ世の中を明るく照らそう」と、若松に古くからある「かっぱ伝説」を元にして、「かっぱの持つおおらかさと徳を世に伝え広める『かっぱ祭り』」と「世を明るく照らすたいまつを持って高塔山の頂上までのぼる『たいまつ行列』」を提唱。この取り組みに賛同した市民により、昭和29年にはじまった。

③ 若松区内自治会の連絡協議機関である若松区自治総連合会が、郷土の文化や歴史の伝承と、まつりを通じての青少年の健全育成をめざし、企画から運営を行っている。参加募集や当日の引率も自治会が主体で行っている。また、地域住民のボランティアがにぎわいを高めるため、竹灯篭設置や地蔵尊ライトアップ、火野葦平に縁の深い五平太ばやしの演奏等を行っている。

④「たいまつ行列」の到着地点の高塔山公園には、河童伝説の起源となる河童地蔵尊が祀られている。当日はボランティアによる竹灯篭や電飾のライトアップを行い、厳かな雰囲気を醸成している。また、手作りのかっぱを公園内に飾り付け、かっぱ伝説への親しみを深める取り組みを行い、まつりを盛り上げている。

⑤ 少子高齢化やレジャーの多様化、市街地人口の減少、などの要因により、「火まつり行事」への関心も薄れ、参加者も年々減少傾向にあった。
そこで、火野葦平が「火まつり行事」を提唱した思いを次世代に広げ、郷土への愛着を高めることを通じて、若松の活性化に繋げることを目的として位置づけた。

⑥ 様々な準備から、まつりの開催まで、高齢者から子供まで住民交流を深める場となっている。また、「かっぱ伝説」などの古くから伝わってきた「伝承」と文化人「火野葦平」への理解を深め、郷土愛を育む機会となっている。

⑦ 火まつり行事を通じた郷土文化への理解を深め、行事への多様な参加を進めるため、平成26年は火野葦平がまつりをはじめた当時に行っていた、自治会対抗の「かっぱ人形コンテスト」にちなみ、手作りかっぱの募集を行う。

◆ 自治体名　福岡県北九州市
◆ 人口　963,267人
◆ 面積　489.6km²
◆ 事業開始年度　昭和29年度
◆ 事業主体　若松区自治総連合会

**連絡先**
若松区役所コミュニティ支援課
TEL 093-761-5321（内線257）　FAX 093-761-3490

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 福岡県大野城市　大野城市に古くから伝わる伝統料理「ぼっかけ」の普及啓発

① 郷土料理「ぼっかけ」を現代風にアレンジし、「大野城鶏ぼっかけ」としてイベントでの提供、市内各飲食店での販売を行っている。また市でも学校給食の献立に組み込み、子どもたちへ「ふるさとの味」としての伝承にも取り組んでいる。

②「ぼっかけ」は、本市上大利地区で古くから食べられていた。昔はニワトリを自宅で飼っていた家庭が多く、親睦の場の「シメの料理」や「家庭の手軽な料理」として、ご飯にしょうゆ味の鶏の汁物をかけて食べていた。これを、ご飯に汁を「ぶっかけ」たところから、「ぼっかけ」と名付けられたと言われている。

③ 本市商工会が平成23年度より取り組んでいる「着地型観光商品開発事業」の中で、食メニュー開発の一つとして「ぼっかけ」に着目。平成24年度に「ぼっかけ」を現代風にアレンジした「大野城鶏ぼっかけ」として商品開発し、平成25年度にはその良さを市内外に広げるべく、その普及啓発を目的としたボランティアグループ「大野城鶏ぼっかけ隊」を事業者・商工会職員・行政職員等で結成し、イベント出店等を行っている。

④ 市でも学校給食に取り入れ、子どもたちへ郷土料理「ぼっかけ」の伝承を行っている他、「大野城鶏ぼっかけ隊」としては市内外の様々なイベント時の出店、「ぼっかけ－1グランプリ」と称した普及イベントの開催などを通じて、①「大野城鶏ぼっかけ」を知っていただく、②そのおいしさを味わっていただく、そして③10年、20年先に「大野城のふるさとの味と言えば、鶏ぼっかけやね！」と皆さんに思っていただけるよう努力している。

⑤ ①市内外、特に市内で行われる地域のまつり等で数多く啓発活動を行いたいと思っているが、「大野城鶏ぼっかけ隊」そのものはボランティアとしての活動であり、マンパワーと資金面において不十分である　②その商品の性質を活かしたコンセプト付け（「飲んだ後のシメの料理」）が不十分であり、参画いただく飲食店を増やすためには焦点を絞った商品紹介が必要であるという点に、現在も苦心し、解決方法を模索している。

⑥「着地型観光商品開発事業」を通じ、事業者・商工会・行政が一体となって一つのものを作り上げたこと、そこに地域の伝統という要素が加わり、「大野城鶏ぼっかけ」や「大野城鶏ぼっかけ隊」という形になったことは、本市としてこれまであまりなかった事例であり、こういった取り組みの創出ならびに継続こそ、持続的なまちの活力を生み出す重要な要素と考える。

⑦ 先述のとおり、「10年、20年先に『大野城のふるさとの味と言えば、鶏ぼっかけやね！』と皆さんに思っていただく」ことが大きな目標であり、大野城市を終の棲家とされる方はもちろん、ここを離れても、「ぼっかけ」を思い自然と舌が懐かしむような、そういった存在になるよう努力していきたい。

◆ 自 治 体 名　福岡県大野城市
◆ 人　　口　98,362人
◆ 面　　積　26.88km²
◆ 事業開始年度　平成25年度
◆ 事 業 主 体　大野城鶏ぼっかけ隊

**連絡先**
大野城市環境生活部産業振興課
TEL 092-580-1894　FAX 092-572-8432
Facebook https://www.facebook.com/Bokkaketai

## 佐賀県みやき町　蝋しぼり、和ろうそく作り

① 廃業となっていた旧精蝋工場を活用し、ハゼの実収穫から蝋しぼり、和ろうそく作りまでの一連の作業を試行錯誤の末、復活させた。またそれらの実績を地域住民や子どもたちに体験させるなどして、みやき町のかつての伝統産業の周知に努める。

② 幕末の佐賀藩では精蝋技術を殖産興業とし、精蝋による収入で財政を立て直し、幕府や諸藩に先駆けて近代化を推し進めた。この歴史的背景によりみやき町の各所にはハゼの木が多く移植され、現存している。これらのハゼの木を利用し昭和16年に鳳星木蝋（ほうせいもくろう）有限会社が設立され、昭和33年の閉鎖まで和ろうそくや携帯燃料などさまざまな製品を国内外に出荷していた。この精蝋技術を復活させ、昔のみやき町の特産品を改めて周知することにより、地域の浮揚、町おこしができないかと考えたのが発端となる。

③ 閉鎖されていた工場内の道具類を再利用しながら、当時の精蝋技術の復活を試み、約1年を要して目標を達成した。その後、月に1回を目途にハゼの実収穫⇒粗挽き⇒木蝋搾り⇒和ろうそく作りの作業を行っている。

④ 精蝋技術を復活することができ、現在は地域住民や小中学生を対象に体験活動を実施している。これらの活動を通して、みやき町、佐賀県の伝統産業のすばらしさ、伝統産業を取り巻く歴史を再認識してもらえればと考えている。

⑤ 閉鎖されていた工場内の道具類を再利用しながら、当時の精蝋技術の復活を試みたものの、昔の道具類に改良が必要であったり、木蝋搾りに関しても蒸す時間や温度などを変えて効率の良い方法を模索する必要があったため、現在の状況に至るまでに1年以上を要した。会のメンバーの退職以前の仕事の知識を持ちよりながら、様々な問題解決の取り組みを行った。

⑥ 現在、各メディアにも取り上げられる機会を得て、町内外の多方面から体験の申込みを受けている。また町内での活動も重視しているため、地域住民に多くの知的財産を提供できているのではないかと考えている。

⑦ 会のメンバーは基本的に仕事を退職した地元有志で構成しており、60代がメインである。今後、どこまで活動が続けられるのか？会に新規メンバーが入ってきてくれるのか？が今後の課題である。

◆ 自 治 体 名　佐賀県みやき町
◆ 人　　口　25,598人
◆ 面　　積　51.89km²
◆ 事業開始年度　平成20年2月
◆ 事 業 主 体　中原の豊かな自然を守る会

**連絡先**
みやき町総務部企画調整課　企画担当
TEL 0942-89-1600　FAX 0942-89-1650

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 熊本県熊本市　「ゑんま祭り」・奇習「すり鉢舞い」の復活による地域コミュニティの活性化

① 閻魔大王像をまつる宗禅寺で、毎年8月16日に「ゑんま祭り」を開催している。また、毎年11月に開催される「風流街（ふるまち）浪漫フェスタ」では、奇習「すり鉢舞い」という神事を行っている。

② 寛永9年（1632年）細川忠利の肥後入国に随伴した僧・宗善が創建した中央区細工町の宗禅寺で、江戸時代から昭和30年代初めまで毎年旧暦7月16日、秘蔵の閻魔王像や地獄絵の掛け軸を公開する「ゑんま祭り」が開かれ、大勢の人で賑った。また、「すり鉢舞い」は、中央区万町2丁目にある総社神社に伝わるもので、氏子が神主となり酒を振る舞われ商売繁盛と家内安全を祈願し、囃し立てる見物女性の着物の裾をまくって回るという踊りで、警察から中止命令が出された明治30年頃まで続いた。

③ 平成3年に五福ふれあいまちづくりの会が発足し、平成4年に「ゑんま祭り」を35年ぶりに復活させ、地獄の釜のふたが開く（閻魔も鬼も休む）といわれる毎年8月16日に開催している。また、「風流街浪漫フェスタ」も同年に始まり、90年ぶりに復活させた奇習「すり鉢舞い」という神事をこのイベントで行っている。

④ 五福ふれあいまちづくりの会は、古き良き五福の歴史や伝統の復活・継承を通して地域住民が一体となることを目指し、活動を行っている。昭和50年の五福小学校創立百周年の時に刊行された「五福百年」を元に、地域歴史勉強会を五福ふれあいまちづくりの会創立20周年記念事業として実施した。

⑤ 五福ふれあいまちづくりの会が結成された平成3年頃は、地域に多くのマンションが建設され、転出入により住民の入れ替わりが激しく、地域コミュニティの希薄化が懸念され、新旧住民交流のきっかけが必要だった。「ゑんま祭り」や「すり鉢舞い」を通して、住民が交流できるよう工夫をしている。また、五福小学校の児童にとっても伝統に触れる機会となっている。

⑥ 五福ふれあいまちづくりの会の活動は、まちの持つ歴史的資源や人的資源を活用した新旧住民の交流の促進を目的とし、20年以上の取り組みによる成果として、「風流街浪漫フェスタ」の定着により「古町」が五福の呼称として広く住民に浸透したこと、古町の民族歴史を「五福百年」勉強会を通して掘り下げることができたこと、次代を担う人材の確保と育成ができたことが挙げられる。

⑦ 現段階では、特に課題等は見当たらないが、今後も継続性をもった活動が必要。

◆ 自治体名　熊本県熊本市
◆ 人口　738,371人
◆ 面積　389.54km²
◆ 事業開始年度　平成4年
◆ 事業主体　五福ふれあいまちづくりの会

**連絡先**
熊本市企画振興局区政推進課
TEL 096-328-2031　FAX 096-324-1713

## 熊本県玉名市　ふれあい仁〇加館事業

① 肥後狂句や俳句、歌謡・演劇などの芸能が盛んな伊倉で、地域住民の交流・情報提供・賑わい創出の場となる「ふれあい仁〇加館（にわかかん）」を整備し、伊倉仁〇加（いくらにわか）の稽古場やまちづくりの活動拠点（地域コミュニティの場）として伊倉まちづくり委員会が維持管理している。

② 伊倉は、以前から肥後狂句や俳句、歌謡・演劇などの芸能が盛んな地域（町）で、特に肥後狂句や仁〇加については県下屈指の町である。現在も全国で伝承が確認されている「にわか」は20ほど存在する。「にわか」とは、江戸中期から伝わってきた祭りや路上で繰り広げられる即興芝居のことで、時代風刺や洒落を含む滑稽な寸劇を地域の方言で庶民が演じることに趣があり、表記については、にわか・二和加・仁〇加など地域によってまちまちである。熊本県では「肥後にわか」が有名だが、地元伊倉では伝統無形文化財「伊倉仁〇加」を、単に披露するだけでなく広く全国に広める目的で、伊倉商店街中心部の空き家となっていた町屋を改修し平成15年4月に「伊倉ふれあい仁〇加館」としてオープンした。

③ 伝統無形文化財「伊倉仁〇加」を全国に広め、後継者を育成し継承しようと、「伊倉ふれあい仁〇加館」を拠点に、伊倉仁〇加保存会の指導のもと稽古を重ね公演活動を実施している。また普段の仁〇加の稽古場だけでなく住民交流拠点として活用している。

④ 平成16年10月には、「笑いの祭典　全国にわか交流大会～おもしろかバイ伊倉～」を伊倉で開催した。それから10年経た現在も、仁〇加館における仁〇加の稽古は継続され、大小さまざまなイベントや施設訪問等においておもしろ可笑しく披露し、見る人に笑いを提供している。

⑤ 平成13年度にスタートした旧玉名市における小学校区を単位とした住民主体のまちづくり「一区一輝運動～校区の素材を活かして新たな魅力を打ち出そう～」を展開するに当たり、伊倉まちづくり委員会の立上げ（委員・役員の選定）から地域の連携に至るまで住民への周知と理解獲得に苦心した。実際、仁〇加館を開館し活動拠点がはっきりしてくると住民の協力も得やすくなった。

⑥「笑いの祭典　全国にわか交流大会～おもしろかバイ伊倉～」の開催がまちづくり推進の起爆剤となり、伊倉仁〇加館運営にも住民の協力を得られるようになった。現在では、仁〇加の稽古のほか気軽に立ち寄れる憩いの場＝まちづくりセンター＝活動拠点として活用されている。

⑦ 平成13年に立ち上がった伊倉まちづくり委員会は、当時の役員がそのまま継続して活動を継続しているため、若者の力が不足しがちになっている。一昔前までの盛り上がりを復活するべく、地域一丸となり（子ども仁〇加の伝承活動等も含めて）「伊倉仁〇加」を継承し、伊倉仁〇加館を守っていきたい。

◆ 自治体名　熊本県玉名市
◆ 人口　68,777人
◆ 面積　152.59km²
◆ 事業開始年度　平成15年
◆ 事業主体　伊倉まちづくり委員会

**連絡先**
玉名市企画経営部企画経営課地域振興係
TEL 0968-75-1421　FAX 0968-75-1166

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 鹿児島県垂水市　大野棒踊り

① 垂水市大野原地区には約100年の歴史を持つ伝統芸能大野棒踊りという踊りがある。戦後一時期途絶えたが、地元の有志で復活させようと話が持ち上がり、自分達や祖先が切り開いた土地への愛着、情熱が住民の心を動かし、ここに大野棒踊りが復活した。

② 垂水市大野原は、今から100年前の桜島大正大噴火で被災した人々が移住し、主に開拓された地域である。棒踊りは元々、薩摩藩島津義弘公が関ケ原の合戦に敗れた薩摩藩士の士気を鼓舞するため、武芸の技を踊りに取り入れ勇壮に踊ったものが県下に広まったといわれているが、その踊りが大野原地区の開拓時代、同じく開拓に疲弊した住民の士気を鼓舞するため大野原の住民に伝わったものである。元々開拓して移住してきた人の集まりのためまとまらないこともあり、住民の心を結びつけるツールとして神社であったり、この棒踊りを取り入れることで、住民の心を一つにしてきたのではなかろうか。

③ 毎年11月の豊年祭に奉納棒踊りとして披露しており、小さな祭りではあるが地域内外からの見物者もある。少子高齢化の影響で踊り手が年々不足しているため、地元住民や出身者、交流のある鹿児島大学の学生にも協力してもらい夜遅くまで練習している。

④ 保存会では、昔の踊りを知る地元の高齢者をはじめとする先輩方に指導してもらい、世代を超えて伝統の踊りを継承している。ビデオや携帯動画等に残し映像としても保存していくことで後世へ残していきたい。

⑤ 踊り手の確保は大変だったが、伝統を守ろうと呼びかけたところ、出身者が踊りに参加したり、前述した交流がある鹿児島大学の学生にも呼びかけ踊り手の確保を図っている。仕事を終えた夜に練習をするのだが、忙しいにもかかわらず参加者は協力的である。

⑥ 棒踊りは私達が小さい頃から先輩方に教わってきたが、年長者が年少者に教えることで鹿児島伝統の「郷中教育（年長者は年少者を指導せよ、年少者は年長者を尊敬せよ）」を自然と教わっていたのではないか。また、住民と加勢に来てくれる学生との交流も年々深まっている。そして棒踊りには唄い手も必要で、これは伝統を知る地域の高齢者が欠かせない。内にこもりがちな高齢者に表舞台に出てもらい、活躍してもらう場にもなっているように思う。

⑦ 今は主に地域内での披露にとどまっているが、市内外での披露の場を作りたい。そのためにも踊り手の確保は大きな課題なので、呼びかけはもちろん、まず多くの人に知ってもらい地域内外の人にも興味を持ってもらい、踊り手の確保、最終的には人口増加へもつなげていけるとよい。しかし、基本的には地域住民が主役なので、地域住民の理解と協力を最大限努力して得ていき、地域内外の人々と一緒になって地域活性化も図っていきたい。

◆ 自治体名　鹿児島県垂水市
◆ 人口　16,541人
◆ 面積　162.03km²
◆ 事業開始年度　昭和51年度
◆ 事業主体　大野棒踊り保存会

**連絡先**
垂水市企画課地域政策係
TEL 0994-32-1143　FAX 0994-32-6625
URL http://www.city.tarumizu.lg.jp/oshirase/kikaku/oonodukuri/h23/index.htm

## 鹿児島県南種子町　宝満神社のお田植え祭り（県指定文化財）で伝承されている古代赤米を活用した地域活性化

① 南種子町の宝満神社では、全国で3か所、ご神米として伝統的な赤米とそのお田植え祭りが守り伝えられている。平成11年度より保存会と地域おこし団体が相互に協力しあって文化財の伝承に取り組んだ結果、現在では赤米は地域コミュニティの誇りとなり、郷土愛の醸成に大きく寄与している。

② 宝満神社のお田植え祭りは、鹿児島県指定文化財、国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財で、毎年4月3日に行われる。全国で3か所、ご神米として伝統的な赤米が伝えられていて、古代赤米のお田植え祭りとして全国的に著名である。

③ 平成11年当時は、過疎化に伴う後継者問題に加え、地域住民の関心が減衰していた。そこで、地域おこし団体「ミニ独立村赤米のふるさと千石村」が中心となり、ハウジングアンドコミュニティ財団より「地域づくり活動支援助成2000」の助成を受け、「赤米サミット2000IN千石村」を実施。赤米を伝承する対馬市、総社市の保存団体を招き、多くの地域住民参加のもと、この文化財の価値を再確認した。その後も茎永秋祭りを開催するなど、文化財の価値を伝える活動を継続している。

④ ミニ独立村赤米のふるさと千石村が中心となり、他地域の伝承団体を招き、交流することで、保存会の人達が伝承活動を見つめ直すきっかけをつくることができ、また、地域ぐるみで保存伝承を行う体制を再構築することができた。その後も、赤米の販売などを財源に、さまざまな支援活動を展開している。

⑤ 文化財の次の世代に伝承するべき本質的な価値は何かを見定め、文化財個々の伝承環境に応じた、持続可能な伝承体制の確立に苦心した。その一つの打開策となったのが、他地域との交流で、他地域における伝承状況を知り、比較することで、自分達の伝承する文化財の価値を客観的に捉えることができた。

⑥ 宝満神社のお田植え祭りを地域全体で支える体制が再構築できたことで、地域の人々が、赤米に対し誇りをもつようになり、他地域と交流をする中で、自分達の地域の魅力を再確認することができた。現在では、赤米の六次産業化にも地域が主体となり取り組む試みがはじまっている。

⑦ 今後は、六次産業の考え方を取り入れ、赤米の更なる活用を図ることで、文化財伝承基盤をより強固なものとしていくとともに、地域資源を学び活用することで、地域の活性化につなげるよう努めたい。

◆ 自治体名　鹿児島県南種子町
◆ 人口　6,033人
◆ 面積　110.4km²
◆ 事業開始年度　平成11年度
◆ 事業主体　ミニ独立村赤米のふるさと千石村、宝満神社赤米お田植え祭り保存会

**連絡先**
南種子町企画課
TEL 0997-26-1111　FAX 0997-26-1116

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 鹿児島県喜界町　追い込み漁

① 沖の方から素潜りで網を張り、浅瀬の方へ魚を追い込む小野津集落の伝統的な漁である。
この漁は、漁をする班と丘で魚を捌く班に分かれており、それぞれが協力しあって行われる。
② 起源は不明だが、集落行事や来客の際に漁を行い「おもてなし」の品として、おいしい魚を提供していた。
③ 小野津集落民を中心に結成された「シーマスターズ」というグループが積極的に活動を行っており、農閑期を中心に年10回ほど漁をしている。最近では、テレビや雑誌、新聞等の取材依頼も多く、シーマスターズの会員達はやる気に満ちている。
④ 子どもたちを対象に魚を捕って捌き、食べるまでを一連の流れとして、他体験（シマあるき等）と組み合わせた体験学習等を実施している。平成26年度より、これらの体験学習を推進する施設として、集落内にあった小学校跡地をリニューアルした「地域文化等宿泊体験学習施設」がオープンした。この施設は、伝統文化や地域文化の保存と宿泊して様々な活動や体験を通して本町の文化等を深く理解してもらうことを目的としている。今後も施設で行う体験プログラムを充実して伝統継承に繋げたい。
⑤ これまでは集落内の子供達を中心に追い込み漁の指導を行っていた。しかしながら、集落の児童、生徒が著しく減少しているため追い込み漁体験学習の機会が減少傾向にある。そこで、地域文化等宿泊体験施設をうまく活用し、島内はもちろんのこと島外の児童や生徒も対象に宿泊体験学習の受入を積極的に行い、追い込み漁体験の機会を増やしたいと考えている。また、定住希望者や観光客等にもインターネット等を利用し、広く情報を発信して異なる地域文化や歴史を相互に学びあうための機会を作り出し、伝統・地域文化を継承する意義を知ってもらう。
⑥ 伝統的な追い込み漁を実施することにより、希薄になりつつある地域住民の相互の連携や融和、親睦が保たれる。また、このような伝統文化を後世へと引き継ぐことは、喜界島に暮らす人々が将来にわたって心豊かで安心に生活できると考える。そして、暮らしやすい環境は多くの人々を呼び込み、地域社会の持続的な発展に寄与するものと考える。
⑦ 今後の課題は、体験学習の機会をいかにして造成するかである。上述しているが、集落が運営する「地域文化等宿泊体験学習施設」を積極的に活用していかなければならない。また、基幹作物であるサトウキビや生産量日本一の白ゴマの収穫等の農業体験や、伝統行事、地域資源を絡めた魅力ある宿泊体験プログラムの創設が必要になると考えている。今後、島内外の児童や生徒、移住希望者等を対象に開催時期を熟慮しながら試験的に新規プログラムを実施して体験学習の機会を提供する。

◆ 自治体名　鹿児島県喜界町
◆ 人口　7,656人
◆ 面積　56.93km²
◆ 事業開始年度　不明
◆ 事業主体　小野津集落

**連絡先**
喜界町企画課
TEL 0997-65-3683　FAX 0997-65-4316

## 鹿児島県伊仙町　徳之島地域文化情報発信施設「徳之島なくさみ館」

① 現在、奄美群島で徳之島だけに残っている「闘牛」は、およそ400年以上続く伝統文化である。当該施設は、この闘牛と徳之島固有の伝統芸能を併せて住民、観光客に発信するために整備されたものである。
② 奄美地方の闘牛に関する記録は、嘉永3年（1850年）に奄美大島に遠島の刑に処せられた名越左源太が記した「南島雑話」に掲載された「闘牛の図」が代表的である。また、徳之島の闘牛に関する記録として挙げられるのは、島唄の「前原口説（めぃばるくどぅき）」である。庶民の牛が不利な条件を撥ね除け、役人が所有する牛に身分の差を超えて勝利するという物語が歌詞の中に情緒豊かに描かれている。「奄美民謡大観」（文英吉（かより）著）によると、300年ほど前の出来事とされている。
③ 昨年度の本施設での文化行事（闘牛・島唄等）の開催は14回となっている。また、併設されている資料館では行事が行われていない場合も映像資料の閲覧ができるように整備しているため、年間を通じて徳之島の文化に触れられるように配慮している。さらには、県外在住の出身者を中心とした団体やクルーズ客船などが入港した際の、闘牛ツアーも開催されている。
④ 闘牛においては、闘牛大会に出場し、勝ち続けて横綱にすることが目標であり、闘牛を持ちたいという子供達は多い。さらに、今年度はじめには町文化財にも指定され、闘牛文化継承の推進に努めている。また、島唄に関しても、日本民謡における奄美島唄の全国大会優勝など、華々しい成績を収めていることもあり、後に続けとばかりに子供達の民謡教室への参加が増加している。
⑤ 闘牛においては、闘牛大会が終了した後のポイ捨てが多いことが問題としてあげられる。中学生のボランティアや職員による清掃などで対応しているが、どの会場においても改善できていない。今後、本施設においては、闘牛観戦時のマナー向上や闘牛協会との協議を持って、問題の解決にあたっていきたい。
⑥ 本施設は、全天候型の施設であるため、闘牛と伝統芸能の同時開催が可能となっている。そのため、闘牛、伝統芸能それぞれにしか興味のない人々に対してアプローチができるという効果によって、文化の射程が広がったという点では観光業のみならず、伝統文化の継承や伝承への成果が大きいのではないかと考えている。
⑦ 今後の展開として、徳之島を含む「奄美・琉球」地域が世界自然遺産の候補地となっていることから、世界自然遺産の島の文化として昇華していけるよう、普及啓発、伝承活動を支援していく施設としての取り組みも進めていきたい。

◆ 自治体名　鹿児島県伊仙町
◆ 人口　7,061人
◆ 面積　62.7km²
◆ 事業開始年度　平成24年度
◆ 事業主体　伊仙町

**連絡先**
伊仙町企画課
TEL 0997-86-3111　FAX 0997-86-2301

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

## 沖縄県浦添市　9月3日（組）踊観光・文化振興事業

① 9月3日を「く(9)み(3)踊の日」と銘打って、国立劇場おきなわ周辺にて、組踊を含めた伝統芸能等の演舞を中心とした祭りを開催し、文化振興、観光振興を図るとともに、観光客誘致を目指す事業を実施した。

② 組踊とは、首里王府が中国皇帝の使者「冊封使（さっぷうし）」を歓待するために創作された芸能で、音楽と舞踊、台詞で構成された沖縄独特の歌舞劇である。享保2年（1718年）、踊奉行であった玉城朝薫が創作し、翌年の冊封式典の後に行われた宴で好評を得て、その後は士族階級で観劇されていた。廃藩置県後は、市の舞台で演じられていた。沖縄の本土復帰と同時に、国の重要無形文化財の指定を受け、平成22年にはユネスコの無形文化遺産保護条約に基づき、文化遺産として選定された。

③ 平成24年度より本事業を開始し、平成26年度で3回目を迎える。平成24年度は組踊まつり等を開催し、浦添市民だけでなく、県外、国外からの誘客を目指し、組踊の観光資源化の可能性を模索した。平成25年度は組踊を観光資源化することを目標に、組踊まつり等を開催するだけではなく、組踊を映画化した「シネマ組踊」を作成し、鑑賞機会の拡大を目指した。

④ 組踊まつりの中では、「ももたろう」等、身近な物語を組踊版で演じることで、大人だけではなく、子供たちにも組踊に親しみや興味をもたせることで、伝統芸能である組踊が継承していくよう取り組んだ。

⑤ 組踊の鑑賞に関して、琉球古語（方言）による演目のため、見てもわからないという先入観や、本来は宮廷芸能であるので、敷居が高いという先入観があった。また、組踊の認知度が低く、鑑賞してみたいという動機そのものが成熟していなかった。そこで、組踊を映像化し、劇場のみでしか鑑賞できなかった組踊を劇場以外でも鑑賞できるようにすることで、鑑賞障壁を取り払い、組踊の認知度拡大を図った。また、映像の中に日本語字幕を追加することや事前にあらすじの説明を加えることで、鑑賞の妨げになっていた言語の問題の解決を図った。

⑥ 組踊まつりには、平成25年9月から10月までの週末の5日間で1,251人が来場した。また、平成26年2月に実施したシネマ組踊の上映会には、12日間で1,121人が来場した。本事業を実施したことで組踊への関心が高まり、市民のみならず、県北部の今帰仁（なきじん）村や県外からの誘客も図れた。

⑦ 今後は、組踊まつりの期間だけではなく、制作した映像を有効活用し、例えば市内の小・中学校の授業で上映する等、伝統芸能をより身近に感じられるように努めたい。

◆ 自 治 体 名　沖縄県浦添市
◆ 人　　口　113,893人
◆ 面　　積　19.3km²
◆ 事業開始年度　平成24年度
◆ 事 業 主 体　浦添市

**連絡先**
浦添市　市民部商工産業課
TEL 098-876-1234　FAX 098-876-9467

## 沖縄県南風原町　津嘉山区「村あしび」・組踊「忠臣身替の巻（一名：八重瀬）」

① 組踊「八重瀬」は、昔から道路の開通及び拡張、村ガー（共同井戸）の新設及び改修などの完成祝いを兼ねて津嘉山地区で上演されてきた。前回の上演（昭和63年）から再上演したいとの思いと組踊だけではなく「津嘉山民俗芸能保存会」を復活して地区に伝わる民俗芸能も一緒に上演するため、「村あしび」として復活上演した。

② 享保4年（1719年）に首里王府で初演された後、組踊は暫くして地方へ伝播されたと思われる。また南風原で最も大きな村である津嘉山は、芸能の豊富さでも群を抜いた村であり古い芸能が数多く残されている。津嘉山民俗芸能保存会は昭和63年12月に61年ぶりに復活上演された組踊「忠臣身替の巻（八重瀬）」の再上演をめざし、字にその要請をした時に創設された。しかしその後、休眠状態にあった「津嘉山民俗芸能保存会」は平成23年10月に再結成され復活し、また部会も棒、舞踊、地謡、狂言、エイサー、そして調査広報部の6部会を設けて再出発することになった。

③ 平成24年度は、「十五夜あしび」を復活させたいとの強い意見があり新年宴会、新旧班長組長歓送迎会に盆踊りと共催にし実施した。平成25年度は盆踊りとの共催はさけ、名称も「村あしび」に替えて開催した。平成26年度は、前年までは「忠臣身替の巻（八重瀬）」の一場面のみ上演していたが、今年度は組踊「八重瀬」全編上演した。

④ 津嘉山には、町指定文化財の舞方棒をはじめ、ウズィンビーラ、チラー小舞ひ、たのむぞ節、狂言など多くの伝統芸能がある。平成25年度は「村あしび」を復活しプログラムは、前半に子ども部を設け、うちなーロ、空手演舞や子ども三線サークルの演奏、後半は伝統芸能演舞など復活した演目を上演した。このような伝統芸能を毎年上演することにより順調に継承されると考えている。

⑤ 伝統芸能を継承する上で戦後途絶えた時期もあり、指導継承するために組踊は、外部から指導者を招いて練習することや衣装・道具をそろえることなど復活上演するための費用を捻出することに苦心している。

⑥ 戦後途絶えていた伝統芸能を上演することで地域活性化に繋がり、また継続的に上演することで今後は伝統芸能の継承者を育成していくことが可能になる。

⑦ 戦後途絶えた伝統芸能でもあり保存・継承していくには継承者育成の場や道具の補修、指導者への謝礼金、記録保存用のための撮影委託などもある程度の支援が必要となってくる。伝統芸能を保存継承する集落へ継続した市町村からの支援や補助金等が必要である。

◆ 自 治 体 名　沖縄県南風原町
◆ 人　　口　36,663人
◆ 面　　積　10.72km²
◆ 事業開始年度　平成23年度
◆ 事 業 主 体　津嘉山民俗芸能保存会

**連絡先**
南風原町総務部企画財政課
TEL 098-889-0187　FAX 098-889-7657㈹

※①活動概要　②伝統的な地域資源の起源や歴史について　③活動内容　④伝統継承への取り組み　⑤活動において苦心した点や解決方法　⑥成果　⑦課題と今後の展開

# 地域づくり（別冊）
## 「平成26年度 地域活性化事例集 ～伝統的な地域資源を生かした地域活性化～」

平成27年１月発行

編集・発行　一般財団法人　地域活性化センター
〒103-0027　東京都中央区日本橋2-3-4
日本橋プラザビル13階
TEL：03-5202-6136　　FAX：03-5202-0755
印　　刷　株式会社　太平印刷社




宝くじは、図書館や動物園、
学校や公園の整備をはじめ、少子高齢化対策や
災害に強い街づくりまで、いろいろなかたちで、
みなさまの暮らしに役立てられています。

一般財団法人 日本宝くじ協会は、宝くじに関する調査研究や
公益法人等が行う社会に貢献する事業への助成を行っています。

一般財団法人
日本宝くじ協会
http://ja-takarakuji.or.jp/